

目 次

序章	1
本章	9
第 1 章 ^{セクシュアリティ} 性 とは何ー生物の多様な性	9
第 1 節 性の諸側面における定義付け	10
1.1.1 生物学的性の定義付け	13
1.1.2 性自認	13
1.1.3 性的指向性	19
1.1.4 ジェンダー	26
第 2 節 男女二元論で語れないセクシュアルマイノリティとは	30
1.2.1 セクシュアルマイノリティにおける嫌悪、偏見と差別	32
第 2 章 カンボジアにおける性の背景、構造、現状	36
第 1 節 カンボジアにおける性の位置づけ	36
第 2 節 カンボジアにおけるセクシュアルマイノリティをとりまく諸問題	38
2.2.1 自己アイデンティティーとの対立	40
2.2.2 家族・友人・パートナー	41
2.2.3 周囲からの反発・差別・偏見による就学・就労・生活に関連した諸問題	43
2.2.4 社会的な機能であるメディアによる評価	46
第 3 節 セクシュアルマイノリティの最近の動き	47
第 3 章 今まで語られている性の考察	52
第 1 節 ミシェル・フーコー(Michel Foucault) の理論整理ー生 - 権力によって語られる性の考察	53
3.1.1 『性の歴史 I 知への意志』における生 - 権力及び国家との関係	53
3.1.2 性の主体の問題とその解釈	58
3.1.3 セクシュアルマイノリティ主体の確立	60
第 2 節 ジュディス・バトラー(Judith Butler)の『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』への考察ー主体の不可について	62

3.2.1	セクシュアルマイノリティの主体の誕生	64
3.2.2	実はジェンダーフリーに奪われた声もある	62
第4章	フランスとカンボジアのコロニアルな関係における近代の性	69
第1節	コロニアリズム、ポストコロニアリズムとは	69
4.1.1	^{セクシュアリティ} 性の主体が形成される以前	71
4.1.2	コロニアルな時代における ^{セクシュアリティ} 性	73
4.1.3	ポストコロニアルな時代における ^{セクシュアリティ} 性	74
第5章	カンボジアにおける性の意識調査——被調査者たちのナラティブを通じた性の再考	76
第1節	ナラティブ調査の概要	76
5.1.1	質的研究のナラティブ（語り、物語り）とは一問題の提起、目的と意義	76
第2節	事例の内容の分析とその結果	80
5.2.1	ナラティブへの考察	80
5.2.1.1	カンボジア内に在住するカンボジア人のナラティブの考察	80
5.2.1.1.1	社会に正常とみなされたグループ	81
5.2.1.1.2	社会に異常とみなされたグループ	88
5.2.1.1.3	考察の試み	102
5.2.1.1.3.1	社会に正常とされる人の回答の考察	102
5.2.1.1.3.2	社会に異常とされる人の回答の考察	116
5.2.1.2	フランスに在住するカンボジア人のナラティブ	110
5.2.1.2.1	社会に正常とみなされたグループ	110
5.2.1.2.2	社会に異常とみなされたグループ	122
5.2.1.2.3	考察の試み	132
5.2.1.2.3.1	社会に正常とされる人の回答の考察	132
5.2.1.2.3.2	社会に異常とされる人の回答の考察	135
終章	総括的考察——普遍的な性の主体概念としての性の再考察	140
参考文献		145

序章―問題提起

現在、各国において人々は^{セクシュアリティ}「性」というものと無関係に日常生活を営むことはできない。それなのに、われわれは性について取り上げ、まじめに語る機会がなかなかない。私的にも公的にも性の語りはタブー化されていると言えるだろう。例え、性について語る機会があるとしても、人々は限定された言葉を選びながら語ることになる。そもそも、人の性のあり方やその認識は様々であり、一人ひとりが異なるにも関わらず、今の時代では性は単純化されている。一般的に性は2種類に分けられ、それは女性／男性である。しかし、20世紀後半以降に入ってから、生殖科学研究の中では性別とは多様であり、それを単純に女性／男性の2種類のみ限定されるものでは決してありえないということが明らかになった¹。中には、半陰陽、つまり女性／男性何れの性別か明白ではない状態、あるいは自らの性別に違和感を抱えている人がしばしばいることも事実である。

一方ではそういったことが明らかにされても、多くの人々は性別というものに対して2種類（女性／男性）であると信じ続けている。そもそもいつから人々は世の中には女性と男性しかいないと信じてきたのだろうか。

かつて性は極めてあいまいかつ多種多様であった。しかし、特に近代西洋社会では性の快楽が一方的に抑圧される対象になって、性は2種類のみ（女性／男性）であるという信義は強固なものとなってしまった。それは、西洋社会の歴史では性に関する歴史・文化・思想が大きく変遷してきたからである。近代国家はそれまで快楽を指向するとされた性を、生殖（生産）という側面から捉えるようになった。近代国民国家の富国強兵政策による子孫繁栄（人口増加）というイデオロギーの介入によって性は抑圧される対象となった。そういった思想は西洋社会による植民地化と共に、アジア大陸、アフリカ大陸に広まり、女性／男性の明確な概念が用いられはじめた。植民地から独立に至った後も、そのような思想は続いている。独立後も植民地的な支配による社会的、文化的な思想は依然として残存しており、その思想は社会秩序というマクロ的なレベルから人々の意識というミクロ的な範囲にまで及ぶことによってポストコロニアルな支配体制を確立しつつある²。近代国家（近代西洋社会、植民地化された地域）の国民生活に与える影響は非常に大きく、自由、個性の表現、主張、選択など権力によって大幅に制限され、性というものも国家によって

¹ 山内俊雄（2000）『性の境界-からだの性とこころの性』、岩波書店。

² スピヴァク・ガヤトリ（Spivak Gayatri）（2003）上村忠男、本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判――消え去りゆく現在の歴史のために』、月曜社；橋本哲也（2005）『ポストコロニアリズム』、岩波書店。

抑圧される対象となった。現在でも、多様であいまいだった性は単純化され、女性／男性の区別が世界的な規範とされている。そうすると、人は生まれてからすぐに身体的特徴（染色体・内外性器）によって女性か男性という性別が与えられ、また社会に生きる条件として女性らしさ／男性らしさがジェンダー化されるのである。多くの人々が語ろうとしている女性／男性は最早本質的なものになり、多くの人の信念・認識に広く浸透していると言っても過言ではない。

しかし、社会にはまだまだそのような性についての認識を周縁化しているものが存在している。また男性／女性という規範から逸脱したセクシュアルマイノリティに対して、社会が非常に厳しい態度をとるケースも多く見受けられる。セクシュアルマイノリティの大多数は、職場でハラスメントや解雇、学校でのいじめ、社会からの偏見、嫌がらせや暴力、場合によっては国の刑法によって処罰が課される対象となっていることから明らかなように、セクシュアルマイノリティの人権は様々な形で阻害されている³。

セクシャルマイノリティ当事者はなぜ受け入れられにくいのだろうか。その原因は女性／男性と言ったカテゴリーが当然とされ、唯一正常とみなされることに対して、そういったカテゴリーから外れたものが自然に反する行為・病気・異常として捉えられることにある。つまり、正常と異常の概念は性という概念に必然的に絡まり合っている。日常生活において私たちは女性もしくは男性の二つの中からどちらかを選択しなければならず、これは社会的な約束として全ての人々に強いられる。この社会の中で女性あるいは男性にならないことは、異常として扱われ、劣ったものとしてみなされるような規範の下に置かれている。セクシュアルマイノリティ当事者は日常生活の困難さや不便さから周囲の目や社会を恐れる傾向がある。

これに対して、世界各地でいくつかのセクシュアルマイノリティの人権団体が設立され、小規模運動から大規模変革に至るまでセクシュアルマイノリティの自由、人権などを追及している。結果として、現在では同性婚、パートナーシップ法などが合法化される国があり、また法案として議論している国もいくつか存在しており、同性婚が認められる国も次第に増えてきている。しかし、80 カ国以上は同性愛などセクシュアルマイノリティを違法とみなしており、さらに犯罪者として死刑が適用される場合がある。多くの国々では男女二元論と異性愛主義が標準となり、その標準から外れたものに対しては根強い偏見や差別

³ ベアード、ヴァネッサ (Baird Vanessa) (2004) 『性的マイノリティの基礎知識』、町口哲生訳、作品社。

が残存している。このような現実で、筆者は性というものは果たして女性／男性だけであるのかという問いを立てることで、改めて性という概念を見直すことができるのではないだろうかという点から本テーマの設定に至った。

筆者はその例として、まずカンボジアの事情を取り上げ、性の解釈やそのあり方を検討していく。現代カンボジアにおいて性が語られる時は、そのほとんどが女性／男性というように二元的に語られる場合が多く、それらが自然で唯一正常な立場とみなされる。現状では、女性／男性という性の概念は明確に分かれているので、女性として生まれたならば内面及び外見ともに女性らしく、反対に男性ならば男性らしさが求められる。人は常に社会的行動様式に合わせて生活しないと評価されないというのがカンボジア的社会秩序である。

その社会秩序に従わないものの一つの例としてセクシュアルマイノリティが存在している。カンボジア人権センターによると現在カンボジアではセクシュアルマイノリティ当事者が存在するにも関わらず、社会はあえてこの存在・事実を無視している⁴。重要なのは人数の多い少ないではなく、社会によってセクシュアルマイノリティという立場に位置づけられる人がいるという事実である。セクシュアルマイノリティ当事者は自分の生物学的性、性自認、性指向性に対して不快感、違和感を持ち、自分のアイデンティティに対して、「自分は、一体何者であるのか」という存在意義についての悩みを抱えている。そのため、当事者には心理的な不安定感が生じ、将来に対する自分の人生、生活などに混乱や迷いが生じる。当事者が自分のありのままの姿を受け入れたとしても、それを周囲の人々にカミングアウトする時に、差別、偏見などを受け、圧迫され、いじめを受ける。カンボジアにおけるセクシュアルマイノリティは周囲、社会からの根強い差別だけではなく、政府などのオーソリティーからも差別されている。よって、セクシュアルマイノリティ当事者は自分たちの人権について自由に語る場を十分に持てず、非当事者のようには社会参加をすることができない。

西洋の思想家として性を研究し、議論したミシェル・フーコー (Michel Foucault、フランスの哲学者) やジュディス・バトラー (Judith Butler、アメリカのポスト構造主義思想家) は異常と正常とに分けられた性は自然的、本質的なものではなく、実は社会的、歴史的、

⁴ Cambodian Center for Human Rights (CCHR) (2010), *Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia*, Phnom Penh, LGBT Rights Project; Cambodian Center for Human Rights (CCHR) (2012), *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*, Phnom Penh, LGBT Rights Project.

文化的な要素によって構築されたものであることを提示した⁵。性は人為的な構築物だからこそ、当然ながら性に対する人々の考え方や意識も、住んでいる環境や時代によって変化する。すなわち、カンボジアのポストコロニアルな状態が近代的な性二元論を受け継ぐ一方で、旧宗主国のフランスは早くから良くも悪くも近代的二元論の枠組みを越えようとしてきた。本稿では、この二つの国に生活するセクシャルマイノリティの言説を拾い上げることによって、ポストコロニアルな社会において構築される性と近代を越えようと試みる社会において構築される性の違いを明らかにしていく。

この研究目的を達成するためにフィールド調査を行った。本研究に関しては、フランス内に在住しているカンボジア人とカンボジア内に在住しているカンボジア人を対象にしたフィールド調査を行った。また被対象者は、社会によって正常とみなされる女性／男性及び、社会に異常とみなされた同性愛者、両性愛者、性同一性障害の人などである。その人たちの語り、物語を通して正常と異常の立場、それぞれがどこまで社会によって構築されるのかを考察していく。

研究方法としては、ナラティヴ論を使用し、個人の物語に着目する。被対象者たちの発言から重要なポイントを確認することによって、彼らの性に関する生きた認識が社会によって変化してくかどうかを、フーコーとバトラーの理論と照らしあわせて確認していく。

章構成

本論文は3章からなる。第1章では、これまで性がどのような社会的意味を持ってきたのかを紹介する。性という概念はさまざまな仕方で理解・解釈されてきたため、その統一的な定義を提示するのは極めて困難であるが、一般的には男女というふたつのカテゴリーを前提とし、4つの構成要素で説明するのが近代の特色である。それらは生物学的性、性自認、性的指向性、ジェンダー（文化的・社会的・歴史的性）である。本章ではこの4つの定義付けを近代社会がどのように発明し、構築してきたかということをふまえたうえで、既存の文献を用いてこれらの定義をまとめ、批判的に検討していく。また、社会がセクシュアルマイノリティを強調して語ることによって、一般的な視点と異なる性質を持つものを受け入れない、もしくは排他的な意識を持つ傾向がある。人々がセクシュアルマイノリ

⁵ フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』、新潮社；バトラー・ジュディス (Butler Judith) (1999) 竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

ティを異質な見方であると、寛容に認めることができなく、偏見や差別につながるだろう。セクシュアルマイノリティに限らず、障害者、病人、犯罪者などの社会から何らかの形で逸脱するものを例えてもおかしくない。セクシュアルマイノリティへの偏見や差別などは、誤った知識や情報を持ったり、あるいはそういった人たちと接した経験がなかったりする人がいるからこそ、「同性愛は気持ち悪い」「おかしい」「変態」というふうに扱うことになる。そもそもそのように思っている人はどのような根拠を持つのか、あるいは単にそう思われているのかを検討する必要がある。人間は誰しも生まれながら環境や教育、極端に言うとも生活する社会からの影響を受けているので、自分の意識あるいは考え方を言おうとしても、結局のところ、今までの体験や教わったことしか言えない。このように性は明らかに社会によって構築されるものであり、この構築のプロセスによって性だけではなく、性についてのパーセプションもまた構築されることとなる。

セクシュアルマイノリティへの偏見や差別の構造と近代との関係がどのようなものなのか、すなわち近代的な社会や制度（規範）は人々の意識にどのような影響をもたらすのかを議論するために、第1章の後半ではミシェル・フーコー（Michel Foucault）とジュディス・バトラー（Judith Butler）の理論を整理していく。ここではまず、フーコーの『性の歴史Ⅰ 知への意志』における権力論の概念、特徴を概観し、その具体例として生-権力概念をまとめていく。その中で生-権力の例として挙げられているのが性の主体のつくられ方である。そして議論を引きついで、フーコーの思想に影響を受けた現代思想家であるバトラーが著した『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』における性の主体の不可能性について整理していきたい。バトラーは主体の完全な形成が不可能であるという点を指摘したが、その議論を援用して、性の普遍性（男女二元論と異性愛主義）を批判的に論じていく。

第2章はカンボジアに焦点を絞り、近代化されるカンボジアにおける性の歴史と現状はどのようなものなのかを説明していく。現在カンボジアにおいて、セクシュアルマイノリティ当事者が直面している問題にはまず自己アイデンティティ混乱というもの自己アイデンティティとの対立という問題のみならず、家族・友達・同僚などの人間関係における問題、社会やコミュニティとの問題、メディアによる評価などにも直面している。これらの問題はどのようなものなのか。加えて、セクシュアルマイノリティへの差別や偏見が深く根付いているとされるカンボジアにおいて政府機関または非政府機関はセクシュアルマイノリティの人権を守る動きがあるのかを検証していく。

そしてミシェル・フーコーとジュディス・バトラーの理論を踏まえながら、性が近代社会においていかに語られ管理される対象となるのかを近代のカンボジア社会（植民地以降・独立後）における性概念の変化を通して説明していく。近代のカンボジア社会はフランスに植民地化されたことに始まり、同国を始めとする西洋の文化、思想、制度などに影響を受けた。植民地状態を脱して独立した後も、その西洋／植民地の関係が根付いて、多大な影響が社会、政治、経済、文化など多岐に渡って深く刻まれている。その一つの例として性があげられ、ポストコロニアルな社会状況は両性区分の明確化を通して様々な性の制度化をもたらした。近代以前のカンボジア社会では男女という性の主体そのものは明確ではなかったが、近代以降ではそれが形成され、語られるようになった。ここで性の主体が語られるようになったのは、生殖（再生産）を目的とする制度が誕生したからである。そのため、この章では生殖イデオロギー（社会的な再生産）によって正常な性（社会的に再生産できる）と異常な性（社会的に再生産できない）という区別がいかにつくられたかということを議論していく。「正常な性」が社会的な再生産によって定義づけされたことによって、男女二元論と異性愛主義は特権的地位を獲得することができた。そこから外れたものは不利な立場に置かれ、差別や偏見の対象とされるようになった。しかし、フーコーとバトラーが提示したように、近代社会によって異常と正常とに分けられた性は自然的、本質的なものではなく、実は社会的、歴史的、文化的な要素によって制度化され、生産され、管理された構築物である。しかも、性は時代や空間に依存しながら変化しているといえることができるであろう。

第3章ではカンボジアの性の状況を、ミシェル・フーコーとジュディス・バトラーの理論を援用しながら、フィールド調査を通して分析していく。フィールド調査の目的は、異常と正常とに分けられた性は構築されたものであるという点、社会の変化に伴って性に対するカンボジア人の意識にどのような変化が起こっているかという点について明らかにすることである。そこでは性について男女二元論的な研究しかなされていないカンボジアの現状を、被対象者の語り・物語を通して考察していく。被対象者の語り・物語を分析するため、ナラティブアプローチを利用する。ここでは被対象者たちの発言した内容から、性に関する彼らの認識が社会によってどのように変化してくかどうかをフーコーとバトラーの理論と照らしあわせながら検証していく。

第1章 セクシュアリティとセクシュアルマイノリティに関する諸水準の語られ方の批判的考察—フーコー・バトラー理論の整理

「あなたの性別は何ですか？」と聞かれれば、「自分は男性」あるいは「自分は女性」と単純に答える人が多い。私たちは、なぜ自分の性別に関して女性／男性と断言できるのだろうか。何かの根拠があって、そう思っているだろうか。一般的な考え方において、生物学的には人間の性別を構成するのは性染色体であり、それには、X染色体とY染色体の2種類があり、女性／男性の性別はこの染色体の組み合わせによって決定される。男性の細胞にはX染色体とY染色体があるのに対して、女性の細胞にはX染色体のみとなる。女性／男性の性別は受精の瞬間に決まり、つまり先天的に作り出されると考えられてきたのである。性別は、出生時に身体のある部分の形状を根拠に、すなわち外性器が異なることによって、女性／男性のいずれかという二元的に付与される。こうして自然的、先天的に女性／男性または雌／雄の区別することを性別という。こうして、私たちは生まれた瞬間に「性別」によって区別され、社会の中で当たり前のように女性／男性であることを認識させられる。その属性は社会生活においてもあらゆる場面に関わっており、男性は男性らしく振る舞い、女性は女性らしく行動する。

しかしながら、20世紀後半以降、性別とは多様であることが明らかにされてきた。性とは、決して単純に女性／男性の2種類のみ限定されるものではないのである⁶。しかしながら医学的な立場からは、女性／男性と言ったカテゴリーが唯一正常であり、何らかの原因で女性／男性に適合しないものは疾患・障害と捉えられる。こうして私たちは日常生活においても女性もしくは男性の二つの中からどちらかを選択しなければならない状況にある。性別はいわゆる社会的な約束なのだ。そして、男性／女性という性の規範は、従ってそれへの適合・不適合は、医学という制度を一つの依りどころとして社会的に構築されているのである。

本章では性がどのような定義されているのかを説明していく。そして、生物学的性、性自認、性的指向性、ジェンダー（文化的・社会的・歴史的性）の4つの構成要素で説明される近代の性認識の特色を考察していく。その4つの定義付けを近代社会がどのように形成してきたかということをふまえたうえで、これらの定義を批判的に検討していく。

⁶ マネー・ジョン（Money John）・タッカー・パトリシア（Tucker Patricia）（1969）朝山新一訳『性の著名：問い直される男と女の意味』、人文書院；山内俊雄（2000）『性の境界-からだの性ところの性』、岩波書店。

第1節 性の諸側面における定義付け

一般的に、現代社会の中で性を語る時には4つの構成要素で説明するのが通常である。それは、生物学的性、性自認、性的指向性、ジェンダー（文化的・社会的・歴史的性）である⁷。以下、これらの点を詳しく見て行く。

1.1.1 生物学的性の定義付け

生物学はX型、XYY型、XYYY型、XXX型、XXXXY型の場合は異常または障害としてみなされている。多くの場合、人間の生命が生まれた時、医者や看護師によってその子の外性器の様子が判断され、性別が決定されていく。男性ならば、ペニス（陰茎）がある。逆に女性ならば、ヴァギナ（膣）があるということである。しかし、そればかりではなく、中には生まれつき外性器の様子を見ても判断しにくい人もいる。そうした場合は生まれつき持つ病気として扱われることとなる。医学が日進月歩する現在では性別適合手術が可能となったことから、生まれ付きの外性器が区別しにくい場合は、必要に応じて性別適合手術をし、ホルモン治療をすることによって無理やりに女性か男性かという性別にする⁸。

人間の外性器であれ、性染色体であれ、実際には両方とも曖昧であり、明確な性の判定はできない。女性または男性が決定される前に、当然ながら本人の意思を確かめなければならないだろう。しかし、今日では人が生まれた時、医者などの立会によっていわゆる第三者の意思で、女性か男性かが決められていく。親や兄弟でさえ医者の言ったことに従い、勿論目で見える外性器という基準から判断して、男の子もしくは女の子として育てられていく。性は本来、本人が主体的に認識するものであろうが、実際には周りの人により認識させられると言える。こうして性は必然的に自己と他者の権力関係を包含する。つまり性とは政治的なのである。

⁷ 本稿は医学と臨床を中心とした研究ではないため、ここでは性の定義を基礎的な範囲にとどめておきたい。

⁸ 針間克己（2003）『一人ひとりの性を大切に生きる～インターセックス、性同一性障害、同性愛、性暴力への視点』、少年写真新聞社； ロニー・アレキサンダー・池田久美子・おかべよしひろ・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌二・土肥いつき・宮崎留美子・2003）『セクシュアルマイノリティ同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』、明石書店。

1.1.2 性自認と性同一性

性自認とは、自分の性に対する自己意識、自己認知であり、つまり自分は男性／女性であるという認識である。現代社会では医学的社会的に判定される性と本人の性自認が一致している状態が性同一性の確保されている状態とされる。過去も現在も自分を男性（女性）として認識しており、その後何年経っても自分が男性であろうという意識、つまり時間的な一貫性と持続性をもち、人々にも自分が男性（女性）であると思わせ、そして男性（女性）の役割や期待される振る舞いをしながら生活している状態が性同一性の担保されている状態なのである。そして、現代社会はこうした性同一性の確保されたあり方を正常と定義する。

性同一性の形成については種々の議論がある。例えば、性同一性は生物学的な要因による先天的なものであると主張する人もいる。その主張においては、性別の判定は性染色体の構成や内外性器の形態という基準によって行われる⁹。他方、環境や育ち方という要因による後天的なものであるという論者もいる。つまり生まれた後、育ち方や環境の影響で自分が女性であるか、男性であるか、という性に対する認識が形成されるという考え方である¹⁰。しかし、いずれにせよ両者は性同一性が唯一正常であることを当然視している点には注意が必要であろう。その文脈でしばしば使われているのが「性同一性障害」という言葉である。医学的な定義では、性同一性障害とは、「生物学的には完全に正常であり、しかも自分の肉体がどちらの性に所属しているかをはっきり認知していながら、その反面で、人格的には自分が別の性に属していると確信している状態」を意味する¹¹。つまり、性同一性障害とはいわゆる心と体の性が一致せず、自分が間違った性別に生まれて来たと感じている状態である。例えば、身体は完全に男性なのに、心の中では自分は女性だと思っている人、逆に自分の生物学的な性別は女性であるのに、自分が男性だと認識している状態をいう。性同一性障害の症状は、自身の生物学的性別に対する嫌悪や忌避を持ち、反対の性への持続的な同一感、日常生活で自身の生物学的性別と反対の性別役割をとろうとするところにある。多くの性同一性障害者は医療の手助けとしてカウンセリング、ホルモン治

⁹ 針間克己（2003）『一人ひとりの性を大切に生きる～インターセックス、性同一性障害、同性愛、性暴力への視点』、少年写真新聞社。ロニー・アレキサンダー・池田久美子・おかべよしひろ・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌二・土肥いつき・宮崎留美子・2003）『セクシュアルマイノリティ同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』、明石書店。

¹⁰ 田崎英明（2000）『思考のフロンティア ジェンダー／セクスアリティ』、岩波書店。

¹¹ 同上、p. 17。

療、性別適合手術などを求める。性同一性障害における国際的な診断基準には、世界保健機関（World Health Organization, WHO）によって定められた ICD-10(International Classification of the Disease)のものと、米国精神医学会(American Psychiatric Association)が定めた DSM-IV-TR（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision, 精神疾患の診断・統計マニュアル）によるものがある。これらによって、性同一性障害は疾患であるとみなされているが、それはどのような経緯でそうなったのであろうか。ここで性同一性障害の歴史を簡潔にまとめたい。

20 世紀初頭、マグナ・ハースフェルド（Mangnus Hirschfeld）はドイツにおいて「異性装者」を医学的に分析し、共通の特徴からこの人たちの症状に服装倒錯症（Transvestism）という名を付けた。服装倒錯症は異性装者の意味であり、性的表現の一つである服装を自分の性と異なる性の服装をすることによって安心できる人々を言う。異性装者には同性愛者のみならず、異性愛者も含まれている、つまり性自認、性的指向性はどうかで、異性装をすることによって満足でき、安心感が芽生える人々を指すのである¹²。しかしながら同年代のイギリスでは服装倒錯症（Transvestism）という言葉は適切ではないという主張がなされた。

しかしながら、自分が反対の性別であると信じ込み、そのため異性装だけでは安心できないというケースもある。その場合は自分の肉体的特徴をも反対の性別に変えたいという強烈的な願望があり、それを英語ではトランスセクシュアリズム(Transsexualism)という¹³。この概念は性同一性障害の理念とほぼ一致している¹⁴。

性別適合手術が始めて行われたのは、1930 年のオランダであった。手術を受けたのはドイツの風景画家・イラストレーター Lili Elbe(1886-1931)（以前の名前は Einar Wegener）であり、Elbe は女装をし、服装だけでは満足できず、性別適合手術を 3 回受けたと伝えられている。その手術において卵巣の移植を受けたことにより、法的には女性として認められた¹⁵。卵巣移植は画期的ではあったが、1931 年手術の結果死亡が確認された。

1952 年にデンマークの医学界では Christian Hamburger による男性から女性への性別適

¹² 澤田新一郎（2004）「ジェンダーの概念の形成」、『改定版 性同一性障害の基礎と臨床』、新興医学出版社、p. 1-8。

¹³ 田新一郎（2004）「ジェンダーの概念の形成」『改定版 性同一性障害の基礎と臨床』新興医学出版社、p. 1-8。

¹⁴ 同上

¹⁵ 針間克己、（2003）、『性同一性障害って何？ 一人一人の性のありようを大切にするために』、縁風出版、p. 17。

合手術が実施され、デンマーク国内で注目を集めた。その手術を受けたのは、アメリカ軍として朝鮮戦争にも参加した男性であり、その後 1950 年にデンマークで Hamburger による治療を受けた。数ヶ月に渡るホルモン治療を受けてから、男性の性器除去と外見的女性化の手術が行なわれ、遂には女性となった。

日本はどのような状況に置かれているのだろうか。日本においては、1998 年に埼玉医科大学において、初の公式な性別適合手術が実施された。しかしながらそこに至るまでには長い時間が必要であった。

日本の状況で最初に触れなければならないのは、1964 年に起きた東京都の医者たちの事件である。彼らは性別適合手術を実施したことによって優生保護法違反で検挙された。その事件はブルーボーイ事件と呼ばれており、3 人の男性が精神的な診察を正確に行わず、睾丸摘出、陰茎切除、造陰等々をし、それがいわゆる性別適合手術であったと伝えられている。また、手術の際、治療用麻薬を使用し、麻薬取締法違反で処罰と懲役の対象になった。彼らが行った性別適合手術は優生保護法に違反するとして、懲役 2 年および罰金 40 万円、執行猶予 3 年という判決を受けている。優生保護法第二十八条では、「何人も、この法律の規定による場合の外、故なく、生殖を不能にすることを目的として手術又はレントゲン照射を行ってはならない」と定められている。そして、この医師たちは優生保護法に違反する行為、つまり女性への性別適合手術すなわち睾丸摘出および生殖を不能化という行為を行ったということから、この判決が下されたのである¹⁶。

「ブルーボーイ事件」は、医学の世界のみならず、日本社会も揺るがした。判決文では性別適合手術を全く否定したわけではないが、性別適合手術に対する様々な意見を挙げた上で、次のような結論となっている。

性転向症に対して性転換手術を行うことの医学的正当性を一概に否定することはできないが、生物学的には男女のいずれでもない人間を現出させる非可逆的な手術であるので、少なくとも次のような条件が必要であると考えらる。

(イ) 手術前には、精神医学ないし心理学的な検査と、一定期間にわたる観察を行うべきである。

(ロ) 当該患者の家族関係、生活史や、将来の生活環境に関する調査が、行われる

¹⁶ 山内俊雄編著（2004）『改定版 性同一性障害の基礎と臨床』、新興医学出版社。

べきである。

(ハ) 手術の適応は、精神科医を混えた専門を異にする複数の医師により、検討されたうえで決定され、能力のある医師により、実施されるべきである。

(ニ) 診療録はもちろん調査、検査結果等の資料が作成され、保存されるべきである。

(ホ) 性転換手術の限界と危険性を、十分理解しうる能力のある患者に対してのみ、手術を行うべきであり、その際、手術に関して本人の同意は勿論、配偶者のある場合は配偶者の、未成年者については一定の保護者の、同意を得るべきである¹⁷(一部省略)。

これ以降、国内では性別適合手術がしばらく行われなくなり、それを望んでいる人たちにとっては非常につらい時期になった。

日本で性同一性障害という言葉がマスメディアを通じて聞かれるようになったのは、1995 年になってからだという。その一連の報道は、「自分は何処で誰と相談したらいいのか」「自分は異常、間違っているのではないか」など非常に不安に思った当事者が出現し、埼玉医大倫理委員に問いかけたことについての報道という形で始まった。そして 1995 年、埼玉医大倫理委員会はその当事者に、性転換治療の臨床的研究を本格的に実施すると回答した。そして、1996 年に埼玉医大倫理委員会は「性同一性障害と呼ばれる痴患が存在し、性別違和に悩む人がいる限り、その悩みを軽減するために医学が手助けをすることは正当であり、外科的性転換も治療の一手段」という答申をだした¹⁸。1997 年に日本精神神経学会は「性同一性障害」に関する診断と治療のガイドラインを発表し、1998 年に公式の性別適合手術が行なわれた。

医学的な立場から見れば性同一性は正常な状態であり、胎児期（第 8 週目程度）までに生物学的な問題がなければ通常に成長していくとされる。性同一性障害は胎児期に精子と卵子が受精し細胞分裂が始まってから、生物学的な問題で身体または脳のいずれかの性分化に異常が生じた結果として生じるといわれ、その意味で原因は先天性であると考えられている¹⁹。

¹⁷ 山内俊雄編著（2004）『改定版 性同一性障害の基礎と臨床』新興医学出版社、p. 223。

¹⁸ 池田久美子・岡部芳広・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌二・土肥/いつき・宮崎留美子（2003）『セクシュアルマイノリティー同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』、明石書店、p. 84。

¹⁹ 山内俊雄編著（2004）『改定版 性同一性障害の基礎と臨床』、新興医学出版社。

1.1.3 性的指向性

これまで述べてきたように、性自認は自分自身の性別をどのように認識するかという問題であり、あくまでも自分自身で完結する問題である。これに対して、性的指向性とは相手に対して情緒的魅力、性的魅力を感じるという問題、つまり対象が存在する問題である。対象あるいは相手については、各人の特定の好みや感じ方、こだわり等があるが、その意味で性的指向性の多様さを語ることは難しく、かつあいまいであると考えられる。また中には、性的指向性を全く持たないケースも存在し、それは無性愛と呼ばれる。そのため、性的指向性の定義はケース及び研究者によって異なってくる。性的指向性の概念や定義などを推し進めても、場合により当てはまらないケースがあり、一人ひとりの指向が当然ながら異なるので、結局のところ性的指向性はあえて定義しなくてもよいのかもしれない。しかしながら、現在の一般的な考え方では、性的指向性は異性愛（ヘテロ・セクシュアル）、同性愛（ホモ・セクシュアル）、両性愛（バイ・セクシュアル）に分類されており、ここではそれぞれの定義をみていきたい。

1.1.3.1 異性愛

異性愛（ヘテロ・セクシュアル）とは一般的な定義では異性者に対して性愛、恋愛、魅力を持つ状態である。例えば、現代では、男性が女性を愛し、逆に女性が男性を愛することはいわゆる正常なカテゴリーに入る状態とされる。このような異性愛は、単純化を恐れずに言えば、生殖、つまり子孫繁栄（再生産活動）に親和性が高い。

ジェンダー研究の世界有数の研究者で国際的な影響力を持つジュディス・バトラー²⁰によると、同性愛という言葉およびその概念は医学的知識の一般に普及した頃から使われだしたという²¹。医学用語では先に同性愛（ホモ・セクシュアル）という言葉が作られ、その後それに對する異性愛（ヘテロ・セクシュアル）という言葉が出てきたとされる。同

²⁰ ジュディス・バトラー(Judith Butler)は1956年にアメリカのオハイオ州クリーブランドに生まれた。バトラーはフーコーの影響を受け、ジェンダーとセクシュアリティ、フェミニズム、クイア理論、政治哲学の研究を推進しており、『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』『『触発する言葉——言語・権力・行為体』『アンティゴネーの主張——問い直される親族関係』『自分自身を説明すること——倫理的暴力の批判』などの書物を著した。彼女はアメリカ合衆国のポスト、構造主義思想家として有名である。現在彼女はカリフォルニア大学バークレー校修辭学・比較文学科教授である。

²¹ バトラー、ジュディス (Butler Judith) (1999) 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

性愛の方が先に言葉として誕生した理由は、これが先に病理化されたからである。医学はここでも大きな役割を果たす。疾患として定義づけられた同性愛を、疾患でない異性愛と対比させることによって性的な異常・正常という概念を人々に認知させる機能を果たしたのである。

社会は、生殖という観点から異性愛を自然なものとしている。つまり異性愛は正常な行為として人々に受け取られてきている。しかしながら、異性愛であればそれだけで「正しい」というわけでもない。実際、異性愛の中にも様々な形態がありえる。例えば、中には異性の幼児、未成年、老人に魅力を感じる人々もしばしばいる。社会ではその様な人物は通常の異性愛者ではなく、異常な異性愛者とされる。従って、実際のところ、どこまでが正常でどこからが異常なのか単純には決定できないことは明らかである。

1.1.3.2 同性愛

では同性愛の定義とはどのようなものであろうか。同性愛（ホモ・セクシュアル）の定義は様々であるが、一般的な概念では、性的指向性が同性にむけられた状態を意味する。例えば、男性の同性愛者のことをゲイと呼び、女性の同性愛者のことを特にレズビアンと呼ぶ。他に類似している言葉はいくつかある。例えばホモ、オカマ、オナベ、ニューハーフなどであるが、これらの言葉には差別的な意味合いが含まれ、聞いた瞬間に不快感を持つ同性愛者が多数いることから学術用語としては使われていない²²。

同性愛者は自分の性自認に対して必ずしも違和感を抱えている訳ではないが、性的指向は同性に向く。例えば男性の場合、自分の性自認に違和感、不快感がなく、男性として生活し、しかし性的指向では同性である男性に性的魅力を感じる。女性の場合は、女性として認識し、違和感などを持たず、ただ同性の女性に魅力を感じる²³。

科学万能時代の19世紀の欧米では、同性愛は疾患名とみなされ、医学的治療の対象となることもあった。この考え方は比較的近年まで続いてきた²⁴。しかしながら、実際には当事者も自分自身を疾患とはみなしていないことが通常である。そのため、同性愛者は市民

²² 野宮亜紀・針間克己・大島俊之・原科孝雄・虎井まさ衛・内島豊（2003）『性同一性障害って何？ 一人一人の性のありようを大切にするために』、縁風出版。

²³ 針間克己（2003）『一人ひとりの性を大切に生きる～インターセックス、性同一性障害、同性愛、性暴力への視点』、少年写真新聞社。

²⁴ ロニー・アレキサンダー・池田久美子・おかべよしひろ・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌二・土肥いつき・宮崎留美子（2003）『セクシュアルマイノリティ同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』、明石書。

権獲得の運動を起こし「病気ではないこと」を訴え、その結果現在では特別な医学的治療の対象から外されている。実際、1990 年代初頭に世界保健機関の ICD-10 および、米国精神医学会の DSM-IV などは同性愛を疾患とはみなさず、医学的治療の対象から外した²⁵。この様に、現在の専門医の見解では同性愛のそのものは疾患ではない。

1.1.3.3 両性愛

両性愛（バイ・セクシュアル）の定義は未だに議論されている。一般的な定義では、男性と女性の両者に対して、性的及び肉体的な魅力を感じる状態を指す。異性愛でもあり同性愛でもあるため、どちらの性的指向に入るのかが決定できないことも、異性愛者の視点からは異常な状態として認識される。

両性愛は 20 世紀後半に入ってから、研究の対象となった。両性愛は人類学、歴史学、生物学など様々な分野において人間の行動及び他の生物の世界を構成する一要素として認められていた。

1.1.4 ジェンダー

1.1.4.1 ジェンダーとは

1970 年代以降、性の複雑さが認められ、二項対立の枠組みに留まらず、性の概念を社会的、文化的なアプローチから捉え直すために「ジェンダー」の概念が提示された。ジェンダー研究はその後活発になり、理論も多様化し、国際的な分野となっている。いずれにせよ、ジェンダー研究における諸概念及び諸理論にも限界や相違点があることが明らかになっている。ここではジェンダーの起源を再確認しながら、その概念の限界及び、それが生物学的性（セックス）と持つ関係性を論じたい。

ジョン・マネー²⁶が最初にジェンダーという言葉を使ったのは 1950 年代であり、特に性自認という医学・性科学的な問題を対象とした発達心理学的研究においてである。性自認（ジェンダーアイデンティティ）の典型的な例として、性同一性と性同一性障害があるが²⁷、

²⁵ 針間克己（2003）『一人ひとりの性を大切に生きる～インターセックス、性同一性障害、同性愛、性暴力への視点』少年写真新聞社。

²⁶ ジョン・マネー（John Money）はニュージーランドで生まれ、のちアメリカに移民した心理学者、性科学者、精神科学者である。

²⁷ 同上

いずれも身体的な性別しか指さない。マナーは、105 人のインターセックス当事者²⁸を対象に、生物学的性に割り当てられた役割と、教育によってどのように彼らのアイデンティティ（どちらかの性別を選択しなければならないこと）が決定されるのかを研究した。その結果、彼は「性自認が分化をするこの段階期では、染色体やホルモンや性器などがどのような状態であろうとも、社会的圧力のほうがジェンダー・アイデンティティを決定する影響として大きい」と指摘した²⁹。性の分化において、生物学的な要素よりも環境や育て方という要素に優位性があることを証明したのである。

彼の説明によって二元的性別概念は揺れ動き、研究者の間では再度議論が交された。そして、1960 年代から 1970 年代にかけての第二波フェミニズム以降、人間の性についての研究は生物学的な性よりも社会的、文化的、歴史的に形成された性差（女性らしさ、男性らしさ）に重点を置くジェンダー研究へと変化してきた³⁰。こうして 1980 年代になって初めて生物学的性とジェンダー概念が分けられた。

こうした考え方は社会科学によって先に取り入れられるようになった。性とは生物学的な性（つまりセックス）であり、それは先天的で自然なものであると医学者は主張したが、これに対して、社会学者は性別役割や自己認識に基づく、社会的、文化的に形成された性がジェンダーであり、それが性を意味すると述べたのである³¹。生物学的性とジェンダーの区別をめぐって、双方は相違点を持つ。しかし、生物学的性（セックス）にしても、ジェンダーにしても、多くの場合女性／男性という二元論から生まれた差異を前提視する点は共通している。

生物学的性というのは人々の無意識的認識の中で「自然」なものとして生産され確立されていく。しかし後に詳述するようにジュディス・バトラーは、実際のところ生物学的性は所与の事実ではなく、政治的、社会的な利害に沿うものとして、言説的に構築されたものと議論する。バトラーから見れば、ジェンダー概念だけではなく、生物学的性（セックス）の概念もまた社会的な構築概念であり、性についての科学的言説として社会的文化的性に根拠を与える権力構造の装置なのである。

²⁸ インターセックス（中間的な性や半陰陽であり、簡単説明すると、染色体、内外性器などが女性か男性か区別できない状態である。

²⁹ 同上

³⁰ ミレット・ケイト（Millet Kate）（1985）藤枝濤子・横山貞子・加地永都子・滝沢海南子訳『性の政治学』、ドメス出版。

³¹ 加藤秀一（2006）『知らないで恥ずかしい ジェンダー入門』、朝日新聞社。

1.1.4.2 ジェンダーから解放されたジェンダーフリーの再確認

社会的、文化的に作られた女らしさ／男らしさ、つまりジェンダーが生んだ性差は、性に関する不平等、人間差別の根本的な原因として論じられている。例えば、女性差別などである。女性差別に対しては女性運動が始まり、フェミニストたちは女性が抑圧されてきた社会的、文化的構造を徹底的に壊し、男女平等の社会を築くことなどを訴えてきた。ただし、性の存在を特別に扱うことも、ある意味ジェンダーによる差別と考えられる。それは男性と同じでないという理由により特別扱いをしているということになるからである。これに対し、アメリカの教育学者バーバラ・ヒューストンは「ジェンダーフリー」という言葉を提唱した。英語表記における Free が「存在しない」ことを示しているように、これは、男女平等という状態を示すというよりはむしろ、ジェンダーの存在を意識しないという意味合いを持っている³²。

即ち、ジェンダーフリーの思想とは、社会的、文化的に作り上げたジェンダー（例えば女性らしさ、男性らしさという性差）の固定観念に束縛されずに、人々の性のあり方やその生き方（女性男性）を認め合いながら、尊重するという主張である。つまり性差による偏見をなくそうとする思想であり、あくまでも性差という存在抜きには語れない概念である。では、ジェンダーフリーが提唱している、女性／男性という概念から外れたものは一体どのように語られているのか。

ジェンダーフリーとは、一概に性差に苦しむ人々に救いの手を差し伸べるものではない。フェミニストたちはジェンダーフリーと性差による不平等さを批判するとしても、性差そのものは否定しない。生物学的な性差は、男女平等の社会のための前提条件であり、不可欠なものであると彼女／彼らは認識している。しかし、男女平等という概念が提示された途端に、固定化された女性／男性という二元論から外れた人たちの存在、例えばセクシュアルマイノリティが排除される危険性は十分にあるだろう。ジェンダーフリーとは、女性と男性の差異を認めた上で、男女平等の社会を語るということになるので、その時点で既に権力の問題が無意識的に造りだされていることになる。この考え方からは、生物学的な

³² Houston, Barbara. (1994). Should Public Education Be Gender Free? In L. Stone, ed., *The Education Feminism Reader*, New York: Routledge, pp. 122-134; (ジェンダーフリーという言葉が誤用される研究も見受けられる。例えば、ジェンダーフリーは性差を拒否するのではなく、生物学的性差を前提視した上で、女性と男性の平等な社会進出を促す用語として用いられる場合がそうである。); 上野千鶴子・宮台真司・斎藤環・小谷真理 (2006) 『バックラッシュ! : なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』、双風社; 木村涼子 (2005) 『ジェンダー・フリー・トラブル』、白澤社。

差異の概念は決してなくなることはないであろう。場合によっては、セクシュアルマイノリティに対して更に強い差別や偏見が生まれる可能性さえある。

ジェンダーにしても、ジェンダーフリーにしても、それらは社会的、文化的に造り出されたものであり、またその概念や定義はやはり社会的、文化的に作り出された性別のことである。そうであるならば、こうした言説の批判を通して性差を壊すこともできるだろう。即ち、ジェンダーをフリーにするのではなく、ジェンダーの概念そのものをなくすことによって性からフリーになると考えられるのである。

第2節 男女二元論で語れないセクシュアルマイノリティとは

1.2.1 セクシュアルマイノリティと社会

近代的社会の中においては、男女二元論と異性愛主義のもとに人々の考え方だけでなく、暮らし全体が作り上げられている。それに対して、そうでない立場の人々は社会に少数者すなわちマイノリティの立場に置かれている。この節では、セクシュアルマイノリティはなぜ社会に周辺化され差別されるのかを考察する。

近年ではセクシュアルマイノリティの人権を守る立場から、セクシュアルマイノリティの社会的認知度や関心も高まっており、研究も活発に行われている。では人々の言うセクシュアルマイノリティとは何だろうか。その問いに対して各研究者の間で議論が百出したが、必ずしも100%正確な解答はない。それは性というものは多様であり、またきわめてあいまいなものであるからである。

セクシュアルマイノリティ当事者は、統計的にどれぐらい存在するのかという質問は非常に困難である。そして結論を言ってしまうと、正確な数字は現在においてもなお不明である。その要因の一つはセクシュアルマイノリティとカミングアウトしにくい社会的圧力が存在していることである。「あなたは同性愛者ですか」と聞いて、「はい、そうです」という答えは簡単に返ってこない。セクシュアルマイノリティに対してまだ寛容でない社会の方が多いためである。実際、多くのセクシュアルマイノリティ当事者は社会あるいは非当事者からの偏見や差別の対象になることが多く、他人に知られることなく一人で苦しんでコンプレックスを抱えながら辛い日々を送らなければならない。

多くのセクシュアルマイノリティ当事者は自己アイデンティティーの混乱に直面している。社会には、性差の典型的なパターンから外れる言説あるいは実態があると、当然ながらそのズレを排除しようとする傾向がある。これは近代的なシステムの一つである。近代的な

制度（規範）の中で男女二元論と異性愛主義の普遍的主体が特権を獲得する際、セクシュアルマイノリティの存在に対する排除や差別を生み出してしまい、性のあいまいさや多様さを無視し切り捨ててしまう傾向がある。

多くの人々（男女二元論と異性愛主義）は「自分の性については問題がない」というふうに思っているだろう。しかし、実際には生物学的性、性自認、性的指向性の3つの要素の組み合わせは必ずしも一致する訳ではない。多くの当事者は「自分がなぜ周囲と違うのか？世界には自分一人なのか？」と思い、よって葛藤、不快感、社会適応困難、混乱を抱え込む。近代社会は性の多様さを制限し、決まった男女二元論と異性愛主義と異なる他の性を異常と断定し、人々に正常になるという規範を押し付けていく。

突き詰めると、アイデンティティというものは、個人の固有のものではなく、社会的、文化的に構築され、社会の関係性の中で初めてその形が出現し成立していくものである。ある人が自分を表現する際、「私の名前は〇〇であり、女性／男性です」と答えたとしよう。ここで名前の「〇〇」はそもそも与えられたものであって、本人は選ぶことができない。女性／男性という性別も、他者が決定するものである。人々は、安定したアイデンティティを確保するために何らかの形で自己を他者に同一化し、再構築していく。特に近代的なアイデンティティの概念は、他者化されたからこそ、つまり他者の存在を前提とするからこそ、そこに初めて自己アイデンティティが立ち上がってくわけである。だから、アイデンティティは、個人の内面化という問題だけではなく、社会的、文化的な影響による他者との対比によって機能している。

セクシュアルマイノリティ当事者は自己アイデンティティの混乱だけではなく、カミングアウトという問題にも直面している。例えばカミングアウトとしても、理解されないか、極端な場合は宗教および社会の規則により、処罰の対象となり死刑になることもありうる。従って、当事者に聞いても、簡単に答えが出てこないことは容易に想像できるし、カミングアウトできる環境だとしても数がとても少ない。

さらに言えば、開かれた社会においてさえセクシュアルマイノリティは政治的弱者である。例えば、実際に一般人々の生活レベルにおいてセクシュアルマイノリティ当事者がオープンに生活できるカナダを例として取り上げてみよう。1997年にカナダのケベック州で、世界で初めて性的指向における差別が禁止され、誰でも平等な権利が認められるようになった。そして2005年にカナダの全土に同性婚の法律が施行され、同性同士のカップルにも養子縁組が認められ、その権利が保障される道が開かれた。しかしそういうことになって

も、やはり同性愛、性同一性障害などはセクシュアルマイノリティの側に属しており、異性愛はマジョリティ側にある。結局のところ、セクシュアルマイノリティの主体によってマジョリティが担保されていく。セクシュアルマイノリティを認める行為自体はマイノリティ対マジョリティを生み出す規範として、常に当事者はマイノリティのカテゴリーに入れられてしまう。よってマイノリティの概念が存在する限り、マジョリティ的主体を取り戻す可能性は低い。その結果カナダでさえ、マイノリティを受容する行為は「マイノリティはマイノリティだから」「マジョリティはマジョリティだから」ということになってしまふ。

1.2.2 セクシュアルマイノリティへの嫌悪、偏見と差別

近代化するにつれて、社会はセクシュアルマイノリティというカテゴリーを生産し、同時に否定し続けてきた。理解しようとする人々の間でさえ、その理解は十分に行われていないし、誤った方向に理解している人々が多い。例えば、テレビ、ラジオ、新聞や雑誌などというメディアではセクシュアルマイノリティについて取り上げられても、その内容は根拠のない話ならまだしも、笑いネタの対象とされたり、「ホモ、ゲイ、レズビアン、ニューハーフ」などという差別的な用語が使用されたりと、視聴者の間にセクシュアルマイノリティに対してより悪いイメージを与えると見受けられる³³。

近代社会は、異性愛主義と男女二元論を生産し、それらを特権化し、正当化し、性の規範として確立させてきた。そのように必ずしも成文化されない規範のもとで多くの人はその規範が自然で、普遍であることを内面化してきた。セクシュアルマイノリティ当事者たちは自分らしく生きようと、周囲に対して自分のありのままの姿をしばしば公表してきた（カミングアウト）。そして、それには相当な勇気が必要であった。なぜならば、人によって事情があるかもしれないが、当事者自身がカミングアウトをしようとしても、実際多くの場合は、残念なことに家族はもちろん、親戚にさえ分かってもらえず、一人で悩んでいることが多い。具体的に例を挙げると、当事者が家族にカミングアウトすると、多くの場合は家庭内での暴力虐待などを招いてしまう。さらに、友達や知人、学校、職場、地域に自己のアイデンティティと打ち明かすと、多くの場合は人間関係悪化、就学・就労に関連

³³ 野宮亜紀・針間克己・大島俊之・原科孝雄・虎井まさ衛・内島豊（2003）『性同一性障害って何？ 一人一人の性のありようを大切にするために』、縁風出版；石丸径一郎（2008）『同性愛者における他者からの拒絶と受容—ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ—臨床心理学研究の最前線』、ミネルヴァ書房。

した問題、社会適応困難、社会的排除などにより反発を招き、理解されず、いじめの対象となって差別や不利益をこうむってしまう。深刻な場合には「命」を絶ってしまうものもいるというのも事実である。当事者が受ける心理的・精神的苦痛は計り知れない。性別二元論と異性愛主義という社会的規範のもとでは当事者が直面している問題は家族、友達、知人、社会などという非当事者（他者）のみならず、自己アイデンティティーに関して、内的葛藤、罪悪感、過酷な心の呪縛、混乱、不安、恐怖が噴出している。そうすると、当事者の自身さえも自分を否定的に捉えてしまう。

第3節 権力論における^{セクシュアリティ}性への考察

こうした近代的な性の構築に最も早く異論を唱えたのがミシェル・フーコー（Michel Foucault）である³⁴。フーコーは、近代以降、国家が人間の誕生段階から死に至るまで管理し、しかもその人間たちを生かし使いやすくするように徹底的に養成しているという。彼は権力論に関する研究を大胆に推し進めていき、具体例として人間の生における^{セクシュアリティ}性を取り上げた。本節ではまずフーコーの『性の歴史I 知への意志』における権力論の概念、特徴を概観する。また、ここでは国家と権力をそれぞれ定義するより、むしろ双方の関係性を明確にすることによって、性というトピックの中で語られている問題の全体像を図る。

フーコーによれば、西洋社会は近代に入って国家権力によって、積極的に諸制度が導入され、人々の統治・管理・調整などが行われた。本論ではそのひとつの事例として生-権力を取り上げ、理論をまとめていく。そして、生-権力の関係で語られている理論を援用しながら、^{セクシュアリティ}性の概念へと具体的に結実していく。

³⁴ ミシェル・フーコー（Michel Foucault）は1926年10月15日にフランスの南部のポワティエ市に生まれた。1943年6月大学入学資格試験に合格した。フーコーの学生の生活は「同性愛」者としての苦しさ、エリートとしての息苦しさにより精神的に不安定で、ついに1948年に自殺未遂事件を起こした。1950年再び自殺未遂事件を起こしたが、この時期、精神的に不安定であったフーコーを助けたのがルイ・アルチュセール（1918年～1990年、フランスの哲学者）である。アルチュセールはフーコーに「精神分析によってではなく、仕事によって病気を乗り越えるように」とアドバイスしたという。

フーコーは大学教員資格試験に合格し、1954年にリール大学、1955年にスウェーデンのウプサラ大学、1958年にポーランドのワルシャワ大学、そして1960年にクレルモン・フェラン大学講師を経て教授となった。1966年からはチュニジアで哲学を教えた。そして、1968年にフランスのパリで起こった五月革命に接し、「主体」に対する思想と真理を考え、それを分析した。1970年にコレージュ・ド・フランスの教授に就任した。フーコーは『狂気の歴史』、『言葉と物』、『監獄の誕生』、『性の歴史』、『臨床医学の誕生』などの作品を著した。そして、1984年半ばに他界した。

1.3.1 『性の歴史Ⅰ 知への意志』における生 - 権力によって語られる性への考察

1.3.1.1 『性の歴史Ⅰ 知への意志』における生 - 権力及び国家との関係

近代国家の理念は18世紀に起こったフランス革命、イギリス産業革命、アメリカ合衆国独立革命によって出現し、世界史の新たな時代の幕を開いた。近代国家の基礎は、フランス革命によって封建社会体制・王国または帝国体制が崩壊した後、成立した一定の領土・国民・主権などが明確なことにある。共和国として成立したフランスは史上初の近代国家だと言われる。人間の権利、自由、平等の原理によって成立した近代国家は、国家権力を担掌し、国民の統治を行うため様々な制度を構築した。近代国家は人間の権利、自由、平等などという原理に基づく概念であったが、その国民とは男性のみを対象としていた。つまり男性以外のものは国民として語られる対象ではなかった³⁵。つまり近代国家はそのスタートから性の問題を孕んだ形で始まったのである。

ここでひとまず、フーコーの理論を整理し、国民国家または近代国家はどのように人々を管理したのかを考察していく。フーコーの思想的展開において、もっとも重要なことは権力論である。フーコー自身は国家に対してあからさまに批判するのではなく、間接的議論から始め、権力論の展開で多くの書物を著作した。

近代は国家権力によってすべての国民が管理される時代であると思われる。フーコーの『性の歴史Ⅰ 知への意志』では、「権力とは、一つの制度でもなく、一つの構造でもない、ある種の人々が持っているある種の力でもない。それは特定の社会において、錯綜した戦略的状况に与えられる名称なのである」と述べている³⁶。権力には無数の構造が存在する。権力とは、特定の人間集団が掌握し、上（政府）が下（住民）を支配する圧力ではなく、いたるところに存在する。

フーコーによれば、生 - 権力と国家の関係は互いがそれぞれに自立をしているが、個別的に動いているものではなく、互いに助けあう互助関係が成立し、しかも浸透し強まっていく。フーコーは『性の歴史Ⅰ 知への意志』において国家を直接的に定義しなかったが、彼の国家概念をまとめると、国家とは多様な統治性の体制（権力）によって構築され維持されるものである。この権力はそれまでの殺す権力ではなく、人々を生かす権力として理解される。かつて西洋社会において伝統的な主権は国民の生死を握っていた。フーコーは「長いあいだ、君主の至上権を特徴づける特権の一つは、生と死に対する権利[生殺与奪の

³⁵ フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（1986）渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社。

³⁶ 同上、p120-121。

権]であった」³⁷と述べた。つまり、かつて国家／権力支配者は人々の生を掌握し、また逆に人々の生命を簡単に絶つこともできた。例を挙げると、社会の規則や法律などに従わなければ、死刑を課すという直接的な権利を持っていた。つまり国家にとって危険な人物は合法的に殺害することができたのだ。また、国家ひいては民衆の平和な生活を人質に取って戦争に参加させるが、このことは国民全体の生存の名において行われたのである。また戦術の規律・訓練などによって、人間は簡単に人間同士で戦い、殺し合うこともできた。フーコーは以下のように述べた。

「生と死」という形で表されている権利は、実は死なせるか、それとも生きるままにしておくかの権利である。結局のところ、それは剣によって象徴される。そしておそらくは、このような法的形態を歴史的な社会の一典型へと関係づけてこななければならないのだ。すなわち、権力が本質的に、徴収の機関、窃取のメカニズム、富の分け前を専有する権利、臣下から生産物と財産と奉仕と労働と血を強奪するという形で行使される社会である。権力とはそこでは何よりもまず掌握の権利である³⁸。

しかし、19世紀以降近代国家は生に目を注ぎ、むしろ権力によって生命を管理・経営することを通じて、国民全体の統治を行った。ここで、フーコーは次のように述べた

このような死に対する途方も無い権力は…今や生命に対して積極的に働きかける権力、生命を経営・管理し、増大させ、増殖させ、生命に対して厳密な管理統制と全体的な調整とを及ぼそうと企てる権力の補完物となるのである。…そこで生存が問題になるのは、もはや主権の法的な存在ではなく、一つの国民の生物学的な存在である。民族抹殺がまさに近代的権力の夢であるのは、古き＜殺す権利＞への今日的回帰ではない。そうではなくて、権力というものが、生命と種と種族というレベル、人口という歴大な問題のレベルに位置し、かつ行使されるからである³⁹。

近代以前の国家は生死を与える権力の特徴を持ったが、しかし近代国家においては人々

³⁷ フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社、p. 171。

³⁸ 同上、p. 172。

³⁹ 同上、p. 173-174。

の生命を管理し、人口を調節した。加えて、フーコーは「死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代わって、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現われた」⁴⁰と強調した。近代国家になってから、国家は新たな権力を誕生させ、人々の生に介入し管理する方向に変わってきた。殺すことというより、むしろ納税者、労働者となる国民を生かす（働かせる）ことに移っており、それは「生かす権力」に変化したのである。そのような権力を生 - 権力とフーコーは呼ぶ。

国家が生 - 権力を採用することができたのは、近代的な国家概念の成立と関係している。近代国家とは一定の領土、一定の国民、主権の存在によって成り立っている。そうすると、主権（権力）が領土全体に機能し、全国民を対象とし、更に主権（国力）が強大になればなるほど、他の国まで拡大すること（植民地、侵略）は可能である。生 - 権力もまさに一つの例であり、国民統治、経済発展、国力強化という明確な目的の登場と関連している。つまりこの目的を達成するために、国家は人間の出生率と死亡率の管理すなわち人口調節などの国民の統治に焦点を当てたのである。

国家は人間の生命を増進し、拡大し、管理することによって、よき労働者、よき兵士を育て、働かせることを目指していた。国家はこの生 - 権力をスムーズに機能させるために、特定の正しい生き方を人々に教え込み、浸透させた。具体的な例として、人間の健康増進、公衆衛生拡大・維持、犯罪率減少政策などである。現在にもそのような政策が維持されているが、新たな形として表れている。少子化防止対策、社会福祉、禁煙・卒煙政策などは典型的な例である。そうすると生きるという行為は、結局生物として存在することだけになり、極端に言えば、国家は正しく生きることを生産しているということになる。国家は人々の幸せがどうであれ、その人口を数値化し、監視社会にすることによって、誕生から死まで管理することになってしまったのである。フーコーは 17 世紀以来、生 - 権力において具体的には 2 つの主要な形態があったと示した。その二つの形態は全く相違するものではなく、むしろ必然的に相互作用として表れている。

その極の一つは、最初に形成されたと思われるものだが、機械としての身体に中心を定めていた。身体の調教、身体の適性の増大、身体の力の強奪、身体の有用性と従順さとの並行的増強、効果的で経済的な管理システムへの身体の組み込み、こういったすべ

⁴⁰ フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』、新潮社、p. 175。

てを保証したのは、**規律**を特徴づけている権力の手続き、すなわち人間の身体アナトミの**解剖－政治学**ポリテイクスで[解剖学的政治学]であった。

第二の極は、やや遅れて、十八世紀中葉に形成されたが、種しゅである身体、生物の力学に貫かれ、生物学的プロセスの支えとなる身体というものに中心を据えている。繁殖や誕生、死亡率、健康の水準、寿命、長寿、そしてそれらを変化させるすべての条件がそれだ。それらを引きうけたのは、一連の介入と、**調整する管理**であり、すなわち人口の生－政治学ビオ・ポリチック[生に基づく政治学]である⁴¹。

すなわち、17世紀以来国家は生に対する権力を2つの形態から発展させた。第1形態は機械としての身体を形成することであった。例えば、正しい身体正しい身体の概念、その身体を管理し監禁し、規律の権力を確立した。つまり、規律をもった身体を形成していくのは人間の身体人間の身体の解剖－政治学である。国家はその正しい身体正しい身体の概念を人々に内面化し、「生まれてきた身体が不自由なく、良かった」というふうに思い込ませる。権力によって正しい身体が形成されるのではなく、身体と権力との関係によって、正しい概念が誕生されたわけである。国家がその正しい身体正しい身体の概念、規律を人々に従順させ、調教させることは「規律権力」とも呼ばれる。正しい身体正しい身体という概念に周縁化されると、異常者（正しくない身体）という概念も同時に形成された。身体障害者施設、福祉施設、病院は典型的な例である。そもそもそれらの場所は疾患を治療し、リハビリなどを手助けたりする場所であるとする理解もあるが、身体が異なりながらも、あえて正しい基準に強制的に従うようにさせる作用が生じる。異なる身体でも、それらの機関にいれば、また国家に求められる基準に再び治され（正しい病人、正しい障害者）、それで国家の政策に貢献できるという。しかし、設置された基準を外れた場合は、正しくない病人、正しくない障害者であるとみなされる。そうになると、「正しい健常者」対「正しい病人・障害者」のみならず、「正しい病人・障害者」対「正しくない病人・障害者」という構造ができてしまう。いうまでもなく、そこでは規律権力が発揮しているのである。

第2形態は生物としての身体を中心に形成されてきた。例えば、統計的な国勢調査を行い、人間の誕生、死亡率、生殖、健康、衛生、寿命、病理などを管理する権力、すなわち国民人口を管理してきた。そのため、国家は統計学、公衆衛生学、福祉学、医学、科学に

⁴¹ フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（1986）渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社、p.176。

特権を与えることを通じて、人間の生老病死に関する制度化と生殖に一層力を入れた。

そのような身体の規律と人口管理は生－権力の仕組みである。よって、国家は国民の生命を数値化し、その一定の数を確保するに上で生殖に注目した。生殖できるには決まった定式を採用し、しかも健康な状態を保ったうえで、生産活動に貢献しなければならない。生産活動とは子供を生むこと、生活していくためのものを生産し、それらを確保しなければならない。そして、生産活動によって作り出された生産物を流通させなければならない。国家はそのような仕組みを国民全体的に導入させるために、諸個人に徹底的に教育を施し、更に諸個人から社会全体を統治する。すなわち、国家はミクロ的な権力（個人に規範を内面化すること）とマクロ的な権力（法・制度・秩序）を使いながら、人々を管理する。それらは近代社会における支配の有効な手段となった。そして生－権力は、構成員である個人のみならず、個人全員が一体になる時に最も効果を発揮することができるようになった。たとえば、諸個人が亡くなったりまたは生まれたりしても、生－権力によって社会統治（秩序）が全体的な統一性・一貫性・持続性を持つからこそ、常に一定の生が再生産できるのである。

生－権力の対象としての身体の規律・管理と人口調節（生殖）の社会的管理化に密接な関係があるのは^{セクシュアリティ}性である。フーコーによると、身体と性が絡みついている権力構造こそが、近代社会を成り立たせる必要な条件である。そのために、国家は社会を維持し、拡大するには性を問題化する。国家はこの生－権力によって社会と人間の性とは相互作用することで理想社会が到来すると期待し、よって性に関する様々な制度、規則をつくり、管理する。では、性はどのような形で管理されるようになったのであろうか。次に近代国家における性はどのように男性／女性という主体化に関わったのかを説明していく。

1.3.1.2 性の主体の問題とその解釈

フーコーの主張では、西洋社会は近代以前、性が本質的に抑圧されることは少なかったという⁴²。しかし、17世紀以来特に近代社会では性の語りはタブー化され、性を語る行為は公共の場ですべきでないとされてきた。彼によれば、近代以前における性の概念は非常にあいまいであり、性に対して比較的に自由であった。例えば、古代ギリシャでは人々の性的指向は自由に選択することができ、具体的にいえば少年愛、男性同性愛という行為を禁じられず、むしろ勧められた⁴³。また、古代ローマ帝国にも同性愛者が多くみられたという。中世の日本、中国、古代の中央アジア地方や北アメリカなどには両性愛者が多く存在したという。その時代においては性とは神秘的なものであり、例えば、森林の中で集団的性行為をすることで自然との調和を表す意味をもつ文化も存在した。そのため、性に対する羞恥心がなく、とても自由で解放的であったと考えられる。また、農産物の安定した確保のため、農業神に性の交わりを供える行為などが存在した。その場合、性はとても神聖なものであるという考え方もあった。

フーコーは、17世紀以来、特に近代国家の西洋社会では性的行為は快楽を満たすという方向から、国の富のため、つまり労働力確保の目的で、人口政策における生殖の方向に向かったと述べた⁴⁴。従って、かつて概念があいまいだった性は本質的なものになり、そこでは性と権力の密接な関係は不可欠となった。近代国家は性を管理することによって、人口の増加を理想的なあり方とし、商品と同様に生産性の高さ、つまり生殖能力の高さを優先してきた。国家の規範（正しい身体・人口政策）を厳密に守っている者が唯一正常であり、そうでない人々は異常としてみなされる。そこから正常と異常という概念が導出される。国家のいう正常とは、健康的な人で（障害、病気などを持っていない人）、異性愛者として社会的に再生産（規範・人口調節）できる、そしてよき労働者、よき兵士になれることである。逆に、社会的に再生産できない人たちは、異常として位置づけられる。例えば障害者、病人、妊娠できない女性、セクシュアルマイノリティなどである。そうした人々は社会的に再生産できないため、異常として社会の中で不利益な状況に置かれ、偏見を持たれ、差別されている。

同時に、近代国家は性における様々な社会制度を創造し、例えば医学、科学、教育、経

⁴² フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』、新潮社。

⁴³ 同上

⁴⁴ 同上

済、法学などを仲介して、現在でもそれらを継続している。例えば、女の身体の高ステリ一化であり、つまり女性の身体を性的欲望に満ちたものとし、また女性の身体を医学的治療の対象にする。具体的にいえば、婦人科、産婦人科などである。さらに、女性は産む身体として定義され、そうになると子供を産まない女性は普通ではないとみなされ、何かの医学的な原因を持つと判断され、病理または異常として看做される。また、近代国家は子どもの性を教育し、その子どもの性を危険な対象と見なし、管理した。国家は生殖行為の社会的管理によって、人口を増大させ、維持することを目的とし、異性愛に基づく一夫一婦制を正常であるという認識を拡大させ、同性愛者などのセクシュアルマイノリティを処罰の対象とした。そうすると、国家は産児奨励か、産児制限かを決めることになる。しかも、科学、医学の権威によって、性的指向が異性愛でない人は人口政策に参加できない存在として病理化され、性倒錯者、性的逸脱者として認識され、倒錯を矯正される対象となった。またこうした国家の認識は日常化されることとなった。

従って、こういった制度によって、権力はいたるところで性と密接的に絡みついている。そしてこのような性の言説化によって、性の主体が確立されたわけである。フーコーは次のように示した。

主体の学の企てが、性の問題の周囲を回転し始めたのだ。主体における因果律、主体の無意識、それを知っている他者における主体の真理、彼自身が知らないことについての彼のなかにおける知、これらすべてが、性についての言説のなかに自らを繰り展げる手段を見出だしたのである⁴⁵。

近代以降、国家は性の主体を誕生させることによって、人間に正常という規範、価値観または考え方を強制的に受け入れさせ、拡大させ、あたかもそれが本質的なものであると思わせた。

⁴⁵ フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』、新潮社、p. 92。

1.3.1.3 セクシュアルマイノリティ主体の確立

さまざまな主体化の装置を批判的に捉えるフーコーはどのようにセクシャルマイノリティと生権力との関係を考えたのであろうか。フーコーは、19世紀に西洋社会において同性愛・両性愛などのセクシュアルマイノリティが歴史的、文化的、社会的に構築されたとする⁴⁶。かつて西洋社会ではそれらが存在していたとしても、概念や意味は明確ではなかった。しかし近代以降、セクシュアルマイノリティの存在を強調し、語ることによってマイノリティの概念とマジョリティ（男女二元論と異性愛主義）の差異が形成された。人間が生まれた時点でそうした差異を内面化し、取り込むことは近代国家に固有の現象であるといえる。

国家は18世紀末にキリスト教の教義を利用し、法律などによって性におけるこまかな社会的制約を定めた。結果的に性の制度または実践として形成されたのは一夫一妻制による結婚制度・家族制度であった。そこでは、男女関係つまり異性愛による結婚が子供を産むための正しい性のあり方として規範化されていった。国家は人口政策に参加できないものたちを生殖機能から逸脱するという理由で異常として概念化し、それを定着させた。ここで国家の言う異常とは、同性愛、両性愛などのセクシュアルマイノリティである。

キリスト教の世界ではかつて同性愛を抑圧したわけではない。事実、男性同士の結婚に似せた儀礼があった。しかし、中世末になると社会全体が生殖に目を向けるようになった。その中で、キリスト教の教えが変化していった。つまり、同性愛は神の救いが受けられず、罪と判断され、処罰の対象となったのである。

また医学、科学の権力が強大になった18世紀末西洋の近代国家では、同性愛は罪という認識から、自然に反する疾患あるいは異常という認識へと変化し、医学の研究、治療の対象ともなった⁴⁷。そもそも医学的、科学的な「同性愛は病気であるため、異常」という言説は、近代国家の「生殖における人口政策及び、異性愛主義における男女二元論のみが正常である」という概念（規範）から生じている。それがベースとなって、「社会において再生産できるグループ、すなわち正常＝マジョリティ」対「社会において再生産できない、すなわち異常＝マイノリティ」という二項対立の構造が誕生したわけである。フーコーによれば、このような背景によって同性愛者のみならず、社会において再生産できないもの

⁴⁶ フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（1986）渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社。

⁴⁷ 同上

がセクシュアルマイノリティとして主体化され、さまざまな形に分散化された。セクシュアルマイノリティが「悪趣味」「変体」「異常」「病気」などとみなされるために、人々が社会的価値観（規範）を内在化し、偏見や憎悪心を持ち、セクシュアルマイノリティを差別するようになった。当時では、同性愛者による性行動は刑法によって処罰の対象となり、それ以外にも、必要以上に細かな性的犯罪の概念をつくり、性に介入した。現在に至るまで、セクシュアルマイノリティを犯罪と見なす国も存在し、当事者に危害を加えても処罰されないこともある。

こうしたセクシュアルマイノリティに対する差別や偏見に対して、当事者たちは自分の権利、主張、自由を求め、市民運動などを起こした。その結果として1990年5月17日に世界保健機関および、米国精神医学会が同性愛は異常な性欲、性的倒錯ではないとし、治療対象から削除した⁴⁸。しかし、未だに同性愛は病気であり異常だと思っている人も存在し、他のセクシュアルマイノリティも同性愛と同様に性的倒錯であり、異常性欲であると判断される。

ここまで説明すると、一見してみれば、社会はそういったセクシュアルマイノリティを排除することを目的としているように思われる。しかし、フーコーの視点では性とは権力によって抑圧され、正常と異常の概念を生み出すものである。性概念はセクシュアルマイノリティ（異常）を排除するのではなく、このカテゴリー（セクシュアルマイノリティ）をむしろ生かし、固定概念を定着させることによって、マジョリティ（正常）を担保することができるという⁴⁹。そうなると、正常と異常に分けられた性の主体は自然的、先天的、実在物、普遍的な要素を持つものではなく、実は医学的、科学的、社会的、文化的、歴史的な言説による構築物であり、しかも時代や空間によって変化する構築物であるということができる⁵⁰。性が人為的な構築物であるのなら、当然ながら性に対する人々の考え方や意識も住んでいる環境や時代によって何らかの形で変化があると考えられる。

⁴⁸ 針間克己（2003）『一人ひとりの性を大切に生きる～インターセックス、性同一性障害、同性愛、性暴力への視点』、少年写真新聞社。

⁴⁹ フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（1986）渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社。

⁵⁰ 同上

1.3.2 ジュディス・バトラー(Judith Butler)の『ジェンダー・トラブルーフエミニズムとアイデンティティの攪乱』への考察—主体の不可能について

1.3.2.1 セクシュアルマイノリティの主体の誕生

ミシェル・フーコーは^{セクシュアリティ}性⁵¹の言説については自然的、本質的なものではなく、社会的文化的、歴史的に構成されたものであることを示した⁵¹。このことを現代の文脈でより具体化して議論したのがジュディス・バトラー(Judith Butler)⁵²であり、彼女は人間の身体(セックス)と社会、文化の性であるジェンダーは両方とも構築物として生産されたものであると述べた⁵³。では、バトラーはどのようにしてその議論をフーコーの議論から導出したのであろうか。

バトラーは、フーコーの権力論分析を参照しながら、男女による性差は権力関係によって生じた言説的な主体であると指摘した⁵⁴。生殖という行為が人々の再生産を促し国力を増強していくという近代の性の規範から、現代においては異性愛そのものが「正しい性の形」として規範になったという。それによって多様であいまいだった性は本質的になり、正しい性という概念が確立された。そうすると、人は常に性別化されており、必ず女性か男性かのいずれか一方であると考えられる。つまり、女性／男性の区別が明確化され、プラス男性優位の社会となった。

このような社会状況から、1970年代には社会、文化的に構築される女性らしさ／男性らしさというジェンダーの考え方が誕生した。1960年から1970年代にかけて代第二波フェミニズム以降、人間の性とは生物学的性の意味よりも、社会的、文化的、歴史的に形成された性差(女性らしさ、男性らしさ)に重点を置くジェンダー概念へと変化してきたのである⁵⁵。それで、初めて生物学的性であるセックスと社会的性であるジェンダーの概念に

⁵¹ フーコー・ミシェル(Foucault Michel)(1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』、新潮社。

⁵² ジュディス・バトラーは(Judith Butler)アメリカのポスト構造主義思想家である。バトラーは1956年にオハイオ州のクリーブランドに生まれた。彼女は同性愛者であることを自ら公表した。また、彼女はヘーゲル研究という道を進み、1984年にイェール大学で博士号を取得した。更に、バトラーはフーコーの影響を受けて、ジェンダーとセクシュアリティ、フェミニズム、クイア理論、政治哲学の研究を進めている。彼女が書いた作品は主に、『ジェンダー・トラブルーフエミニズムとアイデンティティの攪乱』『触発する言葉—言語・権力・行為体』『アンティゴネーの主張—問い直される親族関係』『自分自身を説明すること—倫理的暴力の批判』である。

⁵³ バトラー・ジュディス(Butler Judith)(1999) 竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフエミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

⁵⁴ 同上

⁵⁵ ミレット・ケイト(Millet Kate)(1985) 藤枝濤子・横山貞子・加地永都子・滝沢海南子訳『性の

分けられるようになる。そうすると、人のアイデンティティは常にセックスかつジェンダーによって規定されるという社会基盤が構築された。結果として、人はセックスやジェンダーと全く無関係では生活を営むことが難しくなる。新しい人間の生命が誕生する時、すぐに生物学的性（身体的）の特徴によって女性か、男性の性別を与えられ、生きていく過程上で常に女性らしさ、男性らしさというジェンダー化されるのである。日常生活では社会に求められる「女性は女性らしくすること」、反対に「男性は男性らしくすること」という性及びジェンダー規範に従っているうちに、いつの間にか人間は社会においてその規範が「自然」であり「本質」的であると捉えるようになってしまう。よって、近代社会は男女二元論、プラス異性愛主義を土台として構築され、再生産されるのである。

この視点では、ジェンダーの方は文化の構築物であるが、生物学的性（セックス＝身体の性）の方は自然であるため、社会や文化などで変えることはできないと仮定される。よって、生物学的性（セックス＝身体の性）が先にあって、後にジェンダーの概念が決定されるのである。バトラーはこのようなセックス／ジェンダーの区別に対して疑問を提起した。バトラーは逆に近代社会ではジェンダーが生物学的性（セックス）を決定するという⁵⁶。自然＝本質とされてきた男女二元論による生物学的性は実は生殖の理念に基づいたものであり、この理念を通じて繰り返し身体を様式化するジェンダーのパフォーマンス効果によるものであると説いた。そうすると、その二つには区別はおそらく存在しないだろう。バトラーは次のように述べている。

ジェンダーは、生得のセックス（法的概念）に文化が意味を書き込んだものと考えべきではない。ジェンダーは、それによってセックスそのものが確立されていく生産装置のことである。そうすると、セックスが自然に対応するように、ジェンダーが文化に対応するということにはならない。ジェンダーは、言説／文化の手段でもあり、その手段を通じて、「性別化された自然」や「自然なセックス」が、文化のまえに存在する『前-言説的なもの』—つまり、文化がそのうえで作動する政治的に中立的な表面—として生産され、確立されていくのである⁵⁷。

政治学』、ドメス出版。

⁵⁶ バトラー・ジュディス（Butler Judith）（1999）竹村和子訳『ジェンダー・トラブールフェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

⁵⁷ 同上、p. 29。

生物学的性（セックス＝身体の性）とはジェンダーと呼ばれる文化的、社会的、歴史的に構築された産物である。そうすると、ジェンダーも生物学的性も区別が存在しなくなるだろう。つまりジェンダーという生産装置はある女性に女性らしさ、男性に男性らしさを埋め込むことによって自身の身体の性を自覚させる。例えば成長期にある子どもがジェンダー教育されることにより、より女性らしく／より男性らしく変化していく自身の身体を自然なことだと意識できるようになる。それは本人が生まれながら、身体とセックスというカテゴリーそのものによって女性らしさ／男性らしさ（ジェンダー）を意識するものではなく、環境（政治的、社会的）によって意識するのである。そして、そうした男女による性差がある中で、男性は優位な立場に立つこととなる。女性に対するステレオタイプ化されたイメージに基づく男性側からの差別に直面したフェミニストたちは市民運動を起こして、「女性の地位向上、権利、平等、自由」などを追及したため、**ジェンダーフリー**が誕生した。そしてこのジェンダーフリーという言葉の使用をめぐって、論争が巻き起こった。では、そもそもこの言葉の起源は何か、またどのような論争が起こっているのか。次の節にて見ていくことにしよう。

1.3.2.2 セクシュアルマイノリティとは構築物

女性／男性という二つの性を前提に、生物学的性、性自認、性的指向性などが分けられた。現代社会では、多くの人々は生物学的性と性自認が一致し、性別指向は異性の方へ向くのが代表的な組み合わせであり、つまりマジョリティの立場を占めている。簡潔に述べれば、男性が生まれたとすれば、生物学的性も男性、性自認も男性であり、性的指向性は異性愛、つまり女性に向いている。逆に、女性ならば、生物学的性も女性、性自認も女性であり、性的指向性は異性愛で男性に向いているというのが一般的な認識である。

しかしながら、必ずしもこの認識がすべてのケースに当てはまるわけではない。社会にはしばしば何らかの理由で性のあり方が非典型的で、生物学的性、性自認、性別指向性はあらゆる組み合わせが可能であり、そうした人々は社会によってセクシュアルマイノリティに位置つけられる人と呼ばれている。

ここで、バトラーはセクシュアルマイノリティとは結論から言えば、自然に作り出されたのではなく、その意味で性差も生物学的な要素からよりも、実は、社会的、役割的、文

化的な要素によって構築されたものであると主張した⁵⁸。そもそも男性/女性といった大きな枠である性は、いつから使われるようになったのだろうか。バトラーによれば、これは1869年頃に医学的知識が一般に広まってからであり、それ以降この言葉は人々の間で認識され始めたという。その時点で、医学用語でホモセクシャリティー（同性愛）という言葉が作られ、それに対してヘトロセクシャリティー（異性愛）という言葉が出てきたとされる。同性愛の方が先に言葉として誕生した理由は、これが先に病理化されたからである。男性はこうでなければいけない、女性ならこうあるべきだ、という規範が生みだされ、様々な違いも生まれ、その女性／男性というカテゴリーに入らないセクシュアルマイノリティは病気であり、あるいは何か異常があるのではないかと認識されるようになったのである。それによって、人々の意識はある一方向に構築されて、性に対する正しい認識を追及していくが、そこにはただ一つも真実がない。もっと簡単に説明すると、物としてのミカンがあるのではなく、ミカンと名付けたから、ミカンとして理解されて、認識されているのである。それと同じことで、異常／正常があるわけではなく、ジェンダーの視点あるいは性の視点から、人々が認識された結果、女性は女性、男性は男性という性が存在し、そうして異性愛という概念が構築されることになる。バトラーは次のように述べている。

セックスの「自然な事実」のように見えているものは、じつはそれとはべつの政治的、社会的な利害に寄与するために、さまざまな科学的言説によって言説上、作り上げられたものにすぎないのではないか。セックスの不変性に疑問を投げかけるとすれば、おそらく、「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ。そしてその結果として、セックスとジェンダーの区別は、結局、区別などではないということになる⁵⁹。

正常から外れた状態は異常であると捉えられ、社会規範が動き始め、差別や偏見なども誕生した。セクシュアルマイノリティが病気、すなわち異常とされる限り、それは差別の根拠となる。そうすると、正常と異常に分けられた性またはジェンダーの主体は自然的、

⁵⁸ バトラー・ジュディス (Butler Judith)、(1999)、竹村和子訳、『ジェンダー・トラブルーフエミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

⁵⁹ 同上、p. 28-29

先天的、実在物、普遍的な要素を持つものではなく、実は医学的、科学的、社会的、文化的、歴史的な言説による構築物であるという認識が可能となる。そしてこれらは後天的なものなので、空間や時間によってそのあり方は異なってくることが予想される。よって、当然ながら性に対する人々の考え方や意識も、住んでいる環境や時代によって何らかの形で変化があるだろう。

次章では、フーコーとバトラーの理論を援用しながら性がどのように作られたのか、どのように人々は性を認識しているか、また人々の性に対する意識が生活する社会によって、どのように変化していくのかを明らかにするために、まずはカンボジアを具体例として取り上げ、考察していく。

第2章 カンボジアにおけるセクシュアリティとセクシュアルマイノリティの生成

前章では近代と性の問題を概観するとともに、フーコーおよびバトラーの批判的な議論を紹介した。近代に入ってから性の言説は大きな変容を遂げ、自由な状態から生産のための装置へと変わった。その中で科学的な言説が性を本質化する役目を負い、人々は学術的権威あるいは社会的権威から教えられた性だけが唯一正しいと信じ込んでしまっている。ここではカンボジアのケースを取り上げながら、社会における性の位置づけられ方を検討していきたい。

第1節 カンボジアにおける性別カテゴリー

クメール語⁶⁰（カンボジア語）では、男性を *Bros* と言い、女性を *Srey* と言うように性についての概念は明確に分かれている。カンボジアは社会の中で生きる条件として、女性ならば女性らしい内面及び外見、あらゆることにおいて女性らしいこと、反対に男性ならば、男性らしいことが求められる⁶¹。つまり、カンボジアでは男女二元論による性差は自然で普遍性を持つと考えられている。一般的には、生まれながら自分の生物学的性が女性なら、女性として育てられて成長していき、男性ならば男性として育てられて成長していく。一般的な人々の性的指向は異性愛の方に向いていて、それが正常な状態であると認識されている。これに対して、生物学的性、性自認、性的指向性の3つの要素に基づく典型的なパターンでは語れない人々に対しては「それは違うのではないか、なんだか変、気持ち悪い、異常」という視線を向ける。しかし、実際にこの性の3つ要素の組み合わせが決まっていない人たちがいるということも事実である。その証拠に、カンボジアには男女の間の3番目の性として認識されている *Kteuy* という言葉がある。現在カンボジアにおいて、一般の人は *Kteuy* という言葉を幅広い意味で使用しているが、この言葉には差別的な意味合いやマイナスイメージが組み込まれている。*Bros*、*Srey*、*Kteuy* という言葉は確かに今でも使用されているが、歴史を遡っていつから使われるようになったのか、どのように使われてきたのか、その本来の意味は必ずしも明らかではない。

⁶⁰ クメール語は、オーストロアジア語族のモン・クメール語派に属する言語である。カンボジア語とも呼ばれる。

⁶¹ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2010). *Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.

仏教研究所⁶²(Buddhist Institute)が出版したクメール語辞典によれば、*Bros* (男性)とは *Srey* (女性)ではない人で、父親の希望を果たし、跡を継ぐものであるというふうに解釈されている⁶³。*Srey* (女性)とは、*Bros* (男性)でない人を指し、また *Kteuy* ではない、と解釈されている⁶⁴。「*Srey Bros*」(女性男性)または「*Bros Srey*」(男性女性)というふうに結合した形で使用されている。さらに、両方の項目では *Bdey*(夫)と *Bropon*(妻)という関連語が示されている。*Bdey* (夫)とは所有者、権力者、ボスを意味し、家を所有する男性と定義され、その男性は女性の妻とペアになっている⁶⁵。この辞典によると男性は女性とペアとなり、妻は女性であり、夫は男性であると定められている。*Bropon* (妻)とは、拘束という意味を持ち、女性は男性に拘束され、夫とペアとなっている⁶⁶。ここまでの説明をみると、カンボジアでは女性と男性が明確に分かれており、女性の地位や立場が低く、男性に従属するというふうに位置づけられていることがわかる。更に、結婚は必ず女性と男性の間で行われるという説明もあった。同研究所によると、*Kteuy* とはもともとなんらかの原因で外性器が女性か男性かが判別できない状態を持つ人、つまり女性と男性の間でできた性という意味を持っていた⁶⁷。この *Kteuy* とは一定の肉体的な特性を持っている人を言い、心理的な要素や性的違和感などは含まれていなかった。

現在では *Kteuy* は様々な意味で使用されており、例えば異性装者、同性愛者、両性愛者、性同一性障害者、トランスジェンダー、トランスセクシャル、第3の性、などの意味で用いられるし、より広い意味ではセクシュアルマイノリティを意味する。例を挙げると、男性として生まれた場合は女性の服装をする者、反対に女性として生まれた場合は男性の服装をする者は一般の人に *Kteuy* と呼ばれる。更に女性らしい仕草をする男性、それに対して男性らしい仕草をする女性のことも *Kteuy* と呼ばれる。従って *Kteuy* という言葉はカンボジア人の間では幅広い意味で使用されているが、いずれにしても差別的な意味合いを持つ言葉であることには変わらない。当事者はこの言葉に対して非常に敏感であり、嫌がる

⁶² 仏教研究所はカンボジア政府の主となる仏教のあらゆる面を研究する高等機関である。この研究所は1900年代にプノンペンに Sisowath Monivon 国王(当時カンボジア国王)、Sisavong Vong 国王(当時ラオス国王)、Pierre Pasquier(当時インドシナ総督)と George Coedes 氏(当時 Française d'Extrême-Orient 学校の校長)によって建設された。現在の研究所長は Nguon Van Chanthly 氏である。

⁶³ Chuon Nat (1917)『クメール語辞典』、仏教研究所、p. 706。

⁶⁴ 同上、p. 1510。

⁶⁵ 同上、p. 660。

⁶⁶ 同上、p. 679。

⁶⁷ 同上、p. 132。

人が多い。

第2節 カンボジアにおける性の現状—セクシュアルマイノリティをとりまく諸問題

カンボジアの憲法の第3章（クメール国民の権利・義務）31条では

Khmer citizens shall be equal before the law, enjoying the same rights and freedom and obligations regardless of race, color, sex, language, religious belief, political tendency, national origin, social status, wealth or other status. クメール市民は、同じ権利、自由を享受し、人種、皮膚の色、性、言語、宗教的信条、政治的傾向、出生地、社会的身分、富あるいは他の身分にかかわらず、同じ義務を負い、法の前に平等である⁶⁸。

と書かれてある。従って、カンボジアにはセクシュアルマイノリティを抑圧するような法律はない。しかしながら、実際は社会及びコミュニティのみならず、家族でさえ、セクシュアルマイノリティへの理解が乏しく、ステレオタイプに基づいてあやまちを起こし、差別と偏見を繰り返している。そしてその結果、多くの当事者が自分のありのままを認めず隠しながら、現実暮らしにくさを感じる事となる。

カンボジアにいる多くのセクシュアルマイノリティ当事者はカミングアウトせず、どのような問題に直面しているかを把握できないのが現状である。そのため、その情報を集めるのはとても困難である。ここでは先行研究や依存資料を簡潔にまとめ、これまでに明らかとなったカンボジアにおけるセクシュアルマイノリティ当事者の直面する困難や問題点を紹介していく。

2.2.1 自己アイデンティティ混乱から家族・身内との問題へ

カンボジアにおいては、女性の地位は低く、男性に従順するという前提がある。未だに、女性の性的行為は結婚するまでに許されず、結婚するまでに処女でないといけないとされている。このことから、結婚する時に処女でないと判明した場合、即離婚あるいは強く非難される場合が多い。ここで言えるのは、差別や偏見のひとつの原因は家族構成の伝統で

⁶⁸ カンボジア王国国民議会（1993）『カンボジア王国憲法』、カンボジア王国国民議会。

あるということだ⁶⁹。

カンボジアの家族観では、男性は女性と結婚して、子どもをつくり、その子どもは女性／男性と関係なく、跡継になる。他方、結婚できない人、何らかの原因で子どもが産めない女性を差別するような明確な確立した考え方は存在しない。しかし、現実にはそうはいかず、子どもが産めない女性も、場合によって離婚され、あるいは結婚できないのも少なくない。まして、同性愛者などのセクシュアルマイノリティは、家族でさえその存在を認めない場合も多い。多くの人々はカンボジアにおいて、セクシュアルマイノリティは存在しないと強く思っている。そのような原因によって、当事者の家族は当事者に対して、結婚相手、恋愛対象などを決め、聞かなければ、家庭内で暴力的に抑圧し、家族の戸籍から削除するなどのケースが多い。そのため、カミングアウトできない当事者が多く、日々自分のアイデンティティを隠すこととなる。

ここからカンボジア人権センター（CCHR）とカンボジアレインボーコミュニティ（RoCK）の報告を参考し、具体例を述べたい。この二つの機関の報告を取り上げるのは、カンボジアにおいてセクシュアルマイノリティの問題を語る際、その二つの機関は非常に重要な役割を果たしているからである。事実彼らは当事者の人権を守るのみならず、一人ひとりの人間の人権を大切にする活動を展開している。

2010年5月15日にカンボジア人権センター（CCHR）はカンボジアレインボーコミュニティ（RoCK）の協力を得て、プノンペン市内でセクシュアルマイノリティの会議を開催した⁷⁰。この会議は、自分たちの性について自由に語る場を日頃十分に持たないセクシュアルマイノリティ当事者が意欲的に社会からの差別や偏見などについて議論し、自分の権利を追及するための場となったが、その会議に参加した当事者の多くはまだ家族にカミングアウト出来ず、実際この会議も非公開会議であった。多くの当事者によると、彼ら／彼女らは自分のアイデンティティを家族にカミングアウトしたいが、しかし、カミングアウトとなると理解されず、暴力を受けたり、場合によって勘当されることもありえるという。

社会的に不名誉になることを恐れるという理由で、多くの家族は当事者のカミングアウトを応援しない。当事者がカミングアウトしようとしても、無理解や偏見が生じ、当事者の精神的、経済的なサポートが打ち切られ、場合によって勘当されるケースもある。各家

⁶⁹ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2010). *Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.

⁷⁰ 同上

族は、当事者の行動が周囲（マジョリティ）とは異なる（社会規範から外れること）ので、異常かつ病気だとみなす⁷¹。従って、家族からのサポートをなかなか受けることのできない当事者は、あらゆる場面で危険を感じるようになる。

2.2.2 周囲からの反発・差別・偏見による就学・就労・生活に関連した諸問題

カンボジアにおけるセクシュアルマイノリティ当事者は、自分のありのままのアイデンティティを持って、安定して生活し、就学・就労することが出来ない状況であり、これはきわめて重要かつ緊急の問題となっている。多くの場合は本来のアイデンティティを隠しながら、生活していく。カミングアウトしなければ問題はなく、就学・就労することができる。しかし、カミングアウトした人、あるいはカミングアウトしなくても、例えば性に対する違和感、性役割に対しての不全感、社会への不適応感、身体に対する不快感が激しい人、つまり性同一性障害者に当たる人⁷²は、周囲からのいじめ、非難、差別など受ける。その影響で生活全般や社会的な参加の場面がせばまり、就労や就学の機会が失われている状態である。しかし、彼ら／彼女らが何の問題に直面しているのかが語られることはほとんどない状態である。

教育の場面では、当事者はクラスメート、先生など周囲から不利益を受けている。教育機関、小学校、中学校、高校には校則があり、男性は短髪で黒または青いズボンと白いシャツの制服があり、女性ならば黒または青いスカートと白いシャツという制服がある。同性愛、両性愛などはカミングアウトしなければそれで大丈夫だが、性同一性障害者だと、やはり生物学的性、性役割に対する違和感、不快感を持っているため、どうしても自ら反対の性別を生きようとする。そうすると、多くの場合は校則に反すると見なされ、処罰を受ける対象になってしまう。学校でそういった問題が家族に伝わり、当事者が家族に理解を求めても、なかなか理解されない。ゆえに、先生、クラスメート、家族の周囲の不理解、壮絶ないじめによって生まれた葛藤、混乱、孤立により精神的にまいってしまっていて、就学

⁷¹ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2012). *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project. p.6.

⁷² カンボジアでは性同一性障害という言葉はクメール語ではまだ翻訳されていない。医学世界では、未だにそのままフランス語の *Les troubles de l'identité sexuelle* を使用されている。また英語の表記では、Gender Identity Disorder である。民間ではこういった、生物学的性が心の性と不一致する状態を持つ人には、*Khteuy* という差別的な意味合いを持つ言葉を使っている。しかし、*Khteuy* は様々な意味で使用されており、例えば男っぽい女／女っぽい男、異性装者、同性愛者、両性愛者、性同一性障害者、トランスジェンダー、トランスセクシャル、第3の性、などの意味で使用しているし、より広い意味ではセクシュアルマイノリティとしても用いる。

継続が不可能になり、途中で学業を諦める人も少なくない。そしてこうした人々は、低学歴者、低所得者になる可能性が十分にある。カンボジア人権センターは；

生まれつき、女性だが、自分自身では男性として認識されているので、短い髪でズボンを履いて登校したが、先生や友達からいじめを受けて、途中で退学した。頭が良くないのもあるかもしれないが、ズボンを履いて、学校に行ったら、校則の違反という理由で先生に教室に入れてくれなかったり、昼間の日差しが強くあたる所に長時間を立たされたりした。学校に行くのも楽しくないし、いつも苛めや無理解を受けたのでやめた⁷³。

という例を報告している。そういう経験を受けたセクシュアルマイノリティ当事者は少なくないと思われる。

就業の面においても同様である。カンボジア労働法の第1章の第3条には、その人の出身地や年齢、宗教や性のありように関わらず、個々才能、学歴、スキルが重視され、お互いを尊重し合い、調和された安心のできるような働く環境を目指すという事が書かれている⁷⁴。しかし、カミングアウトした当事者または性同一性障害者などのセクシュアルマイノリティ当事者は職場でのパワーハラスメント、セクシャルハラスメント、モラルハラスメントなどの嫌がらせを常に受ける可能性がある。学校と同様、職場でもセクシュアルマイノリティ当事者はしばしばハラスメントを受け、*Khteuy* という呼ばれ方をされる。また、職場の同僚、上司の言葉や行動で執拗な嫌がらせを受けても、我慢をする人もいる。当事者は職場に訴えても理解されにくく、嫌がらせはますますエスカレートし、辞職する場合やあるいは解雇されるという場合もある。性同一性障害者の場合は面接の段階で落とされることになるし、あるいは既に決まった人でも会社の制服やルールに関する服従命令等に従わなかったという理由で懲戒、解雇になる可能性ある。性同一性障害者はたとえ大学を卒業しても、外見上のせいで安定した仕事ができず、工場などという力仕事のところでもなかなかできないのが現状である。多くの当事者は低学歴でなかなか安定した就業ができず、そのため低所得者になり、殆どの場合水商売や風俗などで従業員として働くこととなる。

こうした状況から出てきたもう一つの問題はセクシュアルマイノリティ＝エイズ感染者

⁷³ Rainbow Community Kampuchea (RoCK) (Producer and Director). (2013). *Cambodian Lesbian Documentary "Daughter and Marriage"*. Cambodia: Rainbow Community Kampuchea. p.21.

⁷⁴ 同上、 p. 27。

だと見なす人々が多いということである。アジア太平洋諸国の中で、エイズ感染率が最も高いと言われているのがカンボジアである。しかし、エイズの問題はセクシュアルマイノリティ当事者に限られた話ではなく、異性愛者も含め誰もが感染する可能性がある病気だと言われている。しかしカンボジアでは、セクシュアルマイノリティは異常、自然に反することであり、セクシュアルマイノリティ当事者にはエイズに感染する人が多いという悪いイメージが人々に植え付けられている。実際、風俗で働いている人の多くは周囲の人々だけではなく、場合によっては警察にも非人道的な扱いを受け、残酷な言語的虐待、性的虐待、暴力の被害を受けることもある。カンボジア人権センターによると、次のような報告があった；

ある日私（風俗で働いている）は3人の警察に首、腰、頭を蹴っ飛ばされ、厚い棒で体中を殴られるという過酷な暴力を受けた。更に一人の警察は私の頭に銃を突きつけ、引き金を引こうとしたが発砲せず、命は助かったが、無罪なのに、服役させられた⁷⁵。

警察でさえ正当な理由によらず偏見や先入観に基づく差別や虐待などという精神的、肉体的、性的暴力を当事者に対して振っている。セクシュアルマイノリティ＝エイズという偏見は一般のカンボジア人のみならず警察というオーソリティーにも見られる。

もう一人の当事者によると；

ある日、警察に「*Ar-Kteuy*」（残酷な差別的用語）は自分で自分をソドミー⁷⁶してよいと言われた。また「*Ar-Kteuy*」はエイズに感染しているのに、他の人に感染させたいと思っている？そのようなことをしたら、「*Ar-Kteuy*」を撃って、殺してもよいと非難された⁷⁷。

カンボジアでは、セクシュアルマイノリティ当事者が性暴力の対象になるリスクが高い。

⁷⁵ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2012). *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project, p.22.

⁷⁶ ソドミーとは英語の表記では Sodomy で、肛門性交という意味であるが、主に同性愛者などのセクシュアルマイノリティによる性的行為である。

⁷⁷ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2012). *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project, p.22.

実際、次のような報告もある。

私は女っぽい男（性同一性障害にあたる人だと思われる）である。風俗で働くのは 3 年、4 年になった。家族は私のことが嫌いである。それは女性でもない男性でもない中性の私だからである。私は国立公園やクラブで夜に働いている。ある日、公園の離れたところで警察や男性の客に暴力を振われ、レイプされた。しかし、その時コンドームは使われなかった⁷⁸。

そのようないじめ、壮絶な暴力を受けても、当事者はどこに訴えたらいいのか分からず、毎日苦しんでいる。

最近では、セクシュアルマイノリティに関連する人権問題を取り扱っている非政府機関が設立されたが、その数は限られている。ジェンダーに関する議論は活発であるが、ジェンダーと言っても女性が対象となる人権問題のみ扱われているところが多い。

2.2.3 セクシュアルマイノリティに対する報道の評価

最近セクシュアルマイノリティの存在は一般市民にもその認識が広まっているが、実際に日常的生活レベルでセクシャルマイノリティの当事者たちが暮らしやすい社会になっているかというとは決してそうではない。最近カンボジアにおいてテレビ番組、ラジオ番組などでも、そうした話題をよく取り上げるようになったが、多くの場合は変わったもの、珍しいものとして人々の視線に曝すためである。中には社会あるいは周囲の人々による無理解、差別や偏見をなくし、セクシュアルマイノリティへの理解を促進することを目的としている番組もあるが、多くの報道ではセクシュアルマイノリティをいくら取り上げても、ただ笑い物にするのみで、場合によって誤った知識及びステレオタイプの先入観でセクシュアルマイノリティへのマイナスイメージをもたらしている。よって、視聴者はそれを見て指をさすだけで何も理解せず、その結果更なる差別や偏見を招くこととなる。現実には多くのテレビ番組はセクシュアルマイノリティに対して、「そうなって欲しくない」というような発言のように相手の事を配慮せず、侮辱、誹謗中傷、安易に高圧的な発言を放送している。

⁷⁸ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2010). *Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project, p.17.

またメディアによるもう一つ問題としては、セクシュアルマイノリティを取り上げる際には主に同性愛者、両性愛者、トランスジェンダーのみであり、それ以外のセクシュアルマイノリティ当事者に関しては省略されてしまう。例えば、全性愛、無性愛などのセクシュアルマイノリティ当事者は一切触れられない。よって、セクシュアルマイノリティといっても、その場合はセクシュアルマイノリティの集団内に新たなマイノリティを作り出すことになる。

第3節 カンボジアにおけるセクシュアルマイノリティをめぐる動向

2.3.1 国王、政府のセクシュアルマイノリティに対する発言

2004年にノロドム・シハヌーク前カンボジア国王は「神様が彼ら（セクシュアルマイノリティ）をつくらなければ、男性の同性愛者と女性と同性愛者は生まれてきません。私は仏教徒ですが、私と同じでなくても、全ての人々に思いやりや愛情を持ち、誰も殺さない人や誰も苦しめない人を許します」⁷⁹と主張した。また、同年にシハヌーク前国王はサンフランシスコの同性結婚という記事に対して、自分の公式サイトで次のように述べた。同性婚は『自由民主主義』であり、カンボジアにおいても男性同士の結婚または女性同士の結婚を許可すべきであるという内容であった⁸⁰。前国王は同性愛当事者に対して敬意を払いながら、「私はゲイではないが、ゲイとレズビアンの人権を尊重している。たとえ神様が彼らをそういうふうに誕生させたとしても、彼らの欠点ではない」と述べた⁸¹。「彼らは彼らであり、なぜなら神様は人生において様々な個性を愛するからである」と述べた⁸²。更に「国のコミュニティはセクシュアルマイノリティを受け入れ、より応援するべきである」と加えた⁸³。しかも同年にはシアヌーク元国王は同性カップルの結婚を承認する法律を支持すると公言した。しかしながら、その発表以降、残念なことにそれを承認する立法措置への動きはない状態である。

The Phnom Penh Post という新聞によると、カンボジア人民党（CPP: Cambodian

⁷⁹ Alex Spillius, "I'm not gay, says 81 year old monarch with 14 children," *Daily Telegraph*, 25 February 2004, <http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/asia/cambodia/1455293/Im-not-gay-says-81-year-old-monarch-with-14-children.html> 2013/9/10 参照

⁸⁰ BBC News, *Cambodian King Backs Gay Marriage*, February 20 2004, <http://news.bbc.co.uk/2/hi/asia-pacific/3505915.stm> 2013/9/11 参照

⁸¹ 同上

⁸² 同上

⁸³ 同上

People's Party) の内閣 Cheam Yeap 氏は「政府がセクシュアルマイノリティ当事者の人権問題を優先的に解決するという見通しはまだない」⁸⁴と述べた。そして「今まで、カンボジアにおいては男性／女性が女性／男性と結婚するという伝統があるが、現状では同性婚の制度を立案することよりも、力を入れて重視すべきことを国の発展のために優先的に考えなければならない」と加えた⁸⁵。

また同記事には野党のサム・ランシー党 (SRP: The Sam Rainsy Party or Kanakpak Sam Rainsy) の Son Chhay 氏は「カンボジアには欧州のようにセクシュアルマイノリティ当事者を受け入れる伝統や文化はまだ存在していない」と 2010 年に述べた⁸⁶。そして「今まで政府に同性結婚という法律を承認するという正式的な要請はまだないし、もし同性愛者たちからの要請があるとしたら、私たちはこの課題を（同性結婚）考えるだろうと思う」と加えた⁸⁷。カンボジアの政治家にとってセクシュアルマイノリティの問題、特に同性婚やその人権はあまり重要でないと思われる⁸⁸。しかし、本来は同性愛者であれ、誰であれ、平等な権利を持たなければならないはずである。

2012 年 12 月 11 日にフン・セン首相は「私はカンボジアのセクシュアルマイノリティ当事者からの要望を聞いた。彼らは一般の人々のように平等で同じ権利と自由を持ちたい。各国においてセクシュアルマイノリティが存在しており、あくまでも彼らの運命なので、彼らに対して差別をしないで欲しい」と強く語った⁸⁹。

⁸⁴ Tivea Koam and Meng Hourng, “Same same… but married”, *The Phnom Penh Post*, 22 September 2010, <http://www.phnompenhpost.com/index.php/2010092242205/LIFT/same-same-but-married.html> 2013/9/10 参照

⁸⁵ 同上

⁸⁶ 同上

⁸⁷ 同上

⁸⁸ 同上

⁸⁹ Fox News, Cambodia's prime minister urges his countrymen not to discriminate against gay people, December 11, 2012, <http://www.foxnews.com/world/2012/12/11/cambodia-prime-minister-urges-his-countrymen-not-to-discriminate-against-gay/#ixzz2TPxs6wUF> 2013/9/10 参照

2.3.2 加速する現地の NGO の動き—最新情報

こうした状況のなかで、カンボジアにおいてセクシャルマイノリティの人権問題を扱う非政府機関が設立されるようになった。例えば、カンボジアレインボーコミュニティ(RoCK、The Rainbow Community Kampuchea)、カンボジア人権センター(CCHR、Cambodian Center for Human Rights)、Mstyle (2008年にプノンペンで設立。男性同性愛者のグループが運営したが、2013年に運営できなくなった)などである。それらの機関は、異性装者、同性愛者、両性愛者、性同一性障害者、トランスジェンダー、トランスセクシャル、第3の性など、同じ様な悩み及び不安を抱える人たちの人権を守り、個別相談や友達及びパートナー探しをサポートする団体である。またそれらの団体は、誰にとっても心地よく安心して暮らせる社会を目指すために政府に様々な提案をする。

2003年からプノンペンにおいては“Cambodia Pride Week”というイベントが毎年開かれている。参加者の多くはセクシュアルマイノリティ当事者である。スタート当時の参加者は少なかったが、年々増えると予想されている。イベントの様子は毎年異なるが、参加者は主にコミュニティーや社会がどのようになれば誰にとっても住みやすい社会となるかを意見交換し、今直面している諸問題、特に人権問題などを意欲的に熱く訴えている。その他には、セクシュアルマイノリティの映画、演劇、展覧会、様々なイベントも同時に行われる。イベントは毎年5月の17日あたりに行われる。それは5月の17日は国際反ホモフォビア・反トランスフォビアの日⁹⁰(IDAH0, International Day Against Homophobia and Transphobia)だからである。

2009年には“Cambodia Pride Week”が5月10日から5月17日にかけて約一週間行われ、国内最大のセクシュアルマイノリティのイベントとなった。イベントは大成功で、多くの参加者とボランティアは毎年このようなイベントを行いたいという熱い思いを持ち、The Rainbow Community Kampuchea (RoCK)を立ち上げた。その目的は、カンボジア社会においてセクシュアルマイノリティ当事者への理解と支持をより高めることである。

翌年の“Cambodia Pride Week”ではさらに多くの参加者がイベントを盛り上げた。また当事者のみならず、非当事者もそのイベントに参加した。2011年には、プノンペンのみな

⁹⁰ 国際反ホモフォビア・反トランスフォビアの日(IDAH0, International Day Against Homophobia and Transphobia)は2004年にはじめて開催され、LGBTに関する政策立案者、リーダーの考え方、社会の動き、メディアの考え方に対して注意を払う目的としている。現在では、世界の約100カ国はこのIDAH0を毎年行っている。IDAH0が毎年5月17日に行われるのは、1990年代初頭に世界保健機関(WHO)のICD-10は同性愛を国際疾病分類から除外したことを記念して定められたからである。

らず、各地方でも“Cambodia Pride Week”が開催された。プノンペンではおよそ 1300 人の参加者がいた。バタンバン州では 300 人、セムリアップ州では 300 人、バンテイメンチェイ州では 20 人が参加した。そして 2012 年には初めて ASEAN のメンバーもこのイベントに参加した。

2012 年 11 月 14 日には 2009 年以降、プライドウィークを開催してきたカンボジアレインボーコミュニティとカンボジア人権センター両者の主催で“The ASEAN LGBTIQ Caucus”（ASEAN LGBTIQ の集会）がプノンペンで行われた。そのイベントは多様性について語る機会を作るという目的のみならず、各国の政府や一般の人々に LGBTIQ の人権を強く求めることを訴えた⁹¹。

また最近ではセクシュアルマイノリティの人権を扱っている学術論文なども次々にでてきた。例えば、カンボジア人権センターは 2010 年に「Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia」、そして 2012 年に「Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride」などを出版した⁹²。

2.3.3 メディアの報道による民間の考え方の変化

最近、カンボジア国内ではセクシュアルマイノリティを対象とし、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などが多く取り上げられるようになった。例えば、2009 年にカンボジアの有名な監督である Phoan Phuong Bopha 氏の「私は誰ですか（Who Am I?）」という女性同性愛者の映画がつくられ、テレビで放送された⁹³。また同年に小説家である Chan Sopha 氏によって、国内でも初めて女性同性愛者の恋愛物語が書かれ、そのタイトルは「紳士的な恋愛（Gentleman's Love）」という。このように次々とセクシュアルマイノリティに関して、テレビ番組、映画、ドラマ、小説などが発表され、民間でもその存在が認識され始めた。

現在は、カンボジアでもソーシャル・ネットワークが急成長しており、セクシュアルマ

⁹¹ Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2012). *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.

⁹² Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2010). *Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.
Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2012). *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.

⁹³ Tivea Koam and Meng Hourng, “Same same… but married”, *The Phnom Penh Post*, 22 September 2010, <http://www.phnompenhpost.com/index.php/2010092242205/LIFT/same-same-but-married.html>
2013/9/10 参照

イノリティ当事者はそれを使って、新たな情報などを得られるようになった。こうした方法を通して趣味、価値観などを共有している他の当事者を見つけることができ、人脈が広がっている。かつて多くの場合、セクシュアルマイノリティ当事者は孤独感を持ってきた。しかし、ツイッター、フェイスブック、ラインなどソーシャル・ネットワークを通じて、友達やパートナーあるいは意見交換ができる人とつながることができる。また、セクシュアルマイノリティ当事者はソーシャル・ネットワークを使用して、その権利を保護する非政府機関やそれに関するイベント、会議などを知ることができる。

第4節 近代国家のフランスとカンボジアのコロニアルな関係における^{セクシュアリティ}性

こうした現代のカンボジアの状況は、大きな歴史的な文脈を考察することによってより深く理解することができる。この節ではミシェル・フーコーとジュディス・バトラーの理論を踏まえながら、性が近代社会においていかに語られ、管理される対象となるのかという事について、カンボジアの歴史的な文脈における^{セクシュアリティ}性を具体例として挙げて考察していく。そこでは近代という概念に注目し、それと植民地主義（コロニアリズム）との関係について考えていきたい。

2.4.1 国家と近代

国家という概念は1648年にウェストファリア体制によって形成され、同時に近代国家の概念も誕生した。近代国家は、領土、国民、中央政府（主権）を必ず有し、その主権が他国から承認され、国と国との間は平等な関係でなければならない。国家はいわゆる社会的構築物であり、自然にできたわけではない。

国々は同じ権利を持ち、平等であるべきということは理念の中だけの話であり、実際にはいずれかの国が覇権を握っているため、国際の概念は必ずしも平等ではない。近代国家は主権を国内のみならず、国境外の領域にも拡大して、制度・政策・活動（秩序）という形で支配を推し進めた。その制度・政策・活動はしばしば文化や文明という名目で行われた。こうした統治形態をコロニアリズムといい、日本語で翻訳すると、植民地主義という。植民地化の意図とは、国の富のため被植民国の資源・労働力・市場・軍事力を確保し、支配することにある⁹⁴。それによって被植民国の経済・政治・教育などを掌握し、その結果西洋の国々は強国・先進国となった。また、植民地と被植民国の相互依存のなかで生まれた問題も数多くある。それには、領土の問題、先住民のアイデンティティの剥奪、伝統・文化・遺産・知識・価値観の喪失、民族・宗教・社会身分・性などに関する不平等や格差等が含まれる⁹⁵。

20世紀半ば頃に植民地支配から独立を宣言した国は多かったが、独立した後も諸問題が

⁹⁴ スピヴァク・ガヤトリ（Spivak Gayatri）（2003）上村忠男、本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』、月曜社；菊地夏野（2010）『ポストコロニアリズムとジェンダー』、青弓社。

⁹⁵ スピヴァク・ガヤトリ（Spivak Gayatri）（2003）上村忠男、本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』、月曜社；橋本哲也（2005）『ポストコロニアリズム』、岩波書店。

山積しており、現在に至るまで一部未解決の状態が続いている。独立後もその植民地支配の頃の影響が経済、文化、政治、教育といったもののみならず、人々の価値観や認識にまで及んでいるということが明らかになった。すなわち、植民地が解放された後でも、植民地支配の頃の影響は被植民国に広範囲に持続的に現れており、現在も続いており、ポストコロニアリズムと呼ばれている⁹⁶。1960年代以降、ポストコロニアリズムについて多くの研究者は研究課題として扱うようになった。この流れは、そのスタートである文学批評にとどまらず、政治学、社会学、文化人類学、地域研究、歴史学など多岐にわたる。

コロニアリズム、ポストコロニアリズムと近代が相互作用として生み出したのは権力(主体)と生産の問題である。カンボジアは^{セクシュアリティ}性^{セクシュアリティ}が近代社会によって語られ、管理される対象となったのかという点についての典型的な例といえるであろう。カンボジアにおける性と近代との関係を検討するために、ここではコロニアル以前、コロニアルな時代、ポストコロニアルな時代という三つの時代を通して考察を加えていく。

^{セクシュアリティ}性の主体が形成される以前

第2章で説明したが、クメール語では男性を *Bros* と言い、女性を *Srey* というように性の概念は明確に分かれている。この二つの間の3番目の性として認識されているのは *Kteuy* である。現在では *Kteuy* という言葉はカンボジア人の間では幅広い意味で使用されているが、いずれにしても差別的な意味合いが組み込まれる。

歴史を遡ると、*Kteuy* という言葉の起源は未だに解明されていない。しかし、国元代の航海家の汪大淵(オウタイエン)⁹⁷の日記によると *Kteuy* という言葉はアンコール時代(9世紀~15世紀)にすでに存在した。彼は当時のカンボジアのアンコールワット遺跡、当時のクメール王朝⁹⁸の伝統文化などを日記に記した。その日記はカンボジア語に翻訳され、その中から発見されたのは、当時のクメール王朝においてもすでに同性愛者などのセクシ

⁹⁶ スピヴァク・ガヤトリ (Spivak Gayatri) (2003) 上村忠男、本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』、月曜社；橋本哲也 (2005)『ポストコロニアリズム』、岩波書店。

⁹⁷ 汪大淵 (オウタイエン、ラテン語の表記では Wang Dayuan、ワン・ダーユエン、1311年 - ?) は14世紀、中国元代の航海家、歴史家である。1311年江西南昌に誕生。1327年から1333年に南シナ海から東南アジア、南アジアに、そしてベンガル地方、スリランカとインドを船で訪れた。そしてその旅は1334年から1339年にかけてイスラム諸国から欧州、北アフリカと東アフリカにまで及ぶ。旅と共に、彼は日記を書き、その資料は中国の対外関係史上重要な文献である。

⁹⁸ クメール王朝は9世紀から15世紀まで東南アジアの一帯を支配する大帝国であった。カンボジアの元の通称であり、アンコール王朝とも呼ばれる。

ュアルマイノリティ当事者が存在しており、その意味でこの *Kteuy* という言葉はアンコール時代に既に出現したということになる。当時 *Kteuy* とは差別的な意味で使われたわけではなく、恐らく女性と男性の間で新たにできた性として使われたと考えられる。

また周達観（シュウタツカン）⁹⁹は1296年に外交官としてクメール王朝を訪れた。周達観はクメール王朝で生活しながら、クメール王朝の風習などを観察し、『真臘風土記』を書いた。それによると、当時のクメール王朝の人々の多くは女性／男性の異性愛者だったが、中には同性愛者も存在しており、特に宮殿にいた宦官や古典舞踊家などは同性愛の傾向が強かったという¹⁰⁰。クメール王朝の宦官の場合は、中国古代の伝統文化の影響により、男子禁制の後宮で王の宮廟に仕える男性たち、特に王様の婦人の世話をすることは、強制的に性器を去勢しなければならなかった。全てに当てはまるわけではないが、多くの場合、宦官は同性愛の傾向があっただろう。

また王宮にいる舞踊家は、伝統的舞踊・演劇の世界で、女性が男性の役を演じる場合もあり、逆に男性が女性の役を演じる場面もある。この空間の中では性というものはもっと大らかであり、男性であれ、女性であれ、誰であれ、性の区分は問題とならなかった。しかし稽古をする際は、男性グループと女性グループが分けられ、両者はそれぞれの決まった場所からしか出入りできなかった。中には恐らく同性愛者もいたと思われる。当時の宦官にしても舞踊家にしても、きちんと役割あるいは義務さえ果たせば、同性愛そのものを問題視されることはなかったと考えられる。また『真臘風土記』の中の観察記によれば、当時カンボジア国内には同性愛者が数多く存在し、毎日市場などに限らず市中に見られたという¹⁰¹。市場などの公的な場に同性愛者がいたことは、寛容な社会だったことを意味するひとつの証明と言えるであろう。

当時その人たちへの差別や偏見などがあったとしても、当事者がきちんと役割あるいは義務を果たせば同性愛が問題とされないような寛容な社会であったと言われていることはコロニアル・ポストコロニアルな時代状況を考える上で非常に重要である。コロニアル以

⁹⁹ 周達観（シュウタツカン、ラテン語では Zhou Da Guan、1266-1346）は元朝の元成宗皇帝の下でのクメール王朝と元朝の外交官である。彼がクメール王朝に到着したのは1296年であり、そして彼は『真臘風土記』（*Zhenla feng tu ji, The Customs of Khmer Empire*）という歴史書を記述した。彼の書物は特にアンコール遺跡とクメール王朝の歴史、伝統、文化を理解するために、非常に大切な資料である。

¹⁰⁰ Zhou Da Guan（周達観）（1973）Ly Theam Teng 訳『汪大淵の日記 真臘風土記について』、プノンペン出版。

¹⁰¹ 周達観（Zhou Da Guan）（1989）和田久徳訳『真臘風土記—アンコール期のカンボジア（東洋文庫）』、平凡社。

前の（プレコロニアルな）時代においては、性はもっとも大らかであった。例え女性であれ、男性であれ伝統的なスカートを履き、両者とも髪が長かった。さらに女性でも上半身が裸だというのは普通であった。また、カンボジアは熱帯モンスーン気候に属し、一年を通じて高温多湿なので、毎日数回は水浴びをしなければならない。そのため、明るい昼間でも男女を問わずみな裸体で池（家ごとに水浴びのための池）に入り、水浴をしていた。女性は左手で陰部を覆い隠し、池に入って水を浴びていたと言う¹⁰²。

コロニアルな時代における^{セクシュアリティ}性

こうした性に寛容な社会状況はフランスによる植民地化以降、急変を遂げる。カンボジアは近代化を通してフランスを始めとする西洋の文化、思想、制度などに強い影響を受けた。そのプロセスの中で、カンボジア全体にフランスの中央・地方行政システムが導入され、国内が統治されることで近代国家が誕生した。フーコーは、近代国家とは「国家、それは、多数多様な統治性の体制によってもたらされる動的効果に他ならない」と主張した¹⁰³。統治を行う近代国家とは権力によって形成されたものであり、その目的は国の富及び国力の強化である。国家の経済成長のため、統治者は国民の統治を考えた。要するによき労働者、よき兵士を作ろうと考えたのである。

コロニアルな時代におけるフランスは、カンボジアにおいて都市計画内容及びその決定権を持ち、それに基づいて都市が建設された。例えば、道路や交通機関といったインフラなどが整備された。その建設活動は現地の住民が行い、特に税金を支払うことのできない人に強制労働させられた。また、フランスによる植民地化以降、フランスの法規・行政・制度に基づいて住民票・戸籍・出生届・結婚届などの制度が導入された。これは、税金徴収者による人口の把握を目的としている。フランスはカンボジアを支配することによって人間の生の全てを管理し、特定の正しい生き方を人々に教え込もうとした。近代国家は「正しい国民」の生をコントロールすることによって、社会規範に従わせ、その規範を国民自身に維持させる。フランス政府にとってカンボジアにおける正しい国民とは、よき労働者、よき納税者、よき消費者である。また正しい国民はフランスの社会秩序に従いながら生活していく人たちである。

¹⁰² Zhou Da Guan（周達観）（1973）Ly Theam Teng 訳『汪大淵の日記 真臘風土記について』、プノンペン出版。

¹⁰³ フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（2008）慎改康之訳、『生政治の誕生（コレージュ・ド・フランス講義 1978-79）』、筑摩書房、p. 94。

しかし、社会にはフランスの社会秩序に納得できない、あるいは賛成しない人たちも存在した。例えば納税できない人、犯罪者、病人、障害者、生産活動に参加できない同性愛者などである。近代国家の都合に合わせながら生きていく人間たち、すなわち、国家規範を再生産できる者は中心＝マジョリティという立場に位置づけられる。しかし、中には本人の意思に関わらず近代国家規範を再生産できない人たちが存在している。近代国家はそのような人たちを周縁＝マイノリティ化していく。そうして、規範的・社会的に生産できる中心＝マジョリティと規範的・社会的に生産できない周縁＝マイノリティの主体が誕生する。このメカニズムによって、社会の効率性、持続性が十分に担保されるのである。

ポストコロニアルな時代における^{セクシュアリティ}性

カンボジアはフランスから独立した後も実質的なコロニアル状態が根付いており、多大な影響が社会、政治、経済、文化など多岐に渡って深く残っている。そういった状況のことをポストコロニアルという。その一つの例として性が挙げられる。コロニアルな時代は性区分の明確化によって性に対して様々な制度をもたらした。近代以前のカンボジア社会では性の主体そのものが明確ではなかったが、近代以降ではそれが形成され、本質化された形で語られるようになった。正常な性（社会的に再生産できる）の定義が維持されることによって、男女二元論と異性愛主義の社会的特権もまた維持されてきた。そこから外れたものは不利な立場に置かれ、差別や偏見の対象とされる。

非当事者の主張ではカンボジアの伝統や文化といった枠組みや、跡継ぎ及び子孫繁栄に参加できないこと（再生産できないこと）、家族の恥または名誉を壊すことなどが、セクシュアルマイノリティを許されない理由とされる。しかし、カンボジアの多くの人々が言う「本来のカンボジアの伝統や文化」がセクシュアルマイノリティを許容しないかといえ、それも正しくない。なぜなら、本来カンボジアの伝統、文化、宗教においては、結婚できないこと・子どもを産むことができないこと、つまり子孫繁栄の活動に参加できない（再生産できない）ことが罪または間違った行為とされることはないからである。カンボジアは近代以降フランスの影響を受けてきた。そのため、恐らくそこで言及される「伝統」とは、フランスのコロニアル化以降の伝統を指すと考えられる。

こうしてコロニアリズムは両性区分の明確化によって性に対して様々な制度をもたらした。近代以前のカンボジア社会では性の主体そのものが明確ではなかったが、近代以降ではそれが形成され、語られるようになった。ここで性の主体が語られるようになったのは、

フーコーとバトラーの理論が言うように、生殖（再生産）を目的とする制度が誕生したからである。正常な性（社会的に再生産できる）から外れたものは不利な立場に置かれ、差別や偏見の対象とされる。しかし、近代社会によって正常と異常を分けられた性は本質的、自然的なものではなく、特定の社会的、文化的、歴史的に制度化され、生産され、管理された構築物である。しかも、性は時間や空間に依存しながら変化している。そのため構築される性の形は時間・空間に従って異なるはずである。そこで次章では、人々の性に対する意識が時代や空間によってどのように変化するのかという点を考察していく。

第3章 カンボジアあるいはフランスに暮らすカンボジア人のセクシュアリティとセクシュアルマイノリティに」 関する意識

ここまでミシェル・フーコーとジュディス・バトラーといった思想家の手による理論に基づいて議論を進めてきた。そこでは時間・空間によって変化する性のあり方に注目した。本章では、フィールド調査を通してカンボジアの性について議論していく。

カンボジアでは性やジェンダーについて研究する人は存在しているが、その殆どが女性の権利などに対する研究を扱っているものが多い。そのため、カンボジアの社会ではセクシュアルマイノリティを中心に行われる研究が非常に少なく、よってそのような研究領域に関連する既存資料、文献資料は殆どなかった。しかし近年では、特に2010年からカンボジア人権センターによってセクシュアルマイノリティの人権を扱っている学術論文などが発表されている。本研究は聞き取り調査による質的データを採用し、ナラティブとその分析を試みる。

第1節 ナラティブ調査の概要

3.1.1 質的研究のナラティブ（語り、物語り）とは一問題の提起、目的と意義

フィールド調査の目的

本研究において、性という概念についての趨勢を見るために被対象者たちの生の声を通して検討する。その手法として、彼らのライフヒストリー（物語）を語ってもらうという形を取った。被対象者に対してあらかじめ質問などを用意するのではなく、なるべく自由に語ってもらい、また会話の流れに沿って、質問していく調査法を取った。

被対象者たちのライフヒストリー（物語）を語ってもらう理由は、彼らの性に関する生きた認識が社会によってどのように変化してくかを確認するためであり、また調査が人々の非常に難しい側面に焦点を当てていることから、数的調査が困難であることによる。

そして、被対象者たちのライフヒストリー（物語）をナラティブ資料¹⁰⁴（Narrative：語り、物語と訳される）として整理し、結果を分析していく。そのナラティブ資料の内容の中から、近代社会構造の中で性があたかもすでに存在しているかのように構築され、その構造によって近代社会が成り立っていることを明らかにしたい。

性の規範に関する固定観念には非常に根強いものがあり、社会における異性愛と女性／

¹⁰⁴ ナラティブとは、事実に基づき特に個人の発した言葉やその内容に重点を置くことである。

男性というカテゴリーは社会における最も一般的な性概念である。それらは社会の安定と発展のために寄与するように、常識化されている。一方で、正常を担保するために、その正常から周縁化されたものを対比させなければならず、それは異常として生産される。性とは先天的に存在したものではなく、実は後天的につくられたものであり、当然ながらそれぞれの国によっては性のあり方や解釈が異なってくる。

そこで、人々の性に対する意識が生活する社会によってどのように変化していくのか、また正常と異常の立場、それぞれがどこまで社会によって構築されるのかを考察し、明らかにする。性と社会は互いに影響し合っている、つまり性も社会も本質的なものではなく、構築されている。よって、今回の調査においてはひとつの仮説を立てた。それは、フーコーとバトラーが提示したように性とは生まれつきの本質ではなく、社会的、文化的、歴史的、役割的な要素によって構築された主体であるので、社会が変わると人々の性に対する意識も変化していくということである。この仮説を考察していく際、あくまでも被対象者たちの物語に注目し、彼らの視点から分析していきたい。

研究方法と調査地域、その対象者の選定

本研究において調査の対象は、フランス及びカンボジアに在住する、異性愛と男女二元論を受容している人々と、同性愛、両性愛、性同一性障害などのセクシュアルマイノリティ当事者たちである。被調査者たちのナラティヴ（語り、物語り）を通して社会によって性の正常と異常がどのように構築されるのかを考察していくのである。

研究方法としては、ナラティヴ論を使用するため、個人の物語あるいはそのストーリーに着目することになる。その物語は個人情報を含み、その相手の名誉を傷つける可能性があるため、本名ではなく仮名を使用する。性別という問題は事情が異なり、地域、国または場合によっては相手にとって不利益あるいは汚名を着せてしまう可能性があるため、ここでは個人情報やその内容などを一部公表しない。

本研究はフランス国内に在住しているカンボジア人とカンボジア国内に在住しているカンボジア人を調査の対象にしたが、その二つの国を選択した理由には、カンボジアはフランスととても深い政治的・社会関係を築いていることが挙げられる。カンボジアは約 100 年間以上フランスの保護国であったが、フランスの植民地から独立を宣言したのは 1953 年 11 月 9 日のことである。カンボジアは植民地化され

て以来フランスから文化、思想、制度など大きな影響を受け近代化が進められた。特に植民地以降（近代国家）、国益のために、権力体制を強化しつつ、国民統治も行ってきた。植民地以降フランスはカンボジアで特に両性区分の明確化によって性についての様々な制度を作った。第2章で説明したように、カンボジアは13世紀のクメール王朝の時代には、既に *Srey*（女性）、*Bros*（男性）、*Kteuy*（セクシュアルマイノリティ）という言葉が確かにあったが、これらの言葉の概念はまだ近代的性という意味においては明確ではなく、仮に男女の性差が存在したとしても、その判断基準に基づく正しい女性らしさ、正しい男性らしさがなかった。なぜなら、その時代では、性の概念が多様であって、非常にあいまいであったからである。当時、同性愛者が数多く存在し、市場や都市の中心部にいたところで自由に生活することができた¹⁰⁵。同性愛者などのセクシュアルマイノリティが差別や偏見の対象ではなかったという意味で、当時は比較的寛容な社会であったといえる。しかし、フランスの植民地化以降、異性愛主義と男女二元論が近代カンボジア社会の構築に密接に関わってきた。その結果、異性愛主義と男女二元論は持続的なものとしてカンボジアに根付いている。セクシュアルマイノリティに対するステレオタイプの固定観念、先入観、偏見、思い込み、誤った知識による差別や当事者への不利益などは日常的に広まっていった。よってセクシュアルマイノリティに対して無意識的・意識的に強い嫌悪感をいだき、露骨に差別意識を持つ非当事者（異性愛主義者と男女二元論に立つもの）が多いのである。そうした理由から、本研究ではカンボジアとフランスの社会を取り上げる。

一方、フランスでは1968年の5月革命（五月革命）¹⁰⁶による大きな変化がきっかけとなり、市民の意識や法制度は大きく変わっていった。革命以降、人間は生まれながらにして自由であり、同じ権利を持ち、平等であるという意識が広がった。そういったことから、フランスでは女性の社会進出の拡大や女性が職業生活と家庭生活を両立できる政策をすすめる、家族の生活様式の多様化、セクシュアルマイノリティの権利の取得などを支援してきた。フランスでは、多くの人がマイノリティのアイデンティティを守るというよりも、皆を同じように平等に扱うという考え方を少なくとも表面的には持っている。誰であれ、皆同じ権利を持っており、自由であることを標榜する社会である。

¹⁰⁵ Zhou Da Guan（周達観）、（1973）、Ly Theam Teng 訳、『汪大淵の日記 真臘風土記について』、プノンペン出版。

周達観、（1989）、和田久徳訳、『真臘風土記—アンコール期のカンボジア（東洋文庫）』、平凡社。

¹⁰⁶ 五月革命とは、1968年5月にフランスにおいて大学生たち、労働者、革新的市民層を中心とする運動を中心にして起こった社会的革命である。

またクメール・ルージュ（カンボジア共産党）¹⁰⁷の時代には多くのカンボジア国民が難民となったため、フランスに難民として移住し、現地で生活を営んでいる人が多い。その割合は他の国と比較しても、かなり多いと言える。

インタビューでは30人の対象者に協力をしてもらった。分析結果がカンボジア全体の現状として、全て当てはまるということとはできない。しかし、今回の調査分析はカンボジアとフランスにおけるカンボジア人のセクシュアリティ構築を考察する上でひとつの資料としての価値はあるであろう。

現在のカンボジアの状況と比べれば、現在のフランスはセクシュアルマイノリティに比較的寛容な社会であることから、フランス国内に住んでいるセクシュアルマイノリティ当事者がカミングアウトする割合はカンボジアと比較して多いと言える。一方、カンボジアではセクシュアルマイノリティ当事者が周囲の人々によって偏見や差別などの形で人権を侵害され、拒絶され、罪悪感を背負わされてきた。セクシュアルマイノリティ当事者は日常生活の困難さや不便さから周囲の目や社会の抑圧を恐れる傾向があるため、セクシュアルマイノリティであることを公言することは非常に勇気が必要な行為である。つまり将来自分にとってどのような目に遭遇するか、どのようなことが起こるか、当事者にとって極めて不安である。そのような状況において、当事者たちと直接会って、話を聞き出すということは非常に困難な作業であった。第1回目の調査では国際電話という手段を利用し、調査をした。第2回目はカンボジアで社会にセクシュアルマイノリティと位置づけられた当事者の被対象者たちに直接に会って話を聞いた。

筆者はその修士論文で『性同一性障害』者（MTF）が目指す社会へーカンボジアの現状』について論述した。今回の調査では、そこで聞き取り調査に協力してくれた被対象者のネットワークを通じて、30人の被対象者と面会することができた。被対象者たちのナラティブ内容の中から、異常と正常に分けられた性がどのように社会的、文化的、歴史的、役割的な要素によって構築されるのか¹⁰⁸、社会制度の違いがどのように性についてのカンボジ

¹⁰⁷ クメール・ルージュ（カンボジア共産党）の時代は1975年から1979年に掛けて、カンボジアではカンボジア国は暗い時代に世界で漂っており、ポル・ポト政権によってカンボジア人の希望を徹底的に破壊した。当時、ポル・ポト派は毛沢東の思想の影響を受けて、知識人層によって生まれた階級・格差を根絶することを目指した。殺されなかった人々は飢餓で命が奪われた。そして、食料生産に従事させるために、都市部の全住民を強制的に農村部へと移住させ、強制的に農作業をさせた。ポル・ポト政権に逆らう人には残酷な処罰し、命を奪った。

¹⁰⁸ フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（1986）渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社。

ア人の意識の変化に影響を与えるのかを慎重に探りたい。

第2節 事例の内容の分析とその結果

3.2.1 ナラティブへの考察

3.2.1.1 カンボジア内に在住するカンボジア人のナラティブの考察

調査対象 カンボジアのプノンペン在住カンボジア人

調査期間 第1次調査：2012年8月14日～2012年8月30日（現地の日付 国際電話）

第2次調査：2013年3月13日～2013年3月30日（現地の日付）

3.2.1.1.1 社会に正常とみなされたグループ

事例1 ソクニー氏（プノンペン在住、30代、既婚）

筆者は今回あえて *Kteuy* という言葉を使用し、非当事者はその言葉あるいは、そのような立場に位置つけられている人々との経験があるかどうかを、ソクニー氏に聞いた。ソクニー氏の回答は以下である。

確かな記憶ではありませんが、小学生ごろには隣のクラスにちょっと女の子っぽい子がいました。私の友達です。最初はとても大人しい子とだけ思いました。毎回会う度にいつも女の子の友達と遊んでいるのを見ました。4年生になったら、私は違う学校に転校して、しばらく会っていませんでした。14歳になって、もう一度あったら、なんか服装とかもって *Kteuy* になって、とてもびっくりしました。思わず、率直に質問をしまして、『なぜこういうふうに変った』と聞きました。すると「急に変わったのではなくて、生まれつき男性が好きなので、仕方がありません」と答えてくれました。

セクシュアルマイノリティはもともと概念があいまいであり、近代化になってからその概念や意味が確立するようになった。そして、現在ではマジョリティと対比されながら使われている。マジョリティに対比させ、その主体を担保する目的で使用されているセクシュアルマイノリティというのは実は社会の安定ためとなるものである。実際、異性愛主義と男女二言論の立場に立つソクニー氏の回答をみてみよう。

バトラー・ジュディス（Butler Judith）（1999）竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフエミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

結構ハンサムな男性だし、性格もやさしいし、上流階級の息子さんなので、なんか残念な気持ちでした。普通の男性に戻ればいいのに。でも本人にはきっとできないでしょう。私はあまり深く聞きませんでした。家族全員はアメリカに移住したので、当然あの子も行っているでしょう。それ以来全然会っていません

…中略…私にとっては、あまり分からない世界でしょうが、偏見などは持っていません。しかし、応援することもあります。今までセクシュアルマイノリティの人々と何人か会ったことがあります、やはりこの人たちと付き合うのはとても勇気がいることです。この人たちというだけで、もしかしたら、自分自身も同じではないかと周りの人に疑われるので、できるだけ距離を保ちます。個人の自由だと思いますが、私としてはなってほしくないです。他の国はあまり行ったことがありませんので、分かりません。カンボジアでは今は多くのセクシュアルマイノリティの人々がいますが、ただ寛容な社会ではないので、そういう人にとって大変な状況です。自分の親戚や友達にはなってほしくないです。つらい目に遭遇するかもしれませんので、気の毒です。

ソクニー氏はセクシュアルマイノリティ当事者に対して偏見や差別などは持っていないが、一般的な視点（異性愛主義と男女二言論）が内面化されているので、当然ながらセクシュアルマイノリティに対して誤った解釈や知識を持っている。ソクニー氏ではなく、異性愛主義と男女二言論の立場に属している人はセクシュアルマイノリティに対して自然に反する行動という理解から異常あるいは病気とみなしている。異性愛主義と男女二言論の立場に立つ非当事者であるソクニー氏に、同性婚という制度や法律について、どのように思っているかを聞いてみた。その回答は以下の通りである。

結婚や恋愛などは自由だと思いますが、やはり国のルールなどに従わなければならないです。カンボジアはまだ同性婚を認めていません。今はまだ寛容な社会になっていないし、これらの人々にとって、不自由なところがあるかもしれませんが、それは仕方ありません。海外に行けばいいのでしょうか、そこまで彼らには余裕がないと思います

…中略…もし彼らの数が多ければ法律などが変わるでしょうし、そうなればいいのですが、未だにまだマイノリティなので、仕方ありません。

…中略…それ（同性婚）はなかなか考えられないことですね。勿論同性婚を認めてい

る欧州の国々あるいは他の地域があると思いますが、アジア諸国は伝統文化などが厳しいし、なかなか実現できないでしょう。認めないのは恐らく、周囲の人々や友だちとは違うし、子どもや家庭を作ることができないということが要因かもしれません。恐らく不可能だと思います。仮に同性婚が認められたとしても、色々な問題が出てくるでしょう。例えば、家族の構成や跡継ぎなどです。男性同士のカップルや女性同士のカップルは子どもができないし、それは一番大きい問題です。恋愛や結婚というのは個人の自由ですが、家族や身うちにはやはりなって欲しくないですね。

事例 2 ソレン氏（プノンペン在住、30 代、独身）

Kteuy という言葉はカンボジアでは非当事者が当事者に対してよく使用する言葉であるが、中に差別的な意味合いが含まれている。第 2 章で *Kteuy* という言葉を説明したが、*Kteuy* とは現在では様々な意味で使用されており、例えば異性装者、同性愛者、両性愛者、性同一性障害者、トランスジェンダー、第 3 の性、などの意味でを含み、より広い意味ではセクシュアルマイノリティとしても用いる。今回はあえてこの言葉を使用し、非当事者に聞いた。その非当事者の自身はどのような意味でこの言葉を使用しているか、またセクシュアルマイノリティ当事者に対してどのようなイメージを持っているかを、ソレン氏に聞いた。ソレン氏さんの回答は以下の通りである。

それ（*Kteuy*）はカンボジア人なら誰でも知っています。例えば同性愛者や、女装とか第 3 の性という意味ですね。

…中略…それ（*Kteuy* に対する偏見や差別）は人によるかもしれません。しかし皆は *Kteuy*（セクシュアルマイノリティ）に対してあまりいいイメージを持っていません

…中略…私はどちらかと言えば、セクシュアルマイノリティを受け入れることが出来ません。今までそういう人と関わりがないし、全員じゃないですが、性格の良くない人が多いでしょう。やはり一般の人と異なるし、同性愛だったら、結婚できないし、それに子どもを産むことができず、家族の方にとって恥になると思います。

カンボジアでは宗教にしても、伝統にしても、結婚ができない人と子どもが産めない人を差別の対象としないが、そうすると、子どもを産むことのできない（社会再生産）、法律上では同性婚が認められないセクシュアルマイノリティも差別の対象とならないはずであ

る。しかし、実際はカンボジアには一般的な視点からセクシュアルマイノリティに対する偏見や差別が存在しているのが現状である。例として、今回のソレン氏の回答では以下のようなものである。

私の村では男性も女性も結婚するのは早いし、それにやはり子どもを持つ家庭が多いですよ。私は彼ら（*Kteuy*）を理解できません。本当に理解できません。人間は異性に恋するのが適切で、当たり前というか常識だと思います。同性に恋愛関係を持つのはおかしい、自然に反することになるでしょう。考えるだけで、ぞっとします。

私の村では同性愛者がいましたが、皆に嫌われますね。しかもあの人はエイズにかかっていますし、怖いです。

…中略…性別には男性か女性かという区別があると思います。動物なら雌と雄ですね。女性なら、男性と結婚して、恋愛して、子どもを産んで、育って、家庭を支える役目があります。反対に男性なら、女性を愛して、結婚して、家庭をつくるという義務を果たすべきですね。それは自然のことだと思います。同性愛者とか第3の性は同性同士が恋愛対象となるので、子どもも産めないし、家庭をつくることができないでしょう。

セクシュアルマイノリティへの無理解あるいは先入観やステレオタイプの情報に基づく偏見によって、当事者は精神的に非常に不安定になり、生活し辛さを感じる場合が多い。特にカンボジアの多くの人々は同性愛などのセクシュアルマイノリティ当事者イコール病気であるという意識を持っており、現在では「同性愛＝エイズ」というふうに変換して、よりイメージが悪化される。本来エイズとは同性愛者か異性愛者であるかに関わらず誰もがかかる病気であるが、カンボジアでは異性間での感染の増加がほぼ一定なのに対して、同性間でのエイズ感染は、増加傾向にあるため、「同性愛＝エイズ」というふうに変換する人が多い。実際に非当事者のソレン氏の回答を見よう。

同性愛者はエイズに掛っている人が多いですよ。皆は学歴が低いし、大体水商売をやる人が多いので、エイズの問題も深刻です。本当に怖いですよ」。

…中略…ただ同性愛者になると、もっと深刻な話題になるので、要注意ですね。

…中略…二つの問題を抱えるので、同性愛とエイズですから、より怖いです。

ステレオタイプの情報や間違った知識が入ってしまう解釈によって、悪いイメージ、差別、偏見などが誕生したわけである。実際のところではカンボジアにおいて、セクシュアルマイノリティ当事者はどのような立場に位置つけられているのかをソレン氏の回答を観察しよう。

彼らは大抵性格が良くないし、変な人が多いので、仕方ないです。ですから、嫌われるのも当然です。

彼ら、彼女らは穢れ（同性同士の恋愛とか）を素敵だとか勘違いしていると思います。女性しか愛せないとか、男性しか愛せない男性、本当は女性／男性になりたかったのとか、勝手なことをするし、言い訳や愚痴ばかり言った挙げ句に、両親にせつかく産んでくれたとても大事な体に傷を付けたたり、弄ったり、家族の名誉を壊し、本当に情けないです。ですから彼らは人として人を愛する資格がありません。

…中略…自分の子どもには、あるいは身内にはそういうふうになって欲しくありません。なってしまったら、やはり縁を切りますね」。

カンボジアではセクシュアルマイノリティに対する偏見はまだ根強い。そのことに基づき、ソレン氏にフランスの事情を説明しながら、質問した。フランスではカンボジアと比較してみれば、セクシュアルマイノリティでも誰であれ平等な権利かつ自由を持ち、少なくとも寛容な社会だと言える。例えば市民運動によって、同性愛者に男女の夫婦と同じような権利を与えるようになり、PACS「民事連帯契約」という法案が可決されたとソレン氏に説明した。またフランスで筆者が会ったフランスに住んでいるカンボジア人を例として挙げ、彼らのセクシュアルマイノリティに対する考え方や意識を伝えた。ソレン氏は筆者の話に対して以下の通り述べた。

国が違うでしょうが、ここはカンボジアですから、カンボジアのやり方があります。フランスや他の国にはその考え方があるかもしれませんが、カンボジア社会ではセクシュアルマイノリティに対して寛容にならないでしょう。例えば、海外に住むことになったら、きっと私の考え方も変わるでしょうが、今はこのカンボジア社会に生きているので、多分考え方は変わらないでしょう。

…中略…変わるか変わらないか、個人差がありますね。でも私は向こうに住むことに

なっても、変わらないと言い切れないし、変わっていくとも言えません。経験してみないと分かりません。でも自分の家族とかがそういうふうになったら、許しません。

事例 3 チャンター氏（プノンペン在住、30 代、独身）

インタビュー冒頭で、最近のカンボジアにおけるセクシュアルマイノリティに関してチャンター氏が感じたことなどを聞いた。その回答は以下の通りである。

私の専門ではないので、自信がありません。しかし、少なくとも皆は少しずつ認識は始めていると思います。ただ問題なのは、皆はやはりセクシュアルマイノリティに対して、偏見を持っている人がかなり多いです。最近テレビ番組にもたまにセクシュアルマイノリティの方々が出ていますが、皆に笑われて、変な質問をされているのです。セクシュアルマイノリティに対してあまり正しく理解できない人が多いです。

最近カンボジア国内において、人々はセクシュアルマイノリティに対して認識し始めたにも関わらず、残念なことに多くの人々または社会はセクシュアルマイノリティを無視する傾向があり、あえて存在しないことにしている傾向がある。そのため、間違った解釈や不理解から偏見や差別が生まれたわけである。そのことに関してチャンター氏に確かめて、その内容は次である。

それは仕方ありません。やはり一般の人々と違うということで、偏見や差別が生まれたと思います。私としては反対するつもりはありませんが、ただ身内や友達になって欲しくありません。そういうふうになったら、辛いし、あまりいいことがないと思います。

…中略…カンボジアではご存知のように、まだヨーロッパのように開かれた社会ではありません。人々は伝統を守りながら、生活していくため、一歩外れるとやはり無理解を招くことが多いです。

カンボジア国内において、人々はセクシュアルマイノリティに対して認識し始めたにも関わらず、当事者への差別や偏見は少なくならない。しかし、フランス社会に住んでいるカンボジア人では、人によって違うかもしれないが、少なくとも非当事者は人間が平等な権利を持つという立場から、セクシュアルマイノリティであれ、誰であれ、皆は法律上で

は同じ権利を認められている。よって、セクシュアルマイノリティに対する考え方がカンボジア内にいる人達と比較すれば、とても異なることが分かった。そのことをチャンター氏に伝え、その反応を観察した。チャンター氏の話では以下のものとなる。

それは違うでしょう。カンボジアの諺にもあったように、郷に入れば郷に従えという諺で、やはり自分がいる環境だったり、その社会様式に合わせないと、暮らしはとても大変だし、当然ながらその社会の法律やルールを守らなければなりません。

…中略…人によって違うかもしれませんが、最初は自分の意志で変わらないと思っても、やはり自国と異なる社会で生活するにつれて、意識が次第に変化していくでしょう。ただその変化は人によるかもしれません。

事例 4 ソピア氏（プノンペン在住、30 代、結婚）

筆者は最初に非当事者であるソピア氏にセクシュアルマイノリティに対してどういうふうに思っているかということを確認めた。その回答は以下の通りである。

私はどちらかと言えば、セクシュアルマイノリティを受け入れることが出来ないと思います。今までそう言った人が友達とか知り合いにいたことがありません。勝手なイメージかもしれませんが、同性愛者やニューハーフはあまり性格の良くない人が多いのだと思っています。一般の人にしてみれば、同性愛者やニューハーフは「変態」であるし、極端に言うとエイズに掛っている同性愛者が多いので、イメージがもっと悪くなります。

…中略…例えば、男性なのに、なぜ男性同士で愛するか、全く理解できません。恋愛は男性と女性の間であるべきです。男性は女性と結婚して、家庭をつくっていきます。女性なら、男性と結婚して、子どもを産んで、家族をつくっていきます。同性愛者やニューハーフや第3の性にしたら、一般の人々の生活と随分違うし、子どもを産むことができないし、家族の方にとって非常に恥になると思います。

…中略…同じ人間ですが、やはりまだ少数派ですね。しかも一般の人々とかなり異なる少数派です。

ソピア氏はセクシュアルマイノリティに対して偏見を持ち、誤った知識に基づいて解釈しているようである。ソピア氏のみならず、カンボジア国内に多く非当事者は当事者に対

して編見や差別意識を持ち、そこには「一般の視点あるいは自然から外れること＝異常」「子どもが作ることができないこと（再生産）」「家族を作って、跡継ぎになれないことによって家族の名誉を汚すこと」、更に「病気だと思うこと＝エイズ」という認識が原因と考えられる。しかし、フランス国内に在住しているカンボジア人に聞いてみると、セクシュアルマイノリティに対して個人の自由なので、迷惑にならなければそれでいいと言う。しかも、フランスでは、結婚することよりも、アムール（愛）が最も大切という価値観が文化的に強いようである。そのため、形式を問わず、お互いの自由や実態を大切にする愛情関係が増えている。セクシュアルマイノリティであっても、誰もが平等であるということから、フランスに住んでいるカンボジア人はセクシュアルマイノリティに対して比較的寛容である。そのことをソピア氏に説明した。その反応は次のとおりである。

フランスとカンボジアは随分違うので、恐らく色々な情報が得られたのでしょうか。

…中略…しかし考えてみたら、まずは国が違うでしょう。カンボジアでは伝統や文化がとても古く、非常に大切にしています。

ここはカンボジアですから、カンボジアのルールや法律があります。今はカンボジアではまだ同性婚という制度を認めていません。セクシュアルマイノリティにかなり偏見を思っている人も多いし、それは仕方がないです。確かに自由な社会だったら、いいのですが。でも昔ながらの伝統や文化はもっと大切だと思います。フランスや他の国はあまり知りませんが、今のカンボジア社会ではセクシュアルマイノリティに対して寛容にならないだろうと思います。

…中略…今私はカンボジアにいますのでカンボジアの伝統や文化を守っています。例えば、将来海外に住むことになったら、きっと私の考え方も変わるでしょうが、今はこのカンボジア社会に生きているので、多分この考えは変わらないでしょう。

3.2.1.1.2 社会に異常とみなされたグループ

事例5 ヴィラー氏（プノンペン在住、20代、独身）

セクシュアルマイノリティに対して人々の理解を得て、カミングアウトができる環境になれば問題を軽減することができるのだろうが、しかし先入観や偏見などが原因でカミングアウトすることで不利益になり、排除されることになる違いはない。ここで、ヴィラー氏にカミングアウトの体験について尋ねた。

職場では絶対にカミングアウトしません。知られたら、バカにされる違いにありません。ですから職場ではあえて男性らしくしています。

…中略…ここはカンボジアですよ。まだ寛容な社会ではありませんので、カミングアウトすることによって不利益になるし、差別されることもあるでしょう。しかも名誉が掛かっていることなので、絶対に秘密にしています。信用できる親友だけに教えました。

…中略…家族には兄と姉に教えました。両親や祖母祖父や親戚には教えていません。

私はどちらかといえば普通の男性で、外見上も性格も男性ですが、ただ性的指向は男性と女性の両方に向いています。しかし男性が好きということは親友以外、誰にも知られていません。知られたら、バカにされるに違いがありません。そして家族の恥にもなり、きっと家族の名誉を汚すことになってしまいます。

自由にカミングアウトできる社会なら、平気でカミングアウトすることができるでしょうが、今はとてもできません。人々はセクシュアルマイノリティに対して、知識があると思いますが、どこまで理解しているかと言いますと、まだまだですし、受け入れる人が少ないでしょう。

当事者がカミングアウトできるかどうかは根本的にはやはり社会状況に左右されると考えられる。フランスでは勿論人によってそれぞれではあるが、カミングアウトする人もいれば、しない人も存在している。しかし、重要なのはセクシュアルマイノリティがカミングアウトしても、カミングアウトしなくても本人の意思というふうに解釈されていることである。カミングアウトしても、理解あるいは応援という形をとる人は存在する。またフランスにおける性に対する態度は、基本的には個人の自由に基づくので、他人に迷惑さえかけなければ平等な権利は変わらないことに少なくとも表面上はなる。セクシュアルマイノリティであれ、法律上では平等な権利かつ自由が認められているのである。しかしカン

ボジアの状況では当事者のカミングアウトによって差別の対象になり、家族でさえ分かってくれないケースがほとんどである。むしろ家族は当事者にカミングアウトして欲しくなく、それは家族の恥あるいは家族の名誉を壊すと捉えている人が多い。二つの社会、または社会の影響について当事者であるヴィラー氏はどのような意識を持っているのかを尋ねてみた。その回答は以下のとおりである。

フランスですから、それはカンボジアと比べたら、かなり違うし、本当にいい状況だと思います。少なくとも、フランスにいるセクシュアルマイノリティ当事者にとって住みやすい社会だと思います。

…中略…カンボジアだったら、同性同士だけではなく、異性愛者のカップルであってもそのようなこと（恋愛の自由）を公にすることはできません。伝統文化はとても厳しいので、特に性に対してかなり閉鎖的だと思います。

カンボジア社会はセクシュアルマイノリティ当事者がなかなかカミングアウトできる環境ではない。当事者のヴィラー氏にとってなぜカンボジアではカミングアウトできず、人々がなぜセクシュアルマイノリティに対して偏見や差別意識を持っているのかを聞いた。その回答は以下の通りである。

女性だったら、女性らしく、男性と結婚して、子どもを持つこと、または男性ならば、男性らしく、女性と結婚して、子どもや家庭をつくることです。いわゆる誰でも当たり前だと思っていることです。…中略…カンボジアでは出来るとしても、まず人々の考え方や意識が変わらないと、同性婚の法律が出来たとしても、差別や偏見が残るでしょう。もし考え方がオープンになったら、同性婚もスムーズに行われるでしょう。今の段階ではちょっと難しいですね。

事例 6 ソパン氏（プノンペン在住、20 代、独身）

カンボジアでは異性愛主義と男女二元論が当然の前提になっているため、セクシュアルマイノリティ当事者は、多くの場合は社会または周囲の人々に常に偏見、差別、いじめを受けたり、笑われたりした経験を持つ。そのことによって本来の自分のアイデンティティに対して悩みや苦悩が生じたり、心の傷に残り、自分の存在を否定続けたりするケースが多い。そのことについてソパン氏に聞いてみた。ソパン氏次のように述べた。

私の村ではやはり厳しかったです。知られたくない原因はやはり家族の名誉に掛かっていることだし、特に私の両親は同性愛者や女性っぽい男性や男性っぽい女性が好きではないです。周りとかかなり違うので、知られたら、親戚や学校の友達に差別されるでしょう。特に一番嫌なのは *Kteuy* と呼ばれることです。この *Kteuy* という言葉はかなり深刻で、マイナスイメージを持つ言葉ですので、本当に呼ばれたくないです。

…中略…カンボジアでは特にある一定以上の年齢層の人々はセクシュアルマイノリティのことを理解できないし、誤った知識で理解されることもあります。セクシュアルマイノリティはエイズに感染しているので、良くないとか言われたりしているし、例えばゲイならどんな男でも性関係を持つこととかを主張される人もいます。

多くの非当事者はセクシュアルマイノリティ当事者に対して *Kteuy* という言葉を平気で使用している。本来の意味はもともとなんらかの原因で外性器が女性か男性かが判別できない状態を持つ人、つまり女性と男性の間でできた性という意味を持っていた。しかしこの言葉はかなり人権を損なう言葉であり、個人の人格を侮辱し、差別的かつ暴力性を持つ言葉である。また近年では *Kteuy* とは様々な意味で使用され、例えば、異性装者、同性愛者、性同一性障害者、トランスジェンダー、第3の性などと言った意味で使われており、いずにせよマイナスイメージの差別言葉である。ソパン氏のみならず、当事者はこの *Kteuy* という言葉に対して不快感、抵抗感がある。彼は次のように語ってくれた。

確かに言い換えられると思いますが、*Kteuy* もセクシュアルマイノリティも好きではありません。*Kteuy* は勿論嫌いだし、あれは差別用語だと思います。セクシュアルマイノリティもあまり好きではありませんね。何をもって、マイノリティという定義をするのか全く分かりません。単なる数的な問題だけなのか、数が多ければ、多いほど正義な

のか、本当に難しいです。今の社会は多数決で決める社会だと思いますね。私たちはたまたま数的にはまだ少ないですが、皆と同じ人間であることには変わりありませんし、もっと言えば当然皆と平等だし、個人の選択ができるべきと思います。

社会または周囲の人々からの偏見や差別の根強さと向かい合いながら生きていくのはかなり困難である。ましてカミングアウトというのは大変難しい課題だろう。よって多くの当事者は自分のアイデンティティを隠しながら、日々の生活を送っている。ソパン氏もカミングアウトしないことを決心している。そのカミングアウトについて以下の通りに話してくれた。

私はまだ完全にカミングアウトをしていません。幾人かの親友に言いましたが、自分の家族には未だに言えません。縁を切られることがとても心配です。カンボジアの社会は西洋や他の進んだ国々と違って、セクシュアルマイノリティがまだ許されていません。

ソパン氏はやはり偏見や差別がセクシャルマイノリティを縛る社会で生活しているからこそ、あえて公的にカミングアウトしない。しかし、尋ねたところでは、もしカンボジアがセクシュアルマイノリティに対して開けた社会になれば、きっと自由にカミングアウトできるだろうと話した。例えば、一部の西洋の社会は同性結婚が法制化され、認められているので、偏見や差別が比較的少なく、セクシュアルマイノリティにとってカミングアウトしやすい環境である。そのことに関して、ソパン氏は次のように述べた。

…中略…もしカンボジアが西洋と同じようになったら、人々の意識も当然変わってくるし、私のような人々にとってきっといいのではないのでしょうか。社会は人々に影響を与えるので、まず社会を変えてからでないと難しいでしょう。全てにおいて意識が変わらないでしょうが、少なくとも差別や偏見をカットダウンすることが出来るでしょう。

…中略…私はイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツなどに行ったことがあります。長く滞在はしたことはありませんが、少なくとも私の目から見ると、カンボジアと比べたら、まだいいと思います。国の事情はそれぞれ違うかもしれませんが、セクシュアルマイノリティにとってカミングアウトしやすい社会だと思います。当事者であれ非当事者であれ、法律上では同じ権利を持ち、自由で、互いに尊敬している。カ

ミングアウトというテーマも、したい人はしてもいいし、そうでない人はしなくてもいいです。あくまでも個人の自由です。勿論差別や偏見が存在しないわけではありませんが、カンボジアと比べれば、少なくともまだいい状況だと思います。

事例 7 キムハン氏 （プノンペン在住、30 代、独身）

キムハン氏は生まれながら、自分の生物学的性が心の性別と不一致する状態を持ち、いわゆる性同一性障害に当たるといえる。本人は公にカミングアウトしており、女性として生活している。その女性としての生活について、キムハン氏は以下の通り述べた。

私はカミングアウトしているというより、男性として生まれましたが、去年タイで性転換手術をしました。戸籍上はまだ男性の性別ですが、心と体は女性です。自分自身はあくまでも自分が女性だと思っていますが、ただ周りの人に理解されていません。手術をしても、子どもが産めないのも、それでは女性ではないと周りの人に言われ続けています。

…中略…私は自分のことはあくまでも女性だと思います。どう思われていても、女性だと思います。やはりこのことでとても疲れますね。

…中略…私は自分を女性だと思いますよ。子どもの時から思っていて、いつか本来の姿を取り戻したいと考えていました。ですから性転換手術を決心しました。今はやっと女性に近い存在になりましたね。

性同一性障害などのセクシュアルマイノリティは家族、友達、周囲の人々と社会の理解が少しでもあれば、差別や偏見などはそれほど深刻化しない状況である。しかし現実では当事者は様々な問題に直面している。性同一性障害の例で言えば、当事者の持つ「身体の性と心の性の不一致する状態」のみならず、学校・職場に関連する問題、家庭の無理解などがあり、社会適合が困難である。実際に、当事者はどのような偏見・差別を受けているかを、キムハン氏は以下の通り話した。

ときどき、「やはり男性ですね」と言われています。「体つきは男性ですから、普通の女性より大きいです」、「(外性器) 同じでも、子どもが産めない」、「彼か彼女か、どちらで読んでほしいですか」などといったくだらない話ばかりされています。余計に疲れ

ますね。ちょっとしたことでも、やはり「もともとは女性ではないから」とか言われるのは一番悔しいです。

…中略…両親とか兄弟は最初反対しました。やはり時間が経って、次第に認めてくれました。友達の中には応援してくれる人もいるし、友達ではなくなる人もいました。

続いて社会制度の人々の考え方に与える影響について伺った。キムハン氏の回答は以下となる。

…上略…他の国のように戸籍上の性別が変更できたら、今より楽になるでしょう。今は、住民票、パスポートなどは男性のものですから、いつも怪しまれています。やはり社会にどうにかして欲しいですね。社会が変わると人々の考え方にも影響があるでしょう。少しでも理解して欲しいです。

今私はカンボジアの社会ではかなり疲れています。人々は何も私たちのことを分らないのに、勝手に決めつけるのですよ。それは一番いけません。文化伝統は厳しいし、男性は男性らしく、女性は女性らしく、本当に大変です。

…中略…少なくとも社会的影響力はとても強いと言えます。私たちは、普段の生活において、自由に行動したいと思って行動しています。しかしその中には制限されることもありますね、例えば男性は上半身が裸でもいいですが、女性ではそうはいきません。でもある少数民族の女性は上半身が裸でも大丈夫だし、恥ずかしいことではないです。そうするとやはり自由な行動でも、それは決められた行動ですね。また社会によっても事情が違ってくるし、常識とか非常識になる可能性もあります」。

事例 8 チェッタ氏 （プノンペン在住、30 代、独身）

社会にセクシュアルマイノリティとして位置つけられた中でチェッタ氏は自己アイデンティティについて以下の通り述べてくれた。

私も最初気付いた時、このような性的志向を持つのは世界には自分ひとりかもしれないと思いました。私は女性として生まれましたが、女性を愛しています。ですから、自分のことは最初おかしいと思いました。よく考えてみれば、愛というものは性別と関係がありません。

…中略…最初気付いたのは高校に入ってからでした。なぜ、私は女性なのに、女性を愛していたのでしょうか。もしかしたら、カンボジアで私のような人はいないだろうと思って、非常に寂しい毎日を過しました。現在は私のような人と友達ができて、とても前向きになり、もっと頑張りたいと思えるようになりました。しかしながら、社会のみならず、特に私の家族は私のことを理解してくれないのです。なぜ周りの人と違うのか、あなたは異常であると言われ続けています。

カミングアウトとは当事者にとって、非常に困難な課題であり、非常に不安を伴うものとも言えるだろう。しかし、場合によって、カミングアウトとは家族、周囲の人々からの応援につながることも考えられるし、同時に自分を解放することができるだろう。逆に残念な場合は、カミングアウトしても、無理解などによりこれまで築き上げてきた人間関係、つまり友達を失うこと、家族の絶縁も十分に有り得るだろう。そのようなことに基づき、チッタ氏に彼女自身カミングアウトの体験について伺った。その回答は以下となる。

はい、(家族にカミングアウトしたこと) してしまいました。やはり家族に一番理解してもらいたかったので、カミングアウトしました。しかしながら、理解されず、とても怒られています。

…中略…私は女性が好きですが、自分も女性だと思いますし、カミングアウトしなければ、女性そのものですね。男性の恰好をしたり、男性らしくしたりしませんので、なんとも言われません。自分の口から言わなければ、大丈夫です。

…中略…(家族以外にカミングアウトした人) 教えた人もいれば、何も言わない人もいますよ。でも親友には教えました。中には前のように付き合っている人もいますし、もう友達ではなくなる人もいます。正直かなり困難です。

チッタ氏は現在パートナー(恋人)と恋愛関係を持っている。女性として暮らしているが、同性間パートナーシップをめぐる生活上の問題が数多くある。自己意識をどのように受け止めるか、周囲にどのようにカミングアウトするかについては、彼女のような性的マイノリティの人たちに共通する非常に困難な課題である。チッタ氏は同性パートナーがいることによってどのような問題に直面しているかについて以下のように説明してくれた。

将来、できるかどうか分かりませんが、今の恋人と結婚したいです。将来もし機会があれば、やはり理解してくれる環境に行こうと考えています。家族との縁を切るつもりはないですが、状況はだんだん悪くなりますので、どうにかしないと男性と結婚させられてしまいます。今は両親にお見合いをさせられています。男性と結婚すれば、きっと一般人のように変化していくのではないかと、両親は考えていますが、私は男性と結婚しても、きっと本質が変わりません。

…中略…カンボジアはまだまだ寛容社会ではありませんので、恋人と付き合っても、なかなかオープンな関係にはできません。寛容社会になれば、結婚したいですね。カンボジアでは多分私たちと同じような人がたくさんいると思います。しかしその人たちのほとんどが自分は普通の男性で、自分は普通の女性で、自分で自分に嘘をついているし、周りの人々に隠しています。無理やりに異性愛者として結婚しますが、途中で離婚したり、また同性の人に浮気したりする人が多いです。それなのに、まだ理解してくれませんか。

事例 9 コック氏 (プノンペン在住、40 代、独身)

コック氏は現在同性のパートナーと一緒に住んでいるが、セクシュアルマイノリティにまだまだ偏見や差別を持っている人が多いカンボジア社会なので、あえてカミングアウトしないと決めたようである。異性愛主義と男女二元論が絶対的なものとして固定された社会の抑圧によって、自分のアイデンティティを隠し忍んでいるのである。コック氏のみならず、ほとんどの場合カンボジアにいる多くのセクシュアルマイノリティ当事者はあえて、自らカミングアウトしない。コック氏自身はなぜカミングアウトしないかという理由を以下の通りに説明してくれた。

今私の家では恋人と一緒に住んでいます。…中略…でもそれでも私はまだあなたのようにカミングアウトしていません。未だに妹にもまだ言っていない。恐らく知られていると思いますが、あえて自分の口から言いません。偉くないですが、政府機関の中で働いているので、バレたら、まずいです。今カンボジアではそういう同性愛者が多いです。ただ皆隠しているし、無理やり女性と結婚している人もたくさんいます。

…中略…カミングアウトしている人は勿論いますし、そうですね、例えばニューハー

フとかだったら、カミングアウトしなくても分かるし。しかしカミングアウトするとしても、やはりいまの社会にはまだ認められないし、差別や偏見を持っている人が多いです。カンボジアはまだ他の進んでいる国と違うので、セクシュアルマイノリティに対してネガティブに思っている人がたくさんいます。

確かにカンボジアではセクシュアルマイノリティに対して偏見や差別意識を持ち、否定的に捉えている人が多いので、誤ったイメージを広め続けている。よって、セクシュアルマイノリティ当事者は自分が当事者であることが周囲の人にカミングアウトできず、周囲に知られたら、軽蔑されたり、不利益がもたらされたりするという怖さを覚えているので、自分の存在を自虐的攻め、社会からの孤立を感じ、精神的に非常に危険を招く場合が多い。しかし、フランス国内に住んでいるカンボジア人は、セクシュアルマイノリティに対してあまり偏見を持たないという人が多いように思われる。そのことにコック氏に説明し、彼は以下のように意見を述べた。

それはフランスだからですよ。ヨーロッパは全体的ではないですが、寛容な社会が多いでしょうが、アジアはなかなか簡単にそういきません。例えばカンボジアでは同性婚という法律が承認されるとしても、まず人々の意識を変えることはとても重要です。お隣のタイではまだ同性婚という法律が出来ていませんが、やはりセクシュアルマイノリティを受け入れるし、とてもオープンな社会です。それぐらにならないと同性婚は難しいですね。

事例 10 ビビ氏（プノンペン在住、20 代、独身）

ビビ氏にカミングアウトの体験について聞いた。その回答は以下となる。

私はゲイです。でも内緒でお願いします。親とか親戚とかにはまだカミングアウトしていません。親友には 3 人ぐらいに教えたが、まだ内緒でやっています。ゲイバーで働いているので、当然ここに来て頂いているお客様は大体ゲイの方が多いです。なのでゲイバーでは平気で教えることができますが、やはり学校とか他のところではなかなかカミングアウトできないです。

…中略…外国人のお客様はカンボジア人のお客様と比べると、圧倒的に多いですね。カンボジア人のお客様はゲイバーに来たくても、勇気がいると思いますし、やはりゲイバーに来る人は皆ゲイだとバレるでしょう。

また、カンボジアにおいてセクシュアルマイノリティの存在はどのように考えられているかをビビ氏に聞いた。彼は次のように述べた。

一般の人々の間ではマイノリティに対して少し認識し始めていますが、なかなか受け入れることは出来ないようです。特にゲイの方が多いですが、勇気を出して、カミングアウトすることは出来ないです。

筆者は、フランス国内に住んでいるカンボジア人にとって、彼らがセクシュアルマイノリティに対してあまり偏見を持たないという人が多いように考える。勿論人はそれぞれであるが、フランスで会ったカンボジア人は非当事者でも当事者でも、『いい人ならば』という前提で、セクシュアルマイノリティでも、どんな人であれ皆平等というふうに話してくれた。そのことをビビ氏に聞かせると、次のように述べてくれた。

それはフランスの話でしょう。カンボジアの今の社会ではやはり難しいのではないですか。他人のことまで気にしすぎるし、特にゲイとか知られたら、バカにされるに違いがありません。本当に怖いです。なので、私はカミングアウトしません。しようとしてもやはり親友、一番私のことを理解する人でないと、言えません。

…中略…人々は誰でも自分のありのままの生活をしたいし、自分であることを分かっ

てもらいたいし、ただ周囲や社会、特に家族は分ってくれるという前提ですね。もし分ってくれなかったら、意味がありません。

事例 11 ボナー氏（プノンペン在住、20 代、独身）

ボナー氏にカミングアウトの体験について聞いた。彼はその話を次のように述べた。

色々と大変ですよ。私は一人子だし、それに男だし、ですから結婚しないと、本家が続かないのです。しかし、結婚しても、私は女性には一切興味がありません。それなのに、母は「あなたは女性と結婚しなさい。最初は駄目でも、後は女性に興味を持ち、変わっていくでしょうと」言いました。

…中略…もう我慢できなくて、母にカミングアウトしましたが、結果的にとても怒られました。それに女性と結婚させられました。

…中略…その女性（結婚する予定の相手）にカミングアウトしても、「ゲイでも、好きですよ。とりあえず私のことを愛しなさい。そうしたら、多分女性に興味を持ち、女性を愛するようになるでしょう』と言われました。

…中略…私は未だに職場ではまだ誰にもカミングアウトしませんし、母と親友ぐらいですかね、カミングアウトしました。母には、もう我慢の限界だったので、言いました。

カンボジアにおいてセクシュアルマイノリティ当事者がカミングアウトしても、周囲の無理解やあるいは偏見による先入観で誤って解釈されるケースが多い。例えば、ボナー氏の話では、彼の母の意見は次のようなものである。

母には、「あなたはヨーロッパ人と一緒に働いているし、最近カンボジアでは同性愛者が多いし、ですからその影響を受けたのではないか』と言われました」。

カンボジアはセクシュアルマイノリティに対して差別意識あるいは偏見を強いられるため、当事者にとってなかなかカミングアウトできない環境であるが、フランスにいるカンボジア人は非当事者であれ、当事者であれ、平等な権利を持つという立場から、少なくとも個人の自由を尊重する人が多い。その話をボナーに説明したら、彼は以下の通り述べた。

それはフランスだからでしょう。カンボジアだったら、文化や伝統もあるし、やはりまだまだ厳しい状況です。海外に出ている人はやはり向こうでの社会に馴染まないといけないし、当然向こうの伝統や文化に触れ合って、現地の法律、規則に対して理解をしています。異国なので、当然ながら自分の意識は知らない間に変わっていくものだと思います。

…中略…少なくとも何らかの変化があるでしょう。社会の影響はとても大きいです」。

事例 12 サキー氏（プノンペン在住、30 代、独身）

サキー氏にカミングアウトの体験について聞いたところでは、次のように回答してくれた。

完全にはカミングアウトしていません。やはり親友にしかカミングアウトすることができません。

…中略…家族には（カミングアウトは）まだです。母と妹にはまだ言っていない。私は長男なので、そういうことをカミングアウトしたら、大きな問題になるでしょう。母にはいつも早く結婚しなさいと言っていますが、やはり自分としてはまだ結婚したくないです。今私はある男性と付き合っていて、二人で将来、同棲することまでも考えています。

カンボジア社会はまだ厳しいので、とてもカミングアウトすることは出来ない状況にある。その原因を、サキー氏は次のように述べた。

海外のように、特にお隣のタイとかヨーロッパのようになれば、問題はありません。しかし、現在はまだ女性の地位もかなり低い社会だし、まして同性愛などセクシュアルマイノリティとなるともっと困難になるでしょう。カンボジアはまだ昔の仕来り、伝統などが強いため、結婚あるいは恋愛というのは男性と女性の間で行われるものだと一般の人々は考えています。

…中略…私の友達の何人かはゲイで、本当に大変そうですよ。自分は自分でありたいですが、やはり周囲に分ってもらえないし、とても苦しんでいます。

筆者は、フランス国内に住んでいるカンボジア人にとって、聞き取り調査を行った。彼らはフランスにおいてはどんな人であれ皆平等な権利を持つというふうに話してくれた。セクシュアルマイノリティの当事者でも非当事者でも皆あまりそういう問題を荒立てるのではなく、例えば女性が好きなのか、男性が好きなのかという性的指向の問題はあくまでも個人の選択肢である。フランスは必ずしも住みやすい社会ではないが、少なくともセクシュアルマイノリティの当事者にとっては住みやすい社会だろうと思われる。従って、どんな社会にすることは人々の意識に影響力があるだろう。この話しをすると、サキー氏は以下のように話した。

それはやはり社会の影響ではないですか。やはり向こうで生活しているし、最初はどうしても慣れないことでも結局少しずつ変わっていくでしょう。カンボジアもフランスのような社会になればいいのに。

事例 13 ボパー氏（プノンペン在住、30 代、独身）

ボパー氏のカミングアウトの体験の話に基づき、カミングアウトしてからどのような困難に遭遇したのかについて聞いて、その回答は以下の通りである。

私は生まれながら、女性の身体ですが、自分が女性であると一度も思ったことがありません。そういう気持ちでいても、やはり周囲は理解してくれない。毎日、人の目が非常に気になり、本当になんでもかんでも気になりがちです。ある意味で自分の本来の姿を隠すという選択肢を選ばなければならなかったのです。つい最近もう我慢の限界だったので、家族にカミングアウトしましたが、結果的に反対されました。

…中略…私にとってカミングアウトするということはとても大きな課題です。自分のことを分かるつもりでも、やはり他人にしてみれば、同じことが分かるわけではありません。「女性なのに、なぜ男性の服装をしたり、性格も男性っぽくしたりするのですか」と常に聞かれています。私は意識的にするのではなく、自然にしています。もし戻れるのなら、やはり男性として生まれたいです。その思いは誰かに言いたかったのですが、ご存じのようにカンボジアはまだセクシャルマイノリティに対して厳しい社会だし、カミングアウトするとしても、やはり皆が分かってくれません。

周囲からの偏見や差別などに常に遭っているボパー氏は家族にカンミングアウトしたが、やはり家族に理解されなかった。その原因はどのようなものなかを本人に語ってもらった。その話の内容は以下である。

両親には「あなたは一般の人々のように戻りなさい。男性と結婚して、孫を早く産んで、幸せになってほしいです」と言われました。私の幸せはそれではありません。もっと自分でありたい自分になって、自由に暮らしたいです。

…中略…他人には「セクシュアルマイノリティは異常だ」と思われても、本人は別に異常だと思っていないし、ただそれは単なる個性です。

フランスの状況についての話しをすると、サキー氏は以下のように意見を述べた。

それは意識が変わってくるでしょう。私のカンボジアの友人の中には同性愛者の人もいるし、第3の性の人もありますが、皆大変です。特に第3の性は自分の身体の性別と異なる服装や振る舞いをしているじゃないですか、そのため皆働きたくても、とても出来ません。なので、水商売をせざるを得ません。同性愛者ならば、まだいい状況ですよ。自ら言わなかったら、偏見も受けないし、普通に仕事できるでしょう。

事例 14 サンボー氏（ブノンペン在住、30代、独身）

いわゆる「性同一性障害」のサンボー氏は今までに遭遇した問題を次のように語った。

学校にあまり行っていなかったんで、あまりいい思い出がありません。子どもの頃、正直自分は男性なのか、女性なのかを悩みました。男性の服装をしましたが、何か違うという違和感を抱きました。気持ち、心、性格などは女性と近いと言っても可笑しくないでしょう。周りの友達も「女っぽい男の子」だと呼ばれたり、色々とひどいこともされたりしました。毎日、周りのクラスメートに変な目で見られ、いじめなどを受けて、辛かったです。

…中略…今女装しても、仕草を女性のように頑張っても、やはり周囲には理解されません。ただ「変態」「異常者」だと見られるだけです。私はもう30代なので、様々なことに遭遇したし、もう慣れてきました。家族は誰も理解してくれなくて、結果的に

20歳の時、ついに家を出てしまいました。家を出て、仕事を探しましたが、書類選考でもやはり本人と生物的性別とが違いますので、その時点でも落とされました。いくら頑張っても、仕事を探しても、なかなか見つけれず、とても大変な時期がありました。

勉強があまり出来なかったのも、原因かもしれませんが、結果的に夜の仕事をし、家計を支えています。今はバーで働いています。

カンボジアはセクシュアルマイノリティに対して寛容ではないので、家族、友達、知人などの周りの人はサンボー氏にどのように思っているか聞いた。その回答は以下の通りである。

連絡をしましたが、母は割と大丈夫になったみたいです。しかし、父はいまだに口もきいてくれませんし、家族のメンバーとして認めてくれません。

…中略…ご存じのようにカンボジアは今になっても、やはり多くの人々はセクシュアルマイノリティに対して偏見や嫌悪を持っている人が多いです。特に私のようなニューハーフだったら、もっと嫌われると思います。

3.2.1.1.3 考察の試み

3.2.1.1.3.1 社会に正常とされる人の回答の考察

現在カンボジアに住んでいる異性愛主義と男女二元論を当然視している、社会的に正常なカテゴリーに位置づけられる被対象者の回答を考察すると、多くの場合次の考えのどれかに収まる。すなわち、セクシュアルマイノリティの存在を否定してイメージを全く持たない状況か、もしくは正確な知識を持たず、先入観、思い込み、あるいは偏ったイメージを持っているかのどれかに分かれる。まずセクシュアルマイノリティについてその存在を否定し、イメージが全く思い浮かばないケースを考察しよう。

イメージが全く思い浮かばない人の回答の考察

カンボジア人であるならば、*Kteuy*¹⁰⁹という言葉を知らない人はまず存在しないだろう。近年では非当事者は*Kteuy*という言葉の説明があったが、*Kteuy*は現在様々な意味で使用されており、例えば異性装者、同性愛者、両性愛者、性同一性障害者、トランスジェンダー、第3の性、などを指す。また、より広い意味ではセクシュアルマイノリティの意味でも用いる。しかし、そのセクシュアルマイノリティの存在を否定し、イメージが全く湧かない人もしばしばいる。彼らの回答では、日常生活にセクシュアルマイノリティ当事者に会う機会がなかったり、それに関する情報・知識を持たなかったりする。日常生活において社会の中には一定数のセクシャルマイノリティが存在しているにも関わらずセクシュアルマイノリティ当事者に会ったことがないということは、その存在を意識的にも無意識的にも否定しているか、または気付かないことを意味する。更に、セクシュアルマイノリティが周囲または社会から低く評価され、差別や偏見がもたらされる社会は当然ながら、当事者が自らカミングアウトをすることができない社会でもある。よって、当事者たちは本来の自己アイデンティティを隠さざるを得なくなるため、非当事者が実際に当事者に会っていたとしても会ったことがないというふうに答えることになる。したがってその存在に気づかないのは当然だということになる。そのような社会では多くのセクシュアルマイノリティ当事者は、異性愛主義と男女二元論の立場にいる人（非当事者）であるかのように、社会の期待に応えようと男性らしい／女性らしい日常生活を営んでいる。

しかし、性同一性障害者の例を考えよう。彼らは生物学的性と性自認の不一致のために

¹⁰⁹ *Kteuy*はセクシュアルマイノリティと意味がほぼ一致するので、その代わりに以降セクシュアルマイノリティを用いる。

社会適応が困難となる。たとえば外見上、声、仕草などが反対の性別のそれとして現れるため、非当事者はそれを見て不自然、異常また病気だと否定的な認識を持つだろう。従って、性同一性障害者に会っても、その存在を否定することによって、「セクシュアルマイノリティのことは知らない」「出会ったことがない」「理解できない」というふうに答えることになるだろう。

また、カンボジアの場合は人々が自ら性という話題を口にする機会が殆どなく、その性の多様さやそのあいまいさなどに気付かないまま生活している人が多い。異性愛主義と男女二元論という一般的な考え方（規範）のみが自分が知っている唯一正しい性概念となるため、その性の基準は非常に狭くなる。

カンボジアでは性を語る行為はタブーとはされていないが、公の場で自らの性について語る行為は良くないとされる傾向にある。未だに伝統や文化的規範が厳しいため、殆どのカンボジアの人々は結婚前の性行為は性的な関係を汚すという理由で絶対してはいけないと捉えている。特に、女性は結婚するまで処女でないといけないという意見を持っている人が多く、ましてセクシュアルマイノリティに対してはより否定的な見方が多い。

偏ったイメージを持っている人の回答の考察

とはいえ、カンボジアでもセクシュアルマイノリティの認識は広まりつつある。同時に、セクシュアルマイノリティに対する認識レベルにおいて、先入観、思い込み、固定観念、偏見も根強いため、セクシュアルマイノリティに対する意識上の嫌悪感や差別が生じている。問題はそのような判断の妥当性がいかほどのものかという点にある。以下ではセクシュアルマイノリティに対して偏ったイメージを持っている人の回答を考察していく。

セクシュアルマイノリティ当事者は世の中のどこにでも存在するが、そもそもなぜセクシュアルマイノリティという立場に位置づけられているのか。まず、単に人口が少ないことがその理由として考えられる。二つ目の理由は、一般的な視点（規範）によって「周縁」にカテゴライズされるということである。近代以降、性にまつわる場面はごく限れてきたため、人々の性のあり方が多様で、あいまいであるという事実も無視されるようになっていく。多くの人々は教えられた異性愛主義と男女二元論に対して疑いを持たず、それらを受け入れ、その意識を内面化している。よって、社会はまさにその考え方を受け入れている人々を数の多さから基準とし、マジョリティとして位置づけているのである。しかし、勿論異性愛主義と男女二元論という考え方によって生きづらくさせられている人たちがい

る。そういう人たちはセクシュアルマイノリティの側に位置付けられる。しばしば、セクシュアルマイノリティがどこでも存在している点を認めた上で、人口の最低3%から5%はいるだろうと推測する研究もある。しかし、その人口の判断基準は正確ではないと考えられる。なぜなら、国によって性の概念も異なり、生の多様性に対する社会の寛容度も十分に考慮しなければならないからである。現在ではセクシュアルマイノリティに対して不寛容な社会が多いため、当事者が自のアイデンティティを明かすことが出来ない状況になっている。従って、セクシュアルマイノリティ当事者の人口が少ないということは必ずしも正しい認識とは言えない。むしろ、現状では恐らく多く存在しているにもかかわらず、国の制度（秩序）によって個人の自由や生き方を抑圧されていると考えるほうが妥当であろう。

次に、異性愛主義と男女二元論という一般的な視点（規範）による周縁化が原因となっていることについて考察してみよう。ミシェル・フーコーとジュディス・バトラーの言うように、セクシュアルマイノリティの主体はそもそもマジョリティを主体として担保するために、確立されたものである¹¹⁰。この背景は、18世紀末（近代以降）に至ると、西洋で誕生した医学、科学の権力が強大になり、また同性愛を罪として禁じたキリスト教の後、医学が同性愛を治療・研究対象とするようになった。当時、医学は同性愛を疾患と規定したが、そもそもその理由は同性愛者が社会の人口政策（社会的規範）に参加できないことにあった。社会的規範に参加できないセクシュアルマイノリティが医学的に疾患と扱われたため、とりわけ異性愛主義と男女二元論が内面化された人々によって、自然に反する行為、異常としてみなされることになった。これは同性愛に限られた話ではなく、他のセクシュアルマイノリティや社会の秩序あるいは規範に何らかの形で外れた人も同様であり、社会によって排除される傾向があるのである。近代以降、各地域に同性愛などのセクシュアルマイノリティが自然に反するという考え方、彼らは異常、疾患であるという固定観念が広まり、人々はそれに対して嫌悪感、差別意識を抱くことになってしまったのである。しかし、1990年代に入ってから、国際精神医学会及び世界保健機関は、同性愛を疾患とはみなさず、治療の対象からは外した。しかし、性同一性障害などの他のセクシュアルマイノリティは未だに疾患として治療・研究の対象とされている。実際、同性愛が疾患でない

¹¹⁰ フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社。

バトラー・ジュディス (Butler Judith) (1999) 竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

と医学的に提唱されたのにも関わらず、多くの人々に異性愛主義と男女二元論という規範が内面化されたため、その規範から外れた人たちはマイノリティというポジションに位置づけられ、性の多様さやあいまいさが否定されてしまう。従って、各地では規範によって周縁化された人たち（セクシュアルマイノリティを含む）に対する差別や偏見が未だに存在し続けている。

3.2.1.1.3.2 社会に異常とされる人の回答の考察

当事者たちは社会的強制によりセクシュアルマイノリティという立場に位置付けられ、またその立場に追い込まれている。セクシュアルマイノリティ当事者にとって、自己アイデンティティをどのように受け止め、さらに周りの人々にそのアイデンティティを打ち明けることが非常に重要な問題である。また周囲の人々がそのアイデンティティをどのように受けとめ、理解するかは、当事者だけの問題ではなく、非当事者の考えるべき問題である。ここでは社会によって強制的にセクシュアルマイノリティ当事者、または異常とされている人の回答の考察を3つの項目にわけ、彼らの自己アイデンティティの獲得、カミングアウトプロセス、セクシュアルマイノリティに対する人々及び社会の受け止め方を考察していきたい。

自己アイデンティティの獲得

自己アイデンティティとは、本来は自分自身をどのように受け止めるのか、ということを目指す。これは、自分が社会や人々（他者）との関係の中で形成され、承認されていくものである。セクシュアルマイノリティといったカテゴリーやその概念は自然、先天的につくられたもののように見えるが、実際は社会の中で歴史的なプロセスを経ることによって、後天的につくられたものである。

西洋の社会では、かつてキリスト教の聖書で同性愛者またはその行為が自然に反する行為として罪だとみなされた。そして、近代に入ってから、国家の労働力確保や、人口調節に目が向けられ、人間の性や生殖行為が行政の対象とされた。これらを、厳しく管理した結果、同性愛者などのセクシュアルマイノリティに対して、処罰が課せられた。そして、同時期に進歩した科学、医学の力を借りることで、同性愛などセクシュアルマイノリティが病気であるとされ、異常な立場に位置付けられることになった。人口政策に参加できる男女二元論と異性愛主義という立場にいる人が唯一正常であるとの言説が流布されること

によって、男女二元論と異性愛主義が人々の根本的な意識にまで浸透し、内面化されることで、あたかも本質的な実体であるかのような錯覚が生まれるのだ。その錯覚が広まることで、当事者は非当事者から社会の中でいじめ、差別の対象となっており、差別や偏見が根強く存在している。非当事者のみならず、当事者でさえ自分で自分のことを「社会によりセクシュアルマイノリティは病気かつ異常」だと内面化してしまうと、自己嫌悪、混乱、葛藤などに陥る。たとえ、当事者が「自分は病気または異常ではない」と主張していても、社会または周囲の人々に強制的に押しつけられた「セクシュアルマイノリティであり、病気かつ異常」ということを受け入れている。多くの当事者が自己アイデンティティを受け止めるとしても自分は病気または異常であるから、偏見や差別されることを受け入れ、同時に精神的にかなり大きな危険を伴っている。

実際、カンボジアでもまさにこの流れになっている。それはフランスの植民地化によって、西洋、特にフランス近代の思想、制度などの影響を受けたことによる。これをきっかけに、カンボジアの人々はセクシュアルマイノリティに対して偏見や差別をあからさまに顕し始めた。そういったことから、当事者は自己アイデンティティに対して悩まなければならない状況に置かれている。更にカンボジアの現状では、当事者は非当事者のように、本来の姿など気にせずに話すことさえできない。実際、今回の被対象者の多くは本名を出さないことを前提に、調査に協力してくれた。恐らく、彼らが不安なのは本名が露呈した場合に、不利益を被ることになるかもしれないという不安を抱いていることが原因にある。

近代では、世の中がマジョリティが特権をもってしまっており、セクシュアルマイノリティ当事者を否定的に見ている人が多いために、自分自身でも否定的に感じている場合が少なくない。毎日本来の自分を隠しながら、生活を送り、例えそれに限界を感じたとしても、それでも自分の感情を抑え、カミングアウトには至らないことが多い。社会がまだ不寛容であるため、当事者のカミングアウトがほとんどみられない状況である。次にカンボジアでのカミングアウトについて述べたい。

カミングアウト

カンボジア国内で生活しているセクシュアルマイノリティ当事者の被対象者の多くはカミングアウトをまだしていない。やはり不寛容な社会であるカンボジアで生活しているため、多くのセクシュアルマイノリティ当事者は日常生活の面では一見何ら問題なく生きているように見えても、精神的混乱、孤独感、社会的孤立、ストレス、罪の意識によって追い詰められている。社会の抑圧によって、本来の自己アイデンティティを隠しながら、異性愛主義と男女二元論に立たざるを得ない状況になっているのである。もちろん、中には性同一性障害当事者は存在しているが、その人たちはカミングアウトするというよりも、生物学的性と性自認の不一致する状態に苦しんでおり、例えば服装、声、外見上などは反対の性に合わせるため、社会適応が困難である。その当事者はカミングアウトしていないにも関わらず、やはり一般的な認識では性的逸脱者、自然に反する行為、異常、疾患などとみなされる偏見や固定観念によって、嫌がらせや差別を受け、不利益が生じることになる。従って、性同一性障害ではない限り、例えば同性愛者、両性愛者などのセクシュアルマイノリティ当事者たちはカミングアウトしないのである。

カミングアウトとは、単に自己アイデンティティを周囲の人々に打ち明ける行為のみならず、今の自分がどの状況に置かれているか、どのような問題に直面しているかを伝えるというのが本来の目的である。しかし、セクシュアルマイノリティだからカミングアウトしなければならないのかと言えばそうということではなく、カミングアウトは当事者自身の意思で判断した上で、決めていくことである。比較的セクシュアルマイノリティに対して寛容な社会であるフランスでは、セクシュアルマイノリティ当事者のカミングアウトの割合が高い。しかし、そうでない社会では、当事者がカミングアウトしたくても、できない状況である。カンボジアはまさにその典型例であり、多くの被対象者たちは自分のままでありたいと思っても、社会の抑圧によって、家族でさえカミングアウトを支持しない。結果、自分自身のことを後ろ向きで、否定的に考えざるを得なくなってしまう。場合によっては、自分を責めたり、自分が異常であると考えたりする当事者が多く、彼らにとって自分がどのような人生を送っていくのか、自分がこのままでいいのか、不安になってしまう。

やはり、カンボジアでは現在セクシュアルマイノリティに対する人々の理解が進んでいないため、多くのセクシュアルマイノリティ当事者の被対象者は、特にセクシュアルマイノリティに対して開かれている社会に住みたいという要望が多い。

セクシュアルマイノリティに対する人々及び社会の受け止め方

カンボジアの法律、伝統、宗教はセクシュアルマイノリティを抑圧するものではない。しかしながら、実際にセクシュアルマイノリティに対する理解不足や誤った解釈などによって、人間関係の問題、家族の絶縁、就学・就労に関する問題、社会適応困難、差別や偏見などが生じている。それがカンボジアの現状である。

一概には断言できないかもしれないが、例えばセクシュアルマイノリティが認められ、比較的寛容な社会であるフランスの事象を考えてみよう。カンボジアの状況と比較すると、フランスにおいて同性婚の制度が合法化される前、PACS(市民連帯契約)という制度があった。この PACS とは、1999 年にフランスの民法改正によって成立され、新たな婚姻関係を示した制度である。これがどういう制度かということ、異性または同性の成人の二人による、非婚カップルでも婚姻夫婦に準ずる諸権利を与える法律である。PACS が生まれた背景には、女性の社会進出、女性の晩婚化、セクシュアルマイノリティを社会的に認めさせるための運動などがある。この制度はフランスの人々の意識を変化させたのに留まらず、フランスが寛容な国の一つであると言われている所以となっている。また、2013 年にフランスにおいて同性婚が合法化されたが、もちろん同性婚の法律が成立する前には反対運動があった。しかし、その反対運動を乗り越えてフランスでは同性婚が認められた。同性婚が認められたことは、セクシュアルマイノリティが社会的地位を獲得する第一歩となるだろう。従って、セクシュアルマイノリティ当事者の被対象者は、特にセクシュアルマイノリティに対して開かれている社会に住み、そして本来のアイデンティティをカミングアウトしたいとの希望を持っている人が多い。

自分の意思でカミングアウトを行う、あるいは本来のアイデンティティを認めるということは、一見個人の領域で完結するような考え方に見えるかもしれないが、実際はこれに留まらず、社会制度（規範）を受けながら存在する。そうすると、性に対する認識は社会秩序（規範）によって形成されたものと言える。実際、今回の被対象者たちもまた彼らの性に関する生きた認識は社会によって変わり、性の異常と正常は社会的につくられたものだと言う認識を持っていることが明らかとなった。

ここまでの調査で、カンボジアにおける性の認知され方については一定の答えを導くことができた。では、フランスに住むカンボジアの人々の性に対する認識はどのようなものなのであろうか。カンボジアに住む人々は性の認識は社会状況によって変わると考えているが、フランスに住む人々の認識はどうなのであろうか。次節ではフランスでの聞き取り

調査の結果を紹介したい。

3.2.1.2 フランスに在住するカンボジア人のナラティブ

調査地 パリ、リヨン

調査期間 第1次調査：2012年7月17日～2012年8月31日（現地の日付）

第2次調査：2013年2月8日～2013年2月27日（現地の日付）

3.2.1.2.1 社会に正常とみなされたグループ

事例15 ダヴィナ氏（パリ在住、30代、既婚）

カンボジアで育てられた多くの人々は性という場面を語る機会が少なく、あるいは触れてはいけないという。カンボジアでは男女による異性愛者でさえ、結婚するまで性的行為が許さないため、性はかなり制限されている。よって、筆者の最初の質問ではフランスでは公に同性同士のカップルがいるということに対して質問した。筆者の質問に対して、ダヴィナ氏は次に様に語った。

今のカンボジアでは少しずつ変わってきましたが、やはり路上でキスするのは、ありえない話ですね。まして同性カップルになるとやはり戸惑いますね。今はもう慣れてきましたので、別に迷惑でなければ、ご自由にどうぞみたいな感じになりますね。

…中略…フランスはとても自由な国なので、人に迷惑をかけなければそれでいいです。勿論差別や偏見などを持っている人がいるというのは事実ですが、アジアとかイスラム教の国ほどではないようです。フランス人は人間が生まれながら平等で、同じ権利を持っていると考えていますから、自由はあたり前です。その自由とは人に迷惑をかけなければ、それで大丈夫です。あなたのことはあなたのことで、私のことは私のことです。

次にフランスのセクシュアルマイノリティに対する差別や偏見について質問した。ダヴィナ氏は次に様に述べた。

私の体験から言えることですが、少なくともフランスは住みやすいと思います。誰にとっても、特に私のような外国人とか、セクシュアルマイノリティの方々にとっては住みやすいかもしれません。

…中略…フランスにはフランスのやり方がありますが、こちらに住んでから思ったのはかなり自由な社会ですし、人に迷惑さえ掛けなければ問題にならないのです。同性愛者はあまり気にしませんが、やはりその人が自分の子どもあるいは親戚だとかなり気になります。というのはやはり一般の人々のようにふるまって欲しいからです。結婚して、子どもを持って、いい家庭を作って欲しいのです。

…中略…誰でも幸せを求めるし、愛する人と一緒にいたいという気持ちも同じだと思いますが、やはり国や環境が許してくれないと無理でしょうね。カンボジアではまだ女性差別の問題もあるし、女性のみならず、人権問題がかなり深刻です。ましてセクシュアルマイノリティの人権問題になると、もっと厳しいですね。本当に大変です。

事例 16 タナさん（リヨン在住、20 代、独身）

筆者が、フランスでは平等な権利という立場から、例えば人種、社会身分、セクシュアルマイノリティなどに関係なく、誰でも平等な権利を持つと考えていることについてタナ氏に聞いた。その回答は以下の通りである。

フランスというと、セクシュアルマイノリティ当事者にとって住みやすい社会だと思いますが、現状は人によるかもしれません。今は同性婚という制度が議論されていますが、反対する人もしばしばいますよ。勿論賛成する人もいます。来年は容認されるでしょうが、家族の構成とかはまだ問題とされていますね。人によって違うかもしれませんが、少なくとも私の体験からしてみれば、フランスはかなり寛容な社会だと思いますよ。

…中略…最近カンボジアではセクシュアルマイノリティ、特に同性愛者が増えていますが、やはり社会と一般の人々はまだまだ受け入れることは出来ません。でも、ここに住んでから同性愛者と一般の人々はそれほど変わらないと思うようになりました。ここは寛容な社会なので、同性愛者だけではなく誰でも法を犯さなければ問題がありません。

…中略…自分の体験からしてみると、私は異性愛者ですが、自分のお父さんは両性愛者なので、最初はびっくりしましたが、こちらに住んでから、人は皆平等であり、誰でも自分のしたいことを選ぶことが出来ます。そう考えてみると、気にならなくなりました。でもカンボジアにいる時は、やはり周りの環境のことを考えるし、特に周囲の目もあるので、自然に無意識にやはりどうしても受け入れることができません。

カンボジアにおいてセクシュアルマイノリティの多くは、自分の本来のアイデンティティをカミングアウトすることができない。同性愛者の場合、無理やり異性愛者のように結婚して、毎日自分のアイデンティティを隠していることもある。筆者は、カンボジアとフランスの状況をタナ氏に聞いた。その回答は以下となる

でもそれは仕方ないことですよ。知られたら、ひどい目に遭うし、やはりそういう流れにならざるを得ません。フランスでも自由な社会に見えるかもしれませんが、大都市と地方は随分違うし、その原因で自殺する人もいますよ。ただカンボジアとかアジア諸国に比べれば、ずっとましです。特にいいと思うのは、自分がセクシュアルマイノリティということについて両親や親友あるいは先生などにカミングアウトする人々はかなり多いということです。

フランスでは全てにおいてセクシュアルマイノリティに寛容な社会わけではないが、カンボジアと比較すれば、まだいい状況である。フランスでも昔カンボジアと同じようにセクシュアルマイノリティに対する偏見や差別があった。しかし、当事者の市民運動、社会運動によって、寛容な社会になったといえるだろう。筆者はフランスについてセクシュアルマイノリティに対してカンボジア人も含めて、この社会に住んでいる人々の考え方について確認した。タナ氏のその回答は以下となる

フランス人は特に小学校では、人種差別や自由や平等の権利などを徹底的に教え込まれているので、その根はすごいです。ですから他人に迷惑さえなければ、それでいいです。あなたのことは、あなたの自由で選択し、してもよろしいです。私のことは自分でしっかりします。いい意味で言えば、自由です。逆に悪く言えば、他人につめたいということです。…中略…まず子どもの時からこのことを教えるのはベストですね。セクシュアルマイノリティのことだけではなく、人権の問題、人種の問題、自由な権利など教えなければなりません。私はカンボジアに対してあまり言いたくありません。ひょっとしたら政治に絡んでいるので、やはり政治が怖いです。ここで留めておきたいです。

…中略…人により、違うのですよ。でもここは法律やフランスのルールがありますので、やはり抵抗があっても、あからさまな差別はできないと思います。当事者でも最初きたばかりの時は多分カミングアウトできないと思いますが、時間が経つにつれてカミ

ングアウトしたり、同じような友達と出会って、カンボジアにいた時と比べれば、いいでしょう。非当事者の場合は抵抗や偏見のある人は勿論いますが、住んでいるうちに思ったことは少しずつ変わっていくし、視野が広がるでしょう。

事例 17 ソワタナ氏（パリ在住、40 代、既婚）

筆者はソワタナ氏にフランスにおける同性愛者などのセクシュアルマイノリティに対する意識や考え方を確かめた。彼は次のように語った。

フランスは多いですね、同性愛者とか。人によって違う視点があるかもしれませんが、私には問題がありません。あくまでも人の考え方に過ぎないと思います。フランスではそういうことにはあまり意識していないともいます。それは同性愛者であるとしても同じ人間だし、あまり問題とかは感じていません。フランスの社会に長くいるし、もし違う国にいたら、どういうふうに思っているのか、また別の話ですね。

カンボジアでは昔から同性愛者などのセクシュアルマイノリティが数多く存在し、最近その存在は人々の間で認識し始められたが、やはりまだ寛容な社会になっていない。例えば、周囲と違う行動パターンを取ることや子どもが産めない（子孫繁栄）という理由が、差別や偏見につながる。このことについて、カンボジアの状況とフランスの状況を比較しながら、ソワタナ氏は以下の通り述べた。

私はフランスにこういう同性愛者のお友達や親戚があまりいないのですが、確かに知り合いには多少いますね。あの方々は優しくて、いい人です。人はそれぞれですが、なんかそういった同性愛者であるという理由で周りの方とあまりうまく行かない人もいます。多分カンボジアの場合は同性愛者に対する差別や偏見という問題のみならず、色々な問題があると思います。女性差別の問題などもたくさんあります。もう少し発展してきたら、恐らくいい状況になると思いますが。

あくまでも私の個人的な考え方ですが、まず教育が一番重要だと思います。学校では人間は平等立場であって、どんな人でも皆同じ権利を持っているということを教えられています。フランスでは少数派だからといって、権利を与えるのではなく、どんな人間でも皆平等で同じ権利を持っています。人に迷惑さえかけなければ、問題では

ありません」。

私は実際フランスに長くいるものですから、カンボジアの現実がどうなっているかわからないですが、教育と実践が必要ですね。実際の生活で実践しないとだめだと思います。なので、カンボジアでは実践が足りないのではないのでしょうか。

カンボジアの学校でも人権について、例えば誰でも平等な権利や立場を持つことを学生に教えているに関わらず、実際にはセクシュアルマイノリティ当事者の権利はあまり守れていない。それは教育と実践がまだ足りないのが原因である。ソワタナ氏によると、フランスでは小学校から人権について子どもたちに教ており、実際のあらゆる場面でこの人権の問題が取り上げられている。従って、日常生活においても身近なところで常に人権の問題が問われているので、人権が生まれ付きのものだと内面化され、誰でも同じのように平等な権利を持つということを自然と受け入れられるようになる。よって、セクシュアルマイノリティであれ、移民であれ、誰であれ、生まれつき持っている権利で、法律上では全ての人間が持っている平等な権利であると広く認識されている。

カンボジアではごく最近、2009年5月12日にカンボジアのプノンペンでセクシュアルマイノリティによる大規模な会議が開催され、300人の性的少数者が出席した。会議によると現在カンボジアにおいてセクシュアルマイノリティ当事者の数は約14万人存在している。この数は多いか少ないかではなく、問題は当事者たちが非当事者または社会から執拗な嫌がらせや偏見などを受けて困っていることである。そのことに関して、ソワタナ氏は以下の通り意見を主張した。

14万人という数は多いですね。驚きました。確かに多いか少ないかという問題ではないですね。やはり社会は受け入れるべきだと思いますね。私はあまりその分野に関して詳しくありませんが、フランスでは性的少数派でも普通に仕事し、社会がそういった人たちのことを認めているのです。例えば、ご存じと思いますが、ベルトラン・ドラノエさんは元パリ市長で、自らゲイであることを明らかにしました。同性愛者であることをフランスでも初めて公表した国会議員として、全国的に有名になりました。これはとてもいいことだと思うし、人間は皆平等で、例え同性愛者であっても、能力、目標などがあれば、やりたい職業に就けるはずです。しかし、社会がどこまで認めるか、それは社会によって違うのです。フランスですからできるのですが、異なる国、政治などにな

ると、その視点も揺れていくでしょう。…中略…

現在のカンボジアではカンボジアなりのやり方があるでしょうが、時代によって変わっていくと思います。

事例 18 ボラー氏（パリ在住、40 代、既婚）

カンボジアではジェンダーと言えば、女性の人権問題のみ取り扱っているが、女性のみならずセクシュアルマイノリティ当事者の権利が無視されることも深刻な問題である。しかし、フランスでは同性愛などのセクシュアルマイノリティ当事者はカンボジアと比較してみれば、少なくとも住みやすい社会だと思われる。セクシュアルマイノリティに対してボラー氏は次のように述べた。

それはその人の選択肢だし、別に悪く思っていない。ただこのフランス社会ならば、いいですが、例えばカンボジアになると、また異なるでしょう。ご存じのように、カンボジアではまだまだ女性の人権問題があるし、性的少数派となると、もっと厳しいですね。カンボジアでまだ性的少数派を受け入れられる社会ではありません。

…中略…私は別に反対するつもりはありませんが、ただ身内の人だと、ちょっと厳しくするかもしれません。やはり一般の人ようになって欲しいですね。ただ最終的には認めるかもしれません。反対なのは、フランスで生活するのならそういう選択肢でもいいでしょうが、将来カンボジアに戻れば、やはり性的少数派だと、色々と大変でしょう。周囲に白い目で見られて、馬鹿にされて、本当に可哀想です。身内の人なので、当然ながら幸せになって欲しいですね。でも本人がどうしてもと言うのなら、やはり認めるしかないですね、ただ色々と壁にぶつかることもあるので、強くなって欲しいですね。

社会が変わっていけば、人間の意識や考え方も変化していく。人間の意識と社会は密接的な関係があると言えるだろう。実際にボラー氏は、フランスの社会のルール及び法律を尊重する。このことに関しては実際のボラー氏の声は以下となる。

正しいか、正しくないか、国によって違いますね。カンボジアはカンボジアのやり方、法律などがあります。フランスも当然ながら、フランスなりのやり方、法律、社会制度があります。ですから、環境とか社会には大きな影響力がありますし、当然ながら、そ

の国にいれば、その国のルールや法律を守ります。

人によって異なるでしょうが、でもやはり変わっていくでしょう。カンボジアに居た時、同性カップルなどを実際に見たことがないし、接触したこともないし、テレビで見ただけで何も思っていない。しかしフランスに来てから、実際に友達でもないですが、路上とか電車とか見たことがあります。最初はやはり妙に可笑しいと思ったのですが、長い間いると、もう慣れてくるし、やはりその人の選択です。なので、私は別に何も思っていない。

事例 19 ヴァンナー氏（パリ在住、20 代、独身）

現フランス大統領フランソワ・オランド氏（Francois Holland）が就任演説では公的に結婚の平等について、同性婚の法案を支持する発言をし、とうとう 2013 年 5 月には世界中 14 カ国目となる、同性婚が合法化された。

カンボジアの場合は 2004 年に前国王ノロドム・シハヌークによりカンボジアの同性愛について議論したが、それ以来その動きは全くないと思われる。このことについてヴァンナー氏は以下の通り述べた。

まずフランスはカンボジアと違いますね。勿論似たようなこともあるでしょうが、やはりカンボジアは高齢者の考え方とか昔の仕来り、伝統などはまだ同性婚を認めません。フランスも恐らく昔は今のカンボジアと同じかもしれませんが、若者の運動とかそういうマイノリティの方の運動によって社会が変わっていきます。やはり住民の声が必要ですね。カンボジアは今女性の権利の問題もあるし、まして同性婚になると、厳しいですね。

同性愛者であれ、異性愛者であれ、あるいは他のグループに属している人であれ、皆同じ権利を持ち、平等である。しかし、実際にどこまでこのことを実践できるかは、人の意識の問題に掛ってくる。やはり、住んでいる環境（社会）の影響が大きい。そのことについてヴァンナー氏にカンボジアにいた時とフランスに来てからそのセクシュアルマイノリティに対する考え方は変化があるかどうかを確かめた。その回答は以下となる。

わたしはフランスに住んでいるので、当然こちらの法律や人々の暮らしに従っていま

す。一番好きなところは自分のことは自分で考えれば、それでいいということです。私は同性を性的に好きになることはありませんが、同性愛者には全く抵抗がありません。あくまでも個人の自由です。

…中略…こちらに来たからかもしれません。以前は同性愛者に出会ったこともなかったし、周りはそういう人に対していいイメージを持っていなかったし、違う世界の人と思いました。でもあえて差別まではしません。こちらに住んでから、周りの人の中には同性愛者がいたりするので、次第に慣れるようになりました。数はまだ少数派ですが、いるということはいるのです。同じ人間なので、いい人ならば、それでいいじゃないですか。人の選択だし、それを拒否することができないでしょう。

…中略…でも子孫のことを考えるとやはり複雑な気持ちになるし、カンボジアの人の考え方も大事でしょう。

事例 20 ダリ氏（リヨン在住、50代、離婚）

フランスは自由で平等な社会の一つであるといわれる。よって、誰であれ同じ権利があり、平等な立場である。その点に関して、フランスにおいて同性愛者などのセクシュアルマイノリティに当事者はどのような位置づけをされているのかをダリ氏に聞いた。その回答は次の通りである。

私はあまり知らない世界ですが、多分あまり問題ないでしょう。人によって意見や考え方が随分違います。私は賛成することもなく、反対することもないです。普通にいい人ならば、それでいいです。個人の問題やプライバシーなどはあくまでもその人の選択肢です。

カンボジアにいた時は、少しは認識していましたが、こちらに来てから、路上で同性カップルがキスしたのを見ましたので、もう驚くことはありません。最初はびっくりしてしまいました。カンボジアでは異性愛者カップルが公の場でキスをしたら、大騒ぎですし、まして同性のカップルだったらもっと話題になるに違いがありません。

カンボジアではセクシュアルマイノリティへの偏見や先入観による差別意識を持っている人が多い。そのことについてダリ氏は次の通り、セクシュアルマイノリティに対してなぜ寛容ではないのかを述べてくれた。

人によるかもしれませんが、やはりまだ受け入れない感じですね。まず子どもを産めないことと周りの人と違うという問題ですね。カンボジアでは子孫の繁栄がとても大事だし、社会の様式に合わせるのは当たり前です。それと違った場合はあまり評価されないですね。今同性愛者などという方々がいるということは事実ですが、まだ認められないですね、一般の人々から。周りの人は当然ですが、家族の人でも多分なかなか受け入れられないです。

ダリ氏自身もセクシュアルマイノリティに対して、カンボジアにいた時はそのような人に会ったことがなく、そのため社会による先入観や偏見を持った。しかしフランスに移住してから、セクシュアルマイノリティに対する考え方はどのように変わったかを次のように述べてくれた。

私もこちらに来てから、考え方が少しずつ変わってきました。カンボジアにいた時は差別意識や偏見などを持ったことはありませんでしたが、セクシュアルマイノリティ当事者に出会ったことがなかったし、違う世界の人というイメージを持っていました。そういう人たちは大体水商売をやっているんで、多少あまり良くないイメージがありました。しかしこちらでは色々な人がいるので、皆同じ人間だし、平等だし、自分のことをしっかりすれば、それでいいです。プライバシーや個人の問題はあくまでも個人にすぎません。良かろうが、悪かろうが、自分の責任です。

…中略…同性愛者に限らず、人権問題になると、皆同じ権利、同じレベルです。勿論社会にはお金持ち、あるいはそうでない人がいますが、それでも皆きちんと法律を守って、平等な立場です。問題や犯罪を起こしたら、法律によって処罰を受けます。

事例 21 モニ氏（リヨン在住、60 代、既婚）

フランスにおける同性愛者、性同一性障害などのセクシュアルマイノリティに対する人々の考え方はどのようなものか。この質問に対して、モニ氏の視点や考え方では次の通りである。

人によって違いますね。また地域によっても違ってきます。私の場合は全く何も思っていない。それはその人の生き方、選択肢です。もう 2013 年ですから、時代が変わるし、いい人ならば、いいのではないのでしょうか。私の周りのカンボジア人（フランスにいるカンボジア人）の中にも同性愛者がいますが、皆あまり気にしません。いい人ならば、それでいいです。

カンボジアにおいては、セクシュアルマイノリティに対する人々の考え方はまだ寛容になっておらず、当事者は非当事者または社会からの偏見や先入観による差別やいじめを受けている。よって、今回の質問では、セクシュアルマイノリティに対するモニ氏のこの考え方にはカンボジアにいた時とフランスに移住してから、どのような変化があったのかを確かめた。モニ氏は次の通り述べた。

変化があったかもしれません。私はカンボジアにいた時は、同性愛者と出会ったことがありませんでしたが、一人の友人は男性なのに、性格は女性らしい人です。その人に対して、最初は大変な人だと思っていましたし、男は男らしくすればいいと思っていました。しかしこちらに来てから、同性愛者にも会ったし、たまにニュースを見たことがありますので、考え方は少し変わってきました。

私の末子は男性ですが、今男性のパートナーと一緒に住んでいます。

モニ氏は非当事者であるが、彼女の息子は同性愛者である。彼女は当事者のカミングアウトやアイデンティティをどのような姿勢で受け止めているのかを聞いた。そして彼女の回答は以下の通りである。

この子は今 30 代です。子どもの時、性格は本当にどうみても男性ですが、働き出してから、突然私にカミングアウトしました。最初は複雑な気持ちを持ちましたが、次第に

認めてあげることになりました。

…中略…最初はなかなか受け入れられなかったですね。自分の子どもにはやはり幸せになって欲しいですので、一般の人々ようになってもらいたいです。親は子どもを愛するので、自分の子に不幸になって欲しいという親は決していないでしょう。なので、叱ったり、認めなかったりするの、当然のことではないですが、あくまでも自分の子どもによくなって欲しいからです。最終的にはどうしてもできない場合は、応援するしかないです。まず自分の親に言った方がベストかもしれません。

フランスでカミングアウトするとしても、問題はありませんし、個人の自由です。し
ようか、しないか、それは自分の決心にすぎません。偏見を持っている人もいますが、それにしてもその人の考え方です。しかし大体の人はあまり気にしませんし、とても自由な社会です。カンボジアだったら、どうですかね？ 厳しいのではないのでしょうか。やはり人はまだマイノリティに対して、間違って理解する人がいるだろうということで、きつとなかなかできないでしょう。

事例 22 チャンティ氏（リヨン在住、40 代、既婚）

セクシュアルマイノリティに対する人々の考え方について、フランスに住んでいる人の立場としてのチャンティ氏の視点から次のように述べた。

私は同性カップルに対してちょっと抵抗があります。人それぞれでしょうが、応援する人もいます。ただ私の場合はあまり理解できません。

男性は当然女性を愛するし、女性も当然男性と結婚すると思います。自分の子どもには同性愛者になって欲しくないです。なったら、本当に親としてはかなりショックだと思います。フランスだったら、自由かもしれないですが、そのやり方はあくまでもフランスのやり方です。カンボジアでは自分の独自の伝統、文化、習慣などあるので、当然自分のやり方があります。

チャンティ氏は同性愛者などのセクシュアルマイノリティに対して無理解であるというふうに答えた。その原因はどのようなものなのを聞いてみた。そしてチャンティ氏の回答は以下の通りである。

やはり同性愛者は子どもも産めないし、カンボジア人にとって家族の名誉を破壊することになり、周囲の人と異なるので、恥をかくことになってしまうということですね。私はこちらに住んでからでもカンボジアの文化、伝統をきちんと守っています。

フランスは今同性婚を認めるようになりました。子どもの問題、要するに養子はどうしたらいいのか議論になっているし。でもそれはあくまでもフランスのやり方です。私は同性愛者に対して、偏見を持っていますが、こちらに住んでから、海外は海外のルールや法律があるから、当然従わないといけません。それは受け止めますが、やはり自分としてまだそういう同性愛に対して理解できません。

カンボジアに住んでいた時は同性愛などのセクシュアルマイノリティに対するチャンティ氏のイメージはどのようなものなのかを確かめた。その回答は次である。

私は周りにはそういった同性愛者を見たことがありません。でも子どもの時、ちょっと女性っぽい男性クラスメートがいて、あまり好きではなかったです。周りの人もその子が好きではなかったです。やはり男性は男性らしく、女性は女性らしくするのは当たり前です。

カンボジアに住んでいた時のチャンティ氏はセクシュアルマイノリティ当事者に対してあまり寛容ではなかった。異性愛主義と男女二元論が染まったカンボジアの環境に住んでいたのも、当然ながらその意識が内面化されていく。しかし、比較的自由に平等なフランスに住み始めてからはどうであったのか。彼女の意識の変化はあったのかを確かめた。筆者は、フランスは自由な社会なので、社会にセクシュアルマイノリティとして位置づけられている人々はいくまでも自分のライフスタイルであると述べた。筆者の言ったことに対して、チャンティ氏の解釈は以下の通りである。

それに対して私は否定しません。確かに皆平等で、個人個人を互いに尊重します。例えば、同性愛でも、どんな国籍の人でも、皆平等です。しかし同性愛の場合はやはり難しい問題ですね。

あくまでもフランスの法律ですから、認めるでしょうが、やはり違う国にいくとまた別の問題になります。カンボジアでは確かに同性愛に対して偏見を思っている人が多い

ですが、それはまだいい状況です。例えば、厳しい国だったら、処罰を与えることもありえるし、極端な場合は死刑になることまでも。やはり国によって様々なルールがあります。

私はフランスにいるからこそ、当然この国の法律を守ります。でも全てにおいて賛成するわけではありません。同性愛に対して、確かにフランスは認めているのですが、私もそれを尊重します。しかし個人としてはやはり自分の子どもになって欲しくないし、あまり賛成できないです。

3.2.1.2.2 社会に異常とみなされたグループ

事例 23 モナ氏（リヨン在住、50代、PACS）

筆者の高校生時代の先生は、現在フランスに住んでいるモナ氏を紹介してくれた。モナ氏は民事連帯契約法（通称 PACS）を通して、現在同性のパートナーと一緒に共同生活を営んでいる。上述のように、フランスでは異性愛者や同性愛者を問わず PACS で法的婚姻関係になるカップルと同等の権利を認められ、法律上は平等かつ自由が保障されている。そのことによってモナ氏はフランスの社会に移住してから、家族、知人、友達の周囲の人々にカミングアウトした。しかし、カンボジアにいた当時はセクシュアルマイノリティに対する認知度が低く、誤った知識や偏見によるいじめ、差別をされる場合が多かったので、モナ氏はあえてカミングアウトせず、つらい日々を送った。その体験の話は以下の通りである。

自分のことに対して、ゲイとか同性愛だと思っていません。あくまでも私の指向性なので、可笑しいことではないはずです。しかし、フランスに住んでから、思い切って言えるようになりました。カンボジアにいた時は、毎日隠しながら、生活していました。当時のことを思い出たら、とても悲しい気持ちになりますね。

…中略…私はカンボジアでは差別や偏見をかなり受けました。カミングアウトしなくても、やはり女性っぽいので、常にバカされていました。カンボジアでは多分生活できなかったでしょう。フランスのようになればいいでしょうが、現実はとても厳しいです。

こちらでは、同性愛者ではなく、人々が平等に扱われて、きちんと保障されています。フランスではセクシュアルマイノリティが社会的に保障されているというよりか、むしろそのことは特別な事情ではなく、国民全員がちゃんと保障される社会です。カンボジ

アもフランスのように、セクシュアルマイノリティに対して保障のある社会になって欲しいです。また少しでも、セクシュアルマイノリティに対して理解して、皆と同じように平等に扱ってほしいです。

モナ氏は自己アイデンティティに対してどのように受け止めているのかは次の通り述べている。

兄弟姉妹は8人もいたものですから、もし私だけが男性ならば、多分今のようにいられないし、きっと女性と結婚させられて、跡を継ぐことになると思います。跡継ぎと結婚がとても重要だと思っている人が多いです。特に男性の場合、それは義務です。したがって、当事者は大変ですよ。

事例 24 イサ氏 （リヨン在住、30代、PACS）

イサ氏は、カンボジアにいた時の厳しい状況などに加え、フランスで体験したことを比較しながら、次のように述べた。

それは自然なことだと思いますよ。だって私は悪いことをしていませんし、恋愛は自由ですね。10代に入ってから、意識し始めましたね。でもやはりカンボジアにいた時に言えなくて、かなり怖かったです。知られたら、きっと批判されるでしょう。

こちらで暮らし始めてから、人の目が気にならなくなりました。全体的にそうではありませんが、パリ、リヨンと言った大都市ではセクシュアルマイノリティに対して寛容的ですが、地方などへ行ったら、まだ保守的なところが見受けられます。しかしながら、それでも、アジアの国などと、例えば祖国（カンボジア）などと比べたら、かなりいい状況です。

…中略…勿論フランスでもそういうセクシュアルマイノリティに反対する人がいると思いますが、それは個人の自由です。あくまでもこの人の意識や意見に他なりません。マイノリティでもマジョリティでも罪を犯したら、当然法律によって処分されるでしょう。罪などを犯さなければ、問題がありません。簡単に言うと自分のことは自分で管理する、他人のことは他人のことですね。

カンボジアでは今は大分よくなっているでしょうが、例えばゲイだと知られたら、学

校も職場も反発を招き、悪口を言われたり、場合により不利益になるという可能性もあるのではないのでしょうか。

イサ氏もモナ氏と同じように、PACS を利用し、現在同性のパートナーと一緒に生活を送っている。カンボジアにいた時、イサ氏自身は自分のアイデンティティに対して混乱が生じ、誰にもその本来の姿を打ち明けることができなかったが、フランスに来てから、その恐怖の意識から解放されたことによって、とうとう家族に自らカミングアウトした。イサ氏はカミングアウトのことについて次の通り述べた。

勿論皆に知られていますよ。せめて家族には分かって欲しいですね。そういう思いがあったからこそ、思い切って家族に言いました。当時はかなり不安でしたが、カミングアウトしたからといって、特に問題は起こりませんでした。不思議だと思いながら、皆の心境をしばらく観察しました。両親は最初口を聞いてくれませんでした。やはり時間が経ったら、自然に親子の関係に戻りました。

イサ氏は自分のアイデンティティに対してどのように受け止めているかを、以下の通り述べた。

差別や偏見を持つ人がいないわけではないですが、皆やはり互いに尊重しています。あえて挙げると、初対面の人と話す時、必ず「ゲイですか」と聞かれますね。分かりませんが、やはり性格は女性っぽいということが原因だと思います。私の服装は派手目なので、当然自らがわざわざカミングアウトしなくても、自然に知られるのでしょう。

…中略…よく考えてみたら、私たちは性別以外にも自分で自分を表現できることがたくさんあるし、それに拘らなくてもいいでしょう。

事例 25 サウン氏 （リヨン在住、30 代、PACS）

サウン氏はカンボジアにいた時はカミングアウトしなかったが、フランスに移住してから、フランス内にいる友人、知人あるいは周囲の人々にカミングアウトした。サウン氏のカミングアウトの話は以下となる。

まあ、家庭の事もあったし、やはりありのままの自分でいたくて、来たわけですよ。

…中略…もう一つの理由は、ゲイである私はやはり自分のありままでいたいんです。祖国（カンボジア）にいた時、人の目が非常に気になり、本当になんでもかんでも常に注意を払いました。しかしながら、こちらに住むようになってから、人の目が気にならなくなりました。こちらでは自分のことは自分さえきちんとすれば、それでいいのです。祖国では、ある意味で自分の本来の姿を隠すという選択肢を選ばなければならなかったです。

…中略…ゲイである私にとってカミングアウトは大きなテーマですね。フランスに 10 年以上住んでいるから言えますが、当然ながらフランスのゲイ社会を知るべきだと思います。故郷にいた時はここまで（カミングアウト）出来なかったですよ。

サウン氏はフランス内で完全にカミングアウトしたが、カンボジアにいる家族や周囲の人々にカミングアウトしたかどうかを聞いてみた。その回答は次の通りである。

それはまだしていませんね。両親は結構昔のしきたり、伝統などをきちんと守っていますので、やはり毎回いつも電話してくれる時に、いつ結婚するの？いつも聞かれています。そろそろ結婚していてもいい年齢になっているし、お母さんは、毎回早く孫の顔を見たいと常に言われています。ですから、そのまんま結構長い間カンボジアを離れてしまったわけです。帰っても、やはり居場所がないので、異国でたまに寂しい思いもしますが、仕方がありません。

両親はきっと許してくれないでしょうが、兄弟には言いました。若い人なら、まだ話しやすいです。兄弟にカミングアウトしたのも、フランスに来てからでした。自分がゲイであることが、以前はかなりコンプレックスにもなった頃もありましたが、その経験から自分を受け止めることができるようになってから、カミングアウトしました。自分のアイデンティティだし、別に異常だと思っていないし、単なる個性です。人と違うと

考えたら、やはり消極的なマイナス思考なので、素直な自分であることに誇りを持つと
いうができればいいと思うし、まずやはり自分を受け止めることが大切です。

カンボジアにいた頃の自分と、今の自分を比較したら、その意識や考え方がかなり変
わってきました。故郷にいたら、そこまで考えないし、単になぜ自分が周りの人と違う
のかというコンプレックスだけ持ち続けていたに過ぎないでしょう。

事例 26 ボリ氏（パリ在住、50 代、離婚）

フランスの人権宣言には人間は生まれながら自由かつ平等であるというふうに書かれて
いる。よって、移民でも、現地の人でも、セクシュアルマイノリティ当事者でも、誰であ
れ自由かつ平等な権利を持つ。実際、フランスに住んでいるセクシュアルマイノリティ当
事者であるボリ氏に、彼の視点からフランス社会でカミングアウトするという行為はどの
ようなことであろうかということ聞いた。彼の回答は以下の通りである

フランスはカミングアウトしやすい環境かもしれませんが。すべてにおいて皆カミング
アウトするわけではありません。するとしても、しないとしても、個人の自由ですね。
するとしても、「あっそうですか」という反応しか返ってこないのが現実です。それは無
視することじゃなくて、例えば「この人はゲイです」と知ったとしても、別に周
囲は驚かないし、反対もしない、応援もしない、それは個人の自由です。

…中略…こちら（フランス）では、例えば知られたとしても、嫌われることや白い目
で見られることは少ないですね。全員がおおらかに受け入れてくれるわけではありません
が、皆やはりフランスに慣れて来たし、ここはカンボジアではないし、自分が居る環
境のことを守るし、皆が何をするかを見ます。なので自分の行動パターンもあわせると
いうことですかね。お年寄りの方を説得するのは、時間が掛かるかもしれませんが、若
者ならば皆自由ですね、構わないし、やはり個人主義ですね。

カンボジアに長く住んでいた経験のあるボリ氏に、カンボジアの社会でカミングアウト
するということについて聞いた。その回答は以下の通りである。

親友、2、3 人にしか言いませんでした。言ったら、どうなるのか心配です。やはり言
いにくい環境ですね。言ったら、死刑とか処罰にはなりませんが、周囲の目や批判など

に耐えられないと思いますね。やはりカンボジアはまだまだ言えない環境ですね。

事例 27 ソパック氏（リヨン在住、30 代、独身）

ソパック氏はカンボジアで生まれたが、子どもの時からフランスに住んでおり、当然ながら、フランスのその環境の影響によって考え方や意識が内面化された。カンボジアに長く住んだことがないが、時々カンボジアを訪れる機会があって、カンボジア内で実際に体験していることを話してくれた。その内容は以下となる。

私は長く住んだことはありませんが、カンボジアには何回か行ったことがあります。そこまでは厳しくなかったのですが、やはり変な目で見られたのは確かです。一回彼氏と行ったことがあって、恋人同士でしたから、当然親しい間柄ですから、手を繋いで歩きます。そうすると変な目で見られました。どうしてかなと思いました。やはり向こう（カンボジア）はフランスと違って、まだまだそういったことに対して偏見をもっている人が多いです。

カンボジアにもゲイの友達がたくさんいますが、皆やはり隠しながら生活していく人が殆どですね。もっと解放したら、いいのにと考えていますが。

…中略…私はこういうふうに毎日過ごすことができるというのは、自然じゃなくて、やはり家族が認めてくれたことや、社会の違いが影響しているのかもしれませんが。

事例 28 アヤ氏（リヨン在住、20 代、独身）

カンボジアに生まれ、フランスに留学しているアヤ氏にカンミングアウトについて聞いた。カンボジアにいた時とフランスにいる今とどのように意識の変化があるのかを尋ねてみた。その回答は以下である。

まだ言っていない。こちらでは多分皆に知られていると思いますが、あえて自分から言わないようにしています。別に聞かれないし、それで構いません。

カンボジアにいる家族と友達にはまだ言いません。とても怖いです。知られたら、どういうふうになるのか、考えるだけでぞっとします。親には多少疑われているかもしれませんが、まだまだ理解段階ではないと思います」。

…中略…私は女性なのに、女性が恋愛対象となっているので、周りにいる人に理解さ

れず、つらい思いをしてきました。しかしフランスに来てから、私は一人ではありません、同じ人がいると気がついて、とても救われました。そう考えてみたら、自由社会から離れたくないですね。

カンボジアにいた時、毎日隠しながら、生活していましたので、随分苦しみました。本当に周りの人の目が気になり、自分のことを忘れてしまいました。

アヤ氏はカンボジアにいた時はもちろん、今でもカンボジアに住んでいる人の誰にもカミングアウトしていない。それはカンボジアではセクシュアルマイノリティに対して自然に反する性的行為をする人、子どもが産めないことや跡継ができない人という考えを持ち、よって異常あるいは家族の恥だと見なされているからである。従って、殆どの場合、セクシュアルマイノリティ当事者の多くは非当事者に差別と好奇の目にさらされ、誰にも相談ができず独りで悩んでおり、本来のアイデンティティを隠しながら、生活している。まだカミングアウトしていない時点で、アヤ氏はカンボジアでどのような差別があったのかを聞いてみた。その回答は以下である

それは人によるかもしれませんが、同性愛者ならば、隠す人が多いと思いますよ。知られたら、どんなふうに馬鹿にされるか分かりませんし、本当に嫌がらせや差別を受けることもあります。

…中略…そこまで大した話ではありませんが、やはり私は女性が好きなので、たまに綺麗な女性の友達を見たり、場合によってちょっとだけ髪とか手に触ったりしました。その時、ある友達に「気持ち悪いわ」と言われたことがありまして、その人は私が同性愛者であることを知りませんが、その場で「同性愛者みたいに触らないでよ」と言われて、ちょっとがっかりしました。

まだカミングアウトしていないにもかかわらず、とても強く拒絶されたので、正直ショックでした。

…中略…自分の母親の一言でとても落ち込みました。最近、あのカンボジアの映画ですね、英語だったら、Who Am I?という女性の同性愛者の映画があります。たまたま放送された日に母親と一緒に観ました。キスのシーンに、母親に一言に言われて、未だに心の中に覚えています。母親に「とても変な映画だ。あなたがそういうふうになったら、二度と私の前に現れるな」と言われました。カミングアウトしようと思ったのに、結

局する前に否定されました。

…中略…まだ誰にも言っていない。カンボジアにいる人には全然言いませんよ。こちら（フランス）ではほとんど知られていますね。

フランスに住んでから、アヤ氏は本来の自分の姿を周囲に対して、少しずつ打ち明けることができるようになった。それは意識の変化があったからである。その意識の変化の理由として、環境や社会の影響があげられる。セクシュアルマイノリティでも暮らしやすい社会はやはり寛容な社会だろう。少なくともカンボジアと比較してみれば、フランスはよりカミングアウトしやすい環境であり、当事者にとって自分の居場所を確立できる国である。アヤ氏にフランスに来てから、意識の変化があったのかを聞いた。その回答は以下である。

そうかもしれません。フランスはとても自由な社会です。勿論その中には色々な人がいますが、少なくとも私のような人にとっては住みやすいでしょう。本当にカンボジアには帰りたくないです。もしフランスのようになれば、住みたいとも考えますが、やはり今だと、住みたくないですね。

事例 29 ダラ氏（リヨン在住、30 代、PACS）

カンボジアにおいて、セクシュアルマイノリティに対する偏見や誤った知識によって生まれた差別やいじめなどがあるため、多くの当事者は様々な問題に直面し、生きづらさを感じる。その体験について、ダラ氏に聞いてみた。その回答は以下の通りである。

私は親（カンボジアにいる）に勘当されました。ですから、戻る場所がありません。

…中略…私は男性として生まれてきたのですが、でも自分の心の中は女性だと思っており、どうしても男ではいられなくて、ずっと女性になりたいと思っています。それでフランス留学中に一回短期帰国して、その時彼氏も一緒に来てくれたし、そのまま両親にカミングアウトしました。しかしあまりにもショックを受けた両親にとっても怒られて、その怒りで私が勘当されました。

…中略…やはり息子は一人しかいないということは分かっていますが、私も幸せになりたいので、なぜ考えてくれないのかと今でもつらい思いをしています。

母親にはもっと男性らしくしなさい、とよく言われました。父親には一回だけ暴力を振るわれたことがあります。私が女装した時にバレて、家に帰ったら、大問題になりました。一人っ子なので、当然ながら厳しく躰をされました。

フランスに住んでから、ダラ氏の生活や意識などどのような変化があったのかを聞いてみた。その回答は以下の通りである。

最初は知られていなくて、徐々にバレていき、知られることになりました。勿論応援してくれる人もいるし、逆にそうでない人もいます。しかしカンボジアにいた時より、こちらに来てからのの方がとてもいい状況です。あまり人の目を気にする必要がないし、本当に暮らしやすい環境です。

…中略…フランスは皆他人のことを気にしない社会ですが、そういうふうに言ったら、けっして他人がどうでもいいという話ではなくて、やはり自由な社会ですから、まだいい状況ですよ。厳しい国ならば、やはり難しいです。カンボジアでは今どうなっているのか分かりませんが、私のような人がたくさんいても、社会に無視される傾向がありますし、極端な場合は家族に勘当されるし、本当に大変です。

事例 30 ナリット氏（リヨン在住、50 代、PACS）

ナリット氏はフランスに住んでから、家族にカミングアウトして、現在同性のパートナーと一緒に住んでいる。そのことに関して、ナリット氏の家族や親戚にはどういうふうに受け止めているのかを聞いた。その回答は以下のとおりである。

皆は知っていますよ。最初は理解してもらえるかどうか、本当に怖かったです。でも勇気を出してカミングアウトしたら、特に問題はありませんでした。最初、親にはしっかり考えたのかを聞かれました。兄弟には『多分それは一時の迷い』と言われました。

カンボジアの社会では学校・職場生活、メディア、そして周囲の人々、家族でさえセクシュアルマイノリティに対する差別や偏見がある。そのことによって、当事者にとって非常にカミングアウトしづらい環境である。ナリット氏はカンボジアに住んでいた経験があり、当時家族にカミングアウトしたかを尋ねた。その回答は以下の通りである。

私もカンボジアにいたとき、どうやって両親や親せきなどを説得したらいいのか分からなくて、隠しながら毎日過ごしていました。でもこちら（フランス）に来てから、やはり自由社会だし、周りの方々にも同性愛者がいるし、それで両親に言いました。カンボジアにいた時は多分言えなかったです。

カンボジアの事情はフランスと随分異なっている。そうした環境の変化が本人の意識や考え方にどのように影響したのかを聞いてみた。カミングアウトやその周囲の受け止め方でも、どのようなものなのか、ナラット氏は次のように述べた。

後は自分の考え方が変わっていったことに他なりません。結局自分次第ですね。勿論家庭環境だったり、社会の影響もあると思います。

3.3.1.2.3 考察の試み

3.3.1.2.3.1 社会に正常とされる人の回答の考察

被対象者たちの回答を見れば、フランス内に在住するカンボジア人においても社会を構成している法律、制度（規範）が変わると、日常的な意識が変化していくことが判明した。もちろん、人によって個人差は存在しており、特にセクシュアルマイノリティに対する意見は異なったものになっている。ここで簡潔に結論を述べると、フランスに在住しているカンボジア人はセクシュアルマイノリティの存在を理解したり、受け入れたりする段階において、差別意識や偏見といったネガティブなイメージや印象など持つことは少ないというふうに見受けられる。それは彼らがフランスに移住してから、その意識の中へフランスの思想や制度が浸透していったからだと考えられる。

3.2.1.2.3.2 社会に異常とされる人の回答の考察

社会に異常とされる人の回答においても、同様の結果がえられた。その内容を詳しく見て行くことにしよう。まず、社会によって強制的にセクシュアルマイノリティとして位置づけられたことに対して、当事者はどのように受け止めるか、つまり彼らの自己アイデンティティの獲得によって、家族あるいは周囲の人々にカミングアウトに至り、またカミングアウトによって人々及び社会の受け止め方を考察していきたい。

自己アイデンティティの獲得

被対象者たちの回答を見れば、自己アイデンティティに対してそれぞれの受け止め方やその認識が異なっているのが分かる。また彼らの生物学的性、性自認、性別指向性はあらゆる組み合わせが可能である。当事者たちは自分のアイデンティティに対して病気また異常などと思っていないとしても、やはり社会により強制的にセクシュアルマイノリティに位置づけられる。例え、フランスのような寛容な社会でも、当事者はまだセクシュアルマイノリティのカテゴリーに属しており、社会的期待から外れる望ましくない性質を持つものというふうになされている。しかし、多くの被対象者の回答では、社会により強制的にセクシュアルマイノリティに位置づけられても、自分の姿を素直に、肯定的に、自信を持って受け止めることを選択する人が多い。それは、やはりセクシュアルマイノリティそのものの存在が社会的に認知され、認められることによって、社会全体に寛容さがあると思われるからである。よって、セクシュアルマイノリティ当事者にとって、自己アイデン

ティティをカミングアウトしやすい環境ということが可能であろう。次に当事者のカミングアウトがどのようなものなのかを次の項目で考慮していく。

カミングアウト

実際、セクシュアルマイノリティ当事者の数は各国においてその人口に対して僅かな程度と言われている。しかし、その国が寛容な社会であるかどうかによって、セクシュアルマイノリティ当事者であることをカミングアウトできないケースも数多く存在している。実際セクシュアルマイノリティは苛烈な差別、偏見、暴力を受けるケースが多いという。そうすると、多くのセクシュアルマイノリティ当事者たちは家族、親戚、友達、同僚などの周囲の人に本来の自己アイデンティティを隠しながら、異性愛主義と男女二元論という立場にたつふりをしている場面が多い。当事者たちは隠したくて隠しているわけではなく、隠さざるを得ない状況に置かれているからである。よって、当事者たちは自己アイデンティティをどのように受容し、どのように周囲の人に対してカミングアウトするのかは、当事者だけの問題のみならず、社会と周囲の人々との関係の問題でもある。

フランス国内で生活しているセクシュアルマイノリティ当事者の多くはカミングアウトしている。しかし、当事者がカミングアウトをした時点で、差別や偏見が全く生じないわけでもない。人々の意見やその考え方はそれぞれであるが、少なくとも多くのフランス人は、人生は楽しむためにあるべきものだと考え、その価値観はもっとも重要だと評価されている。その価値観が誕生したのは五月革命以来とされ、その結果として人間が生まれつき同じ権利を持ち、自由と平等な立場が保障されることによって、フランスは移民の大国でありながら、世界の人種が共存し、個人の恋愛に対して非常に開かれた社会である。よって、人に迷惑さえかけなければ、それで問題がなく、ある意味で無関心かもしれない。

実際、ここでの被対象者たちの回答を見れば、長い間フランスにいる当事者ほど自ら自己アイデンティティあるいは本来の姿を周囲の人々にカミングアウトした人が多いと分かった。勿論、カミングアウトに至るまで、それぞれの事情で、自分の性の悩み、性に対して様々な問題が数多くあったわけであるが、結果的にカミングアウトという手段を使い、自分のアイデンティティを解放するのである。

しかし、フランスに来て、まだ時間が経たない被対象者たちの回答を見れば、カンボジアのイデオロギーやその価値観が内面化し、浸透している。よって本来の自己アイデンティティを拒否し、隠しながら生活を営む人が多い。カンボジアの法律はセクシュアルマイ

ノリティに対して、刑事処罰や懲戒処分などを課するものではない。しかし、多くの人々はセクシュアルマイノリティに対してその存在を否定し、あえて存在しないと思ったり、あるいは誤った知識やステレオタイプで仮借したりすることによって差別意識や偏見が生まれたわけである。そのため、その呪縛から簡単には逃れられず、例え寛容な社会にいても、まだ間もない場合は、カミングアウトしていないのである。

次にセクシュアルマイノリティに対する人々及び社会の受け止め方について検討していく。

セクシュアルマイノリティに対する人々及び社会の受け止め方

一概には断言できないかもしれないが、フランスはセクシュアルマイノリティの権利が認められ、比較的寛容な社会と言える。勿論セクシュアルマイノリティの権利が認められる現在に至るまで紆余曲折があり、例えばキリスト教の影響から同性愛を罪とみなし、また医学、科学の権力の拡大に伴って同性愛が治療すべき異常者、社会の逸脱者というカテゴリーを負わされていた歴史が存在した。しかし、徐々に幸福追求権や個人の自由選択権を広げ、結果として1999年にPACS（民事連帯契約）が誕生し、性を問わず共同生活を営むカップル、または婚姻していないカップルの権利が法的に認められた。言うまでもなく、それはセクシュアルマイノリティの権利の獲得の第一歩につながった。

また2013年5月に、フランスにおいて同性婚のみならず、同性カップルの養子縁組の権利も認められ、合法化された。勿論、同性婚に対する反対派はいたが、賛成派は平等な社会であるフランスにおいて恋愛と結婚を自由に選択する権利を認めるべきであると主張した。政府も一般の市民も賛成多数で同性婚を認め、同性婚の法律が実現できた。そういった理由から、フランスはセクシュアルマイノリティに対して寛容であり、非常に進んでいる社会ということが可能であろう。この寛容さによってセクシュアルマイノリティ当事者は自らカミングアウトし、自由に生活を送っている。被対象者の回答を見ると、周囲の人々にカミングアウトし、またパートナーと共に住んでいる人はPACSを利用している。

被対象者たちの回答を見れば、セクシュアルマイノリティが法律によって権利を与えられたフランスに住んでから、周囲の人に対してカミングアウトし、自己意識が変わっていく人々が殆どであることが分かった。伝統（秩序）に染まったカンボジアにいた時は、セクシュアルマイノリティに対してかなり閉鎖的であった。セクシュアルマイノリティは自由に生活することが出来ず、特に周囲の目が気になる人が多かった。従って、今回の被対

象者たちの回答を見れば、彼らの性に関する生きた認識は社会によって変わり、つまり異常と正常に分けられた性は自然的、生物学的、先天的なものではなく、実は社会的、役割割的、文化的な要素によって構成されるという主張を裏付ける結果となった。

終章 総括的考察—普遍的な主体概念としての性の再考察

本稿では、性の言説における4つ（生物学的性、性自認、性的志向性、ジェンダー）の側面を記述した。その4つの諸側面における定義をどのように近代社会が発明し、構築してきたかということを批判的に検討した。一般的な生物学的性では人間を構成するのは性染色体であり、それにはX染色体とY染色体の2種類があり、女性／男性の性別はこの染色体の組み合わせによって決定される。また、出生時に内外性器の差異によって、女性／男性にいずれかの性が一元的に付与される。こうして、自然的、先天的に女性／男性の区別がなされるのである。私たちは社会において、当たり前のように自分が女性／男性であることを認識する。また、その属性は社会生活においてもあらゆる場面に関わっており、男性は男性らしく振る舞い、女性は女性らしく行動することが求められる。日常生活の中で私たちは、女性もしくは男性のどちらかを選択しなければならない。それがいわゆる社会的な約束として一人ひとりに強いられる。社会的、科学的、医学的な立場は、女性／男性といったカテゴリーが唯一正常であると見なしている。しかし、正常から周縁化された人たちの存在も無視することは出来ない。そういった人たちは、社会によってセクシュアルマイノリティという立場に置かれることを余儀なくされている。セクシュアルマイノリティの定義は各研究者の間で議論されているが、必ずしも正確なそれが得られていない。なぜなら、性とはきわめてあいまいなものだからである。例えば、性的指向が同性に向いている人は同性愛者、成長するにしたがって身体の性と性自認が一致しない人は性同一性障害者、また女性／男性の性別を区別できない人は性分化疾患と呼ばれているそういった人たちは周囲または社会から「普通でない」「おかしい」という圧力を受けることによって、セクシュアルマイノリティであることの苦悩や困難のため自己のアイデンティティが混乱し、不登校や社会からの離脱・迫害、極端な場合は自殺するケースもある。これらの問題は、ある人がセクシュアルマイノリティであることではなく、社会によって作り出された性別という概念に起因するのである。

かつて西洋社会のみならず、非西洋社会においても性の概念は非常にあいまいなものであり、かつ多様なものであった。しかし、近代国家が誕生して以降、性的行為は快楽を満たすということから国力増強のため、つまり労働力の確保を目的とし、生殖を主眼に置くものへと変化していった。近代国家の誕生後、性の概念は本質的なものとなり、そこでは性と権力の関係は不可欠な仕組みとなった。性と権力が結び付いたことで、(近代) 国家に

よって性が管理される対象となったのである。そこでは、男女二元論と異性愛主義が中心となり、そういったカテゴリーが唯一正常な性の在り方と化してしまった男女二元論と異性愛主義という性の構造が標準とされる近代社会では、そこから逸脱すると、社会の逸脱者＝異常者というレッテルを貼られ、さらに治療・研究の対象となる。未だにセクシュアルマイノリティは弱者かつ異常者として位置づけられ、またそのような社会的扱いを受けることから差別や偏見などを受けている。これらの事柄を背景に、本研究は正常と異常に分けられた性という概念を批判的な視点から考察した。

性のありようや解釈は国によって異なるが、本研究では一般的に規範とされる性の構造が象徴的に表れている社会の例として、カンボジアを取り上げ、その性の解釈やあり方を検討した。現在のカンボジアでは、女性は女性らしく、男性は男性らしく、常に社会的行動様式に合わせて生活しないと人として評価されない。そのため正しい性の概念から外れたものは異常であり、反自然的・反本質的であるとみなされ、セクシュアルマイノリティに対する差別や偏見などが根付いている。しかし、近代以前のカンボジアの伝統、宗教などでは、セクシュアルマイノリティを抑圧するものではないことが分かる。従って、なぜカンボジアの人たちはセクシュアルマイノリティに対して差別や偏見を持っているのかという点が、本研究のベースとなる問いであった。

カンボジアの歴史において、かつて13世紀のクメール王朝の時代では同性愛者などのセクシュアルマイノリティ当事者が存在した¹¹¹。同性愛者が数多く存在し、毎日市中あらゆる場所でその姿が見られた¹¹²。市場などの公の場に同性愛者がいたことから、恐らく人々は強い偏見を持たず、寛容で開放的な社会が形成されていたと考えられる。さらに、当時は女性・男性の概念、その両性区分が非常にあいまいであり、性別に関係なくそれぞれの義務や役割を果たせば、問題にならなかった。よって性別による差別や偏見などがあったとしても、その当時のカンボジアは比較的寛容な社会であったといえるだろう。

近代のカンボジア社会はフランスに植民地化されたことから始まり、同国を始めとした西洋の文化、思想、制度などに影響を受けた。植民地状態から独立した後も、その影響が根付いており、それが社会、政治、経済、文化など多岐に渡る分野に残っている。こうした状況はポストコロニアルな状態ということが可能であろう¹¹³。その状態を説明する一つ

¹¹¹ 周達観（1989）和田久徳訳『真臘風土記—アンコール期のカンボジア（東洋文庫）』、平凡社

¹¹² 同上

¹¹³ 橋本哲也（2005）『ポストコロニアリズム』、岩波書店

の例として、性が挙げられる。コロニアリズムは、両性区分の明確化を通して性に対する様々な制度をもたらした。それによって、従来は性に対して寛容であったカンボジアにおいても、性について異性愛主義と男女二元論が自然＝唯一正しいものだと見なされるようになった。そして、それらの規範によって周縁化されたセクシュアルマイノリティは、反自然＝異常として捉えられている。そこからマジョリティ対マイノリティという二項対立の優劣関係が出来てしまい、様々な問題、差別、偏見などが生じている。

本論文では、性についての極めて優れた研究者であるミシェル・フーコーとジュディス・バトラーの理論を援用しながら、議論を進めた。彼らは正常と異常に分けられた性は自然的、本質的なものではなく、実は社会的、歴史的、文化的な要素によって構築されたものであることを提示した¹¹⁴。すなわち性についての規範は特定の時間的・空間的要素によって作られ、ここから時間と空間が変わることによって、人々の性に対する意識にも何らかの変化があるのではないかという点に著者は着目した。

フーコーとバトラーの理論がカンボジアの事象に適用可能かどうかを確かめるために、フィールド調査を行った。この調査では、被対象者たちの語り・物語（ナラティヴ）を聞き、それを再構成することによって、彼らの性に関する認識そのものを明らかにした。二元論的性概念がつくられたものであるからこそ、人々の性に関する認識も社会によって異なるということを確認した。

本研究では、時間と空間の差異によって性に対する意識が構築されていることを検証するために、本国に居住しているカンボジア人に加え、フランスに居住している同胞にも調査を依頼した。また調査の対象は、社会的に正常と見なされた女性／男性、社会的に異常と見なされた同性愛者、性同一性障害の人のナラティヴである。本稿では30人の対象者に協力をしてもらった。彼らのナラティヴを通して正常と異常、それぞれが社会によってどのように構築されるのかを考察した。また、研究方法としてナラティヴ論を用いることで個人の物語に着目した。そして被対象者たちのナラティヴの内容の中から、①フーコーとバトラーが主張したように正常と異常に分けられた性は自然的、本質的なものではなく、実は社会的、歴史的、文化的な要素によって構築されたものであること、②時間と空間の変化がカンボジア人の性に対する意識にどのように影響を与えるのかという点を慎重に探

¹¹⁴ フーコー・ミシェル (Foucault Michel) (1986) 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』、新潮社。
バトラー・ジュディス (Butler Judith) (1999) 竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。

った。調査の内容の考察は以下の通りである。

カンボジアのみならず、現代社会では異性愛主義と男女二元論とが主流になっており、両者が当たり前で常識であるとされている。逆にいえば、これらの常識あるいは規範から周縁化されている人たちは、社会によってセクシュアルマイノリティと位置づけられていることを意味する。そのため、非当事者はセクシュアルマイノリティとされる当事者に対して、自然に反する異常者、病人などのイメージを持っており、差別や偏見が生まれたわけである。カンボジアの現状においても、人々の間でセクシュアルマイノリティの認識はされているが、理解する段階までは至っていない。それは、非当事者がセクシュアルマイノリティの存在を否定するか、もしくは正確な知識を持たず、誤った知識で解釈していることが原因として挙げられる。

カンボジアに住んでいる対象者たちの調査回答を見ると、男女二元論と異性愛主義が中心となっているカンボジアの社会は、日常の中でセクシュアルマイノリティに対して否定的なイメージを持っていることが分かる。セクシュアルマイノリティへの不理解によって、誤解や偏見が生まれ、当事者はいじめられ、精神的に多大なダメージを受けるケースが少なくない。また、自分の性に対して疑問を投げかける際、「自分はなぜ周囲と違うのか」「自分は間違っ生まれてきたのではないか」というように否定的に受け止め、生き辛さを感じたり自虐的になってしまったりする。さらに、社会あるいは周囲にカミングアウトをしたとしても、相手に拒否され—人間関係が壊れてしまう可能性は十分にある。

一方、フランス内に在住する対象者たちの回答を考察すると、ほとんどの場合、フランスへの移住後にセクシュアルマイノリティに対する考え方や意識が変化したことが読み取れる。フランスではマイノリティという立場を優先するのではなく、誰であれ同じ権利を持つこと、平等と自由が社会によって保障されている。現代のフランス社会でも、当事者はセクシュアルマイノリティと位置づけられているが、PACS というパートナーシップ制度や同性婚の法律も有していることから、比較的寛容な社会になりつつあるといえるだろう。人によって異なる意見や価値観があることは確かだが、フランスではセクシュアルマイノリティに対する嫌悪感、差別意識、偏見などに起因する問題は減少している。少なくとも今回の対象者、特に社会的異常と見なされたセクシュアルマイノリティにとってフランスは住みやすい社会であるといえよう。

また、フランス国内に長い間滞在している当事者の回答では、セクシュアルマイノリティとしての自己アイデンティティを自覚し、それを自らも受け入れた後、周囲にカミング

アウトする傾向が見られた。カミングアウトのプロセスは個人によって異なるが、全てのケースにおいて周囲からの受容・理解を得られるわけではない。しかし、少なくともフランスでは、人々の間で人間の自由、平等、尊厳という価値観が内面化されているため、強い差別や偏見はないという。

他方、フランスに来てからまだ日が浅いセクシュアルマイノリティ当事者の回答を見ると、自己アイデンティティの混乱、またはそれを拒否している状態であり、カミングアウトしていない人が多い。それは異性愛主義と男女二元論が前提として語られることが一般的であったカンボジア社会の影響を依然として強く受けている点に原因がある。自分が生まれながら周囲の人々と異なることで、また社会の抑圧によって自己のアイデンティティを否定しており、リスクを冒してまで、あえてカミングアウトをしようとはしないのである。

本稿では、ミシェル・フーコーとジュディス・バトラーの理論を援用しながら、フィールド調査の全対象者の回答を分析した。端的に結論を述べると、社会が変われば、性に対する人々の意識も大きく変化していくということが明らかになった。性に対する人の意識が変わっていくのは、恐らく社会の制度や伝統（秩序）の影響といえるだろう。以上のことから、正常／異常に分けられた性は時代や環境に応じて社会的、役割的、文化的な要素によって構成され、つくられたものであると主張することが出来る。性は、自分の性であれ、他の人の性であれ、人間関係において重要な役割を果たしている。社会は性を構築することによって成り立っており、人々の考え方に大きな影響を与えるのである。

世界の多くの国では性を抑圧し、特にセクシュアルマイノリティの権利は未だ認められておらず、差別、偏見、迫害の対象となっている。他者に対して排他的なシステムであることによって、社会はうまく動いていくのかもしれない。しかし、果たしてそれで良いといえるのだろうか。多様な視点を肯定し、異なる者同士で対話が出来れば、現状がよりよくなるかもしれない。

セクシュアルマイノリティのみならず、どれほど性差による差別などをなくそうとしても現状では困難である。仮にマイノリティ／マジョリティの差異がなくなったとすれば、社会は混乱するだろうか。また、その場合社会がどのように変わるのか。それを考察することが、これからの課題である。

日本語文献

赤川学（1996）『性への自由／性からの自由；ポルノグラフィーの歴史社会学』、青土社

東浩紀（1998）『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて』、新潮社。

アルトマン・デニス・パトキン（Altman Dennis Patkin）、（2005）、『グローバル・セックス』、河口和也、風間孝、岡島克樹訳、岩波書店。

アルトマン・デニス・パトキン（Altman Dennis Patkin）（2010）岡島克樹・河口和也・風間孝訳『ゲイ・アイデンティティ：抑圧と解放』、岩波書店

石井達朗（1991）『異装のセクシャリティ』、新宿書房。

石丸径一郎（2008）『同性愛者における他者からの拒絶と受容—ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ—臨床心理学研究の最前線 1』、ミネルヴァ書房。

伊藤悟・虎井まさ衛（2002）「多様な『性』がわかる本—性同一性障害・ゲイ・レズビアン」、高文研。

ウィークス・ジェフリー（Weeks Jeffrey）、（1996）、『セクシュアリティ』、上野千鶴子監訳、赤川学解説、河出書房新社。

ヴィンセント・キース・風間孝・河口和也（1997）『ゲイ・スタディーズ』、青土社。

上野千鶴子・宮台真司・斎藤環・小谷真理（2006）『バックラッシュ！：なぜジェンダーフリーは叩かれたのか？』、双風社。

江原由美子（1998）『性・暴力・ネーション』、勁草書房。

落合恵美子（1989）『近代家族とフェミニズム』、勁草書房。

風間孝・河口和也（2010）、『同性愛と異性愛』、岩波新書。

加藤秀一（1998）『性現象論—差異とセクシュアリティの社会学』、勁草書房。

加藤秀一（2006）『知らないと恥ずかしい—ジェンダー入門』、朝日新聞社。

河口和也著（2003）『クイア・スタディーズ』、岩波書店。

川坂和義（2009）「セクシュアリティ診断家としてのミシェル・フーコーとセクシュアリティ研究の対抗言説」、『Gender and sexuality：journal of Center for Gender Studies, ICU』、国際基督教大学ジェンダー研究センター、ICU 04、39-60。

菊地夏野（2010）『ポストコロニアリズムとジェンダー』、青弓社。

木村涼子（2005）『ジェンダー・フリー・トラブル』、白澤社。

クライン・フリッツ（Klein Fritz）（1997）河野貴代美訳『バイセクシュアルという生き方』、現代書館。

- 小松 秀雄（2006）「言葉とジェンダーと権力：ブルデュー、フーコー、バトラーのジェンダー論の一考察」、『女性学評論』、神戸女学院大学女性学インスティテュート、20、115 - 137。
- 佐倉智美（2006）『性同一性障害の社会学』、現代書館。
- 桜井哲夫（1996）『知と権力（現代思想の冒険者たち）』、講談社。
- 桜井哲夫（2001）『知の教科書 フーコー』、講談社。
- 佐々木掌子（2006）「ジェンダー・アイデンティティと教育：性的自己形成における遺伝と環境（教育心理学、〈特集〉教育研究の現在-教育の統合的理解を目指して-）」、『哲学』、慶應義塾大学、115、305-336。
- 周達観（1989）和田久徳訳『真臘風土記—アンコール期のカンボジア（東洋文庫）』、平凡社。
- ジュリヴェ・ミュリエル（Jolivet Muriel）（2001）鳥取絹子訳『フランス 新・男と女—幸福探し、これからのかたち』、平凡社。
- スピヴァク・ガヤトリ（Spivak Gayatri）（2003）上村忠男、本橋哲也訳『ポストコロニアル理性批判—消え去りゆく現在の歴史のために』、月曜社。
- ド・ペルサン・ロランス（De Percin Laurence）（2004）斎藤笑美子訳『パックス—新しいパートナーシップの形』、緑風出版。
- 杉浦郁子・野宮亜紀・大江千束編著（2007）『パートナーシップ・生活と制度 [結婚、事実婚、同性婚]』、緑風出版。
- 杉田敦（1998）『権力の系譜学—フーコー以降の政治理論に向けて』、岩波書店。
- 杉田敦（2000）『権力』、岩波書店。
- 世界保健機関（1994）中根允文・岡崎祐士・藤原妙子訳『ICD-10 精神および行動の障害-DCR 研究用診断基準』、医学書院。
- 荘島幸子（2008）「『私は性同一性障害者である』という自己物語の再組織化過程—自らを『性同一性障害者』と語らなくなった A の事例の質的検討」、『パーソナリティ研究』、本パーソナリティ心理学会、16、256-278。
- 田崎英明（2000）『思考のフロンティア ジェンダー／セクスアリティ』、岩波書店。
- 土場学（2000）『ポスト・ジェンダーの社会理論』、青弓社。
- 中西正司・上野千鶴子（2003 年）『当事者主権』、岩波新書。
- 中山元（1996）『フーコー入門』、筑摩書房。

- 野宮亜紀・針間克己・大島俊之・原科孝雄・虎井まさ衛・内島豊（2003）『性同一性障害って何？ 一人一人の性のありようを大切にするために』、縁風出版。
- 橋本哲也（2005）『ポストコロニアリズム』、岩波書店。
- バトラー・ジュディス（Butler Judith）（1994）荻野美穂訳「セックス／ジェンダー／欲望の主体（『ジェンダー・トラブル』第1章）」、『思想』、岩波書店、12月号、1995年1月号に分載。
- バトラー・ジュディス（Butler Judith）（1999）竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、青土社。
- バトラー・ジュディス（Butler Judith）（2004）竹村和子訳『触発する言葉 言語・権力・行為体』、岩波書店。
- バトラー・ジュディス（Butler Judith）他（2009）竹村和子訳 他、『偶発性・ヘゲモニー・普遍性 新しい対抗政治への対話』、青土社。
- 針間克己（2003）『一人ひとりの性を大切に生きる～インターセックス、性同一性障害、同性愛、性暴力への視点』、少年写真新聞社。
- 檜垣立哉（2006）「身体の何が構築されるのか：バトラー的構築主義への一考察」、『現代思想』、10月臨時増刊号、108-115。
- 檜垣立哉（2006）『生と権力の哲学』、ちくま新書。
- フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（1986）渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』、新潮社。
- フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（2002）慎改康之訳『異常者たち：コレージュ・ド・フランス講義 1974-1975 年度』、筑摩書房。
- フーコー・ミシェル（Foucault Michel）（2008）慎改康之訳、『生政治の誕生（コレージュ・ド・フランス講義 1978-79）』、筑摩書房。
- ベアード・ヴァネッサ（Baird Vanessa）（2004）町口哲生訳『フ性的マイノリティの基礎知識』、作品社。
- 松尾由希子（2013）「学校教育と社会における性的マイノリティに関する言説研究：1990年以降の教育メディアと新聞記事の記述分析」、『静岡大学教育研究』、静岡大学教育研究、9、17-38。
- マネー・ジョン（Money John）・タッカー・パトリシア（Tucker Patricia）（1969）朝山新一訳『性の著名：問い直される男と女の意味』、人文書院。

宮淑子（2010）『セクシュアリティ・スタディーズ』、新水社。

ミレット・ケイト（Millett Kate）（1985）藤枝濤子・横山貞子・加地永都子・滝沢海南子
訳、『性の政治学』、ドメス出版。

山内俊雄（2000）『性の境界-からだの性とこころの性』、岩波書店。

山内俊雄編著（2004）『改定版 性同一性障害の基礎と臨床』、新興医学出版社。

山田昌弘（1994）『近代家族のゆくえ；家族と愛情のパラドックス』、新曜社。

山本哲士（1991）『フーコー権力論入門』、日本エディタースクール出版部。

吉村育子（2004）『フーコーとクイア理論 タムシン・スパーゴ』、岩波書店。

ロニー・アレキサンダー・池田久美子・おかべよしひろ・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌
二・土肥いつき・宮崎留美子・2003）『セクシュアルマイノリティ同性愛、性同一性
障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』、明石書。

英語文献

Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2010). *Coming Out of the Kingdom: Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender people in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.

Cambodian Center for Human Rights (CCHR). (2012). *Rainbow Khmer: From Prejudice to Pride*. Phnom Penh, Cambodia. LGBT Rights Project.

Gilmore, David D. (1990). *Manhood in the Making. Culthral Concepts of Masculinity*. Yale University Press.

Houston, Barbara. (1987). *Rescuing Womanly Virtues: Some Dangers of Moral Reclamation*. In Hanen Marsha and Nielsen Kai, eds., *Science, Morality and Feminist Theory*. Calgary, Alberta: The University of Calgary Press, pp. 237-262.

Houston, Barbara. (1994). *Should Public Education Be Gender Free?* In L. Stone, ed., *The Education Feminism Reader*, New York: Routledge, pp. 122-134.

Jaggar, Alison. (1990). *Sexual Difference and Sexual Equality*. In Deborah Rhode, ed., *Theoretical Perspectives on Sexual Difference*. Yale University Press, pp. 239-254.

Lorber, Judith. (2000). *Using Gender to Undo Gender: A Feminist Degendering Movement*. *Feminist Theory*, 1/1, pp. 79-95.

Money, John. (1965). *Sex research; New developments*. New York: Holt, Rinehart and Winston

- Olson, Laura R., Wendy Cadge and James T. Harrison. (2006). Religion and Public Opinion about Same-Sex Marriage, *Social Science Quarterly*, 87(2): 340-360.
- Reproductive Health Association of Cambodia and International Planned Parenthood Federation. (2010). *Report Card on HIV Prevention among MSM and Transgender people in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia. RHAC-IPPF.
- Rainbow Community Kampuchea (RoCK) (Producer and Director). (2013). *Cambodian Lesbian Documentary "Daughter and Marriage"*. Cambodia: Rainbow Community Kampuchea.
- Salas, Vicente. (2010). *Needs and Concerns of MSM in Cambodia, NGO/CBO Profiles and Recommendations for the Strategic Development of the National MSM Network (Bandanh Chatomuk)*. Report of A Consultancy. Phnom Penh, Cambodia: HIV/AIDS.
- Salas, Vicente. Srun, Sorn. (2012). *An Exploration of Social Exclusion of Lesbians, Gay and Transgender persons in families and communities in some areas of Cambodia and their ways of coping*. Phnom Penh, Cambodia. Social Protection Coordination Unit Cambodian Social Protection Research Fund.
- Tan, Phong. (2008). *Ethnography of Male-to-Male Sexuality in Cambodia*. Phnom Penh, Cambodia: HIV/AIDS Prevention Programme, UNESCO Phnom Penh.

クメール語文献

- Chuon Nat (1917) 『クメール語辞典』、仏教研究所。
- Zhou Da Guan (周達觀) (1973) Ly Theam Teng 訳 『汪大淵の日記 真臘風土記について』、プノンペン出版。
- カンボジア王国国民議会 (1993) 『カンボジア王国憲法』、カンボジア王国国民議会。

URL

- グダーズ・エグテダーリ (1997) 「イラン・イスラーム共和国と姦通・同性愛に関する死刑の執行」、『イラン調査研究センターでの報告』、イラン調査研究センター
http://www.kt.rim.or.jp/~pinktri/shayda/adultery_sodomy.html 2013/9/01 参照
- 朝日新聞、「同性愛者に愛し合う権利を」ベトナムでパレード、2013年8月4日、
<http://www.asahi.com/international/update/0804/TKY201308040190.html>
 2013/9/01 参照

Alex Spillius, "I'm not gay, says 81 year old monarch with 14 children," *Daily Telegraph*, 25 February 2004, <http://www.telegraph.co.uk/news/worldnews/asia/cambodia/1455293/Im-not-gay-says-81-year-old-monarch-with-14-children.html> 2013/9/10 参照

BBC News, Cambodian King Backs Gay Marriage, February 20, 2004, <http://news.bbc.co.uk/2/hi/asia-pacific/3505915.stm> 2013/9/11 参照

Fox News, Cambodia's prime minister urges his countrymen not to discriminate against gay people, December 11, 2012, <http://www.foxnews.com/world/2012/12/11/cambodia-prime-minister-urges-his-countrymen-not-to-discriminate-against-gay/#ixzz2TPxs6wUF> 2013/9/10 参照

International Day Against Homophobia and Transphobia, <http://dayagainsthomophobia.org> 2013/9/10 参照

Royal Government of Cambodia, <http://www.cambodia.gov.kh/> 2013/9/10 参照

Tivea Koam and Meng Hourng, "Same same... but married", *The Phnom Penh Post*, 22 September 2010, <http://www.phnompenhpost.com/index.php/2010092242205/LIFT/same-same-but-married.html> 2013/9/10 参照

付録資料

2012 年 7 月 20

ダヴィナさん（パリ在住、30 代、既婚）

身体の性：女性 性自認：女性 性的指向：男性

筆者：はじめまして。プノンペン出身のソケ・ケムバンディットと申します。研究のために様々な質問をさせていただきたいのですが、宜しいですか。

ダヴィナさん：いいですよ。私の友人から聞いておりますので、できるかぎり喜んで協力します。

筆者：ダヴィナさんはフランスには長いですか。

ダヴィナさん：自分にとってはまだそんなに長くないですが、もう 10 年以上にいましたよ。子供もいます。今はもう 5 歳です。

筆者：結構長いですね。

ダヴィナさん：でも私よりもっと長く住んでいる人もいるし、10 年はまだまだですよ。

筆者：どうですか、生活の面は？最初と比べたら、慣れましたか。

ダヴィナさん：それは 10 年ですもの、全てにおいて慣れたわけではないですが、大体のことはもう慣れましたね。初めて来た時は、やはり言葉はあまり分からなくて困りました。夫はフランスで生まれたカンボジア人ですので、とても助かりました。彼はクメール語（カンボジア語）を話すことができますので、良かったです。もし彼がフランス語しかできなかったら、やはり困ったでしょう。当初はやはりフランス語の勉強が大変でしたよ。生活の面はそれほど大変ではなかったです。

筆者：フランスには私は初めて来たのですが、やはり皆は結構個性が豊かな社会、自由な社会というふうに思っていますね。

ダヴィナさん：それはそうですね。ちょっとしたことでもストライキをするし、たまに自由を求めすぎるかもしれません。

筆者：一番びっくりしたのは路上で男女のカップルがキスしたり、それに同性同士のカップルまでいるということですね。地下鉄に乗って、社内でキスしたり、手を繋いだりした同性カップルも居ましたね。とても驚きました。

ダヴィナさん：私は女性なので、当初はとてもびっくりしました。今カンボジアでは少し

ずつ変わってきましたが、やはり路上でキスするのは、ありえない話ですね。まして同性カップルになるとやはり戸惑いますね。今はもう慣れてきましたので、別に迷惑でなければ、ご自由にどうぞみたいな感じになりますね。

筆者：フランス人は、例えば同性カップルなどと言ったセクシュアルマイノリティに対してあまり偏見を持っていないということですか。

ダヴィナさん：それは人によるかもしれません。フランスはとても自由な国なので、人に迷惑をかけなければそれでいいです。勿論差別や偏見などを持っている人がいるというのは事実ですが、アジアとかイスラム教の国ほどではないようです。フランス人の思っていることは人間が生まれながら平等で、同じ権利を持っていると考えていますから、自由はあたり前です。その自由とは人に迷惑をかけなければ、それで大丈夫です。極端に言うところ冷たいでしょうが、それはあなたのことで、私のことは私のことです。

筆者：なるほどですね。というのは差別や偏見が存在しないわけではないということでしょうか。

ダヴィナさん：私の体験から言ったことですが、少なくともフランスは住みやすいと思います。誰にとっても、特に私のような外国人とか、セクシュアルマイノリティの方々にとっては住みやすいかもしれません。

すみませんが、あなたは男性ですよ、なんか喋り方とかかなりソフトだし、ひょっとしたら？

筆者：私は私です。今彼女と付き合っているのですが、男性とか女性とかいう話になると、いつも同性愛者というふうに使われています。しかし私は使われていることに対して何も思いませんし、あくまでもその人の考え方です。

ダヴィナさん：でもあなたはカンボジアにいたら危ないですよ。ご家族も心配されるのでしょ。それならば、寛容の社会で生活した方がいいかもしれないですね。結婚とかは？

筆者：結婚はまだ何も考えていません。でも親には女性とお見合いを勧められています、私はまだ母にカミングアウトしていませんので、それで勧められるのです。

ダヴィナさん：難しいですね。まだお若いし、それは多分一時的な心の迷いだと思います。今結婚を考えなくても、将来考えるでしょう。結婚はカンボジア人にとって、伝統的になくなくてはならないものであり、子孫の繁栄のために、あるべきものです。男性なので、今はしっかり勉強して、将来いい人と会って、結婚したいという気持ちでしょうね。

筆者：私は本当に結婚に対して何も考えていません。それに子供のこともまだ遠い未来の

話です。ダヴィナさんはセクシュアルマイノリティに対してどのような考え方を持っていますか。

ダヴィナさん：フランスにはフランスのやり方がありますが、こちらに住んでから思ったのはかなり自由な社会ですし、人に迷惑さえ掛けなければ問題にならないのです。同性愛者はあまり気にしないですが、やはりその人が自分の子供あるいは親戚だとかなり気になります。というのはやはり一般の人々のようにふるまって欲しいからです。結婚して、子供を持って、いい家庭を作って欲しいのです。

筆者：やはり同性愛者などは一般的ではないですか。

ダヴィナさん：それはあくまでも私の個人の視点に過ぎませんが、やはり数的にはまだ少数だし、本当に大変です。ヨーロッパとかだったら、全てにおいてではないですが、寛容の社会が多いです、例えばオランダとかフランスとかそうですね。なので、こちら辺に住むことができれば、それで少なくとも問題がないですが、他のところ、もっと偏見や差別があるところだったら、処罰や死刑などという怖さがありますね。なので、自分の家族や身内の人にはなって欲しくないです。

筆者：でもなりたいので、なるわけではないですよ。

ダヴィナさん：それは分かっています。誰でも幸せを求めし、愛する人と一緒にいたいという気持ちも同じだと思いますが、やはり国や環境が許してくれないと無理でしょうね。カンボジアではまだ女性差別の問題もあるし、女性のみならず、人権問題がかなり深刻です。ましてセクシュアルマイノリティの人権問題になると、もっと厳しいですね。本当に大変です。

筆者：仰る通りだと思いますが、厳しいからと言って、何もやらなければずっと同じ状況が続くので、この問題を取り上げたわけです。やはり少しでもカンボジア人のみならず、人々に理解していただきたいので、頑張っています。

ダヴィナさん：偉いと思いますよ。ただあなたは将来のことも十分考えてくださいね。カンボジアに住み、仕事をするなら、十分に覚悟をしないと駄目だし、あなた自身も特に精神的にも十分強くないといけません。

筆者：アドバイスをありがとうございます。将来何か起こるか分かりませんが、取りあえず自分の取り組んでいることに対して責任を持って、もっと努力したいです。

ダヴィナさん：私は非当事者の立場で何も言えないですが、もっと同じようなお友達を作って、特に上の年齢の人と友達を作りなさい。彼らにアドバイスをもらうのは、一番いい

でしょう。まだ若いですし、これから色々あるでしょうが、諦めないで、頑張ってほしいですね。

やはりお母さんに早くカミングアウトした方がいいでしょうね。今は分かってくれませんが、将来にはきっと分かってくれると思います。親子の関係は深いものですよ。

筆者：色々ありがとうございました。私もいつか母に直接的にカミングアウトしたいです。多分理解してもらえないかもしれませんが、やはり母には一番理解している人になって欲しいです。タイミングは必要ですね。

ダヴィナさん：早くそうしなさい。ほっておいたら、女性と結婚させられることになるし、その女性にもかわいそうになるでしょうね。

筆者：今日はありがとうございました。お時間を取ってしまいまして、大変申し訳ございません。

ダヴィナさん：大丈夫ですよ、私でよければ、いつでもどうぞまた聞きにきてくださいね。

2012 年 7 月 26

モナさん （リヨン在住、50 代、PACS）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性

筆者：いつからフランスにお住まいですか。

モナさん：私は大分長いですよ。1977 年に難民として来ました。最初は大変で、言葉も分からず、とても苦労しました。でも 2、3 年住んで、言葉も次第に出来るようになり、仕事もさせていただいているし、今はとても満足しています。

筆者：モナさんについて、私の先生の紹介で、同性のパートナーとご一緒に住んでいて、PACS も利用されているということですが、もし宜しければ、色々とお話をしていただければと思います。

モナさん：20 年前に友達からの紹介で今のパートナーと会いました。私は男性ですが、男性を恋愛対象としているということに対して、おかしくないと思っています。世間にはどう見られても、愛は愛ですから、性別と関係なく、互いに好きという気持ちになれば、それでいいはずです。

自分のことに対して、ゲイとか同性愛だと思っていません。あくまでも私の指向性なので、可笑しいことではないはずです。しかし、フランスに住んでから、思い切って言えるようになったものですが、カンボジアにいた時は、毎日隠しながら、生活しました。当時のことを思い出たら、とても悲しい気持ちですね。

筆者：やはり理解されなかったのですか。

モナさん：私はカンボジアでは差別や偏見をかなり受けました。カミングアウトしなくても、やはり女性っぽいので、常にバカされていました。カンボジアでは多分私は今まで生活できていなかったでしょう。フランスのようになればいいでしょうが、現実はとても厳しいです。

こちらでは、同性愛者ではなく、人々が平等に扱われて、きちんと保障されています。フランスではセクシュアルマイノリティが社会的に保障されているというよりも、特別な事情ではなく、国民全員がちゃんと保障される社会です。カンボジアもフランスのように、保障のある社会になって欲しいです。また少しでも、セクシュアルマイノリティに対して理解して、皆と同じように平等に扱ってほしいです。

筆者：やはりカンボジアは未だに厳しい状況です。私もやはり女性っぽい性格なので、

いつもなんか怪しい目で見られています。でも自分が思っていることは、個性は個性ですから、互いに同じではなくても、その異なることを互いに認めて、尊重することは大切だと思いますが、現実ではなかなか難しいです。

モナさん：フランスでは差別や偏見などが無いわけではないですが少なくとも私たちにとって住みやすい社会だと思います。アジア諸国はまだ厳しいということは、それはやはり他人のことを気にしすぎると思います。無関心になれとは言いませんが、もう少し考えて、行動したほうがいいし、もっと自由になってほしいです。ちょっとしたことで話題になります。例えば、私は一昨年カンボジアに一時的に帰った時、とても変な目で見られました。服装はちょっと中性的だったし、性格も女々しいので、常に白い目で見られました。どうして他人のことをそこまで注意するのか理解できません。

筆者：カンボジアではまだセクシュアルマイノリティを理解できない人が数多くいるし、それに最も良くないのは誤った傾向で理解する人も多いです。社会、コミュニティ、学校あるいは職場のみならず、家族さえもセクシュアルマイノリティ当事者に対して偏見を持っています。ちなみにモナさんのご家族はどんな心境ですか。

モナさん：そうですね、カンボジアにいた時にはやはり勇気を持たず、カミングアウトができませんでした。カミングアウトをしたら、将来どうなるか、勘当されるかととても心配で、結局隠すままにしました。しかしながら、フランスに来てから、自然にカミングアウトをしました。

私の場合は直接に言わなかったですが、今のパートナーを家に招き、両親に紹介しました。最初はとても仲がいい友達だと紹介しましたが、彼もよく私の家に来ているし、皆に自然に知られるようになりました。最初は両親に「あなたは男性を愛しているのですか」と聞かれました。私は「はい、彼は私の恋人です」とはっきり答えました。答えてから、お父さんは少し悲しい顔をしましたが、しばらくしたら普段のように接してくれて、なによりホットしました。

私は自分で良かったと思いますよ。兄弟姉妹は8人もいたものですから、もし私だけが男性のならば、多分今までのようにいられないし、きっと女性と結婚させられて、跡継ぐことになると思います。

筆者：カンボジアではやはり跡継ぎと結婚はとても重要ですか。

モナさん：それは家族の事情によって、異なると思います。しかし跡継ぎと結婚がとても重要だと思っている人が多いです。特に男性の場合、それは義務です。したがって、当事

者は大変ですよ。

筆者：私も長男で、家族の中でも兄弟姉妹には言いましたが、どうしても母に言えないですし、親戚にはまだ言っていない。でも母に跡継ぎと結婚という話を度々言われまして、どうしようかと悩んでいます。

モナさん：やはり早めにカミングアウトした方がいいと思います。万一結婚させられたら、大変なことになるし、花嫁にも良くないと思います。カンボジアだけではなく、フランスでさえ無理して女性と結婚している男性の同性愛者が多いです。フランスのように自由な国でさえ、まだ差別があるのですが、カンボジアとか他のアジア諸国と比べれば、少なくともまだマシな状態です。

筆者：それはそうですね。私はフランスに来たのは初めてで、電車に乗った時、なんか車内でさり気なくキスした男性同士を目撃して、とてもびっくりしました。やはり皆は他のカップルのように、生活を送っていますし、同性でも異性でもとても自由ですね。

モナさん：よくありますよ。応援してくれる人もいれば、気持ち悪いとか反対するような声もあります。しかしいずれにせよ、あなたは今何を求めたいのかははっきりしないとフランスでやっていられないし、胸を張って生きていかなければなりません。私のアドバイスですが、とにかく家族全員にカミングアウトしなさい、最初は良くない結果だとしても、家族は家族ですから、どうにかなると思います。そして次に同じような人と友達になります。

フランスではカミングアウトしている人が多いですが、カンボジアでは隠す人が多いし、自分と同じ人を差別や偏見でみている人が多いです。それは人によるかもしれませんが、私がいやなのは、無理やり結婚して、後でまた同性の相手と浮気する当事者がとても多いことです。それは社会はまだ認めないですから、カミングアウトできないということを十分に理解できます。しかしフランスでもここ至るまでどんな歴史があったのか、どんな活動があったのかも十分に分かって欲しいです。何もしなければ、今のままと変わらないし、偏見や差別があるならなくせばいいです。口で言うほど簡単ではありませんが、何もしなければ、何も生まれないでしょう。

筆者：そうですね、仰る通りだと思います。カンボジアでも最近非政府機関、例えばカンボジアレインボーコミュニティ（Rainbow Community Kampuchea）、カンボジア人権センター（Cambodian Center for Human Rights）、Mstyleなどがこの問題を取り預かって、とても活発に活動と取り組んでいます。

モナさん：それはいいことですが、一人ひとりの当事者の協力も不可欠だと思います。私が考えていることは、カンボジアでは当事者でさえ自分の本来のアイデンティティやそれに関する知識がない人が多いし、もっと極端に言うと性格がよくない当事者が多いので、差別の対象になるのではないかと思います。勿論結婚できないこと、子供を産めないこととか跡継ぎが出来ないなどの要因もあると思いますが、当事者の性格にマイナスイメージをもたらし、特にニューハーフの場合は教育のレベルが低いので、水商売する人、たまに泥棒をする人もいます。従って、一般人に受け入れられないのも当然です。一般人のみならず、当事者でさえも受け入れられないでしょう。

筆者：初めてそのお話を聞きました。性格も大きな要因でしょうか。

モナさん：それはそうです。当事者に限らず、人々とは外見より内面です。内面が良くなければ、評価されないです。性格はとても大事ですし、まず自分を受け入れることです。

筆者：お忙しいところで大変申し訳ございません。とても貴重な意見やアドバイスをありがとうございます。

モナさん：私でよければ、いつでも聞きにきてくださいね。来年フランスで同性婚の法律が承認されれば、あなたを結婚式を招待します。是非来てくださいね。

筆者：そうですか。それはいいことですね。やはり結婚式を挙げるのですね。

モナさん：私は結婚制度があまり好きではないですが、でも生活の安定のためにしないとイケないですね。

筆者：もっと具体的にお話しをしていただけないでしょうか。

モナさん：PACS も一応出しましたが、それもやはり色々な問題がありまして、制限されるということですね。でもないより、まだマシです。来年同性婚という制度や法律ができたら、今のパートナーと結婚する予定です。今の生活は問題が特にありませんが、せっかく承認されるので、結婚でもしようかなと考えています。

筆者：婚姻届を出さないのと、出すのとやはり違うのですか。

モナさん：大した違いは恐らくないでしょうが、法的に認めて欲しい場合は出した方がいいです。現在結婚をせず、同棲するカップルが多いし、異性愛者もそうでないカップルも皆自由にライフスタイルを選択しています。それはフランスです。

筆者：そうですか。

モナさん：あなたも早めにお母さんにカミングアウトして、出来るだけ直接に話した方がいいですよ。まだ若いし、これからの人生を色々経験してみてもいいですか。まず自分を

認めることと、胸を張って生きていくことです。

筆者：色々とありがとうございます。母にカミングアウトしたら、また教えます。本当にお会いできて、とても嬉しいし、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。またお会いしましょう。

2012 年 7 月 27

イサさん （リヨン在住、30 代、PACS）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性

筆者：はじめましてではないですね。直接にお会いしたことはありませんが、Skype で何回も話したことがありましたね。どうですか、最近お元気ですか。

イサさん：元気ですよ。パートナーと一緒に毎日過ごして、幸せです。ここまで来られた過程も大変でしたが、それは人生ですね。

筆者：それは何よりですね。いいですね、かなり充実しているようですね。笑顔を見たら、なんか元気そうだし、とてもいきいきしていますね。何回も聞いたと思いますが、あえてもう一度この場で聞きます。フランスは何年目ですか。

イサさん：今 30 代後半ですから、20 年近くいると思いますよ。フランスには生まれなかったが、フランスである意味に大人になりました。考え方も多分フランス人と近いでしょうが、一応カンボジア語は喋れます。むしろ毎日カンボジア語で話していますね。勿論フランス人とは当然ながら、フランス語です。

筆者：長い間ですが、やはりこれからもフランスに住むつもりですか。

イサさん：それは当然でしょう。私の相手はフランス人なので、ずっと彼と一生いたいわけですね。

筆者：イサさんはいつから自分が男性を愛するということに気がついたのでしょうか。

イサさん：そうですね。それは自然なことだと思いますよ。だって私は悪いことをしていませんし、恋愛は自由ですね。10 代に入ってから、意識し始めたね。でもやはりカンボジアにいた時に言えなくて、かなり怖かったです。知られたら、きっと批判されるでしょう。

こちらで暮らし始めてから、人の目が気にならなくなりました。全体的にそうではありませんが、パリ、リヨンと言った大都市ではセクシュアルマイノリティに対して寛容的ですが、地方などへ行ったら、まだ保守的なところが見受けられます。しかしながら、それでも、アジアの国などと、例えば祖国（カンボジア）などと比べたら、かなりいい状況です。

筆者：どういうところがカンボジアと比べたらいいですか。

イサさん：やはり人間は皆平等の立場を持ち、同じ権利で自由に生活していることですね。法律をきちんと守れば、問題がありません。自分はゲイとか、他の人と違うとは思って

ません。これは人間の個性でしょう。勿論フランスでもそういうセクシュアルマイノリティに反対する人がいると思いますが、それは個人の自由です。でもあくまでもこの人の意識や意見に他なりません。マイノリティでもマジョリティでも罪を犯したら、当然法律によって処分されるでしょう。問題や罪などを犯さなければ、問題がありません。簡単に言うと自分のことは自分で管理する、他人のことは他人のことですね。

カンボジアでは今は大分よくなるでしょうが、例えばゲイとか知られたら、学校も職場も反発を招き、悪い口が言われたり、場合により不利益になるという可能性も。

筆者：そうですね。それはカンボジアはまだまだ寛容な社会になっていないからかもしれません。

イサさん：フランスも昔同じでしたよ、カンボジアと。しかし市民の運動とかで、セクシュアルマイノリティとは可笑しくない、皆と同じと訴えたことで、少しいい状況になりました。

筆者：ご家族や友達には知られましたか。

イサさん：勿論皆に知られていますよ。せめて家族には分かって欲しいですね。そういう思いがあったからこそ、思い切って家族に言いました。当時はかなり不安でしたが、カミングアウトしたら、別に問題が起こりませんでした。不思議だと思いながら、皆の心境をしばらく観察しました。両親には最初口を聞いてくれませんでしたでしたが、やはり時間が経ったら、自然に親子の関係に戻りました。

皆が理解してくれたのは、自分なりで分析したら、やはり当時は私は安定した仕事に就くことができ、パートナーがいましたので、理解してくれたと思います。両親に言われたのは「一番心配なのはこれからどういうふうになるか、平凡な生活ができたなら、それでいいので、好きにきなさい。もしそうでないと、例えば仕事を持たず、どうやって暮らすのか、きっと心配でしょう。同性愛者に限らず、異性愛者にも言える問題です。やはり自分のことは自分で責任を持ちながら、生活して欲しい」と言われました。

筆者：素敵な両親ですね。やはりカミングアウトは当事者にとってとても重要ですね。私はまだ母親には言いませんので、どうしたらいいのか正直悩んでいます。

イサさん：それはやはりはやめに言った方がいいかもしれません。気持ちとして分かりますね。まだ学生だし、今の時期はかなり不安定でしょう。でも最終的に言った方が正解だと思います。あなたのお母さんはあなたの幸せを願っているでしょうし、あなたが幸せなら、お母さんも幸せだと思われるでしょう。

とにかく頑張って勉強して、いい仕事をして、素敵なパートナーに出会えたら、一番理想的ですね。やはり自分のことを自分でしっかり管理するべきでしょう。カミングアウトする時には自然のままのあなたで、複雑考えずに、「お母さん、私は将来いい人に出会えたら、男性とか女性とか関係なく、その人と生活していきたいです」と言えば、いいでしょう。

筆者：ありがとうございます。私はいつか自分の母に言いたいと思っています。今はまだ適切なタイミングではありませんので、少し不安です。主題を変えたいのですが、フランスでは何か言われたことや差別のようなことをされたことがありますか。

イサさん：そうですね、あまりないような気がしています。差別や偏見を持つ人がいないわけではないですが、皆やはり互いに尊重しています。あえて挙げると、人の初対面の時、必ず「ゲイですか」と聞かれましたね。分かりませんが、やはり性格は女性っぽいという原因だと思います。私の服装は派手目なので、当然自らがわざわざカミングアウトしなくても、自然に知られるでしょう。あなたを見たら、一瞬で分かりました。やはり大人しいし、なんか雰囲気ソフトなので、もしかしたら男性が好きな人だと思います。最初に初めて Skype で話した時も、この人はきっと男性が好きでしょうと分かりました。

筆者：そうですか。私は男性とか女性とかに全然拘らず、本当に自分のありままでいいですね。男だと言われても、別に何も考えていませんし、逆になぜか女性だと思われたことがたくさんあります。

イサさん：女性でもいいけると思います。声も高いし、雰囲気的にも自然だし、本当に羨ましいです。

筆者：そんなことはありませんよ。

イサさん：あなたが言うように自分のままでいることが一番大事かもしれませんね。よく考えてみたら、私たちは性別以外にも自分で自分を表現できることがたくさんあるし、それに拘らなくてもいいでしょう。

筆者：本当に貴重な時間を頂いてありがとうございました。

イサさん：何かあれば、また聞きに来てくださいね。また遊びにきてくださいね。

筆者：はい、また必ず遊びに来ます。では失礼いたします。

2012 年 7 月 27

タナさん（リヨン在住、20 代、独身）

身体の性：男性 性自認：男性 性的指向：女性

筆者：お久しぶりです。お元気ですか。お勉強とか生活の面とかはどうですか。

タナさん：お陰様で元気です。生活は大分慣れてきました。リヨンがとても大好きな街ですね。リヨン以外絶対に住むことができないという感じです。勉強は、自分の専門だったら、大丈夫ですが、未だにフランス語にとっても苦労しています。しかし最初と比べたら、まだマシですね。もっと頑張らないといけないと思いますが、なかなかですね。

筆者：フランスに来たのは 4 年前でしたか？

タナさん：そうですよ。4 年前に来ましたが、当時のことをあまり思い出したくないですね。毎日寂しかったし、特に言葉がとても大変でしたね。

筆者：それは最初ですから、誰でも直ぐに海外の生活に慣れないし、言葉にもいくら母国で勉強しても、やはり現地とまた違うし、慣れるまでは時間がかかるでしょう。前向きに行きましょうよ。私はそこまでそんなに偉く言う立場ではないですが、一応留学経験を持っているので、アドバイスというか、なんかもっと生活によりスムーズに行ってほしいですね。

タナさん：ここに住んでから思ったのは、フランスはやはりいい国ですね。

筆者：どういうところがいい国だと思いますか

タナさん：お金持ちが勿論いると思いますが、そうでない人でも、皆平等に暮らしていると思います。一番満足しているのはやはり社会保障があるので、とてもいい社会だと思います。

筆者：確かにそうですね。全く違う質問をお訪ねしたいのですが、よろしいですか。

タナさん：いいですよ。私が答えられる範囲では協力します。

筆者：フランスでは平等な権利という立場から、誰でも平等であり、例えばセクシュアルマイノリティ当事者でも一般人と平等な立場、権利を持っていると思いますが、この点についてはどうですか。

タナさん：フランスというと、セクシュアルマイノリティ当事者にとって住みやすい社会だと思われませんが、現状は人によるかもしれません。今は同性婚という制度を議論されていますが、反対する人もしばしばいますよ。勿論賛成する人もいます。来年は容認される

でしょうが、家族の構成とかはまだ問題とされていますね。人によって違うかもしれませんが、少なくとも私の体験からにしてみれば、フランスはかなり寛容な社会だと思いますよ。

筆者：そうですか。タナさんはセクシュアルマイノリティに対してどう思いますか。

タナさん：最近カンボジアではセクシュアルマイノリティ、特に同性愛者が増えています。やはり社会と一般の人々はまだまだ受け入れることが出来ません。でも、ここに住んでから同性愛者と一般の人々とそれほど変わらないと思うようになりました。ここは寛容な社会なので、同性愛者だけではなく誰でも法を犯さなければ問題がありません。

筆者：それはいいことですね。タナさんは恐らく非当事者（こういう言葉を使うのはちょっと失礼かもしれません）なので、でも割と当事者に対して大きい目で見ているし、認識も高いですね。

タナさん：自分の体験からしてみると、私は異性愛者ですが、自分のお父さんは両性愛者なので、最初はびっくりしましたが、こちらに住んでから、人は皆平等であり、誰でも自分のしたいことを選ぶことが出来ます。そう考えてみると、気にならなくなりました。でもカンボジアにいる時は、やはり周りの環境のことを考えるし、特に周囲の目もあるので、自然に無意識にやはりどうしても受け入れることができません。

筆者：要はやはり社会の影響ですか。

タナさん：そうですね。カンボジアの諺があって、郷に入れば郷に従えというので、そうすると、やはり互いに尊重し、認め合うことになりますね。同性愛者であれ、異性愛者であれ、皆平等です。

筆者：大変失礼かもしれませんが、先に自分のお父さんが両性愛者だと仰いましたが、それは、どのようなことでしょうか。

タナさん：私の両親は離婚したのですね。今はお父さんと一緒に暮らしています。離婚の原因は知りませんので、どういうわけか分かりませんが、恐らくお父さんが両性愛者であることがお母さんに知られているのではないかと思いますね。別の原因もあるかもしれません。カンボジアにいた時、お父さんはあえて何も言わなかったですが、フランスに来て、敢えて自分の口から言ってくれませんでした。ただお父さんのお友達を見て、ニューハーフもいるし、ゲイの方もいるし、恐らくそちらのグループではないかと思いました。お父さんの性格も男らしくないし、優しい感じですね。でもお父さんが大好きです。

筆者：そうですか。カンボジアの場合はそういう状況というのは難しいですね。特に同性

愛者だったら、無理やり異性愛者のように結婚して、毎日隠しています。私の友達に何人かいて、やはり皆隠していますね。

タナさん：でもそれは仕方ないことですよ。知られたら、ひどい目に遭うし、やはりそういう流れにならざるを得ません。フランスでも自由な社会に見えるかもしれませんが、大都市と地方は随分違うし、その原因で自殺する人もいますよ。ただカンボジアとかアジア諸国に比べれば、ずっといいです。特にいいと思うのは、自分がセクシュアルマイノリティということについて誰にも言えずに悩んでいる人より、両親や親友あるいは先生などにカミングアウトする人々はかなり多いですよ。

筆者：それはそうですね。かなりオープンな社会だし、でもフランスでも昔カンボジアと同じでしたよ。やはり歴史を経て、市民運動もあったからこそ、今は寛容な社会になったわけですね。

タナさん：この国のことですから、何かあっても皆すぐに運動やストライキを起こしたりしますね。

フランス人は特に小学校では、人種差別や自由や平等の権利などを徹底的に教えられるので、その根はすごいです。ですから他人に迷惑さえなければ、それでいいです。あなたのことはあなたは自由で選択し、してもよろしいです。私のことは自分でしっかりします。いい意味で言えば、自由です。逆に悪いことに言えば、他人につめたいということです。

筆者：そうするとやはりカンボジアはセクシュアルマイノリティに対する差別や偏見を軽減するために、早期教育が必要ということでしょうか。

タナさん：恐らくそうでしょう。まず子供の時から教えるのはベストですね。セクシュアルマイノリティのことだけではなく、人権の問題、人種の問題、自由な権利など教えなければなりません。私はカンボジアに対してあまり言いたくありません、ひょっとしたら政治に絡んでいるので、やはり政治が怖いです。ここで留めておきたいです。

筆者：大変申し訳ございません。お気を使ってくださいまして、答えられる範囲で構いませんので、無理やり答えてくださらなくても、大丈夫です。ちょっと質問を変えたいですが、フランスに住んでいるカンボジア人はやはり皆人間が自由であることということから、セクシュアルマイノリティ当事者に対して、何も思っていないですか。

タナさん：人により、違うのですよ。でもここは法律やフランスのルールがありますので、やはり抵抗があっても、あからさまな差別ができないと思います。当事者でも最初きたば

かりの時は多分カミングアウトできないですが、時間が経つにつれてカミングアウトしたり、同じような友達と出会って、カンボジアにいた時と比べれば、いいでしょう。非当事者の場合は抵抗や偏見のある人は勿論いますが、住んでいるうちに思ったことは少しずつ変わっていくし、視野が広がるでしょう。

筆者：それはいいことですね。

タナさん：いいことかどうか分かりませんよ。

筆者：それはどういうことですか。

タナさん：人間の気持ちは管理できないですよ。変わりやすいものだし、十人はそれぞれの考え方を持っているし、今フランスにいるから、大丈夫だと思っても、環境とか時代が変われば、どうなのか分かりません。

筆者：それはそうですよね。あくまでも私の視点から読み取れたことなのですが、少なくともここにいるカンボジア人のセクシュアルマイノリティ当事者は自由に一般人のように暮らしていますね。

タナさん：確かにそうですね。PACS という制度もあるし、来年も同性婚という制度もできるし、かなりいい状況でしょうね。でも期待しすぎは駄目ですよ。今はいいですが、将来はどうなるかどうか分かりませんよ。

筆者：確かにそうですね。ただ思っていることはカンボジアでもセクシュアルマイノリティに限る話だけではなくて、寛容な社会になればいいですね。やはり時間が掛かるでしょうね。

タナさん：無理だと思いますね。100 年掛かっても、駄目でしょう、今のままでしたら。

筆者：今日は短い時間でお会いすることができましたが、色々な話をしてくださいまして、ありがとうございました。本当に心より感謝を申し上げます。

タナさん：大丈夫ですよ。私はに何もできませんので、ただ答える範囲なら、また聞きに来てくださいね。

2012 年 7 月 28

サウンさん （リヨン在住、30 代、PACS）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男

筆者：フランスにはいつ来られましたか。

サウンさん：そうですね、2001 年に来ました。当時は本当に大変でしたよ。

筆者：11 年も経ちましたね、凄く長いです。そのきっかけは？

サウンさん：まあ、家庭の事もあったし、やはり自分のありのままでいたくて、来たわけですよ。家庭は億万長者の家庭ではありませんが、比較的に余裕のある家庭なので、親の金で留学を決心しました。それは一つの理由です。

もう一つの理由は、自分がゲイである私はやはり自分のありままでいたいんです。祖国（カンボジア）にいた時、人の目が非常に気になり、本当になんでもかんでも常に注意を払いました。しかしながら、こちらに住むようになってから、人の目がきにならなくなりました。こちらでは自分のことは自分さえきちんとすれば、それでいいです。祖国では、ある意味で自分の本来姿を隠すという選択肢を選ばなければならなかったです。

筆者：もっと具体的に話していただけませんか。

サウンさん：そうですね、色々ありましたね。ゲイである私にとってカミングアウトはきっと大きなテーマでしょうね。フランスに 10 年以上住んでいることについては、当然ながらフランスのゲイ社会を知るべきだと思います。故郷にいた時、まさかここまで（カミングアウト）出来なかったですよ。

筆者：それはなぜですか、カミングアウトはやはり難しいですね、今のカンボジアの社会では。

サウンさん：それはそうです、確かに仰った通りです。カンボジアにいた頃は、自分がゲイであることを一生、絶対に隠しておこうと思いました。マイノリティ以外の人には本当に知られたくないという強かった気持ちを抱きました。万一、他人に知られたら、どれほど偏見や差別に直面するのか、考えるだけで怖いです。やはり知られたら、バカにされたのに違いありません。従って、カンボジアにいた時はカミングアウトが出来ませんでした。

カンボジアでは今でもセクシュアルマイノリティに対してまだ偏見を持っている人が多いと思います。もしも簡単にカミングアウトしたら、きっと不利益や差別などに直面してしまう可能性があります。

筆者：カンボジアはまだまだ開かれた社会になっていませんからね。

サウンさん：故郷で素直な自分になれないと考えたので、フランスに移住するようになってからも、当初はその気持ちがまだまだ残っていました。ゲイであることが知られたら、どうなっているのかを非常に心配する毎日を送っていました。ある日、友達にいきなり「ゲイでしょう」と聞かれたことがありましたが、否定もせず、肯定もせず、ただちょっと笑いました。ゲイの人はやはり特徴か、全世界共通のところがありますかね。

またある日に電車に乗っていて、車内には男性同士の二人がたまたま入ってきて、すると手を繋いで、大勢の人前でキスをしたのを見て、衝撃でした。しかし、周りの人は何も気にせず、当たり前のように見たようです。フランス社会は誰であれ、皆同じ権利といった思想があるので、マイノリティでもマジョリティーでも、皆同じです。従って、人に迷惑さえ掛けなければ、それでいいのです。やはり長い間フランスにいたので、次第に友達もたくさんできていき、フランスのゲイ社会にも入り込むことができるようになって、自然に今までの自分の意識がちょっと変わってきました。自分に対して、素直な気持ちになれたし、自分がゲイであることに対して抵抗感が完全になりました。

筆者：やはり社会が認めてくれることは一番いいことですね。ご家族の皆さまにもカミングアウトしましたか。

サウンさん：それは完全にまだしていませんね。両親は結構昔のしきたり、伝統などをきちんと守っていますので、やはり毎回いつも電話してくれる時に、いつ結婚するの？いつも聞かれています。そろそろ結婚していてもいい年齢になっているし、お母さんは、毎回早く孫の顔を見たいと常に言われています。ですから、そのまんま結構長い間カンボジアを離れてしまったわけです。帰っても、やはり居場所がないので、異国でたまに寂しいですが、仕方がありません。

両親にはきっと許してくれないでしょうが、兄弟には言いました。若い人なら、まだ話しやすいです。兄弟にカミングアウトしたのも、フランスに来てからでした。自分がゲイであることが、以前はかなりコンプレックスにもなった頃も経験して、その経験から自分を受け止めることができるようになってから、カミングアウトしました。自分のアイデンティティだし、別に異常だと思っていないし、単なる個性です。人と違うと考えたら、やはり消極的なマイナス思考なので、素直な自分であることに誇りを持つというができれば、いいと思うし、まずやはり自分を受け止めることが大切です。

カンボジアにいた頃の自分と、今の自分を比較したら、その意識や考え方がかなり変わってきました。故郷にいたら、そこまで考えないし、単になぜ自分が周りの人と違うのか

というコンプレックスだけに過ぎないでしょう。

筆者：この考え方がとても素敵だと思います。私も実は非常に悩んだ時期がありました。日本に来てから、もう長い間になっているし、つい最近に家族にカミングアウトしました。しかし、やはり母にはまだ言いません。しばらく溜め込むと思っています。時がきたら、自然に知られるでしょう。社会がカミングアウトできる環境になったら、いいですね。確かにフランスにおいてはマイノリティに対して寛容なところはあると思いますが、全般的じゃないかもしれませんが、社会的に認知度は高いと感じました。当事者でも、非当事者でも、皆平等の立場にいて、本当にとっても暮らしやすい社会です。こういう社会に暮らすと、やはり意識とか、考え方が変わってきましたね。

サウンさん：それは意識が変わってくるでしょう。私のカンボジアの友人何人かも、自分がゲイでいても、明るい生活を送っているし、フランスで楽しく暮らしているみたいです。やはり当事者はカミングアウトができれば、より楽になるでしょう。カミングアウトが悪いか、いいか、別にして、とにかく「自分はこうなのよ」と人にきちんと言えるなら、どう見られても、気にしません。やはり社会の理解が重要ですかね。

私は一人暮らしなので、家族に何にも言われたい自由を手に入れました。家族だけじゃなくて、社会にも認められました。社会が応援してくれているかは分かりませんが、こういう人もいるということは、本当にありがたい話です。ゲイで生まれて本当に良かったと思っていますが、やっと思えるようになったのにはやはり社会の寛容が必要です。

筆者：今日色々お話を聞いて、本当に勉強になりました。社会と家族は何より大きい課題ですね。今後目標やメッセージがあれば、教えていただけませんか。

サウンさん：今後の計画は、そうですね、やはり自分の両親にカミングアウトしたいです。タイミングもその説得力も必要ですね。どのタイミングに言ったら、理解してもらえるか、どんな内容で説得力があるかをきちんと吟味しないと、ただ教えるだけで、結局分かってもらえないし、無駄になってしまう可能性があります。今はやはり人生がまだまださまよっていますので、少し安定して、落ち着いたたら、両親に直接に話したいです。ですから、マイノリティの方々も考える以上に、行動を起こせば、それでいいです。まず自分がどこの社会に生きているのかを把握して、現状を知ることが一番大事です。社会や時代はずっと止まらないでしょう、今はカンボジアではまだまだマイノリティに対して偏見がありますが、将来きっと変わるでしょう。いつかフランスのように変わったら、いいですね。ここまで変わらなくても、互いに違いを認め合えば、それで十分です。

筆者：今日重ね重ねありがとうございました。私にとってかなりいいお話を聞けて、感動しました。また近いうちにお会いして、こういう話を聞けたらと思います。心より感謝しています。

2012 年 8 月 14

ヴィラーさん（プノンペン在住、20 代、独身）

身体の性：男性 性自認：男性 性的指向：男性／女性

筆者：お久しぶりですね。お元気にしていますか。

ヴィラーさん：元気ですね。仕事は普通に忙しいです。ただ仕事の雰囲気は好きではありませんし、特に人間関係です。

筆者：どうしてですか。

ヴィラーさん：色々な人がいます。ただ職場では絶対にカミングアウトしません。知られたら、バカにされる違いにありません。ですから職場ではあえて男性らしくしています。

筆者：でも正直に自分でありのままだったら、いいではないでしょうか。

ヴィラーさん：ここはカンボジアですよ。まだ寛容な社会ではありませんので、カミングアウトすることによって不利益になるし、差別されることもあるでしょう。しかも名誉が掛かっていることなので、絶対に秘密にしています。信用できる親友だけに教えました。

筆者：家族には教えましたか。

ヴィラーさん：家族には兄と姉に教えました。両親や祖母祖父や親戚には教えていません。

筆者：そうですか。

ヴィラーさん：私はどちらかといえば普通の男性で、外見上も性格も男性ですが、ただ性的指向は男性と女性の両方に向いています。しかし男性が好きということは親友以外、誰にも知られていません。知られたら、バカにされるに違いがありません。そして家族の恥にもなり、きっと家族の名誉を汚すことになってしまいます。

自由にカミングアウトできる社会なら、平気でカミングアウトすることができるでしょうが、今はとてもできません。人々はセクシュアルマイノリティに対して、知識があると思いますが、どこまで理解しているかと言いますと、まだまだですし、受け入れる人が少ないでしょう。

筆者：私は先月にフランスに行きまして、向こうにいるカンボジア人の人たちにも会って来ました。全員はセクシュアルマイノリティを応援するわけではないですが、かなり皆が理解しているし、本当に偏見や差別を持っている人が少ないです。

ヴィラーさん：フランスですから、それはカンボジアと比べたら、かなり違うし、本当にいい状況だと思います。少なくとも、フランスにいるセクシュアルマイノリティ当事者に

とって住みやすい社会だと思います。

筆者：フランスに行かれたことがありますか。

ヴィラーさん：はい、何回か行きましたよ。

筆者：やはり向こうにどういうふうに捉えるのでしょうか。

ヴィラーさん：例を挙げると、例えば地下鉄の駅ではキスをしていたカップルがいて、異性同士も同性同士のカップルも皆かなり自由です。本当にそれは一部の日常生活になるでしょう。特に同性同士のカップルはいても、皆全然人の目を気にしないし、気にされないし、本当に皆おおらかに観てくれるという感じですね。

筆者：仰った通りですね。最初、私はかなりびっくりしました。変な意味ではなく、本当に普通です。でもカンボジアや他の国だったら、普通ではないという扱いがされます。

ヴィラーさん：カンボジアだったら、同性同士だけではなく、異性愛者のカップルはそんなことが公にできません。伝統文化はとても厳しいので、特に性に対してかなり閉鎖的だと思います。

筆者：もっと具体的に説明していただけますか。

ヴィラーさん：あなたもカンボジア人ですので、恐らく分かっていると思います。カンボジア人は特に女性の場合は結婚するまで絶対に性的関係をしてはいけません、いわゆる処女でないといけないということです。もしそうでなければ、例えば知られたら、差別や偏見を持たれるでしょう。その原因は、伝統文化が厳しいカンボジアでは家族の名誉が大事にされ、結婚するまで男性と性的関係を持つ女性は汚れで、家族の名誉を害す人だとされ、場合によって婚約する男性相手に結婚を中止される可能性があるでしょう。多くのカンボジア人の女性でも結婚するまで処女でない女性同士を許さない傾向があります。処女を誇りにする女性がいます。

最近はずっと変わってきましたが、まだまだ厳しいですね。しかし風俗や売春はカンボジアではとても深刻な問題ですね。国はまだ発展途上国なので、貧富の差は大きいし、自分の体を売らざるを得ない人もたくさんいます。

もっと言いたいのは女性の問題もまだ解決されないの、ましてやセクシュアルマイノリティの問題まではきっと困難でしょう。自分自身でも仕方がないことですね、たまに思っています。ですから、海外に移住することができれば、いいのですが。

筆者：なるほど。私は長い間カンボジアにいませんが、でもカンボジアのその状況をよく分かっています。やはり性というものはカンボジアではすごく閉鎖的だし、タブーにして

いる傾向があります。

ヴィラーさん：そうですね。従って性を語る時、典型的なパターンを語る場合が多いです。

筆者：どのような典型的なパターンでしょうか。

ヴィラーさん：それは、女性だったら、女性らしく、男性と結婚して、子供を持つこと、または男性ならば、男性らしく、女性と結婚して、子供や家庭をつくることです。いわゆる誰でも当たり前だと思っていることです。

筆者：でも私にしてみれば、当たり前ということは当たり前ではないかもしれませんね。

ヴィラーさん：それはそうでしょうが、実際にはそのことを守っている人が多いです。私は当たり前ではないと思っていますが、ただこの社会に生きている上でどうしようもないですね。

筆者：どうすればよいですか、やはり難しいですか。子供の時から、どのような過程を経て、なんか今の社会はどうにもならないと思いますか。

ヴィラーさん：自分は子供の時は普通の子供でしたよ。男性の友達も多かったし、サッカーをしたり、野外で遊ぶのが大好きでした。初恋は女性の担任の先生でした。あくまでも憧れの人だと思いました。それは小学5年生の時でした。

当時にクラスにはちょっと大人しい子、いわゆる女性っぽい男性がいたら、皆に嫌われましたね。ですから、あえて男の子らしくしました。高校に入って、初めて女性の恋人ができました。でも性関係までは持ちませんでした。大学生になってから、はじめて男性と性関係を持つようになりました。

筆者：それはどういうことでしょうか。

ヴィラーさん：思春期にはやはりなにもなくて、性の関係を持ちませんでした。大学生に入って、初めて男性と性の関係を持ったのは修学旅行の時でした。相手も恐らく同じ気持ちだったでしょう。

やはり女性は処女を守っているし、恋人同士でも結婚するまで絶対してはいけません。またそういう風俗に行くのも勇気がいるし、エイズも怖いので、結局男性としてしまいました。その時は、自分は男性でもいけると目覚めました。その時はただの快樂だと思いました。べつにそこまで恋愛という関係ではないと思いました。

筆者：性は快樂？

ヴィラーさん：性は男性／女性、それ以外の性もありうるし、でもセックスは性別に関係があると思います。一つは子供を作るために、二つ目は生殖ではなく、快樂のためになる

ものですね。

筆者：分かりました。要するに言いたいのは、結婚して、子供をつくって、家庭を築くということですね。もっと突き詰めると、今の社会で法的に認められた性というのは家庭（結婚した夫婦）の中の生殖のための再生産だと理解されたら、いいですね。ですから、その行為によって、社会にとって安全で安定した生殖ということですね。

ヴィラーさん：今あなたが言ったことは難しいですね。分からないわけではないですが、そこまで考える人がなかなかいないと思います。でもあなたが言ったことは的確かもしれません。

筆者：やはり、性をタブーにされているので、分からないままということになってしまいますね。話題に戻りますが、快樂としての性というのは、いわゆる家庭の外で行わる性関係ということですか。

ヴィラーさん：そうかもしれませんね。風俗とかまだ認められないので、いわゆる非社会的な行為ですね。でも快樂や興奮のためにある性関係で、でも法的にはまだ認められないということです。

筆者：従って、性の概念はいずれにせよう、制限されますね。

ヴィラーさん：そういうことになるでしょう。ですから異性愛者でも多分気付かないでしょう。彼らの自由が当たり前のように思われることは実はかなり制限されています。まして同性愛とかになるともっと厳しいです。従って、今の社会にはどうしようもないということを行いました。

筆者：なるほど。でも面白かったです。やはり人と話したら、色々な新しいことを発見することができました。

ヴィラーさん：私はセクシュアリティとかジェンダーの専門ではないですが、自分も当事者なので、人と話したら、とても解放された気持ちになりますね。

筆者：そうですね。やはり性というものはタブーにされているので、なかなか主張できないし、互いに対話する機会も限られます。

ヴィラーさん：また何かあれば、是非聞きにきてくださいね。

筆者：もうあと一点だけを是非ともお尋ねしたいですが、同性婚に対して、どのような意見がありありか。

ヴィラーさん：それはケースバイケースですね。カンボジアでは出来るとしても、まず人々の考え方とか意識が変わらないと、同性婚の法律が出来たとしても、差別や偏見もまだ残

るでしょう。もし考え方がオープンになったら、同性婚もスムーズに行われるでしょう。
今の段階はちょっと難しいですね。

筆者：色々ありがとうございました。とても参考になりました。また次回もお会いしましょうね。

2012 年 8 月 15

ソクニーさん （プノンペン在住、30 代、既婚）

身体の性：女性 性自認：女性 性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。現在龍谷大学大学院国際文化学研究科博士後期課程に在籍しております。研究のために、色々ご質問をさせていただきたいのですが、宜しいでしょうか。

ソクニーさん：どんな研究をされていますか。

筆者：私の研究のテーマは「性を超えるという選択—カンボジアにおける性の構造を通して」というのです。簡潔にまとめると、性というものは文脈によって、色々な意味合いがあり、異なり、しかも幅広い意味を持ちます。一般的には男性と女性の区別、また雌雄の区別であるというふうに思われますが、20 世紀後半に入ってから、生殖科学研究の中では、性別とは多様であり、それを単純に男性／女性の 2 種類のみに限定されてしまうものでは決してありえないということが明らかになりました。その中に *Kteuy* などがいます。しかしカンボジアではご存じのようにマイノリティへの偏見や差別が強いられています。従って、私はカンボジアにおけるその性のあり方や構造を見直すことにすることにしました。恐らく難しい課題ですので、分からないかもしれません。

ソクニーさん：分野が違いすぎて、ちょっと分かりませんが、でも面白そうですね。

筆者：早速質問に入りたいのですが、ソクニーさんは *Kteuy* に関わる経験、例えば友達の中にはそういう人にいましたか。

ソクニーさん：確かな記憶ではありませんが、小学生ごろには隣のクラスにちょっと女の子っぽい子がいました。私の友達です。最初はとても大人しい子とだけ思いました。毎回会う度にいつも女の子の友達と遊んでいるのを見ました。4 年生になったら、私は違う学校に転校して、しばらく会っていませんでした。

14 歳になって、もう一度あったら、なんか服装とかもって *Kteuy* になって、とてもびっくりしました。思わず、率直に質問をしまして、「なぜこういうふうに変った」と聞きました。すると「急に変ったのではなくて、生まれつき男性が好きなので、仕方ありません」と答えてくれました。

筆者：その時の心境はどうでしたか。

ソクニーさん：最初はかなり驚きました。でも偏見や差別などを持ちませんが、ただなん

か残念な気持ちです。

筆者：どうして残念ですか。

ソクニーさん：結構ハンサムな男性だし、性格もやさしいし、お偉い人の息子さんなので、なんか残念な気持ちでした。普通の男性に戻れば、いいのに。でも本人にはきっとできないでしょう。私はあまり深く聞きませんでした。家族全員はアメリカに移住したので、当然あの子も行っているでしょう。それ以来全然会っていません。

筆者：お友達はセクシュアルマイノリティ当事者なので、どういう気持ちですか。

ソクニーさん：私にとっては、あまり分からない世界でしょうが、偏見などは持っていません。しかし、応援することはありません。今までセクシュアルマイノリティの人々と何人か会ったことがあります、やはりこの人たちと付き合うのはとても勇気がいることです。この人たちというだけで、もしかしたら、自分自身もきっと同じではないかと、周りの人に疑われるので、できるだけ距離を保ちます。

個人の自由だと思いますが、私としてはなあってほしくないです。他の国はあまり行ったことがありませんので、分かりません。カンボジアでは今は多数のセクシュアルマイノリティの人々がいますが、ただ寛容な社会ではないので、あの人にとって大変な状況です。自分の親戚や友達にはなあってほしくないです。つらい目に遭遇するかもしれませんので、気の毒です。

筆者：私は修士課程からずっとこのセクシュアルマイノリティについて取り組んでおり、特に性に対して悩みやコンプレックスを持つ人間だったり、セクシュアルマイノリティ当事者であったり、恐らくカンボジアにはたくさんいるであろうし、些細なことでも何かプラスになって、少しでも周囲から理解してもらい、少しでも日常生活の状況が改善できれば幸いであると考え、ここでこの問題について研究を始めました。

ソクニーさん：大変失礼かもしれませんが、もしかたら当事者でしょうか。なんかちょっと優しいし、柔らかいというか、なんか女性に近いですね。最初本当にパッと見たら、男性か女性か一瞬分かりませんでした。

筆者：私は性別上では男性になっていますが、自分は男性だと思ったことがありませんし、逆に女性になりたいという気持ちもありません。簡単にいうと、私は私です。私のままでありたいです。

ソクニーさん：気持ちは分からないわけでもないですが、パスポートや身分証明書などにはやはり性別が必要ですね。学校の入学願書にも一応性別という記入する欄があるし、そ

の時はどうしますか。

筆者：その時に応じて、男性とわざと記入しますね。ややこしいですので、一応男性を選びました。それは言われたとおりですね、やはり自分は性別を超えたいと望んでいても、制度とか法に触れると制限されますね。

ソクニーさん：それはそうですよ。国には法律があります、そして主権もあります。それらがないと、国ではないし、めちゃくちゃになってしまうでしょう。難しい問題ですね。

筆者：ソクニーさんは同性婚という制度や法律について、どのように思いますか。

ソクニーさん：結婚や恋愛などは自由だと思いますが、やはり国のルールなどに従わなければならないです。カンボジアはまだ同性婚を認めていません。今はまだ寛容な社会になっていないし、これらの人々にとって、不自由なところがあるかもしれませんが、それは仕方ありません。海外に行けば、きっといいでしょうが、そこまで彼らにとって余裕がないと思います。

筆者：でもこれから制度とか法律とか変われば、いいと思いますか。

ソクニーさん：もし彼らの数が多ければ、法律などが変わればいいですが、未だにまだマイノリティなので、仕方ありません。

筆者：でも数的に少ないと言って、無視するわけにはいかないと思いますし、人間である限り、皆平等な立場と権利があるし、皆は自由を求めます。

ソクニーさん：それは無視することはできないと思います。しかし、ご存じのように彼らの問題より、今政府が取り組んでいる問題は国の発展や女性の権利の問題などですね。ましてセクシュアルマイノリティの問題まではきっと政府にとって余裕がないと思います。

筆者：例えば、カンボジア政府が同性カップルの権利あるいは同性婚を認めたら、どう思いますか。

ソクニーさん：それはなかなか考えられないことですね。勿論同性婚を認めている欧州の国々あるいは他の地域があると思いますが、アジア諸国は伝統文化などが厳しいし、なかなか実現できないでしょう。認めないのは恐らく、周囲の人々や友だちとは違うし、子供や家庭を作ることができないという要因かもしれません。恐らく不可能だと思います。

仮に同性婚が認められたとしても、色々な問題が出てくるでしょう。例えば、家族の構成や跡継ぎなどです。男性同士のカップルや女性同士のカップルは子供ができないし、それは一番大きい問題です。恋愛や結婚というのは個人の自由ですが、家族や身うちにはやはりなって欲しくないですね。

筆者：ソクニーさんにとって、やはり伝統文化、子孫の繁栄、周囲との違いという原因でカンボジアではセクシュアルマイノリティに対して差別や偏見があると思いますか。

ソクニーさん：それはそうですね。他の原因もたくさんあると思いますが、やはり子孫繁栄はとても重要です。また何かあればまた聞きに来てください。今日はこれで失礼いたします。

筆者：色々とありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

2012 年 8 月 19

ソパンさん（プノンペン在住、20 代、独身）

身体の性：男性 性自認：男性 性的指向：男性／女性

筆者：お久しぶりですね。今日はわざわざ時間を作ってください、ありがとうございます。
す。最近は如何でしょうか。

ソパンさん：最近素敵な恋人ができましたよ。

筆者：そうですか。いいですね。

ソパンさん：そうですね。かなりいい男性ですよ。

筆者：そうですか。でも前は女性と付き合ったというふうに言われた気がしたのですが。

ソパンさん：私は両性愛者の男性なので、両方とも恋愛対象となりますね。

筆者：そうですか。もっと具体的なことを聞かせていただけないのでしょうか。

ソパンさん：子供の時は普通の男性でした。今も普通ですが、最初は女性が好きでした。
中学生の 3 年生の時に女性に片思いをしたことがありました。それは初恋でした。そして
高校の 2 年生の時に女性の恋人ができました。その時は若かったし、やはりカンボジアの
伝統文化は結婚するまで特に女性に性行為をしていけないというようなことがあって、恋
人がいてもキスとハーグだけできました。

高校を卒業してから、進学するためにプノンペンに来ました。大学生の時代では全然恋
愛をしませんでした。初めて女性と性関係を持ったのは働いたばかりの時代でした。

筆者：失礼ですが、男性も恋愛対象となると仰いましたが、それはどうでしょうか。

ソパンさん：高校生の 2 年生の時には、男性の魅力を感じましたが、ただ憧れだと思って、
恋愛とか好きな気持ちではないと思いました。なぜ魅力を感じたかといえば白い人、可愛
い人が好きだからです。でも当時は全く言わなかったですね。やはり当時思ったのは、女
性は男性を愛する、逆に男性は女性が好きというふうに思いました。同性同士の恋愛はあ
り得ないと思いました。

筆者：そうですか、やはり知られたら、まずいと思いましたか。

ソパンさん：それはそうでしょうね。当時は結構厳しかったですよ、カンボジア社会は。
私の村ではやはり厳しかったです。知られたくない原因はやはり家族の名誉に掛かっている
ことだし、特に私の両親は同性愛者や女性っぽい男性や男性っぽい女性が好きではない
です。周りとかかなり違うので、知られたら、親戚や学校の友達に差別されるでしょう。特
に一番いやなのは *Kteuy* を呼ばれたくないです。この *Kteuy* という言葉はかなり深刻で、マ

イナスイメージを持つ言葉ですので、本当に呼ばれたくないです。

筆者:やはりカンボジアで使用される *Kteuy* という言葉は色々な意味で使われていますね。同性愛者、性同一性障害者、異性装者、トランスジェンダー、第3の性などと言った意味で使われていますね。簡単に言うと、英語の表記ではそれらはセクシュアルマイノリティと言い換えられますね。

ソパンさん:確かに言い換えられると思いますが、*Kteuy* もセクシュアルマイノリティも好きではありません。*Kteuy* は勿論嫌いだし、あれは差別用語だと思います。セクシュアルマイノリティもあまり好きではありませんね。何をもって、マイノリティという定義をするのか全く分かりません。単なる数的だけにしたのか、数が多ければ、多いほど勝ち組みなのか、本当に難しいです。今の社会は多数決で決める社会だと思いますね、私たちはたまたま数的にはまだ少ないですが、皆と同じ人間であることには変わりありませんし、もっと言えば当然皆と平等だし、個人の選択ができると思います。しかし、アジアの国では理解されません。西洋は全てにおいてそうではないですが、少なくとも私たちの権利を皆と平等に扱われると思います。

筆者:西洋の国には行かれたことがありますか。

ソパンさん:私はイギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツなどに行ったことがあります。長く滞在はしたことはありませんが、少なくとも私の目から見ると、カンボジアと比べたら、まだいいと思います。国の事情がそれぞれかもしれませんが、セクシュアルマイノリティにとってカミングアウトしやすい社会だと思います。当事者であれ非当事者であれ、法律上では同じな権利を持ち、自由で、互いに尊敬している。カミングアウトというテーマも、したい人はしてもいいし、そうでない人はしなくてもいいです。あくまでも個人の自由です。勿論差別や偏見が存在しないわけではありませんが、カンボジアと比べれば、少なくともまだいい状況だと思います。

筆者:ちなみにソパンさんは、カミングアウトは？

ソパンさん:私はまだ完全にカミングアウトをしていません。親友に何人か言いましたが、自分の家族には未だに言えません。縁を切られるかがとても心配です。カンボジアの社会は西洋や他の進んだ国々と違って、セクシュアルマイノリティがまだ許されていません。難しいですね、カンボジアの社会は。いつか寛容の社会になってくれれば、いいですが、なかなか厳しいです。

もしカンボジアが西洋と同じようになったら、人々の意識も当然変わってくるし、私の

ような人々にとってきつといいのではないのでしょうか。社会は人々に影響を与えるので、まず社会を変えてからでないと難しいでしょう。全てにおいて意識が変わらないでしょうが、少なくとも差別や偏見をカットダウンすることが出来るでしょう。

筆者：それは人によって違うでしょうが、ただ言えるのは皆の性に対する意識は時代や環境によって変化していくものでしょう。

ソパンさん：例えばほかの国だったら、処罰の対象になり、罪として扱われ、場合によって死刑になる可能性もあるし、考えるだけで怖いです。カンボジアではそこまでじゃないですが、やはり一般の人々はセクシュアルマイノリティに対して偏見や差別を持っているというのは事実です。

私の意見に過ぎませんが、やはり社会、コミュニティより当事者の家族が一番理解してくれないし、当事者にとってかなりのプレッシャーだし、とても理解してくれないです。家族は先祖代々の名誉をととても大切にしているし、例えば何か原因でそれが汚されると、許さない傾向があります。でも考えて御覧なさい。例えば、身内が泥棒をしたら、それは罪だし、違法だし許さないのは当然ですが、同性愛者というのは罪ではなく、あくまでも本人の意思で、あるいは個性に過ぎないなので、どうしてそこまで許されないのか、私として全く理解できません。

筆者：それはそうでしょうね。本人は悪いことをしていませんし、子供の幸せや身内の幸せは、家族の望みでもあるのに、なぜ反対されるか全く理解できません。私も不思議だと思いながら、いつも考えているのですよ。例えば、お母さんは子供に幸せになって欲しいですね、その子は同性が好きで、どうしても異性愛者にはなれないです。しかしお母さんは反対しています。もしその子の幸せを望むならば、なぜ反対されるのでしょうか。全く理解不可能ですね。

ソパンさん：それは子供の幸せより、自分の先祖代々の名誉を大事にしているからかもしれません。例えば、近所に「あの隣のお宅にはゲイの子供がいる」という噂が出たら、家族はなかなか受け入れないし、恥になると考えられます。しかし、他人にどう言われても、子供は子供ですから、変わらないと思います。

両親の気持ちは分かりますよ。子供に幸せになって欲しいし、周囲と同じように（異性愛者）なって欲しいというふうに考える親はたくさんいますが、子供の意見も尊重すべきではありませんか。

カンボジアでは特に中年とかご年配はセクシュアルマイノリティのことを理解できない

し、誤った知識で理解されることもあります。セクシュアルマイノリティはエイズに感染しているので、良くないとか言われたりしているし、例えばゲイならどんな男でも性関係を持つこととか主張される人もいます。

筆者：それは良くないですね。異性愛者と同じように、別に誰とでもできるわけではありませんし、自分の好みもあるし、極端に言うとエイズ問題は同性愛者に限った話ではありませんし、皆の考える問題です。

ソパンさん：ですから、それは偏見というのです。ある人が知らないくせに、勝手に決めつけるのは絶対に良くない行動だと思います。若者は最近セクシュアルマイノリティに対して少しずつ認識し始めたのですが、受け入れる段階にはまだなっていません。

私の両親はセクシュアルマイノリティ当事者が強く反対するという意見です。最近テレビとかラジオとかその話題が取り上げられるようになりましたが、やはり両親にしてみれば、あまりそのような話題が好きではないようです。

筆者：やはり両親には反対されるのですか。

ソパンさん：まだ家族にはカミングアウトしていませんので、どうなるかを分かりません。私は両親に女性との結婚を何回か勧められて、いつも断るようになっています。

筆者：どのような断り方をしているのですか。

ソパンさん：もう疲れしましたね。時にはまだ若いですから、まだ結婚の話は考えないです。ある時には、両親とずっと一緒にいたいとか、お金持ちになるまで結婚しないとか、毎回色々な言い訳というか、理由を説明しています。もう限界ですが、本当にカミングアウトしたら、縁が切られることになってしまうでしょう。

筆者：難しいですね。でも諦めず、いつかきっと分かってくれるでしょう。

ソパンさん：そうなれば、いいですが、なかなか厳しいですね。しかし私が考えることは、将来偉くなって、お金持ちまでならなくても、自分の力で安定した生活ができれば、多分認めてくれると思います。

筆者：それはどういう関係があるのですか。

ソパンさん：それは、多分両親にしてみれば、今の私は何も出来ていないと思われるので、きっと自由にさせないだろうし、将来ちゃんと一人前になれば、きっと好きにきなさいと言われるでしょう。カンボジア人の考え方は子供を結婚させて、家族という形ができれば、多分責任を取らざるを得ないので、頑張って一人前になると思うことかもしれません。しかも家族と一緒にいたら（結婚して、子供がいること）自分の性格も変わるし、より大人

になるし、しかも仮に女々しい男性または男性っぽい女性（極端の場合は同性愛者）であっても、普通の人に戻るという前提を考える人が多いです。

筆者：そうですかね。それは無理にすることだと思います。普通の人とか一般の人とか、どういう定義ですか、カンボジア人にとって。

ソパンさん：それは人によって違うでしょうし、最も典型的なパターンは、男性として生まれたら、男性らしく、女性と結婚して、子供や家庭をつくることです。反対に、女性なら、女性らしく、男性と結婚して、子供を作って、育児や家事に専念することが望まれています。

筆者：このような典型的なパターンに入らないと、やはり評価されないということになるのですか。

ソパンさん：そうですね。刑罰になるわけではないですが、あまりいいイメージを持たないし、極端の場合、セクシュアルマイノリティ当事者であることが知られたら、一般的な人々から差別や偏見が持たれます。

筆者：なるほど、色々なご意見をいただき、ありがとうございました。

ソパンさん：もし私のような人々にお話しを聞きたい場合はご協力をしますので、言ってくださいね。友達もいるので、きっとお話ができると思います。

筆者：ありがとうございます。是非ともご協力をしていただきたいと思います。本当にありがとうございます。

2012 年 8 月 15

ソレンさん （プノンペン在住、30 代、独身）

身体の性：女性 性自認：女性 性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。現在龍谷大学院大学国際文化学研究科博士後期課程に在籍しています。研究のために、色々ご質問をさせていただきたいのですが、宜しいでしょうか。

ソレンさん：はい、私で良ければ、協力をさせていただきます。

筆者：早速質問に参りたいと思います。*Kteuy*という言葉をご存知ですか。

ソレンさん：それはカンボジア人なら誰でも知っています。例えばは同性愛者であったり、女装とか第 3 の性という意味ですね。

筆者：カンボジアでは *Kteuy* に対してまだまだ偏見だと思っている人が多いですか。

ソレンさん：それは人によるかもしれません。しかし皆は *Kteuy* に対してあまりいいイメージを持っていません。

筆者：それではセクシュアルマイノリティという言葉もご存じでしょうか。

ソレンさん：はい、英語を少し勉強していますので、勿論知っています。セクシュアルマイノリティは *Kteuy* と似たような言葉ですかね。

私はどちらかと言えば、セクシュアルマイノリティを受け入れることが出来ません。今までそういう人と関わりがないし、全員じゃないですが、性格の良くない人が多いでしょう。やはり一般の人と異なるし、同性愛だったら、結婚できないし、それに子供を産むことができず、家族の方にとって恥になると思います。

筆者：でもカンボジアの宗教にしても、伝統にしても、結婚ができない人と子供が産めない人を差別の対象としないのですが、そうすると、*Kteuy* とかいわゆるセクシュアルマイノリティも差別の対象とならないはずです。その点に関しましてどう思いますか。

ソレンさん：私の村では男性も女性も結婚するのは早いし、それにやはり子供を持つ家庭が多いですよ。私は彼らを理解できません。本当に理解できません。人間は異性に恋するのが適切で、当たり前というか常識だと思います。同性に恋愛関係を持つのはおかしい、自然に反することになるでしょう。考えるだけで、ぞっとします。

私の村では同性愛者がいましたが、皆に嫌われますね。しかもあの人はエイズにかかっていますし、怖いです。

筆者：言われたことは分からないわけではないですが、同性愛は自然に反するのと、同性愛イコールエイズというのはどのようなことでしょうか。

ソレンさん：性別には男性か女性かという区別があると思います。動物なら雌と雄ですね。女性なら、男性と結婚して、恋愛して、子供を産んで、育って、家庭を支える役目があります。反対に男性なら、女性を愛して、結婚して、家庭をつくるという義務を果たすべきですね。それは自然のことだと思います。同性愛者とか第3の性は同性同士が恋愛対象となるので、子供も産めないし、家庭をつくることができないでしょう。

同性愛者はエイズに掛っている人が多いですよ。皆は学歴が低いし、大体水商売をやる人が多いので、エイズの問題も深刻です。本当に怖いですよ。

筆者：しかし、申し訳ないんですが、異性愛者にもエイズに掛っている人もたくさんいると思いますが、その点に関して、どのように考えますか。

ソレンさん：それもいるでしょう。ただ同性愛者になると、もっと深刻な話題になるので、要注意ですね。

筆者：そうすると、例えば同じエイズに掛っているのに、同性愛者の方がもっと話題というか、もっと。

ソレンさん：そうですよ。二つの問題を抱えるので、同性愛とエイズですから、より怖いんです。

筆者：そうですか、でもそれは単なる偏見だと思いますが。エイズの問題は勿論否定できませんが、なぜ皆はそこまで同性愛者などのセクシュアルマイノリティ当事者に対して誤った理解や偏見を持っているのですか。セクシュアルマイノリティへの理解不足に基づく偏見や誤った知識によって、なかなか人間は平等になれないのです。

ソレンさん：仕方がないことですよ。彼らは大抵性格が良くないし、変な人が多いので、仕方ないです。ですから、嫌われるのも当然です。

彼ら、彼女らは汚れのこと（同性同士の恋愛とか）を素敵だとか勘違いしていると思います。女性しか愛せないとか、男性しか愛せない男性、本当は女性／男性になりたかったのにとか、勝手なことをするし、言い訳や愚痴ばかり言った挙げ句に、両親にせっかく産んでくれたとても大事な体に傷を付けたり、弄ったり、家族の名誉を壊し、本当に情けないです。ですから彼らは人として人を愛する資格がありません。

筆者：そうですか。

ソレンさん：それはそうです。自分の子供には、あるいは身内にはそういうふうになって

欲しくありません。なってしまったら、やはり縁を切りますね。

筆者：そうですか。カンボジアではセクシュアルマイノリティに対する偏見はまだ根強いんですね。しかし、私はこの間、フランスに行きまして、向こうにいるカンボジア人にも色々とお話をしてきました。フランスでは昔は、セクシュアルマイノリティに対して寛容な社会ではなかったですが、市民運動によって、同性愛者に男女の夫婦と同じような権利を与えるようになったし、PACS「民事連帯契約」という法案が可決されました。やはりフランスは人間の平等という立場から考えると、皆のことを尊重するし、同じ権利ということですね。

ソレンさん：ここはカンボジアですから、フランスと違いますね。

筆者：でも向こうにいるカンボジア人は、勿論反対するものもありますが、わりと皆とても大らかでセクシュアルマイノリティを見えていますね。

ソレンさん：国が違うでしょうが、ここはカンボジアですから、カンボジアのやり方があります。フランスや他の国にはその考え方があるかもしれませんが、カンボジア社会ではセクシュアルマイノリティに対して寛容にならないでしょう。例えば、海外に住むことになったら、きっと私の考え方も変わるでしょうが、今はこのカンボジア社会に生きているので、多分考え方は変わらないでしょう。

筆者：やはり人間の意識は社会によって変わるのですか。

ソレンさん：変わるかわからないか、個人差がありますね。でも私は向こうに住むことになっても、変わらないと言い切れないし、変わっていくとも言えません。経験してみないと分かりません。でも自分の家族とかがそういうふうになったら、許しません。

筆者：そうですか。今日は色々ありがとうございました。また聞きに来ますので、改めて宜しくお願い致します。

2012 年 8 月 22 日

キムハンさん （プノンペン在住、30 代、独身）

身体の性：男性 性自認：女性 性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンデイトと申します。現在龍谷大学院大学国際文化学研究科博士後期課程に在籍しております。研究のために、色々ご協力をしていただきたいと思います。早速質問に入りたいです。失礼ですが、友達によるとなんか公然とカミングアウトしていますね。

キムハンさん：私はカミングアウトしているというより、男性として生まれましたが、去年タイで性転換手術をしました。戸籍上はまだ男性の性別ですが、心と体は女性です。自分自身はあくまでも自分が女性だと思っていますが、ただ周りの人に理解されていません。手術をしても、子供が産めないのも、それでは女性ではないと周りの人に言われ続けます。

でも私は自分のことはあくまでも女性だと思います。どう思われていても、女性だと思います。やはりこのことでとても疲れていますね。

逆に私はあなたに聞きたいですが、なんか顔とか話し方はとても女性らしいですね。もしかしたら、女性になりたいですか。

筆者：そうですね。一応そのような時期がありましたね。子供の時から迷って、男性の体として生まれてきましたが、性格も顔付きとかも女性に近いと言われたこともあるし、自分もそう思った時もありました。しかし私は女性になりたいかと聞かれたら、また別の話ですね。

今は自分のことは男性だと思っていませんし、逆に女性になりたいという気持ちもありません。どちらかと言えば、私は私です。自分のありのままになりたいです。

キムハンさん：あなたも変わった人ですね。すみません、失礼かもしれません。私は自分が女性だと思いますよ。子供の時から思っ、いつか本来の姿を取り戻したいです。ですから性転換手術を決心しました。今はやっと女性に近い存在ですね。

それでも、ときどき、「やはり男性ですね」と言われています。「体つきは男性ですから、普通の女性より大きいです」、「(外性器) 同じでも、子供が産めない」、「彼か彼女か、どちら読んでほしいですか」などと言ったくだらない話ばかりされています。余計に疲れますね。ちょっとしたことで、やはり「もともとは女性ではないから」とか言われるのは一

番悔しいです。

筆者：そうですか。やはり言われていますね。

キムハンさん：でも応援してくれる人もいますよ。

筆者：キムハンさんはやはり子供の時から、自分が女性だと思ったのですよね。そうすると、やはり家族とか友達はどういう扱い方がされました。

キムハンさん：両親とか兄弟は最初反対しました。やはり時間が経って、次第に認めてくれました。友達もある人は応援してくれるもいるし、友達ではなくなる人もいました。

筆者：大変な時期がありましたね。

キムハンさん：勿論大変でしたよ。

筆者：失礼ですが、キムハンさんは自分のことを女性だと思っていますね。すみませんが、恐らく女性だと思います。しかし、やはり一般的な人々にしてみれば、キムハンさんは男性として生まれてきましたが、自分が女性であることを確信しています。心の性別と身体の性別が一致しない状態で、日本語の表記ではそのようなことに当たる言葉は性同一性障害です。英語でしたら、Gender Identity Disorder というのですが、つまり何らかの障害とか病気などで医学立場からそういうふうに説明されるのですが、その点に関してどう思いますか。

キムハンさん：私は勉強は苦手です。そこまで勉強できなかったです。ただ悔しいのは、なぜ皆はそのような私たちを病気とか言うのか、分かりませんし、悲しいです。

筆者：すみません。そうですね、病気や障害ではないです。ライフスタイルはそれぞれだし、多様だし、それは個性だと思います。そう考えると、いいですね。

キムハンさん：でもそれはあくまでもあなたの考え方です。でも今の社会にしてみれば、そう簡単にはいきません。

他の国のように戸籍上の性別の変更ができれば、今より楽になるでしょう。今は、住民票、パスポートなどは男性のものですから、いつも怪しまれています。やはり社会にどうにかして欲しいですね。社会が変わると人々の考え方にも影響があるでしょう。少しでも理解して欲しいです。

筆者：やはり社会と何か関連があるのですか。

キムハンさん：きっとあると思いますよ。今私はカンボジアの社会ではかなり疲れています。政治など置いていて、人々は何も私たちのことを分らないのに、勝手に決めつけるのですよ。それは一番いけません。文化伝統は厳しいし、男性は男性らしく、女性は女性

らしく、本当に大変です。

筆者：それはやはり社会と関係がありますか。

キムハンさん：うまく説明できないですが、少なくとも社会的影響力はとても強いと言えます。私たちは、普段の生活において、自由に行動をすると思って、要するに自分のしたいように、行動しているということです。しかしその中には制限されることもありますね、例えば男性は上半身が裸でもいいし、女性にはそうはいきません。でもある少数民族の女性は上半身が裸でも大丈夫だし、恥ずかしいことではないです。そうなるとやはり自由な行動でも、それは決められた行動ですね。また社会によっても事情が違ってくるし、常識とか非常識になる可能性もあります。

筆者：面白い例ですね。うまく説明してくれますね。

キムハンさん：私はそんなに勉強できませんが、人の話が大好きだし、人生経験を大事にしています。

筆者：社会の影響力はかなりありますね。 実際に見れば、どこに行っても、その社会のルールや伝統文化を守らなければならないし、人間の意識は社会から切り離せないですね。社会的影響力はとても大きいですね。

キムハンさん：難しいですよ。カンボジアは寛容社会になれば、いいのにね。

筆者：キムハンさんにとって、寛容な社会とはどのような社会ですか。

キムハンさん：私の視点から、やはり人間は平等な立場で、男性でも女性でもそれ以外の性別でも皆同じ権利で、互いに認め合って、譲り合って、尊重する社会です。

筆者：私の考え方とほぼ近いですね。もう少し付け加えると、社会規範とか秩序から次第に自由になり、でもその自由の中でも互いに尊重することです。

キムハンさん：そうですね。私はちょっと仕事が忙しいので、また今度話しましょうね。

筆者：今日はありがとうございました。

2012年8月23日

チッタさん（プノンペン在住、30代、独身）

身体の性：女性 性自認：女性 性的指向：女性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。現在日本で留学しております。龍谷大学大学院国際文化学研究科博士後期課程に在籍しております。研究のために、色々とお話を伺いたいですが、宜しいでしょうか。

チッタさん：恥ずかしくて、あまりして欲しくありませんが、研究のためなら、大丈夫です。ただ本当の名前を出してほしくありません。

筆者：ご安心ください。直接にお会いしたら、多分戸惑うと思うし、緊張になるので、今お電話で話をさせていただきます。勿論実名は出しませんので、ご了承ください。

私はカンボジアにおける性について研究しております。方向性としては、男女と言った性のみならず、セクシュアルマイノリティの立場からも性というあり方を再確認したいです。その研究テーマは「性を超えるという選択—カンボジアにおける性の構造を通して」ということです。

チッタさん：なんかとても難しいですね。正直に聞いていいですか。なぜこのようなテーマを研究していますか。

筆者：セクシュアルマイノリティという言葉はあまり好きではありませんが、ご存じのように、現在カンボジアでは同性愛者、第3の性などといったセクシュアルマイノリティ当事者がたくさんいます。しかし数の問題だけではなく、当事者は性に対する違和感、非当事者また社会からの差別、いじめ、偏見などを受け、不利益を被ってしまう場合が多いのです。

自分のことだと言いましたら、私の外見について周囲の人は、家族でさえ女性か男性かわからないという疑問を持っています。そこまで酷い差別や偏見をされたことはなかったのですが、いつも怪しい目で見られて、とても不安定な毎日を送っています。私の望みでは、性を超えて、自分のありのままで生活することを望んでいるが、社会で生活する上で、女性あるいは男性と選択肢を一つ選択しなければならないため、随分不便、つらい思いをしてきました。この研究を始めたのは自分のためだけではなく、私のような悩みやコンプレックスなどを持っている人々のために、些細なことでも、少しでも周囲から理解してもらい、少しでも日常生活の状況が改善できれば幸いです。

チッタさん：お話を聞いて気持ちがよく分かりました。私も最初気付いた時、世界には自分ひとりかもしれないです。私は女性として生まれましたが、女性を愛しています。ですから、自分のことは最初可笑しいと思いましたが、よく考えてみれば、愛というものは性別と関係がありません。

筆者：愛は性別と関係がありませんが、一般の人々にしてみれば、やはりご存じのように、異性愛者であるという前提ですね。それは当たり前とわかってはいますが、私たちに見れば、その常識とか当り前は非常識だったり、当たり前ではないことですね。

チッタさん：そうですね。最初気付いたのは高校に入ってからでした。なぜ、私は女性なのに、女性を愛していたのでしょうか。もしかしたら、カンボジアで私のような人はいないだろうと思って、非常に寂しい毎日を過しました。現在は私のような人と友達ができて、とても前向きになり、もっと頑張りたいと思えるようになりました。しかしながら、社会のみならず、特に私の家族は私のことを理解してくれないのです。なぜ周りの人と違うのか、あなたは異常であると言われ続けています。

筆者：家族にはカミングアウトしましたか。

チッタさん：はい、してしまいました。やはり家族に一番理解してもらいたかったので、カミングアウトしました。しかしながら、理解されず、とても怒られています。

筆者：すみません。つらいことを聞き出して、申し訳ございません。

チッタさん：大丈夫ですよ。あなたのせいではありませんので、ご心配なく、色々聞きたい質問があれば、聞いてください。

筆者：今は恋人と付き合っていますか。

チッタさん：はい、付き合っていますよ。将来、できるかどうか分かりませんが、今の恋人と結婚したいです。

将来もし機会があれば、やはり理解してくれる環境に行こうと考えています。家族との縁を切るつもりはないですが、状況はだんだん悪くなりますので、どうにかしないと男性と結婚させられてしまいます。今は両親にお見合いをさせられています。男性と結婚すれば、きっと一般人のように変化していくのではないかと、両親は考えていますが、私は男性と結婚しても、きっと本質が変わりません。

好きじゃない人と結婚するということはとても考えられません。ですから、親孝行にならないかもしれませんが、やはりお見合いを断わるつもりです。あくまでも私は女性が好きで、恋愛対象は女性です。将来には女性と結婚したいです。カンボジアには今このよう

な事実があると訴えたいですが、どうか理解されていないようです。

筆者：そうですね。よく皆に言われていますね。私もよく言われていますよ。女性と結婚したら、元の男性に戻るとか、今はまだ若いので、あくまでも一時の迷いとか、言われています。女性と結婚したら、変わっていくものなのか、本当に可笑しい考え方です。無理やりにさせても、意味がないと思います。同性でも異性でも、自分の好みとか、自分に合っている人を求めたいですが、その点についても皆に考えてほしいですね。

チッタさん：あなたは私が言いたいことを言ってくれましたね。私もそう思いますよ。異性愛者と同じように、だれとでも付き合っているわけではありませんし、自分の好みだってあるし、本当に誰とでもいいわけではありません。

筆者：それはそうですね。チッタさんは今まで変なこととか、差別を受けたことがありますか。

チッタさん：特にありません。私は女性が好きですが、自分も女性だと思いますし、カミングアウトしなければ、女性そのものですね。男性の恰好をしたり、男性らしくしたりしませんので、なんとも言われたいですね。自分の口から言わなければ、大丈夫です。

筆者：ご家族以外には、お友達とか、親戚に教えましたか。

チッタさん：教えた人もいれば、何も言わない人もいますよ。でも親友には教えました。中には前のように付き合っている人もいるし、もう友達ではなくなる人もいます。正直かなり困難です。

筆者：そうですか。

チッタさん：カンボジアはまだまだ寛容社会ではありませんので、恋人と付き合っても、なかなかオープンの関係にはできません。寛容社会になれば、結婚したいですね。

カンボジアでは多分私たちと同じような人がたくさんいると思います。しかしその人たちは自分が普通の男性で、自分は普通の女性で、自分で自分に嘘をついているし、周りの人々に隠しています。無理やりに異性愛者として結婚しますが、途中で離婚したり、また同性の人に浮気したり、する人が多いです。それなのに、まだ理解してくれません。

筆者：それはやはり社会の影響ですか。

チッタさん：それはそうですね。今のカンボジア社会はまだ西洋の国々のように認めないし、女性の権利の問題とか、ましてこういう問題になるともっと厳しいです。社会が厳しいので、当事者であっても、自由にカミングアウトできません。無意識的に自分の考え方を自由にできないし、しようとしても、できないです。

筆者：なるほどです。あっという間に時間が経ってしまいましたね。今日は夜遅くすみませんでした。ありがとうございました。

チッタさん：大丈夫ですよ。少しの話なら大丈夫です。最後にはやはり実名だけ載せないでくださいね。

筆者：ご心配なく、実名に関しては責任を持って、保障します。今日改めてありがとうございました。

2012 年 8 月 25 日

コックさん （プノンペン在住、40 代、独身）

身体の性：男性 性自認：女性／男性 性的指向：男性（？）

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。現在龍谷大学院大学国際文化学研究科博士後期課程に在籍しております。研究のために、色々のご協力をしていただきたいと思います。

コックさん：私でよければ、協力します。どんなことについて聞きたいですか

筆者：私はカンボジアにおける性について研究しております。方向性としては、男女と言った性のみならず、セクシュアルマイノリティの立場からも性というあり方を再確認したいです。ご存じのように、カンボジアではセクシュアルマイノリティに対して偏見や差別を持っている一般の人々がたくさんいます。社会の背景やその原因は何のか、私はカンボジアにおけるその性のあり方や構造を見直したいです。

その研究をするに当たって、私は覚悟というか、これから色々大変になるだろうと思いますが、少なくともこの研究を通して何らかの原因、少しでもカンボジアにおいてセクシュアルマイノリティへの偏見や差別が軽減すれば、と思います。当事者の立場でもあるので、やはりやるしかないと思います。黙っているより、少しでも力になればと思います。

コックさん：難しい研究ですね。しかしそれをやったら、あなたはカンボジアでこの研究をなかなかできないでしょう。恐らく当事者ですから、その研究をしているでしょうと思われるし、あなた自身もかなり安定できなくなってしまう可能性が十分にあります。しかも研究を見たら、あなたは公然にカミングアウトすることになるだろうし、正直に精神的に強くならないといけません。

私はあえて自分の口からはカミングアウトしていません。勿論仲間の何人かに言いましたが、理解してくれる人もいれば、そうでない人もいます。

筆者：そうですね。でも私の場合は、誰もやらなければ、やる価値があると思います。正直にこれからどんな目にあうか、分かりません。自分の力で、この問題を少しの力でも解決したいですね。

では早速質問に移りたいですが、すみませんが、今おいくつでしょうか。

コックさん：私は今 45 歳です。

筆者：すみませんが、今は誰かと住んでいますか。

コックさん：私の家族は今妹しかいなくて、しかも違うところに住んでいます。両親はクメール・ルージュ時代に殺害されました。今私の家では恋人と一緒に住んでいます。男性の恋人ですが、女性として扱っています。

筆者：失礼かもしれませんが、男性の恋人ですが、女性として扱っているということはどういうことでしょうか。

コックさん：それは私が可笑しいかもしれませんが。恋人がいる時は彼は女性としてみえます。しかしフリーになったら、自分は女性として思っています。

筆者：そうですか。なんかあまり分かりませんが、もっと丁寧に説明していただけませんか。

コックさん：なかなか可笑しいでしょう。わたしだけと思っています、こういう考え方を持っているのは。つまり恋人がいない時は自分が女性だと思っていますが、いる時は彼は女性として扱っています。その時、自分は男性だと認識します。

私は一度も女性を付き合ったことはありません。あまり気持ちは向いていないのかもしれませんが。

筆者：すみませんが、恋人がいない時は女性だと思うというのはどうことですか。

コックさん：複雑ですね。性格は男性らしいですよ。しかも性転換手術をしたいと思わないし、服装とか暮らし方はあえて、男性らしくしているが、自分のことは女性と思っています。

筆者：恋人がいる時は、なぜ自分は男性だと思うのですか。

コックさん：それは自分でも分かりません。私はどちらかと言えば、異性愛の男性が好きです。ゲイとか、両性愛の男性には興味がありません。今の恋人はもともと女性と結婚していましたが、離婚して、今私と付き合っています。でも彼のことを女性だと思っています。

筆者：やはり相手は女性っぽいので、女性だと思っていますか。

コックさん：それは違います。私の相手はどこから見ても全く男性です。性格も、体つきも全く男性ですが、自分なりに女性だと思えます。

筆者：やはり性の概念というのはあやふや？

コックさん：そうかもしれませんがね。私はそのことに関して全然分かりませんので、あくまでも自分の視点、考え方にすぎません。私はどちらかと言えば、当たり前のことに対して抵抗があります。

筆者：当たり前とはひょっとしたら、当たり前ではないですね。

コックさん：それはそうですね。私は6歳から普通の子供ではなかったですね。

筆者：普通の子供ではなかったというのはどういうことですか。

コックさん：6歳から女性の遊びとかをしました。その時から女性のことに興味を持てなくて、男性が好きという意識し始めたのです。実際に恋愛関係持ったのは中学生の3年生になってからです。

中学生になったのはクメール・ルージュ時代が崩壊してからで、記憶は確かではないですが、その時から性関係を持つようになりました。勿論男性の人とでした。

筆者：その時から男性の相手を女性だと思いましたか。

コックさん：そうですね。マイノリティの中でもちょっと変わったものだと思います。

筆者：そんなことはありません。やはり固定概念はおそらく存在しないと思いますよ。自分なりの考え方を尊重した方がむしろ最も素敵なことだと思います。

コックさん：でもそれでも私はまだあなたのように公然にカミングアウトしていません。未だに妹にもまだ言っていないです。恐らく知られていると思いますが、あえて自分の口から言いません。

偉くないですが、政府機関の中で働いているので、バレたら、まずいです。今カンボジアではそういう同性愛者が多いです。ただ皆隠しているし、無理やり女性と結婚している人もたくさんいます。

筆者：驚きましたね。

コックさん：驚くことではありませんよ。普通ですよ。私も友達に「女性と結婚して、子供をつくったら、変わるかもしれませんよ」とよく言われています。それはやはり無理ですね。簡単に変わるものですか。今まで見てきて、男性が好きなのに、無理やり女性と結婚して、途中で離婚するカップルが多いです。また、まだ男性と浮気する人もいます。しかし皆は表に出しません。表に出たら、バカにされるでしょう。

筆者：そうですか。

コックさん：男性の同性愛者の中でも、色々ありますよ。たとえば、何処から見ても男性なのに、同じく逞しい男性の魅力に惹かれる人もいるし、大体その人はカミングアウトしていません。もう一つは女々しい性格を持つ男性で男性の魅力を感じている、その人たちはカミングアウトしているもいるし、していない人もいます。最後にはカミングアウトしなくても、自然に分かる人もいます。もっと色々なタイプがいます。

筆者：そうですか。色々なカテゴリがありますね。しかしやはりカミングアウトしたら、いけない社会だと思いますか。

コックさん：カミングアウトしている人が勿論いますし、そうですね、例えばニューハーフとかだったら、カミングアウトしなくても分かるし。しかしカミングアウトするとしても、やはりいまの社会にはまだ認められないし、差別や偏見を持っている人が多いです。カンボジアはまだ他の進んでいる国と違うので、セクシュアルマイノリティに対してネガティブに思っている人がたくさんいます。

筆者：でも私はこの間にフランスに行きまして、向こうにいるカンボジアの方々にお話を伺ってきました。向こうでは例えば、セクシュアルマイノリティ当事者ではなくて、非当事者はセクシュアルマイノリティに対して何も思っていない。差別や偏見を持っている人が割と少ないですね。皆大らかでセクシュアルマイノリティ当事者に接しています。フランスは勿論昔セクシュアルマイノリティに対して差別や偏見があったのですが、市民運動で、認められるようになったし、やはり人間平等な権利を持つという概念から互いに皆尊重し合っています。差別や偏見、そのような嫌がらせがないとは言い切れないですが、少なくとも寛容な社会だと見受けられます。

コックさん：それはフランスですよ。ヨーロッパは全体的ではないですが、寛容な社会が多いでしょうが、アジアはなかなか簡単にそういきません。例えばカンボジアでは同性婚という法律が承認されるとしても、まず人々の意識を変えることはとても重要です。

お隣のタイではまだ同性婚という法律が出来ていませんが、やはりセクシュアルマイノリティを受け入れるし、とてもオープンな社会です。それぐらいにならないと同性婚は難しいですね。

筆者：プライバシーに触れるかもしれませんが、今の恋人と結婚するという願望がありますか。

コックさん：正直にまだないです。今の社会ではまだ認められないので、そうすると恥ずかしいし、自分の立場とか地位とかある限りでは、できるわけがないです。

もし人々の考え方が少しずつ変われば、結婚するかもしれません。でもどちらかといえば、結婚が好きではないです。自由のほうがいいですね。あれはただ紙一枚だし、別にしなくてもいいのではないのでしょうか。

筆者：それはそうですよね。そもそも結婚制度に対しても私は疑いがあるし、なぜできたのかという過程を確認したら、とんでもない歴史になると思いますね。

コックさん：でもまず、あなたは頑張ってくださいね。これから大変になると思いますが、前向きで、進んでくださいね。私はあなたの味方なので、なんでもかんでもまた聞きに来てくださいね。

筆者：今日はありがとうございました。非常に有意義で、充実した時間を過ごさせていただきました。またお会いしましょう。

2013 年 2 月 9 日

ソワタナさん （パリ在住、40 代、既婚）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：女性

筆者：フランスにはいつ来ましたか。

ソワタナさん：フランスは 1977 年に来ました。難民として来たんですよ。最初の生活は非常に厳しかったです。でも住んでいるうち、言葉も生活にもなれてきて、今は問題がありません。

筆者：フランスの社会はどうですか。今まで 36 年間でどういうことを思いますか。

ソワタナさん：全体的に言えば、かなりいい状況ではないでしょうか。住んでいて、自分が外国人などと思っていないし、皆同じ権利を持っているし、100%満足している訳ではないですが、他国と比べたら、いいと思います。どこの国にもいいところもあるし、それ反対に悪いところもあります。

筆者：確かに私もそう思いますね。フランスに来たら、私がびっくりしたのは、例えば男性同士でも、女性同士でも電車とか路上などで手をつないだり、同性カップリがたくさんいることですね。ここの人々はどういうふうにいるのでしょうか。

ソワタナさん：フランスは多いですね、同性愛者とか。人によって違う視点があるかもしれないですが、私には問題がありません。あくまでも人の考え方に過ぎないと思います。フランスではそういうことにはあまり意識していないともいます。それは同性愛には何が違いますか、同じ人間だし、あまり問題とか感じていません。フランスの社会に長くいるし、もし違う国にいたら、どういうふうにいるのか、また別の話ですね。

筆者：そうですね、とても言いたいことを言ってくださって、ありがとうございます。しかしカンボジアではですね、最近同性愛者や第 3 の性の方がたくさん出て来たんですね、昔ながらいたかもしれませんが。それなのに、やはり一般の人々にはまだ受け入れられない状況です。それはやはり周りの方と違ったり、子供が産めない（子孫繁栄）という理由だったり、差別や偏見があります。

ソワタナさん：私はフランスにこういう同性愛者のお友達や親戚があまりいないですが、確かに知り合いには多少いたのですね。あの方々は優しくて、いい人です。人はそれぞれですが、なんかそういった同性愛者の理由で周りの方とあまりうまく行かない人もいます。多分カンボジアの場合は同性愛者対する差別や偏見という問題のみならず、色々な問題が

あると思います。女性差別の問題などもたくさんあります。もう少し発展してきたら、恐らくいい状況になると思います。

筆者：発展と関係があるんですか。

ソワタナさん：あくまでも私の個人的な考え方です。まず教育が一番重要だと思います。学校では人間は平等立場であって、どんな人でも皆同じ権利を持っているということを教えられています。フランスでは少数派だかといって、守る、権利を与えるのではなく、どんな人間でも皆平等で同じ権利を持っています。人に迷惑さえかけなければ、問題ではありません。

筆者：なるほど、でもカンボジアでも確かに私が中学、高校で勉強した時、人間が平等であることが教えられました。

ソワタナさん：私は実際フランスに長くいたものですから、現実はどうなっているかわからないですが、教育と実践が必要ですね。実際の生活で実践しないとだめだと思います。なので、カンボジアでは実践が足りないのではないのでしょうか。

筆者：そうですね、確かにカンボジアでは教育と実践がまだ足りないような気がします。

ソワタナさん：カンボジアでは女性の人権問題があります。まして同性愛者の人権問題はもっと難しいですね。社会がもっと開けば、いいのです。

筆者：ごく最近、2009年5月12日にカンボジアのプノンペンで「性的少数派」による大規模な会議が開催され、300人の性的少数者が出席しました。現在カンボジアにおいて性的少数者は約14万人います。この数は多いか、少ないか、別にして、いるということは事実です。ですから、私たちはこの人たちを無視することは決してできないでしょう。

ソワタナさん：14万人という数は多いですね。驚きました。確かに多いか少ないかという問題ではないですね。やはり社会は受け入れるべきだと思いますね。私はあまりその分野に関して詳しくありませんが、フランスでは性的少数派でも仕事したり、社会が認めるのです。例えば、ご存じと思いますが、ベルトラン・ドラノエさんは元パリ市場で、自らゲイであることを明らかにしました。同性愛者であることをフランスでも初めて公表した国会議員として、全国的に有名になりました。これはとてもいいことだと思うし、人間は皆平等で、例え同性愛者であっても、能力、目標などがあれば、やりたい職業に就けるはずです。しかし、社会はどこまで認めるか、それは社会によって違うのです。フランスですからできるのですが、また異なる国、政治などになると、その視点も揺れていくでしょう。

筆者：やはり社会には大きい影響を与えているのですね。

ソワタナさん：今はカンボジアではカンボジアなりのやり方があるでしょうが、時代によって変わっていくと思います。

筆者：色々のご協力をいただきまして、ありがとうございました。

2013 年 2 月 13 日

ボラーさん（パリ在住、40 代、既婚）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ ケムバンディットです。現在私は日本にある龍谷大学で勉強しています。

ボラーさん：はじめまして、私はボラーです。現在は専業主婦です。

筆者：フランスに来てから、もう何年経ちましたか。

ボラーさん：もう 9 年経ちました。2003 年に結婚して、そしてフランスに来ました。

筆者：旦那さんはフランスの方でしょうか。

ボラーさん：いいえ、フランス人ではありません。同じくカンボジア人ですが、ただ彼は私より大分前にフランスに来ました。確か 1977 年ですね。もう長い間です。実はね、彼は元々奥さんがいたのですが、その奥さんはもう亡くなりまして、そして私と再婚したのです。

筆者：なるほど、色々と教えてくださいまして、ありがとうございます。

ボラーさん：でもね、残念ながら、彼は病気で去年になくなってしまいました。ずっと一緒に一生いたかったのに。

筆者：お悔やみ申し上げます。

ボラーさん：大丈夫ですよ。皆知っているのです、気にしないでください。ちょっと寂しい日々を送っているのですが。

筆者：ご主人はきっと天国でボラーさんを温かく見守っているはずです。さて、フランスでの生活はどうか、大分慣れましたか。

ボラーさん：もう 9 年なので、慣れてきましたね。フランスの社会は自由な社会です、どこの国でもいい面もあるし、反対にそうでない面もありますね。

筆者：私はフランスに来たら、一番驚いたことは同性カップルが多いと見受けられていますし、知人でも同性のカップルでしかも一緒に暮らしているし、かなり自由な社会ですね。

ボラーさん：それはいますね。同性カップルとかニューハーフとか色々ですね。それだけじゃなくて、色々な国の人もいるし、ですから自分が外国人だと思っていない、皆と一緒にいるので。

筆者：ボラーさんはどうですか、例えば友達とか知人が性的少数派の人だったら？

ボラーさん：それはその人の選択肢だし、別に悪く思っていないです。ただこの社会ならば、いいですが、例えばカンボジアになると、また異なるでしょう。ご存じのように、カンボジアではまだまだ女性の人権問題があるし、性的少数派のなると、もっと厳しいですね。カンボジアでまだ性的少数派の方を受け入れられる社会ではありません。

筆者：そうですね、カンボジアではジェンダーと言えば、女性しか対象にしないですね。ジェンダーは女性の人権問題というのはカンボジア人の一般的な考え方かもしれません。しかし、性的少数派がいるということは事実ですので、あえて無視することはできません。

ボラーさん：私は別に反対するつもりがありませんが、ただ身内の人だと、ちょっと厳しくするかもしれません、やはり一般の人のようになって欲しいですね。ただ最終的には認めるかもしれません。反対なのは、フランスだったら、そういう選択肢がいいですが、例えば、将来カンボジアに戻れば、やはり性的少数派だと、色々と大変でしょう。周囲に白い目で見られて、馬鹿にされて、本当に可哀想です。身内の人なので、当然ながら幸せになって欲しいですね。でも本人はどうしてもなら、やはり認めるしかないですね、ただ色々と壁にぶつかることもあるので、強くなって欲しいですね。

筆者：確かにカンボジアではまだ厳しい面がありますね。

ボラーさん：正しいか、正しくないか、国によって違いますね。カンボジアはカンボジアのやり方、法律などがあります。フランスも当然ながら、フランスなりのやり方、法律、社会制度があります。ですから、環境とか社会には大きい影響がありますし、当然ながら、その国にいれば、その国のことを守るし、その法律などを守ります。

筆者：でも、かならずしもその法律などその制度を 100%守ることはできないでしょう。どこの国も制度などに管理できない面もあります。

ボラーさん：それは当然です。100%完璧なものが世の中には存在し得ないですが、私が言った通り、今私はフランスに暮らしているので、当然フランスの法律や制度に従います。

筆者：社会はかなり大きい影響を与えますね。極端に言うと、人間は社会によって変わっていくものですか。

ボラーさん：人によって異なるでしょうが、でもやはり変わっていくでしょう。カンボジアに居た時、同性カップルなどを実際に見たことがないし、接触したこともないし、テレビで見ただけ何も思っていないです。しかしフランスに来てから、実際に友達でもないですが、路上とか電車とか見たことがあります。最初はやはり妙に可笑しいと思ったのですが、長い間いると、もうなれてくるし、やはりその人の選択肢です。なので、私は別に何も思

っていません。

筆者：お忙しい中、お邪魔して、申し訳ございません。最後に何かメッセージがあれば、どうぞ一言でもお願いしたいですが。

ボラーさん：こちらこそ、すみません。今日はちょっと忙しいですので、また今度ゆっくり話しましょうね。わざわざ遠いところから、来て、ありがとうございます。

最後には、人間は一回の命があります、しかも短い間です。なので、したいことは全部やって、人に迷惑さえしなければ、問題がありません。同性愛者でも、誰でも皆一緒です。

筆者：本当にありがとうございました。また次回お会いしましょう。では失礼致します。

2013 年 2 月 14 日

ヴァンナーさん（パリ在住、20 代、独身）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：女性

筆者：フランスにはいつ来ましたか。

ヴァンナーさん：5 年前に来ました。違う世界という感じがしました。生活になれるまでとても大変でした。

筆者：そうですね、外国ですから、なかなか大変だと思います。私も日本の生活になれるまでとても苦労しました。一番大変だったことは何ですか。

ヴァンナーさん：やはり言語ですね。未だにまだまだです。毎日使っているのに、あまり自由に話せないです。後は社会のルールかなと思いました。フランスでは色々な法律があって、本当にたまに理解できません。でもしっかり言葉を習得すれば、多分問題がなくなるでしょう。

筆者：社会はどうですか。住みやすいですか。

ヴァンナーさん：社会は住みやすい社会だと思います。やはり自由社会ですね。皆は自分のことをしっかりすれば、それでいいのです。他人のことはあまり気にしないですね。いい人ならば、それでいいです。自分のことは自分で考えて、法律に従えばそれでいいです。

筆者：自由社会はどういう社会ですか。

ヴァンナーさん：自由社会は多分個人によって違うのかもしれませんが、私の場合は、きちんと法律に守って、自分のことをしっかりすれば、いいです。もっと簡単に言うと他の人に迷惑をかけず、正しく生きるということです。

筆者：正しいというのは？

ヴァンナーさん：犯罪を起こさないこととか、法律を正しく守ることです。

筆者：例えば、全く違う話かもしれませんが、フランスは確かに現在の大統領では同性婚という法律に賛成しますね。でもカンボジアの場合はまだまだそういう動きはないですが、それについてどう思いますか。

ヴァンナーさん：難しい例ですね。まずフランスはカンボジアと違いますね。勿論似たようなこともあるでしょうが、やはりカンボジアは高齢者の考え方とか昔の仕来り、伝統などはまだ同性婚を認めません。フランスも恐らく昔は今のカンボジアと同じかもしれませんが、若者の運動とかそういうマイノリティの方の運動によって社会が変わっていきます。

やはり住民の声が必要ですね。カンボジアは今女性の権利の問題もあるし、まして同性婚になると、厳しいですね。

筆者：住んでいる環境（社会）の影響は大きいですね。

ヴァンナーさん：それはそうでしょう。わたしはフランスに住んでいるので、当然こちらの法律や人々の暮らしに従っています。一番好きなのは自分のことは自分で考えれば、それでいいということです。私は同性が好きのではないですが、同性愛者には全く抵抗がありません。あくまでも個人の自由です。

筆者：そういう話を聞けば、とても嬉しいですね。やはりカンボジアにいた時、そう思いましたか。あるいはこちらに来てからですか。

ヴァンナーさん：こちらに来たからかもしれません。以前は同性愛者に出会ったこともなかったし、周りはそういう人に対していいイメージを持っていなかったし、違う世界の人と思いました。でもあえて差別まではしないです。こちらに住んでから、周りの人の中には同性愛者がいたりするので、次第に慣れるようになりました。数はまだ少数派ですが、いるということはあるのです。同じ人間なので、いい人ならば、それでいいじゃないですか。人の選択だし、それを拒否することができないでしょう。

筆者：とてもいいことを言ってくれました。ありがとうございました。私もとても賛成です。あくまでも人の選択肢なので、それでいいでしょう。人の自由を無視することはできません。

ヴァンナーさん：でも子孫のことを考えるとやはり複雑な気持ちになるし、カンボジアの人の考え方も大事でしょう。

筆者：私は同性愛者であれ、異性愛者であれ、あるいは他のグループであれ、皆同じだと思います。自分のことは正しいので、他の人の意見を否定するのは良くないです。皆に分かってほしいというのは人の意見はそれぞれだし、それぞれの意見はとても大事です。ですから、他の人の意見を無視することは良くない行為です。

ヴァンナーさん：難しい問題ですね。バンディットさんの考え方はとても分かりますが、やはり現在の社会では難しいですね。しかし、社会は変わっていくものなので、今はまだ少数派ですが、将来にはきっと変わるでしょう。ただ私が言いたいのは、人生は短いので、したいことはすればいいですが、絶対他の人に迷惑をかけてはいけません。

筆者：貴重な時間とご意見をありがとうございました。

2013 年 2 月 14 日

ボリさん（パリ在住、50 代、離婚）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：女性／男性

筆者：フランスに初めて来たのはいつでしょうか。

ボリさん：1996 年に初めてフランスに来たのです。でも私の初めての海外はオーストラリアです。その時は 3 ヶ月、仕事のために、行きました。

筆者：大変失礼かもしれませんが、私のお友達から聞いた話ですが、ボリさんは奥さんがいらっしゃったのですが、離婚されたようですね。

ボリさん：大丈夫ですよ、事実なので、別に謝る必要がありません。離婚する理由は男性が好きだからという理由ではありません。二人の関係はうまく行かなかったので、ついこの時が来てしまいました。

私は両性愛者なので、男性も女性も恋愛対象となります。でも最近は女性にだんだん興味がなくなり、それが離婚の原因かもしれませんね。若い時には両方（女性／男性）に興味がありましたよ。しかしその時はあまり気にしませんでした、結婚したら、多分一般の人のようになれるかなと思いまして、結婚しました。

筆者：それなら、やはり結婚というのは義務でしょうか。

ボリさん：人によって違いますが、でもカンボジアではある程度もう結婚できる年齢になれば、皆結婚するし、やはり結婚は女性と男性の間で行われることです。いわゆる子孫繁栄のためにするものです。私は遅く結婚したので、いつも周囲に怪しまれていて、仕方ありませんでした。

筆者：怪しまれているというのは一体どういうことでしょうか。

ボリさん：色々ありました。大体はひょっとしたらこの人は男性を恋愛対象とするかもしれないと陰口されました。きっと私の性格も少し女性らしいところがあるので、そういわれたのかもしれませんが。

筆者：なるほどそうでしたか。大変申し訳ございませんが、男性とつきあった経験がありますか。

ボリさん：ありますよ。実は 1995 年に、ちょうど 32 歳の時、仕事のためにオーストラリアに 3 ヶ月ほど行きました。その時はじめて男性と付き合いました。その時は今まで我慢してきたことをもう限界だし、なので解放したくて、現地の人と付き合いました。既に結

婚しているのですが、仕方がありませんでした。

筆者：そうだと、奥さんには言ったのですか。

ボリさん：それは言ってなかったのですね。現地の人とか友達などが私のことを知っていたかもしれませんが、あえて自ら言わないようにしています。カンボジアでは全然誰も知りませんでした、親友くらいですね、私のことを知っているのは。

筆者：そうですか。オーストラリアではじめて男性の方と付き合った時、向こうの人々とかどう思われたのですか。

ボリさん：すべてにおいて賛成するとか応援してくれるわけではなかったですが、別に何も思われませんでしたね、自分のことは自分のことですので、迷惑さえかけなければ、問題がありません。

筆者：やはりフランスと似たようなことですか。

ボリさん：フランスと似ているかもしれません。1996年に私はフランスに来たのです。その時は仕事のために、家族と共に来たわけですが、その時は長くこちらにいるつもりはありませんでしたが、ちょうど1997年にご存知のようにカンボジアでは政治混乱がありまして、帰れませんでした。ですので、そのままフランスの国籍を取り、こちらにいたわけですが。

筆者：1996年からですので、もう17年になりましたね。どうですか、大分慣れましたか。

ボリさん：もう慣れてきましたよ、しかもきっとフランス人以上に慣れて来たのですかね。こちらはとても住みやすいですね。先進国だから、住みやすいという理由ではありません。フランスが一番好きなのは、個人の尊重がかなり重視されているし、皆が平等に権利を持つということですね。

筆者：そうですね。私はフランスに長く住む経験がありませんが、参考資料によれば、例えば、性的少数派だからと言って、人権が守られるというのではなくて、人間は皆平等で、同じ人権を持っているというのです。黒人でも、アジア系でも、どんな身分の人でも、誰であれ、皆平等ということですね。

ボリさん：仰った通りです。ですから、フランスはカミングアウトしやすい環境かもしれません。すべてにおいて皆カミングアウトするわけではありません、するとしても、しないとしても、個人の自由ですね。するとしても、「あっそうですか」という反応しか返ってこないです。それは無視することじゃなくて、例えばこの人はゲイですと知ったとしても、別に周囲は驚かないし、要は反対もしない、応援もしない、それは個人の自由です。

筆者：いいことを言ってくださいました。というのはボリさんはフランスでは完全にカミ

ングアウトしたのですか。

ボリさん：親友は知っていますが、あえて自らわざわざ言わないですね。離婚してから、皆言うと思ったのですが、未だにまだ完全言っていませんね。それはあえて言わないようにしています。別に騒ぐことではありません。

筆者：カンボジアではどうですか。やはりカミングアウトしていませんか。

ボリさん：親友、2、3人にしか言いませんでした。言ったら、どうなるのか心配です。やはり言いにくい環境ですね。言ったら、死刑とか処罰にならないですが、周囲の目や批判などに耐えられないと思いますね。やはりカンボジアはまだまだ言えない環境ですね。

筆者：やはりずっと悩んで来たのですか。

ボリさん：悩むというより、どうしたらいいのか分かりませんでした。

筆者：こちらでもカンボジア人の友人がいますよね、どうですか、例えばボリさんのことを知られたら？

ボリさん：こちらでは、例えば知られたとしても、嫌いになることや白い目で見られることは少ないですね。全部おおらかで受け入れてくれるわけではありませんが、皆やはりフランスに慣れて来たし、ここはカンボジアではないし、自分が居る環境のことを守るし、皆が何をするかを見ます。なので自分の行動パターンもあわせるということですかね。お年寄りの方に説得したら、時間が掛かるかもしれませんが、若者ならば皆自由ですね、構わないし、やはり個人主義ですね。

筆者：というのはやはり住んでいる環境など社会が大きい影響を与えますね。

ボリさん：それは言えるでしょうね。私もこちらに住んでから、気持ちの抑制を解放できるようになりましたね。

筆者：なるほどやはり社会は大きいですね。お訪ねしたいですが、やはりカンボジアでは女性／男性の定義が違うのですか。もちろんフランスにも女性／男性の定義がありますが。

ボリさん：難しい質問ですね。あくまでも私の個人の意見ですが、カンボジアでは都市部と田舎では女性はいつも家事をやっていますね。共働きだとしても、やはり家事は女性がするものだと言われていると思います。ここだったら、大体のパターンは時間のある人がするものです。

私の専門は文学なので、多少に関わるのですね。カンボジアはインドからの文化が大きく影響したため、思想なども影響を強く受けています。なので、男性は優位で、女性は男性のものだと伝えられた訳です。極端に言えば、女性は男性の遊び、もう一つは産むもので

す。そう伝えられたので、女性の人権問題もあるし、まして性的少数派になると、カンボジア内ではもっと難しいですね。

筆者：そうですか、それははじめて知った話ですね。女性の人権問題が確かにあると思いますが、カンボジアではジェンダーと言えば、女性を対象に扱うので、ジェンダーイコール女性というふうになってしまいます。性的少数派は確かにそういう話になると、もっと難しいでしょうが、今から何かしないと、いけないと思いますよ。数の問題ではなく、事実を伝えるべきですね。

ボリさん：はい、確かに事実を伝えるべきだと思いますが、カンボジア内ではかなり勇気が要ることでもあるでしょう。カンボジアに居た時は、私は全然皆に言いませんでしたよ。親友2人ぐらいには言ったのですが、他の人には絶対に言わないようにしています。とてもカミングアウトできない社会ですので。

筆者：とても貴重な時間を頂いて、ありがとうございました。またお会いしましょうね。

2013 年 2 月 15 日

ダリさん（リヨン在住、50 代、離婚）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：今日お忙しいところ、お邪魔してしまいまして、誠に申し訳ございません。

ダリさん：大丈夫ですよ。

筆者：ダリさんはいつリヨンに来ましたか。

ダリさん：10 年前に来ました。

筆者：そのきっかけは？

ダリさん：結婚のために、来ましたよ。カンボジアにいた時は結婚していましたが、主人からの暴力に耐えられず、つい離婚を決定してしまいました。もともといい人だったのに、結局残念なことに。離婚してから、またフランスの人と再婚しました。そのためフランスに来て、フランスの国籍に変更しました。2 番目の主人もどうもうまくいきませんでしたので、離婚しました。今は一人で暮らしていますが、不自由なく、毎日仕事を楽しんでいます。

筆者：すみません。

ダリさん：謝ることは決してありませんよ。大丈夫ですよ。

筆者：フランスはどうですか。大分慣れてきましたか。

ダリさん：慣れてきましたよ。ただ食べ物だけはやはりカンボジアの食べ物が口に合いますので、毎日自分で作っています。他は問題がありません。やはりこちらは自由な社会ですね、法律に従って、問題を起こさなければ、暮らしやすいです。人々は皆平等です。金持ちでも、そうでない人でも、どんな国籍の人でも、皆同じ権利を持っています。

筆者：今まで聞いた話では、やはりフランスは自由な社会と聞きましたね。やはり皆は自由な社会を認めるということです。フランスでは同性愛者であったり、マイノリティの人でも、その社会ではどういう位置づけをされていますか。

ダリさん：私はあまり知らない世界ですが、多分問題がありませんでしょう。人によって意見や考え方が随分違います。私は賛成することもなく、反対することもないです。普通にいい人ならば、それでいいです。個人の問題やプライバシーなどはあくまでもその人の選択肢です。

カンボジアにいた時は少しは認識していましたが、こちら来てから、路上で同性カップ

ルがキスしたのを見ましたので、もう驚くことはありません。最初はびっくりしてしまいました。カンボジアでは異性愛者カップルが公の場でキスをしたら、大騒ぎですし、まして同性のカップルだったらもっと話題になるに違いがありません。

筆者：仰った通りですね。やはりカンボジアでは同性愛者などへの偏見を持っている人は多いですか。

ダリさん：人によるかもしれませんが、やはりまだ受け入れない感じですね。まず子供を産めないことと周りの人と違うという問題ですね。

筆者：それが差別や偏見の原因ですか。

ダリさん：わかりませんが、きっとそうだと思っている人が多いでしょう。まず、カンボジアでは子孫の繁栄がとても大事だし、社会の様式に合わせるのは当たり前です。それと違った場合はあまり評価されないですね。今同性愛者などという方々がいるということは事実ですが、まだ認められないですね、一般の人々から。周りの人は当然ですが、家族の人も多分なかなか受け入れられないです。

筆者：まだ厳しい状況ですね。それには社会の影響が大きいですか。

ダリさん：そうですね。私もこちらに来てから、考え方が少しずつ変わってきました。カンボジアにいた時は差別や偏見などをしませんでした、セクシュアルマイノリティ当事者に出会ったことがなかったし、違う世界の人というイメージをしました。そういう人たちは大体水商売をやっているんで、多少あまり良くないイメージを持ちました。しかしこちらでは色々な人がいるので、皆同じ人間だし、平等だし、自分のことをしっかりすれば、それでいいです。プライバシーや個人の問題はあくまでも個人にすぎません。良からうが、悪からうが、自分の責任です。

筆者：フランスではやはりマイノリティを応援しているのですか。

ダリさん：応援するというより、皆同じ人間なので、当然ながら平等です。同性愛者に限らず、人権問題になると、皆同じ権利、同じレベルです。勿論社会にはお金持ち、あるいはそうでない人がいますが、それでも皆きちんと法律を守って、平等な立場です。問題や犯罪を起こしたら、法律によって処罰を受けます。

筆者：文献によっても、マイノリティというより、皆平等な立場であると書かれてあります。やはり実際に住んでみてそういうイメージを持っていますか。

ダリさん：はい、そうです。100%とは言い切れませんが、少なくとも社会は保障されているので、安心して暮らせます。勿論フランスは全員にとって住みやすいわけではありま

せんが、大体の人は満足していようです。見てください、あちらこちらでは色々な人種の人がいるし、それでも私はこちらでは自分が外国人と思ったりしていません。言葉などはまだ完ぺきではないですが、とても住みやすい社会です。

筆者：貴重な時間をいただきまして、ありがとうございました。

ダリさん：また機会があれば、また是非遊びに来てください。

2013 年 2 月 16 日

モニさん（リヨン在住、60 代、既婚）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：リヨンにはいつ来たのですか。

モニさん：私は 1977 年に難民として来ました。主人と 3 人の子供です。

筆者：とても長い間ですね。どうですか、生活の面とか、何か困ったことがありますか。

モニさん：生活の面は完全に慣れました。もう 40 年いたものですので、フランス人以上になれるかもしれません（笑）。困ったことはあまりないですね、ただもう定年退職ですの
で、毎日つまらないです。仕事をもっとしたいと思っています。

筆者：フランスはやはり自由社会ですか。

モニさん：自由は自由ですね。保障される社会です。

筆者：例えば、同性愛者とか性同一性障害などというマイノリティに対しては、どうい
ふうにとらえているのでしょうか。

モニさん：人によって違いますね。また地域によっても違ってきます。私の場合は全く何
も思いません。それはその人の生き方、選択肢です。もう 2013 年ですから、時代が変
わるし、いい人ならば、いいのではないのでしょうか。私の周りのカンボジア人（フランス
にいるカンボジア人）の中にも同性愛者がいますが、皆あまり気にしません。いい人なら
ば、それでいいです。

筆者：そうですか、その考え方はカンボジアにいた時のと、今とどうですか、何か変化が
ありますか。

モニさん：変化があったかもしれません。私は当時カンボジアにいた時は、同性愛者と出
会ったことはありませんでしたが、一人の友人は男性なのに、性格は女性らしい人です。
その人に対して、最初は大変な人だと思っていましたし、男は男らしくすれば、いいと思い
ました。しかしこちらに来てから、同性愛者にも会ったことがあるし、たまにニュースを
見たことがありますので、考え方は少し変わってきました。

私の末子は男性ですが、今男性のパートナーと一緒に住んでいます。

筆者：すみませんが、もし差支えなければ、もっとお聞きしたいですが、宜しいでしょ
うか。

モニさん：この子は今 30 代です。子供の時、性格は本当にどうみても男性ですが、働き

出してから、突然私にカミングアウトしました。最初は複雑な気持ちを持ちましたが、次第に認めてあげることになりました。

筆者：子供にはやはり同性愛になって欲しくないですか。

モニさん：きっとそうでしょう。でも子供の選択した道ですので、反対することはできません。いい人ならば、それでいいです。子供は子供なので、子供ということは変わらないです。

私の子供はきちんと親孝行してくれているし、いい子なので、本当に誰にでも愛される人です。

筆者：いいですね、私はまだ親に言っていませんので、正直いつかモニさんのお子さんのようにカミングアウトしてしまいたいです。でも親はどう考えているのか全く分かりません。

モニさん：最初はなかなか受けいれてくれなかったですね。自分の子供にやはり幸せになって欲しいですので、一般の人々ようになってもraitたいです。親は子供を愛するので、自分の子に不幸になって欲しいという親は決していないでしょう。なので、叱ったり、認めなかったりするの、当然のことではないですが、あくまでも自分の子供によくなって欲しいからです。最終的にはどうしてもできない場合は、応援するしかないです。まず自分の親に言った方がベストかもしれません。一番理解者でもあるし、相談できる人でもあるので、是非とも直接言うなり、お手紙なりしてカミングアウトに挑戦してください。

筆者：私は最終的に言うつもりですが、今あえて言わないですね。聞かれたら、教えると思います。カンボジアでのカミングアウトとフランスのカミングアウトはやはり違うのではないのでしょうか。

モニさん：また難しい質問ですね、私は長い間フランスに住んでいますので、カンボジアのことがよく分かりません。フランスでカミングアウトするとしても、問題がありませんし、個人の自由です。しょうか、しないか、それは自分の決心にすぎません。偏見を持っている人がいますが、それにしてもその人の考え方です。しかし大体の人はあまり気にしませんし、とても自由な社会です。

カンボジアだったら、どうですかね？ 厳しいのではないのでしょうか。やはり人はまだマイノリティに対して、間違って理解する人がいるだろうということで、きっとなかなかできないでしょう。

筆者：仰った通りですね。一般的な考え方では、性別というものは2種類に分けられ、男

性と女性であることが前提として考えているカンボジア人がたくさんいるので、やはりマイノリティの問題に触れると、困難です。カンボジアの伝統では、結婚というものは、男性と女性の間で行われるということを、多くのカンボジア人が考えていますし、結婚の前提は、子供を産んで、家庭を築くことです。しかし一方では、そういった同性の結婚あるいは恋愛については、カンボジア人にとっては理解できないことであり、家族の名誉を破壊することになり、非常に卑怯なことであると考えられています。

モニさん：これから先色々と大変ですが、道がきっと開くと思いますので、絶対に諦めてはいけませんよ。時代は変わるものなので、いつかは分かってくれるでしょう。ただ強く生きていかないとだめです。

筆者：とても素晴らしい意見と貴重な時間を頂きまして、大変感謝しております。またいつか機会があれば、また尋ねて参ります。

2013 年 2 月 18 日

ソバックさん（リヨン在住、30 代、独身）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性

筆者：リヨンにはいつ来たのですか。

ソバックさん：私は 1986 年に来ました。生まれたのはカンボジアですが、家族とともに難民としてフランスに来ました。

筆者：フランスはどうでしょうか、住みやすいですか。

ソバックさん：住みやすいですね。カンボジアには長く住んだことがありませんから、どういうふうに比べるか分かりません。

筆者：それはそうですね。フランスはとても自由な社会だと色々参考文献を読んだり、色々な人に聞いても、やはりそうですね。どうですか、やはり自由ですか。

ソバックさん：人によるかもしれませんが、私は結構満足して、生活しているのです。現在は同性のパートナーと一緒に住んでいるのですよ。周りには応援してくれる人が多いですが、全てはそうではないですが、勿論嫌悪感を持っている人もいますが、少ないですね。

筆者：そうですか。フランスでは PACS（連帯市民協約）がありまして、つい最近では同性婚を認めるようになりましたが、どうですか、やはり今のパートナーと正式な結婚を考えていますか。

ソバックさん：そうですね。私の場合は今のままでいいですね。そもそも結婚の制度に対してよく分かりませんし、ただの紙一枚ですね。結婚をせず、一緒に住むというのは色々問題がたくさんあるだろうと思いましたが、実際そうしてみると、そこまで大げさでもないし、平凡ですね。人の考え方はその人の考え方に過ぎませんので、人に迷惑をかけなければ、それでいいでしょう。

筆者：とても素敵な考え方だと思います。カンボジアでは同性婚という動きは確かに 2004 年にありました。それはノロドム・シアヌーク前国王が同性愛者の結婚を承認する法律制定を支持すると発表しましたが、その宣言以降、同性婚を承認する立法措置への動きは全くなかったです。やはり一般の人々にはまだ支持されないのか、あるいは伝統文化の問題なのか、本当にまだ厳しい社会です。

最近では確かに 2013 年に入ってから、フン・セン首相はスピーチでは一般の人々に同性愛あるいは第 3 の性などのマイノリティに対して差別や偏見を持たないで欲しいという内

容を発表しました。しかしやはりそういう内容にもかかわらず、やはり社会ではまだまだ厳しい状況ですね。

ソバックさん：私は長く住んだことがありませんが、カンボジアに何回か行ったことがあります。そこまでは厳しくなかったですが、やはり変な目で見られましたのは確かです。一回彼氏と行ったことがあって、恋人同士でしたから、当然親近感がありまして、手を繋いで歩いたら、変な目で見られました。どうしてかなと思ったら、向こうはフランスではありませんので、まだまだそういったことに対して偏見をもっている人が多いです。

カンボジアにもゲイの友達がたくさんいますが、皆やはり隠しながら、生活していく人が殆どですね。もっと解放したら、いいのにと考えています。

筆者：恐らく皆は解放したいですが、やはり今の社会ではまだ自由に出来ませんので、隠すしかないですね。カンボジアにいる私の友達も皆ゲイなのに、ゲイバーとかこっそり行ったら、色々なことを話してくれました。しかし職場とか学校とかではあえて男性らしくしているようです。

ソバックさん：でもその気持ちは分かると思います。私はこういうふうに毎日過ごすことができるというのは、自然じゃなくて、やはり家族が認めてくれたり、社会の影響かもしれません。

筆者：家族には全員言いましたね。

ソバックさん：言いましたよ。最初はとても怖くて、緊張しました。直接に伝えなくて、手紙を書いて、母に送りました。そうしたら、別に問題なく、返事をしてくれました。父は最初知られた時、悲しかったようですが、時間が経ってから、私のところに来て、互いに話しました。

筆者：御兄弟は？

ソバックさん：兄弟も皆知っています。関係はもっとよくなりました。

筆者：いいですね。私もいつか母にカミングアウトしたいですが、なかなか今は出来ません。タイミングを探して、言えるのならば、打ち明けます。

ソバックさん：それは早めに言った方がいいですよ。私は今 30 代ですが、当時 25 歳時に言いましたよ。私の両親はカンボジア人だし、それに文化伝統、仕来たりを守っている人なので、最初言おうと思った時は、とても怖かったです。でも言うべきと思いましたので、思い切って言いました。

25 歳の時に言って、それにしても遅いですよ。それは、やはりご年配の人だったら、孫

の顔を早く見たいし、それに自分の息子だったら、早く結婚してほしく、素敵な家庭を築いて欲しいという期待があると思います。だんだん年を取ると、この期待がもっと膨んでいくのです。突然私はゲイだとカンミングアウトしたら、それは親にとって、かなりショックだし、なかなか分かってもらえないでしょう。

筆者：そうですか。私の場合はあまり男性らしくないですし、恐らく親には疑われているのかもしれませんが、敢えて互いに言わないようにしています。

ソパックさん：事情があるということですね。

筆者：今日本当にありがとうございました。また次回お会いしましょうね。ご協力をありがとうございました。

2013 年 2 月 20 日

アヤさん（リヨン在住、20 代、独身）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：女性

筆者：お久しぶりです。お元気ですか。

アヤさん：お久しぶりです。元気ですよ。最近はどういうふうにすごしていますか。

筆者：色々ありますが、元気にやっています。フランスの生活は慣れましたか。

アヤさん：大分慣れてきましたよ。ただ言葉はまだ難しいですね。2 年経ちましたのに、まだまだ完璧に話せなくて、困っています。

筆者：それはそうでしょう。まだ 2 年ですし、もう少し時間が必要です。私は長い間日本にいますが、なかなか日本人のように話せなくて、いつも悩んでいますよ。どうですか、2 年経ちまして、生活とか困ったことがありますか。

アヤさん：困ったことは山ほどありますよ。生活、自分のこと、勉強のことなどで悩まされています。でもこちらではとても開放的という感じがしまして、自分である自分でいられます。皆は平等ですし、変なことをしなければ、問題がありません。

筆者：変なこと？

アヤさん：それは法律などに違反するとか、人に迷惑をかけることです。

筆者：なるほど、どんなことかなと思いました。やはり友達でもありますので、色々のことを少し知っていますね。どうですか、両親とかお友達にはカミングアウトしましたか。

アヤさん：完全にまだ言っていないです。こちらでは多分皆に知られていると思いますが、あえて自分から言わないようにしています。別に聞かれないし、それでいいです。

カンボジアにいる家族と友達にはまだ言いません。とても怖いんです。知られたら、どういうふうになるのか、考えるだけでぞっとします。親には多少疑われているかもしれませんが、まだまだ理解段階ではないと思います。どうですか、バンディットさんの場合は？

筆者：私も同じですよ。母親にはまだ言っていないですが、多少は分かっているでしょう。友達にはあえて全員に言わないですが、聞かれたら、素直に答えます。カンボジアにあまりいないので、よく分かりませんが、きっと知られたら、大変でしょう。

アヤさん：そうでしょう。私はフランスに来られて、良かったと思います。勉強のためですが、将来住むことができたなら、いいと思いますが、やはりそう簡単にはいきませんので。

筆者：どうしてフランスに住みたいですか。

アヤさん：色々原因がありますが、一番大事なのは先にも言いましたように、自分でいられることです。私は女性なのに、女性が恋愛対象となっているので、周りにいる人に理解されず、つらい思いをしてきました。しかしフランスに来てから、私は一人ではありません、同じ人がいると気がつきまして、とても救われました。そう考えてみたら、自由社会から離れたくないですね。

カンボジアにいた時、毎日隠しながら、生活していますので、随分苦しんでいます。本当に周りの人の目が気になりがち、自分のことを忘れてしまいました。

筆者：同じ経験です。カンボジアにいる人は皆大体そうですか、やはり自分がマイノリティであれば、隠す人が多いですかね。

アヤさん：それは人によるかもしれませんが、同性愛者ならば、隠す人が多いと思いますよ。知られたら、馬鹿にされるか分かりませんし、本当に嫌がらせや差別があるものです。

筆者：差別されたことがありますか。

アヤさん：そこまで大した話ではありませんが、やはり私は女性が好きなので、たまに綺麗な女性の友達を見たり、場合によってちょっとだけ髪とか手に触ったりしました。その時、ある友達に「気持ち悪いわ」と言われたことがありまして、その人は私が同性愛者であることが知らないですが、その場で「同性愛者みたいに触らないでよ」と言われて、ちょっとがっかりしました。

まだカミングアウトしないにかかわらず、とても否定されましたので、正直ショックでした。

筆者：そうですか。もっと極端の場合はされたことがありますか。

アヤさん：ありましたよ。自分の母親の一言でとても落ち込みました。最近、あのカンボジアの映画ですね、英語だったら、Who Am I?という女性の同性愛者の映画があります。たまたま放送された日に母親と一緒に観ました。キスのシーンに、母親に一言に言われて、未だに心の中に覚えています。母親に「とても変な映画だ。あなたがそういうふうになったら、二度と私の前に現れるな」と言われました。カミングアウトとしようと思ったのに、結局する前に否定されました。

筆者：大変ですね。恐らく分かっているんじゃないですかね。

アヤさん：多分疑われているかもしれませんが、あえて事実を認めたくないようです。やはり家族に一番理解者になって欲しいですが、なかなか難しいですね。

筆者：兄弟はどうですか。言いましたか。

アヤさん：まだ誰にも言っていない。カンボジアにいる人には全然言いませんよ。こちらではほとんど知られていますね。

筆者：やはり社会の影響ですか。

アヤさん：そうかもしれません。フランスはとても自由な社会です。勿論その中には色々な人がいますが、少なくとも私のような人にとっては住みやすいでしょう。本当にカンボジアには帰りたくないです。もしフランスのようになれば、住みたいですが、やはり今だと、住みたくないですね。

筆者：カンボジアにいた時はやはり誰にも言いませんでしたか。

アヤさん：一人だけです。私たちの先生に言いました。先生も同性愛者ということにうわさを聞いて、正直に聞いたら、素直な答えが返ってきました。そうすると、私も自分のことを先生に明かしました。

筆者：そうですか。やはり社会はとても大きい影響ですね。でもフランスに来て、その国の影響を受けて、全く別人になりましたね。やはり隠すことは自分を苦しめることと同じですと私は思っています。しかしカミングアウトできる環境かどうかそれは大きいですね。後はタイミングが必要です。

アヤさん：確かにそう思います。いつか自分の家族に分かってもらいたいです。特に両親に何より一番理解者になって欲しいです。

筆者：きっと乗り越えると思いますよ。

アヤさん：乗り越える前に、大変な過程になるでしょう。まず自信を持って、向こうにいる兄弟と次に両親にいうつもりです。友達は次のステップですね。

筆者：頑張ってくださいね。私もいつか自分の母親にカミングアウトするつもりです。ただ今のタイミングではないです。いつか時代が変わると信じています。ご協力をありがとうございます。またお会いしましょうね。では互いに頑張りましょう。

2013 年 2 月 21 日

ダラさん（リヨン在住、30 代、PACS）

身体の性：男性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：ダラさんはいつフランスに来ましたか。

ダラさん：私は 1995 年に来まして、18 年になりました。

筆者：長いですね。こちらにずっといるつもりですか。

ダラさん：はい、そうです。もうフランスの国籍になっているし。でもやはり時々カンボジアに遊びに行きたいですが、なかなか戻る勇気がありません。

筆者：失礼ですが、もし差し支えなければ、その原因を教えてくださいませんか。

ダラさん：私は親に勘当されました。ですから、戻る場所がありません。

筆者：それはやはり何かの原因で勘当されましたか。

ダラさん：私は男性として生まれてきたのですが、でも自分の心の中は女性だと思っており、どうしても男でいられなくて、ずっと女性になりたいと思っています。それでフランス留学中に一回短期帰国して、その時彼氏も一緒に来てくれたし、そのまま両親にカミングアウトしました。しかしあまりにもショックを受けた両親にとっても怒られて、その怒りで私が勘当されました。

筆者：すみません、このような話を聞いてしまって、本当に申し訳ございません。

ダラさん：いいですよ。謝ることではありません。やはり息子は一人しかいないということが分かっていますが、私も幸せになりたいので、なぜ考えてくれないのかを今でもつらい思いをしてきました。私は親だったら、子供がいい人なら、それでいいです。女性とか男性とか全然問題がありません。その子供はきちんと一人前になるかどうか、それだけ心配です。でも残念なことに私の両親には理解できないので、結局こういう結果になってしまいました。

筆者：いつか受け入れるでしょう。

ダラさん：受け入れるのなら、勘当されないと思いますよ。でももう終わったことだし、取り戻すことができません。

筆者：国にいた時はどうしたか。疑われたとかそういう注意されたことがありましたか。

ダラさん：母親にはもっと男性らしくしなさいよく言われました。父親には一回だけ暴力を振るわれたことがありまして、私が女装した時にバレて、家に帰ったら、大問題になり

ました。一人子なので、当然ながら厳しく仕付けをされました。それにもかかわらず、やはり私は女性になりたいので、自分の夢を諦めなかったです。高校を卒業してから、留学させられました。私の親戚はたくさんフランスにいて、なのでフランスを選びました。最初はアメリカに行きたかったのですが、向こうでは親戚がいないので、心細いです。

筆者：親戚にはダラさんのことを知られましたか、そういう女性になりたいということ？

ダラさん：最初は知られなくて、徐々にバレて、知られることになりました。勿論応援している人もいるし、逆にそうでない人もいます。しかしカンボジアにいた時より、こちらに来てからとてもいい状況です。あまり人の目を気にしないし、本当に暮らしやすい環境です。

筆者：やはりカンボジアにいた時は不便でしたか。

ダラさん：不便というより、自分でいられないのは辛かったです。いつも他人が気になったり、どういうふうに見られるかをずっと心配して、ずっと注意する毎日を送りました。女装する時も夜じゃないとだめだし、昼間にしたら、馬鹿にされるに違いがありません。夜には隠すことができ、それでもやはり不便でした。

単なる女装じゃなくて、私は女性になりたいし、性転換手術もしたいです。しかし未だにできません。

筆者：それは親に勘当されたという原因で、手術できないですか。

ダラさん：そうではなくて、健康の問題ですね。

筆者：すみません。

ダラさん：両親に勘当されたのは過去の話です。どうしようもない話です。健康に問題があるので、やらない方がいいと医者に言われました。悔しいですが、来世があるとしたら、女性として生まれたいです。

筆者：今でも十分綺麗だと思いますよ。男性とか女性とか関係なくとても美しい人だと思います。

ダラさん：ありがとうございます。私は彼氏と一緒に住んでいるし、PACS という制度を使っていて、夫婦みたいに暮らしています。最初はどうしても手術したいと思いまして、どんなに医者さんに言われたとしても、やはりやりたかったです。しかし彼には「そのままです」と言われました。しかも、彼は「無理にしてもいい結果になりませんし、今のままで十分ですよ」と慰めてくれました。そのことによって、手術をしないことにしました。

筆者：やはり素敵な彼氏ですね。では今手術のことを考えたりしますか。

ダラさん：勿論考えるのですが、やはり手術をしても子供が産めないし、女性になれないので、悔しいですが、どうしようもないです。

筆者：今のままだったら、いいと思いますよ。女性とか男性とかに超える人はとても素敵だと思いますし、性というものは本当に前から存在したものか分かりませんし。女性は子供を産むことができるということ、だからといってそれは女性なのか。女性は果たして子供を産むという役割しかないのか、それも疑問だし。やはり原因は性にあると思います。ですから、あまり気にしなくてもいいと思いますよ。

ダラさん：確かにそれはそうですが、でもやはり一般の人の中にはまだ理解しにくい人がいるということは事実です。フランスは皆他人のことを気にしない社会ですが、そういうふうに言ったら、どうでもいい話ではなくて、やはり自由な社会ですから、まだいい状況ですよ。厳しい国ならば、やはり難しいです。

カンボジアでは今どうなっているか分かりませんが、私のような人がたくさんいても、社会に無視される傾向がありますし、極端の場合は家族に勘当されるし、本当に大変です。

筆者：時代は変わっていくものだと思います。今はそう状態ですが、将来きっと何かの動きがあると思います。フランスでもこういう自由社会になったのも結構大変な時期があったし、運動があったからこそ、今があります。カンボジアでもきっといつか同じだと思います。

ダラさん：頑張ってくださいね。私も頑張ります。将来カンボジア社会は変わったら、いいですね。少なくともやはり皆平等になって欲しいし、マイノリティでも安心して暮らせる社会になって欲しいです。

筆者：そうですね。本当にとっても貴重な時間をいただきまして、ありがとうございました。またお会いしましょう。

2013年2月25日

チャンティさん（リヨン在住、40代、既婚）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：リヨンにはいつ来たのですか。

チャンティさん：私はだいぶん前に来ましたよ。随分前に来ました。1995年に来ました。旦那はカンボジア人なのですが、フランスで生まれた人なので、フランスの国籍を持っています。なので、結婚してから、彼の仕事の都合で、また私は海外に住みたいので、フランスに来ることになりました。

筆者：こちらに住んでいて、どうですか。

チャンティさん：そうですね私はとても住みやすいと思いますよ。毎日とても忙しいわけですが、とても充実しています。社会にはルールをきちんと守れば、問題がありません。

筆者：ちょっと話が飛ぶかもしれませんが、私はフランスに来て、一番驚いたのは、例えば異性カップルも、まして同性カップルも路上でキスすることや手を繋ぐことなどです。一般の人々にとってあまり気にしないことですか。

チャンティさん：私は同性カップルに対してちょっと抵抗があります。人々はそれぞれですが、応援する人もいます。ただ私の場合はあまり理解できません。

男性は当然女性を愛するし、女性も当然男性と結婚すると思います。自分の子供には同性愛者になって欲しくないです。なったら、本当に親にとってかなりショックだと思います。フランスだったら、自由かもしれないですが、そのやり方はあくまでもフランスやり方です。カンボジアでは自分の独自の伝統、文化、習慣などあるので、当然自分のやり方があります。

筆者：要するにチャンティさんは同性愛者に対してあまり応援していないということですね。それはどんな原因でそういうことになったのですか。

チャンティさん：やはり同性愛者は子供も産めないし、カンボジア人にとって家族の名誉を破壊することになり、周囲の人と異なるので、恥をかくことになってしまうということですね。私はこちらに住んでからでもカンボジアの文化、伝統をきちんと守っています。

フランスだったら、今同性婚を認めるようになりました。子供の問題、要するに養子はどうしたらいいのか議論になっているし。でもそれはあくまでもフランスのやり方です。私は同性愛者に対して、偏見を持っていますが、こちらに住んでから、海外は海外のルー

ルや法律があるから、当然従わないといけません。それは受け止めるが、やはり自分としてまだそういう同性愛に対して理解できません。

筆者：そうなのですか。ではカンボジアにいた時は同性愛に対するイメージはどうでしたか。

チャンティさん：私は周りにはそういった同性愛者を見たことはありません。でも子供の時、ちょっと女性っぽい男性クラスメートがいて、あまりすきではなかったです。周りの人もその子が好きではなかったです。やはり男性は男性らしく、女性は女性らしくするのは当たり前です。

筆者：でもフランスではやはり自由な社会なので、その考え方はやはり不適切ではないですか。皆は自分の権利やしたいことを主張することもできるし、自分のライフスタイルを選択することも可能です。

チャンティさん：それに対して私は否定しません。確かに皆平等で、個人個人を互いに尊重します。例え、同性愛でも、どんな国籍の人でも、皆平等です。しかし同性愛の場合はやはり難しい問題ですね。

筆者：難しい問題？

チャンティさん：あくまでもフランスの法律ですから、認めるでしょうが、やはり違う国にいくとまた別の問題になります。カンボジアでは確かに同性愛に対して偏見を思っている人が多いですが、それはまだいい状況です。例えば、厳しい国だったら、処罰を与えることもありえるし、極端の場合は死刑になることまでも。やはり国によって様々なルールがあります。

私はフランスにいるからこそ、当然この国の法律を守ります。でも全てにおいて賛成するわけではありません。同性愛に対しては確かにフランスは認めるのですが、私もそれを尊重しますが、個人としてはやはり自分の子供になって欲しくないし、あまり賛成できないです。

筆者：ご意見をありがとうございます。本当に参考させていただきます。

チャンティさん：また何かあれば聞いてくださいね。また次回私の家でご飯でも食べましょう。

2013 年 2 月 26 日

ナリットさん（リヨン在住、50 代、PACS）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性

筆者：フランスにはいつ来たのですか。

ナリットさん：私は 1982 年に難民として来ました。家族と共に来ました。当時の話はどう言いたくありません、本当にとっても大変でしたよ。言葉も分かりませんでしたし、それに仕事に就けるまで色々苦労しました。

筆者：でも今はきちんと生活になれて、パートナーもいらっしゃいますよね。

ナリットさん：そうですよ。私は彼と一緒に住んでいます。

筆者：家族とか親戚には知られていますか。

ナリットさん：皆は知っていますよ。最初は理解してもらえるかどうか、本当に怖かったです。でも勇気を出して、カミングアウトしたら、問題がありませんでした。最初、親にはもうしっかり考えたのかを聞かれました。兄弟には「多分それは一時の迷い」と言われました。

筆者：でも分かってもらえないより、ずっといいと思いますね。私もいつかナリットさんのように母にカミングアウトしたいですが、なかなか勇気がありません。

ナラットさん：やはり最終的に言っておいた方がいいと思います。自分にとって後で楽だと思いますが。

筆者：はい、いつか言いたいですね。今はまだタイミングではありませんので、しばらくしてから、考えると思います。ところで、カンボジアにいらっしゃった時には、やはり男性に興味がありましたか。失礼な質問で、大変申し訳ございません。

ナラットさん：そうですね。私は子供の時からあまり恋愛に対して興味がありませんでした。でもカンボジアにある高校に入ってから、クラスメートを好きという気持ちが育ちました。ただ告白はできませんでした。子供の時から、性格は多少女性っぽかったし、今でもやはり女性っぽいですね。

筆者：カンボジアではやはりそういう大人しいっていうか、男性ですが、女性っぽい性格を持っていたら、色々言われて、たまに嫌がらせまでもうけたのですね。ナラットさんの場合は？

ナラットさん：私も色々言われましたが、辛かったです、仕方がありませんでした。男

性の友達に“Kteuy”と呼ばれたことがありました。悔しかったですが、やはり自分の性格ですから、あえて彼らを見捨てました。

筆者：私も“Kteuy”と呼ばれたことがありますよ。当時はただこういう人たちに対してとてもいやでしたが、でもよく考えたら、やはり彼らは分からないし、好きな言葉ではないですが、要は当事者ではないので、こういう発言ができたかもしれないのです。また社会にはやはり制限があるため、男性か女性かという二つのカテゴリを選ばないといけないということになっているし、そう考えたら、私たちは見捨てることやいやだと思うことなどの代わりに、どうして“Kteuy”という言葉などが誕生したのかを調べて、彼らに説明して、納得してもらえば、それで少しでも偏見がなくなるのではないかと私は思っています。

“Kteuy”という言葉はいつ生まれたのかも私たちは分かりませんし、使っている彼らも恐らく分からないだろうし、やはり根拠がないと言葉は誕生しないですね。なんらかの原因で誕生したと思います。

ナラットさん：それは確かですね。私もカンボジアにいたとき、どうやって両親や親せきなどを説得したらいいのか分からなくて、隠しながら毎日過ごしていました。でもこちらに来てから、やはり自由社会だし、周りの方々にも同性愛者がいるし、それで両親に言いました。カンボジアにいた時は多分言えなかったです。

筆者：それはやはり社会の影響ですか。

ナラットさん：そうですね。後は自分の考え方が変わっていったことに他なりません。結局自分次第ですね。勿論家庭環境だったり、社会の影響もあると思います。

筆者：カンボジアに時々帰ったりしますか。

ナラットさん：3年に一回帰るようにしています。帰る時、いつも私のパートナーと一緒に帰るようにしています。

筆者：カンボジアに滞在する間、感じたことあるいはここは前と違うことなどは？

ナラットさん：交通はだんだん悪くなっているし。そうですね、パートナーと一緒に帰るから、問題になっていませんが、やはり人々からの視線がちょっと気になりますね。勿論応援してくれる人もいるし、そうでない人もいます。もう一つ感じたのはカンボジアでは最近同性愛者がたくさんいることですね。プノンペンは特に多いですね。ゲイバーも増えたし、びっくりしました。

筆者：増えたことは確かですが、でもやはりまだきり開かれていない社会ですね。人々は同性愛に対して認識は確かにあると思いますが、理解する段階まではいかないと思います。

時間はかかるでしょう。

ナラットさん：私がカンボジアにいた時と比べれば、随分よくなったのではないでしょう
か。先日、テレビを見たら、今の首相は同性愛者に対して差別をせず、偏見を持たないで
欲しいという願いを一般のカンボジア人にスピーチしたようです。

筆者：それは私も見ました。でもやはりまだまだ偏見をもっている人が多いです。長い時
間お邪魔しまして、今日は色々とお話をしていただきまして、ありがとうございます。

2013 年 3 月 13 日

ビビさん（プノンペン在住、20 代、独身）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。

ビビさん：私はビビと申します。今は学生ですが、夜にはバーで働いています。

筆者：バーで働いていらっしゃるのですか。

ビビさん：はい、そうです。ゲイバーですけど。

筆者：というのはやはり親には教えましたね。

ビビさん：まだです。ただバーで働いていることを両親に教えました。ゲイバーということはまだ教えていないです。バレたら、心配ですが、自分の学費とお小遣いになるために、頑張らないといけません。私の家族は裕福ではないので、学費とお小遣いは自分で稼ぎます。生活費は親に出してもらっています。

筆者：偉いですね。本当に尊敬します。ちょっと失礼な質問かもしれませんが、ゲイバーで働いているということはやはり男性を恋愛対象としているのですか。そして周囲の方々には知られているのですか。

ビビさん：私はゲイです。でも内緒にお願いします。親とか親戚とかにはまだカミングアウトしていません。親友には 3 人ぐらいに教えました、まだ内緒でやっています。ゲイバーで働いているので、当然ここに来て頂いているお客様は大体ゲイの方々が多いです。それでゲイバーで平気で教えることができますが、やはり学校とか他のところではなかなかできないです。

筆者：どうですか、お客様に関しては外国人とカンボジア人と比べたらどちらが多いですか。

ビビさん：外国人のお客様はカンボジア人のお客様と比べると、圧倒的に多いですね。カンボジア人のお客様はゲイバーに来たくても、勇気がいると思いますし、やはりゲイバーに来る人は皆ゲイだとバレるでしょう。私はここで働いているのは、やはり学費のためですね。選べるのなら、働きたくないです。でも仕方ありません。

筆者：なるほど。やはりゲイバーに来たら、ゲイであると一般のカンボジア人は思いますね。フランスとか他の海外の国ではゲイバーがあって、来るお客様はゲイの方もいるし、そうでない人もいるし、女性の方もいるし、本当に自由です。

ビビさん：そうですね。ここに来る人は女性がいたとしても、外国人のお客様ですね。カンボジア人の女性のお客様はめったにいらっしゃいません。

筆者：それをおいていて、どうですか、最近カンボジアにおいてはゲイの方とか第3の性の方はどう扱われているのですか。やはり差別や偏見などはまだありますか。

ビビさん：やはり難しいですね。一般の人々の間ではマイノリティに対して少し認識は始めているますが、なかなか受け入れるは出来ないようです。特にゲイの方が多いですが、勇気を出して、カミングアウトすることは出来ないです。

筆者：私は文献とか参考資料を読んで、やはりビビさんが仰ったことは事実ですね。その通りです。今の社会は難しいです。だが、私は先月フランスに行って、向こうに滞在しているカンボジア人の何人かと話しまして、ほとんどの方はセクシュアルマイノリティに対してあまり偏見を持たないというか、あまり気にしていません。いい人という前提で、ゲイでも、どんな人でも皆平等です。自分のことは自分できちんとして、法律を守って、それで大丈夫です。要は皆、同じ権利を持って、平等ということです。

ビビさん：それはフランスの話でしょう。カンボジアの今の社会ではやはり難しいのではないですか。他人のことまで気にしすぎるし、特にゲイとか知られたら、バカにされるに違いがありません。本当に怖いです。なので、私はカミングアウトしません。しようとしてもやはり親友、一番私のことを理解する人でないと、言えません。

筆者：しかし、やはり隠すことは大変ではないですか。なんだかつらいと思います。

ビビさん：それはそうです。とてもつらいですが、仕方がありません。人々は誰でも自分のありのままの生活をしたいし、自分であることを分かってもらいたいし、ただ周囲や社会、特に家族は分ってくれるという前提ですね。もし分ってくれなかったら、意味がありません。

筆者：確かにそうですね。社会は自由になって、どんな人でも皆平等な立場だったらいいのに。いつかカンボジアの社会はきっと変わっていくでしょう。

ビビさん：変わったら、いいですね。期待半分、不安半分ですが、同姓婚まで望まないですが、ただ周囲の方々に少しでも分かって欲しいです。

筆者：今日本当にありがとうございました。とても参考になりました。ではまた次回お会いしましょうね。

2013 年 3 月 14 日

チャンターさん（プノンペン在住、30 代、独身）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：こんにちは、お久しぶりです。

チャンターさん：お久しぶりです。お元気ですか。

筆者：はい、元気です。そちらは如何ですか

チャンターさん：色々とありましたが、元気に頑張っています。

筆者：今日はお会いできて本当にうれしいです。早速質問をしたいと思います。以前も私の研究にご協力をいただきまして、大変感謝を申し上げます。ありがとうございます。最初の質問としては、最近カンボジアにおけるセクシュアルマイノリティに関して、どういふふうに変化してきましたか。

チャンターさん：私の専門ではないので、自信がありません。しかし、少なくとも皆は少しずつ認識しはじめていると思います。ただ問題なのは、皆はやはりセクシュアルマイノリティに対して、偏見を持っている人がかなり多いです。

最近テレビ番組にもたまにセクシュアルマイノリティの方々が出ていますが、皆に笑われて、変な質問をされたり、するのです。セクシュアルマイノリティに対してあまり正しく理解できない人が多いです

筆者：そうですか。最近では、そうですね確かに 2009 年 5 月にプノンペンではセクシュアルマイノリティによる大規模な会議が開催され、300 人のセクシュアルマイノリティ当事者が参加したようです。現在カンボジアにおいてセクシュアルマイノリティ当事者の数は約 14 万人に及んでいます。かなり多いですね。しかし多いか、少ないか、別にして、とても重要なのは数だけではありません、それはいるということは事実です。そのため、私たちはあえて無視することができません。しかし残念なことに今社会はセクシュアルマイノリティを無視する傾向があります。

チャンターさん：それは仕方ありません。やはり一般の人々と違うということで、偏見や差別が生まれたと思います。私としては反対するつもりはありませんが、ただ身内や友達になって欲しくありません。そういうふうになったら、辛いし、あまりいいことがないと思います。

筆者：それはなりたいたいですから、なるということですか。あくまでも個人の問題です。例

えば、同性愛者の話ですが、よく間違われたのは同性愛というのは疾患、あるいは病気ではないかと思われ人が多いです。それは、科学万能時代の 19 世紀の欧米では、同性愛を「疾患名」とみなし、医学的治療の対象とすることもあったため、病気だと思う人が多かったわけです。この考え方は比較的近年まで続いてきました。しかしながら、実際には、当事者も自分自身を疾患とはみなしていないことが通常であるため、市民グループなどでは、特に同性愛者の方々は運動を行い、要するに病気ではないと訴え、現在では特別な医学的治療の対象から外されています。

チャンターさん：私の専門ではないので、なんとも言えませんが。確かに調べたら、同性愛は病気ではないということになるとでしょうが、やはり一般の人々にしてみれば、なかなか分からないです。

筆者：それは難しい課題ですね。逆に言えば、私もなぜ一般の人々が理解しようとしていないのかを聞きたいですね。

チャンターさん：カンボジアではご存知のように、まだヨーロッパのように開かれた社会ではありません。人々は伝統を守りながら、生活していくため、一歩外れるとやはり無理解を招くことが多いです。

筆者：それはなんらかの影響で皆そう思っているだけだと思います。先月私はフランスに行って、パリやリヨンに在住している人とお話をして、セクシュアルマイノリティに対する考え方がカンボジア内にいる人達と比較すれば、とても異なることを知りました。

チャンターさん：それは違うでしょう。カンボジアの諺にもあったように、郷に入れば郷に従えという諺で、やはり自分がいる環境だったり、その社会様式に合わせないと、暮らしはとても大変だし、当然ながらその社会の法律やルールを守らなければなりません。

筆者：不思議ですね。人間の意識はそんなに簡単に変わるものですか。

チャンターさん：人によって違うかもしれませんが、最初は自分の意志で変わらないと思っても、やはり自国と異なる社会で生活するにつれて、意識が次第に変化していくでしょう。ただその変化は人によるかもしれません。

筆者：今日本当にありがとうございました。

チャンターさん：大丈夫です。私でよければ、いつでも協力をします。

筆者：これからも宜しくお願いいたします。

2013 年 3 月 16 日

ボナーさん（プノンペン在住、20 代、独身）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性

筆者：はじめまして、友達から紹介をいただきましたソケ・ケムバンディットです。私の友達から色々聞きましたが、本当に質問させていただき、誠に申し訳ございません。それでは、これからお話をしたいです。友達から聞きましたが、結婚の日は近いですね。

ボナーさん：そうですね。結婚の日は近いですが、女性と結婚したくありません。それは義務なので仕方ありません。

筆者：お母さんにカミングアウトしても、やはりそれでも結婚させられるのですか。

ボナーさん：色々大変ですよ。私は一人子だし、それに男だし、ですから結婚させられないと、本家が續かないのです。しかし、結婚しても、私は女性には一切興味がありません。それなのに、母は「あなたは女性と結婚しなさい。最初は駄目でも、後は女性に興味を持ち、変わっていくでしょう」と言いました。

筆者：でもお母さんにはもうカミングアウトしましたよね。

ボナーさん：そうです。もう我慢できなくて、母にカミングアウトしましたが、結果的にとても怒られました。それに女性と結婚させられました。

筆者：その女性はボナーさんが同性愛者であると知っていますか。

ボナーさん：知っています。その女性に大変申し訳ない気持ちです。しかし、その女性にカミングアウトしても、そう言われました「ゲイでも、好きですよ。とりあえず私のことを愛しなさい。そうしたら、多分女性に興味を持ち、女性を愛するようになるでしょう」と言われました。

筆者：それは変わるものですか。私もそう言われたことがありますよ。兄弟には、今まだ学生だし、若いし、将来になったら、女性と結婚するでしょう。貴方が男性を好きということは一時的の迷いと兄弟に言われました。よく考えてみれば、やはり自分のことではないと、よく分らないものですね。それは変わる問題ですかね。

ボナーさん：互いさまなので、どういうふうに説得するか、本当に困難です。結婚の日も近いし、とても不安になっている、本当にどうしたらいいのか、分りません。今はバンディットさんとお話をする場合ではないですね。

筆者：すみません、貴重な時間を取ってしまいまして。申し訳ございません。

ボナーさん：大丈夫ですよ。

筆者：やはりカンボジアでは同性愛者などと言ったセクシュアルマイノリティに対して、偏見をもっている人が多いですか。

ボナーさん：それは多いでしょう。私は未だに職場ではまだ誰にもカミングアウトしませんでした、母と親友ぐらいですかね、カミングアウトしました。母には、もう我慢の限界だったので、言いました。

筆者：そうですか、でも私にまで色々お話をしてくださいまして、本当にどうもありがとうございます。

ボナーさん：本名を出さないでいただければ、協力をします。

筆者：ご心配なく、本名を一切出しませんので、ご安心ください。本当に短い間でもお話をしてくださるだけ、何より幸いです。

ボナーさん：母には、「あなたはヨーロッパ人と一緒に働いているし、最近カンボジアでは同性愛者が多いし、ですからその影響を受けたのではないか」と言われました。

筆者：それはどうですかね。

ボナー：男性が好きということは私の自身でも、なぜ男性が好きか、正直のところ答えられません。好きということは理由があるのか、分りません。社会は少し認めてくれたら、いいですが。

筆者：でもこの間私はフランスに行って来て、向こうにいるカンボジア人に会ってきました。やはり皆はセクシュアルマイノリティに対して、偏見を持っていません。やはりフランスは誰でも皆平等である、同じ権利を持っているということから、カンボジア人の意識が変わっていくのでしょうか。勿論全てにおいてセクシュアルマイノリティに対して全員皆、応援するわけではありませんが、少なくとも皆はきちんと向こうのやり方を守り、生活していくようです。

ボナーさん：それはフランスでしょう。カンボジアだったら、文化や伝統もあるし、やはりまだまだ厳しい状況です。海外に出ている人はやはり向こうでのことに馴染まないといけないし、当然向こうの伝統や文化に触れ合って、法律なども待っています。異国なので、当然ながら自分の意識は知らない間に変わっていくものだと思います。

筆者：でもあれは変わっていくものですか。

ボナーさん：少なくとも何らかの変化があるでしょう。社会の影響はとても大きいです。

筆者：貴重な時間を頂きまして、ありがとうございます。

2013 年 3 月 20 日

サキーさん（プノンペン在住、30 代、独身）

身体の性：男性、性自認：男性、性的指向：男性／女性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。研究のために、色々と質問したいのですが、ご協力を頂ければ、幸いです。

サキーさん：私でよければ、協力します。ただあくまでも研究のために、私の答えたことを使用してください。もう一つの点はやはり実名を出さないでください。お願い致します。

筆者：こちらこそ宜しくお願い致します。さて質問に参りたいと思います。お友達から聞きましたが、サキーさんは両性愛者ですね。大変失礼致します。率直な言い方でお詫びいたします。もう皆さんにカミングアウトしましたか。

サキーさん：完全にはカミングアウトしていません。やはり親友にしかカミングアウトすることができません。

筆者：そうですか。家族には？

サキーさん：家族はまだです。母と妹にはまだ言っていないです。私は長男なので、そういうことをカミングアウトしたら、大きな問題になるでしょう。母にはいつも早く結婚しなさいと言われていますが、やはり自分としてはまだ結婚したくないです。今私はある男性と付き合っていて、二人は将来に同棲することまでも考えています。

筆者：でもサキーさんの場合はゲイではないですね。

サキーさん：難しいですね。前は女性と付き合ったことがあります、なかなかうまくいきませんでした。男同士なら、まだ気持ちが分るし、本当に互いに小さいことなどあまり気にしません。楽です。最近の恋愛対象はやはり男性に向いているかもしれません。

筆者：男性の恋人がいることはまだ誰にも言っていないですか。

サキーさん：親友には言いました。そうしたら、やはり皆にびっくりされて、最近ちょっと冷たくされているようです。男性なのに、突然「私の恋人は男性です」と言ったら、それは驚くでしょう。そういうことがあったので、皆に言わないようにしています。

筆者：やはりカンボジア社会はまだ厳しいので、カミングアウトすることはとても出来ないのですか。

サキーさん：そうかもしれませんね。海外のように、特にお隣のタイとかヨーロッパのようになれば、問題はありません。しかし、現在はまだ女性の地位もかなり低い社会だし、

まして同性愛などというセクシュアルマイノリティになるともっと困難になるでしょう。カンボジアはまだ昔の仕来り、伝統などが強いため、結婚あるいは恋愛というのは男性と女性の間で行われるものだと一般の人々は考えています。

筆者：仰った通りですね。なかなか難しいですね、今の社会は。

サキーさん：私の友達は何人かゲイの方で、本当に大変ですよ。自分でありたいですが、やはり周囲に分ってもらえないし、とても苦しんでいます。

筆者：皆やはりまだカミングアウトしていないのですね。

サキーさん：それはまだでしょう。カミングアウトしたら、これから先どんな目に遭うだろうか、考えるだけで怖いです。

筆者：カンボジア人は皆セクシュアルマイノリティに対して嫌悪や偏見を持っているのですか。

サキーさん：それは全員ではないでしょう。全員とは言い切れませんが、やはり大体の人はそうでしょう。

筆者：何の影響ですかね。私はこの間フランスに行って、向こうに在住しているカンボジア人達と色々お話をしてきました。セクシュアルマイノリティの当事者でも非当事者でも皆あまりそういう問題を気にしていません。大体の人はいい人なら、それでいいです。女性が好きなのか、男性が好きなのか、あくまでも個人の選択肢だし、皆自由な権利を持っていると答えてくれました。

サキーさん：それはやはり社会の影響ではないですか。やはり向こうで生活しているし、最初はどうしても慣れないことでも結局少しずつ変わっていくでしょう。カンボジアもフランスのような社会になればいいのに。

筆者：そうですね、フランスは必ずしも住みやすい社会ではありませんが、少なくともセクシュアルマイノリティの方にとっては住みやすい社会でしょう。

サキーさん：そうですね。私ももっと自由に恋人と行動したいし、男性と女性のカップルのように生活したいですね。

筆者：今の社会はまだ認めないですが、時代によって、なんらかの原因できっと変わっていくでしょう。本当にご協力をありがとうございました。

2013 年 3 月 21 日

ボパーさん（プノンペン在住、30 代、独身）

身体の性：女性、性自認：男性、性的指向：女性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。研究のために、ボパーさんに色々と質問したいのですが、ご協力を頂ければと思います。宜しくお願い致します。実は私は Mstyle にいる友達を通じて、ボパーさんを紹介していただきました。

ボパーさん：はい、私もその友人から聞いております。残念ですね、Mstyle はもうなくなるのですね。しかし多分新しい形でまた誕生すると思います。

筆者：私も最初この話を聞いて、びっくりしてしまいました。確かに 2008 年に立ち上がった組織ですね。またいつか、そうですね、新しい形で出てほしいです。では、早速質問に入りたいと思いますが。ボパーさんはもう家族にカミングアウトされましたか。

ボパーさん：そうですね。一応話しましたが、やはり理解してくれなかったです。私は生まれながら、女性の身体ですが、自分が女性であると一度も思ったことはありません。そういう気持ちでいても、やはり周囲は理解してくれない。毎日、人の目が非常に気になり、本当になんでもかんでも気になりがちです。ある意味で自分の本来の姿を隠すという選択肢を選ばなければならなかったです。つい最近もう我慢の限界だったので、家族にカミングアウトしましたが、結果的に反対されました。

筆者：もっと具体的に話していただけますか。ご両親にしてみれば、やはり認めないというのですか。

ボパーさん：そうですね、色々大変なことがありましたね。私にとってカミングアウトするということはとても大きな課題です。自分のことを分かるつもりでも、やはり他人にしてみれば、同じことが分かるわけではありません。「女性なのに、なぜ男性の服装もしたり、性格も男性っぽくしたりするのですか」と常に聞かれています。私は自分の意識でするのではなく、自然にしています。もし戻れるのなら、やはり男性として生まれたいです。その思いは誰かに言いたかったのですが、ご存じのようにカンボジアはまだ厳しい社会だし、カミングアウトするとしても、やはり皆が分かってくれません。

筆者：それはなぜですか、今のカンボジアの社会ではカミングアウトすることはかなり困難ですか。

ボパーさん：とても厳しい状況です。小さい時、自分が男性であると思っていることを一

生隠しておこうと思いました。他人には本当に知られたくないという気持ちでした。時につれて、やはりもう我慢が限界に来ましたので、まず勇気を出して、せめて家族にだけは理解してほしいと願いました。しかし、カミングアウトは出来ましたが、最終的にやはり誰も理解してくれなかったです。

両親には「あなたは一般の人々のように戻りなさい。男性と結婚して、孫を早く産んで、幸せになってほしいです」と言われました。私の幸せはそれではありません。もっと自分でありたい自分になって、自由に暮らしたいです。

筆者：カンボジアはまだまだ切り開かれた社会になっていませんからね。やはりどうしてもセクシュアルマイノリティに対して偏見を持っている人が多いです。

ボパーさん：素直な自分でいられないということはとても辛いです。いつかどこかの国に亡命したいです。自由な社会が一番いいです。

筆者：私は先月にフランスに行ってきました。向こうではカンボジアと随分違いました。特に一番驚いたことは皆がセクシュアルマイノリティに対してあまりなんとも思っていないことです。あくまでもそれは個人のことです。要するに人は生まれながら、平等であり、同じ権利を持っています。

一番びっくりしたことは、向こうのカンボジア人に「ゲイでしょう」と聞かれたことです。その時、私は否定もせず、肯定もせず、何を話したらいいのか分かりませんでした。そうすると、質問した人は「私もゲイです」とカミングアウトしてくれました。とても驚きました。またある日電車に乗って、車内には男性同士の二人がたまたま入ってきて、すると手を繋いで、人前でキスをしたのを見て、かなり衝撃でした。しかし、周りの人は何も気にせず、温かい気持ちで見たようです。やはりフランスは自由な社会ですね。長く住むことは決してありませんが、少なくとも私は自分がいる間は実際に自分の目で見て、自分で感じて、やはりセクシュアルマイノリティは社会とか環境によって、その見かたが変化していくと思いました。

ボパーさん：やはり社会が認めてくれることは一番いいことですね。いつかそういうふうになって欲しいです。

私は家族にカミングアウトしまして、両親は許してくれなかったでしょうが、親友には若干何人かに話しました。若い人なら、まだ話しやすいと思います。親友にカミングアウトしたのも、最近のことでした。自分のアイデンティティを誰かに伝えるということはとても大変です。他人には「セクシュアルマイノリティは異常だ」と思われても、本人は別

に異常だと思っていないし、ただそれは単なる個性です。

筆者：その考え方がとても素晴らしいと思います。私も留学してから、実は非常に悩んだ時期がありましたよ。私は家族にカミングアウトしたいのですが、結果がどうなっているのか、不安でとても怖かったです。今の社会がカミングアウトできる環境になったら、いいのに。

フランスではセクシュアルマイノリティ当事者でも、非当事者でも、皆平等の立場にいて、本当にとっても暮らしやすい社会です。全てにおいてそうは思わないかもしれませんが、やはり少なくとも向こうにいるカンボジア人、特にカンボジア人の同性愛者だったり、その他のセクシュアルマイノリティの方々にとってはいい社会です。社会の影響は大きいですね。自分の国と全く離れた国あるいは、異国の社会に暮らすと、やはり意識とか、考え方が変わってきましたね。

ボパーさん：それは意識が変わってくるでしょう。私のカンボジアの友人何人かも、同性愛者の人もいるし、第3の性の人もいますが、皆大変です。特に第3の性は自分の身体の性別と異なる服装や振る舞いをしているじゃないですか、そのため皆働きたくても、とても出来ません。なので、水商売をせざるを得ません。同性愛者ならば、まだいい状況ですよ。自ら言わなかったら、偏見も受けないし、普通に仕事できるでしょう。

筆者：仰った通りですね。私は修士課程に在籍した時、カンボジアにおける性同一性障害者について論文を書きました。カンボジアの現状について、特に性同一性障害者への差別や偏見など生まれた理由あるいは根拠は何なのかを調べました。性同一性障害者というのは日本語の言い方で、英語の表記では Gender Identity Disorder というのです。しかしクメール語（カンボジア語）では、まだこういう言葉がありません。医学を勉強する人は分るでしょうが。私はかなりこの障害という言葉にとっても違和感を持っています。恐らく当事者によっては自分が障害を持つこととか、何らかの不自由があるということなどを一切思っていないのに、なぜ障害というふうにみなされるか、とても大きな疑問です。

カンボジアでは *Kteuy* という言葉があって、カンボジア人なら誰でも知っているはずです。すなわち「女性」と「男性」の間でできた性である。つまり男性でもない、女性でもない、物理的な特性を持っている人のことを言うのですが、心理学的な要素や性的違和感などは含まれていません。更に、この言葉には差別的な意味合いやマイナスイメージが組み込まれています。それなのに、皆はこの *Kteuy* という単語を使っています。やはり自ら違った性別を生きようとするのはとても難しいです。やはり社会だけではなく、家族や

友達に受け入れてもらわないと大変です。

ボパーさん：今のお話を聞いて、私は一度も自分が障害をもっていると思ったことはないです。一般の人々には「あなたは病気ではないか」と思われていますが、実際のところ病気ということではないです。私は他人に迷惑をかけないし、なぜそんなに白い目で見られるのかを理解できません。

筆者：色々大変なことがあるかもしれませんが、お互いに頑張りましょう。私はその研究を始めたのは、自分のことのみならず、私のような悩みやコンプレックスなどを持っている人々のために、些細なことでも、少しでも周囲から理解していただき、少しでも日常生活の状況が改善できれば幸いであると考えているからです。今のカンボジアの社会はまだまだセクシュアルマイノリティに対して偏見を持っている人が多いですが、時代によって、社会の状況によってきっと変わっていくはずです。

2013 年 3 月 23 日

サンボーさん（プノンペン在住、30 代、独身）

身体の性：男性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。Mstyle にいる友達を通じて、サンボーさんを紹介していただきました。色々とサンボーさんに協力を頂きたいです。宜しくお願い致します。私は今龍谷大学で博士後期課程に在籍、研究テーマは性を超えるという選択—カンボジアにおける性の構造を通して、というテーマです。

サンボーさん：私でよければ、どうぞ何でもお聞きください。

筆者：事前に色々と聞きましたが、もう少し具体的に話していただきたいことがあります。例えば、子供の頃のストーリーなどを教えていただけませんか。

サンボーさん：学校にあまり行っていなかったのも、あまりいい思い出がありません。子供の頃、正直自分は男性なのか、女性なのかを悩みました。男性の服装をしましたが、何か違うという違和感を抱きました。気持ち、心、性格などは女性と近いと言っても可笑しくないでしょう。周りの友達も「女っぽい男の子」だと呼ばれたり、色々とひどいこともされたりしました。毎日、周りのクラスメートに変な目で見られ、いじめなどを受けて、辛かったです。

筆者：すみません、辛い思い出を聞いてしまいました。

サンボーさん：でもそれは仕方がありません。自分でもやはり可笑しいと思います。来世があるとしたら、やはり女性として生まれてきたいです。男性と結婚して、子供を産んで、素敵な家庭を築きたいです。それは私の願いです。

今女装しても、仕草を女性のように頑張っても、やはり周囲には理解されません。ただ「変態」「異常者」だと見られるだけです。私はもう 30 代なので、様々なことに遭遇したし、もう慣れてきました。家族は誰も理解してくれなくて、結果的に 20 歳の時、ついに家を出てしまいました。家を出て、仕事を探しましたが、書類選考でもやはり本人と生物的性別とが違いますので、その時点でも落とされました。いくら頑張っても、仕事を探しても、なかなか見つけれず、とても大変な時期がありました。

勉強があまり出来なかったのも、原因かもしれませんが、結果的に夜の仕事をし、家計を支えています。今はバーで働いています。

筆者：色々と大変でしたね、でもよく頑張ってきたと思いますよ。ちなみに現在、家族と

連絡を取ったりしていますか。

サンボーさん：連絡をしましたが、母は割と大丈夫になったみたいです。しかし、父としてはいまだに口もきいてくれませんし、家族のメンバーとして認めてくれません。

筆者：家族以外の人々は、例えば友達とかはどうですか。

サンボーさん：周りの人はどうですかね。ご存じのようにカンボジアは今になっても、やはり多くの人々はセクシュアルマイノリティに対して偏見や嫌悪を持っている人が多いです。特に私のようなニューハーフだったら、もっと嫌われると思います。

筆者：やはりカンボジアはまだまだセクシュアルマイノリティに対して寛容ではないですね。その話は別にしまして、一つ的话题を取り上げたいです。大変申し訳ございませんが、サンボーさんは性同一性障害（GID）という言葉をご存知ですか。性同一性障害の定義とは簡単に説明すると、自己の認識している性（性自認）と身体の性が一致しない状態です。要するに心の性別と身体の性別が食い違った状態です。それは医学的には病気あるいは障害だと見なされています。ニューハーフという言葉はあくまでも、もともとは生物学的性別が男性であるのに、女性の格好や仕草をしたり、水商売の従業員だと言うのが一般的な定義です。

サンボーさん：すみません、私はあまり知識がありませんので、先に仰ったことをあまり理解できません。しかし自分のことは病気や障害だと思っていません。自分は女性だと思います。周囲の人にどんなに思われても、私は自分のことが女性だと思っています

筆者：変な話ですが、例えば、いくら性別適合手術しても、子供を産むことが出来ませんし、今の法律だったら、まだ戸籍変更もできませんし、それについてどう考えていますか。

サンボーさん：それでもいいですよ。私はいつか必ず本来の姿を取り戻したいです。心は女性だと思っていますので、当然ながら体も女性の姿でないといけません。現在、ホルモン治療を受けていますし、仕事を頑張って、お金が貯めることが出来たら、性転換手術をするつもりです。

筆者：私も悩んだ時期がありましたよ。自分の経験ですが、自分が男性なのか女性なのかということをとっても悩んでいて、つらい時期がありました。しかし今の研究を通じて、わかってきたことは女性とか男性とかというより、やはり自分でありたいです。性別以外で自分のことを表現できる方法というのはいくらでもあります。性別を超えて、自由に生活したいです。ただ個人的にはいくらそれを超えても、やはり社会的にはどうしても限界があるでしょう。例えば、身分証明書、パスポートとかは実際に性別を記載する欄がありま

す。

サンボーさん：言いたいことは十分伝わってきましたが、私は女性になりたいです。もう一つの願いはやはり一人ひとりを社会に受け入れてほしいです。

筆者：社会の影響は大きいですね。

サンボーさん：ネットを見て、オーストラリア、アメリカ、イギリス、フランスなどは皆自由に暮らしているということを知って、私もいつか向こうに住みたいという思いを抱いています。

筆者：フランスと言え、私は先月に行ってきました。フランスではセクシュアルマイノリティでも、誰でも、皆平等の立場にいて、皆同じ権利を持っています。それに私は向こうにいるカンボジア人と話しました。全員がセクシュアルマイノリティに対してかなり受け入れるわけではないですが、少なくとも皆が平等な立場を守って、あまり他人のことを変に気にしたりしません。いい人ならば、それでいいです。

それはやはり社会の影響かもしれませんね。カンボジア国内にいる人は同じカンボジア人なのに、どうしてセクシュアルマイノリティに対する考え方はかなり違うのですかね。

サンボーさん：それはよくわかりませんが、たぶん分かろうとしないからですかね。海外に出たら、色々体験しているし、歳月を経て、自分の考え方などは変わっていくと思いますが。

筆者：そうかもしれませんね。最後にサンボーさんに一言でもいいですので、誰にとってもよりいい社会になるとしたら、どのようなことを考えていますか。

サンボーさん：人間は皆同じ生き物であることは変わらないと思います。人間はもっと平等で、自由で、自分のことは自分で考えたうえで決める道があります。自分の権利は平等にあります。ですから、差別や偏見を無くすことができれば、より住みやすい社会になると思います。

筆者：ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。

2013 年 3 月 26 日

ソピアさん（プノンペン在住、30 代、結婚）

身体の性：女性、性自認：女性、性的指向：男性

筆者：はじめまして、私はソケ・ケムバンディットと申します。現在日本にある龍谷大学で学んでおります。

ソピアさん：はじめまして、私はソピアと申します。現在プノンペン市内にある会社で働いています。

筆者：ちょっとだけ時間を取って、3 つか 4 つの質問に答えていただきたいのですが、よろしいですか。

ソピアさん：私が答えられる範囲ならば、大丈夫です。喜んで答えます。

筆者：変な話かもしれませんが、ソピアさんはセクシュアルマイノリティに対してどういうふうに思っていますか。

ソピアさん：私はどちらかと言えば、セクシュアルマイノリティを受け入れることが出来ないと思います。今までそう言った人が友達とか知り合いにいたことがありません。勝手なイメージかもしれませんが、同性愛者やニューハーフはあまり性格の良くない人が多いでしょうと思っています。一般の人にしてみれば、同性愛者やニューハーフは「変態」であるし、極端に言うとエイズに掛っている同性愛者とかが多いので、イメージがもっと悪くなります。

筆者：一般の人々と何か違いますか。

ソピアさん：例えば、男性なのに、なぜ男性同士で愛するか、全く理解できません。恋愛は男性と女性の間であるべきです。男性は女性と結婚して、家庭をつくっていきます。女性なら、男性と結婚して、子供を産んで、家族をつくっていきます。同性愛者やニューハーフや第 3 の性にしたら、一般の人々の生活と随分違うし、子供を産むことができないし、家族の方にとって非常に恥になると思います。

筆者：でもセクシュアルマイノリティの方々も同じ人間ではないでしょうか。

ソピアさん：同じ人間ですが、やはりまだ少数派ですね。しかも一般の人々とかなり異なる少数派です。

筆者：この間、私はフランスに行って、パリとかリヨンに在住するカンボジア人と色々と話してきました。特にセクシュアルマイノリティについて話しました。

ソピアさん：どんな話でしたか。フランスとカンボジアは随分違うので、恐らく色々な情報が得られたでしょうね。

筆者：そうですね。フランスでは、結婚することよりも、アムール（愛）が最も大切という価値観が、文化的に強いようです。そのため、お互いの自由や実態を大切にする愛情関係が増えています。非婚関係の恋愛は、もともとは進歩的な知識人や芸術家が中心に行われてきましたが、次第に一般の人々にも浸透して来ました。特に 1968 年の 5 月革命による大きな変化がきっかけとなり、市民の意識や法制度が大きく変わりました。例えば、女性の社会進出の拡大、セクシュアルマイノリティの運動などです。

フランスでは人間は誰でも平等であるということから、向こうに住んでいるカンボジアはセクシュアルマイノリティに対してとても寛容です。全てにおいて賛成して、受け入れるわけではありませんが、やはり大体の人はあまり気にしません。要するに、あくまでも自分の選択した道、あるいは自分の個性に過ぎない考える人が多かったです。

ソピアさん：言いたいことは良く分かりました。しかし考えてみたら、まずは国が違うでしょう。カンボジアでは伝統や文化がとても古く、非常に大切にしています。

ここはカンボジアですから、カンボジアのルールや法律があります。今はカンボジアではまだ同性婚という制度を認めていません。セクシュアルマイノリティにかなり偏見を思っている人も多いし、それは仕方がないです。

確かに自由な社会だったら、いいのですが。でも昔ながらの伝統や文化はもっと大切だと思います。フランスや他の国にはあまり知りませんが、今のカンボジア社会ではセクシュアルマイノリティに対して寛容にならないだろうと思います。

筆者：でも伝統やその文化が人間の自由を制限することはいいことでしょうか。

ソピアさん：良く分からない質問ですが、今私はカンボジアにいますのでカンボジアの伝統や文化を守っています。例えば、将来に海外に住むことになったら、きっと私の考え方も変わるでしょうが、今はこのカンボジア社会に生きているので、多分この考えは変わらないでしょう。

筆者：カンボジアでは今まだ色々セクシュアルマイノリティに対して偏見や差別を持っている人が多いですが、将来には変化していくでしょう。

ソピアさん：そうしたらいいですが、やはりあまり変わらないと思います。一般の人に戻して、普通に男女の恋愛をして、男は男らしく、女は女らしくすれば、問題はないと思います。